

湘南記

日本原記

野口幹夫



湘南記 日本原記

日本原記 総序

日本原記その1 神社と祭り 神社フラクタルの源泉を探る 1

日本原記その2 縄文の祭り 三内丸山能登金沢の遺跡がかたるもの 90

日本原記その3 縄文と弥生の接点で生まれた日本の神社の原型 128

日本原記その4 日本語のルーツを探る旅 縄文語の名残を話していた人たち 157

日本原記その5 縄文・弥生からやまと時代へ 邪馬台国と古事記神話との接読 201

日本原記その6 日本の精神風土の形成 246

日本原記その7 埴輪のほほえみ 280

日本原記その8 能狂言 その縄文の源流からの軌跡 305

日本原記総序

私の青年時代は科学的社会主義を信条として、かつ無神論者であった。両親の死をみて以降、宗教に心が向き始め、まず仏教をさまよい歩き、50歳になって、妻のすすめで、イエスに引き合わせてくれた神父に出会い、カトリックの洗礼を受け、以来30年にわたってイエスを紹介するカトリック教会の入門講座を教会で勤めている。

そんな私だから、総じて神社や神道には関心が向かなかった。何か時代に取り残された存在のように見ていた。それが二〇〇七年出雲大社を参拝したときに、その不思議なユニークさに驚いた。それから一〇年かけて、神社とその背景の探訪を行った。仏教は書物によって近づき、キリスト教は神父さんという人によって導かれたのとは違うアプローチであった。それは「旅」であった。十三年間 妻とともに、各地を旅行する中で、人と出会い、見聞をし、パソコンならではの技術も使って、発見をしていった。

その旅による探索は、思いがけない自分探しとなっていた。つまり我々日本人とは何かの原点を探し求めることとなったのである。生物科学が進み、今は遺伝子検査でその人のルーツがわかる。調べてもらって自分は縄文人、妻は弥生人の出自と分かった。それも、その歴史探索を身近なものとした。これはいわば我々縄文・弥生人コンビの旅の記録でもある。

そして次の五つの段階を経て、求めるものにたどり着いたように思う、それを日本原記一から八として集大成できた。

その一は、神社を見ていくと大体は共通の姿をしていて、しかもそれは世界のどこにもない日本固有の存在であることに気づいた。それは必然的に日本固有の歴史である縄文文化にさかのぼるルーツがあることを示唆している。それを探る旅へといざなわれた。

その二は、神社のルーツを探して縄文遺跡を訪ねまわり、そこに共通する祭りの装置を発見した。それは太陽の軌跡である夏至冬至を時とし、自然の偉大な存在とを結び付け、そして何よりも縄文人の人の間の平和な結びつきを強める装置を作っていたのである。縄文聖地というイメージが湧き出た。

その三は、その縄文聖地からいかにして神社に発展したかの過程を探った。そこには日本全土で起きた大事件、縄文から弥生への移行に絡んでいた。そしてその移行が、いかに平和裏に行われたかを知り、そこに日本人の性格を形作っていることを発見した。

その四は、さらにさかのぼって、縄文以前の石器時代の日本列島で何が起きていたのか、そして学問的にも謎とされている日本語の創生に想像を飛躍させる旅の発見があった。それは縄文語古語を残している八丈島の旅であった。それと稚内を旅していた時、周水河地帯に出会い、北海道の古代遺跡と日本列島の古代が、そして日本語とアイヌ語のつながりが見えたのである。

その五はさらに時代を進めて、弥生時代・古墳時代を経てやまと時代へのつながりまでを探った。そして

架空の話とさえされてきた日本神話が、それなりに史実を反映していることを述べた。

その六はこれまでの探索の集大成として、日本の精神構造を分析してみた。大陸とは離れた存在の島国であった特色から、人の階層が歴史的な長期間にわたって温残され、それが世界でも少数派の精神構造を今も温残していることを示し、今の地球時代への日本の課題を見つめた。

その七は有史時代との境目になる古墳時代特有の芸術作品「埴輪」を取り上げ、その特色であるほほ笑みがなせ生まれたのかをさぐった、そして最後に、

その八として、日本独自の芸能である「能」が、ここまで探索してきた縄文の世界から現代にまでを、紆余曲折を経ながらも、貫いてきたという稀有の歴史遺産であることを説いて全編の終わりを飾りたい。

学会的には認められない異端の仮説ではあろうが、何よりも実地を見て回ったということと、未知のままにしておいてはいけない必要な仮説であるとの自信を持っている。

亡くなったが我が畏敬の友人の愛媛大農学部教授の村尾行一氏のこれに対する批評文も添付した。

野口史学への賛同

村尾 行一（愛媛大学農学部教授）

「史観」の原語は *Geschichts anschauung* ですから、それは「歴史の見方」が原意で、これをより積極的に語釈しますと「歴史なるものに対する見解」となりましょう。とすれば「史観」とは歴史的事実（形而上事実ないし精神的事実と形而下事実ないし物質的事実）に対する当該人物の見解でありましょう。そして「史学」とは積極的な意味での「史観」を「赤い糸」として歴史的諸事実を体系的に論述したものであるのでしょうか。

この私見が正しければ、『日本原記』と『日本の精神風土の形成論』は貴兄の独自の「史観」つまり「野口史観」による貴兄の独自の「史学」つまり「野口史学」と受けとめるべきものの労作なのであります。そして私はこの二労作に賛同する者の一人です。

また「能狂言その源流からの軌跡」についてです。

外交辞令ではなく、心底素晴らしいご労作だと評します。

是非とも出版されることを願っています。

公刊の際は縄文・弥生論を展開された前の作品と合作されることをお勧めします。

両作品は一体のものですから。

この能論は本当に蒙を啓いてくれました。

父が謡（観世流）に凝っていましたので、私も国民学校3年生から手ほどきをうけました。

にもかかわらず、大兄のような切り口での能論は初めてです。

己の理解の皮相さを痛感させられました。

(2019-10-5)

日本原記その1

神社と祭り

― 神社フラクタルの源泉を探る ―



目次

1、	出雲大社の驚き	2
2、	国府祭（ここのまち）の神事	9
3、	縄文時代の神社 その一	18
4、	縄文時代の神社 その二	25
5、	縄文信仰の残照を古事記に見る	29
6、	弥生時代以降に神社はどのように変わって行ったか。	37
7、	仏教と神社の争いと共存	47
8、	神社は生き残り、新たな成長をした。	54
9、	徳川と明治、二つの権力の宗教政策に蹂躪された神社	67
10、	歴史に超然として生きてきた縄文神社 稻荷	72
11、	むすび 神社フラクタル論	80

一、出雲大社の驚き



二〇〇七年二月出雲大社公式参拝のツアーに行った。巨大な注連縄の拝殿に上がった。白の肩衣をつけて着座すると、やがて白衣衣冠の神主や巫女が登場した。二人の神主が朗誦する祝詞は聞きなれない美しい和声をなして、堂々と響きわたった。「さきくたま、くしみたま」が聞き取れた。これはなんのこ
と？

境内を案内してくれた年配の女性がこの異界とも言うべき世界のことも教えてくれた。出雲国造の千家（せんげ）が神主で、当代は第八十二代！大社の隣にその千家の館がある。大きな茅葺の門は歴史を感じるが、かなり痛んでいる。その隣に出雲大社教会の本拠である祖霊社がある。出雲大社はこの出雲大社教の信徒五〇万人によって支えられているのだ。この

大きな機構を支えることは大変なことだ。明治初期に創立された出雲教団は、神社神道にはない死後の世界のことと積極的に向き合った。出雲が黄泉の国の玄関にあたるという神話があったからかもしれない

が、教団を維持させるためには、単に神話の世界を守るだけでは現代の人々の心をとらえることは出来ない。普遍的な宗教がそうであるように出雲教団は神道の枠を抜けて、死のことに取り組んだ。それは神官が葬儀に関わることを禁じた明治政府の方針にそむくことになって、大社教は出雲大社とは切り離されるという苦難の道を歩んだが、戦後の信仰の自由の中で再び一体となったという。



境内には、おなじみ因幡の白兔をさす話や、波の上なる玉にもろてを上げて迎えまつるオオクニヌシの像がある。子供にも親しめるようにしてある。

三本一組の大柱の痕跡が発掘された場所にも案内された。これによって、ただの神話とされてきた古事



記の「底つ岩根に宮柱ふとしり」なる巨大神殿がかつて存在したことが証拠立てられた。建築学者も加わった最近の研究で作られた推定図（高さ四八m）は我々の想像を絶するものだ。色々な意味で、ここには神話は生きて、ただならぬ姿として現存している。しかも複雑な権力争いの物語を秘めているようだ。現代に残る化石くらいにしか思っていなかったが、日本社会を理解する鍵の一つがここにありそうに見えてきた。

明治以降、日本に住んだ外国人には、神社はユニークなものとして写ったに違いない。多くの人が研究の対象とした。幕末から明治の中期までイギリスの外交官であった *W・G・アストン* は広範な日本研究の成果として一九〇五年に「神道」を出版した。ここで彼はこう書いている。

「神道、すなわち日本の古いカミ崇拜は、世界の大宗教に比べて決定的に未発達であるのが特徴である。その多神論、最高神がないこと、偶像や道德律が相対的にないこと、霊の概念を人格化することが弱いこと、来世の状態を實際に認識していないこと、深く、熱烈な信仰が一般にないこと、これらすべてのことから、神道は文字に

よる記録を十分にもっている宗教のなかでは、もともと未発達な宗教だという烙印を押せるだろう。それにもかかわらず、それは原始宗教ではない。」

「神道の公式の宗派は本居宣長と平田篤胤の「純粹神道」である。しかしそれはほとんど活力をもっていない。たしかに宗教的な熱狂は、伊勢、出雲、およびその他二、三の杜の大祭や毎年の巡礼によつてかきたてられる。しかし大祭や巡礼は、他の存在理由があるのだ。

国家宗教としての神道は、ほとんど絶えてしまった。しかしそれは、民間伝承や慣習のなかに長い間生き続けるだろうし、日本人の特徴であるもつと單純で、もつと物質的な神の側面への生き生きとした感受性のなかに長らく生き続けるだろう。」

中国杭州大学 日本文化研究所の王守華教授は安藤昌益の研究家であるが、「日本神道の現代的意義」の中でこう語っている。

「古代から現代までの日本哲学思想の背後には、中国哲学と西洋哲学の影響のほかに、日本に固有のものである一本の糸、神道思想の糸が作用しているようだ。それは神仏習合、神儒習合、復古神道(国学)、国家神道などの形で、日本の古代哲学、近現代哲学思想と交ぜ織りになっている。

「『日本の近代化がなぜ成功したのか』を研究すると、もつとも深層にある日本固有の民族的信仰である神道がある。日本の民族文化の中核である神道の視角から日本の近代化が成功した原因を探りたい」

「明治維新以後、神道は国家神道の段階へと発展し、国内的には人民に対する支配を強め、対外的には

侵略の道具となった。日本軍国主義の対外拡張侵略にともない、神道も国境を越えて朝鮮、中国の台湾、東北、内蒙古、海南島および東南アジア各国や太平洋諸島へと伝わっていき、侵略戦争の尖兵としての役割を果たした。国家神道の否定的役割は批判したい」

と述べた上で、日本神道の現代的意義を次のように述べている。

「神道は自然崇拜に終始しており、自然と自然現象を神の行為あるいは神自身として崇拜するのである。ほとんどすべての神社は、山岳、湾岸、河川、湖沼、森林、滝など特定の自然環境と関わりがある。例えば伊勢神宮と神路山、千古斧の入っていない神宮林、澄みきった五十鈴川、浅間神社と日本第一峰の富士山、塩竈神社と日本三景の一つ松島湾、諏訪大社と諏訪湖・八ヶ岳、熊野神社と那智の滝、宗像大社と海など、特定の環境と一緒に結びついている。もしもこれら特定の地域や環境から離れてしまえば、これらの神社もその特定の意義を失ってしまうのである。

このような神が人や自然と一体化しているという観点は、自然環境の保護に役立つ。客観的に見て、日本の自然環境は比較的良好に保護されている。特に神社を中心とした自然環境は一番よく保護されている。これは日本に行ったことのあるほとんどすべての外国人の一致した見方である。そこで、「神道は自然保護の宗教である」といわれるようになった。

「経済開発にともない、今日世界の原始林はもうあまり残されていない。しかし日本の状況はちよつと例外で、神社の「鎮守の森」のおかげで、保護されている。統計によると、今日、日本の森林の総被覆率の

六〇〇を占める常緑喬木地区において、現存する原始林の大部分は神社の社地である。

「神道は日本民族の固有の信仰であり、日本文化の中核である。それは二〇〇〇年余りの歴史を持ち、歴史上、日本社会の政治、経済、文化に対し重要な影響を与え、今日でも国民生活のなかで、なお重要な役割を果たしている。

日本人ですら神道の話題になると必ず「むずかしいね」という。外国人にとっては、なおさらむずかしいのは当然である。」

この大きな謎を秘めた日本の神社は、言うまでもなく実は我々の身近な存在なのだ。国家神道の忌まわしい圧力や、今尚くすぶる靖国問題で、できれば目をそらして見ないようにしてきただけなのだ。しかしこのように異国の人々からも言われてみると、その存在のユニークさは積極的な意味があり、その本質をわかつておく必要があるのではないか。

それから一年越しで神社を訪ね歩いた。どこにでも神社はあった。日本の神社は、細かい違いはあっても、まずはどこも似ているということに、いまさらのように気付いた。それは、まるでフラクタル現象だと気がついた。フラクタル現象という言葉は、部分も相似、それを合わせた全体も相似というような意味だ。日本はすべて神社で覆われ、日本人も神社現象に染まっているのだ。しかもそれは日本だけにあるのだ。何故か。確かに大きな謎だ。

今抱いている結論は、「日本の神社の本質は縄文神社にある。それは民衆があるときにそこに集い、強い一体感を味わい解放感を味わう「祭り」のために存在したのだ。しかし弥生時代以降に神社は変質して支配者のための道具になった。日本の神社はこの二つの違った傾向のせめぎ合いとして変化してきたのだ。」

歩き回って実感したこのことを以下数回にわたって報告したい。

二、国府祭（こうのまち）の神事

前節で「日本の神社の本質は縄文にある。それは民衆の“祭り”だ。弥生時代以降に神社は支配者のための道具になった。日本の神社はこの二つの違った傾向のせめぎ合いだ。」という仮説を述べた。このような仮説は数多くの神社研究書には見当たらなかったもので、一面しか見ていないかもしれない。私もはじめからこの仮説を持っていたわけではない。漠然と神社めぐりを楽しんでいるうちに浮かんできたもので、特に“こうのまち”という不思議な祭りに出会ったときに、この仮説の端緒となるものを見たのだった。この節では

“こうのまち”という奇祭を紹介する。

神社めぐりはまず近隣から始めた。孫達の七五三で世話になった寒川神社や平塚八幡宮は我々に身近な神社だが、これらは相模の国の第一と第五の神社だそうだ。この相模六社なるものをまず巡ることにした。六番の神社は旧東海道沿いに大磯にある。六所神社という。

奈良時代の国司が任地に着任すると、まずその地の神社に参拝しなければならなかった。しかし相模の国は広く、有力な神社はばらばらにあるので回るのは大変というわけで、ここに六社を合祀した神社を作ったという。それがこの六所神社だ。総社と呼ばれる神社は各地にあるが、これもその一つで



ある。

さて相模六社の第一の神社は寒川神社で、平塚市と茅ヶ崎市にはさまれながら独立している寒川町にあつて、そのシンボルとなつている大きな神社だ。祭神は由緒書きにあるように、寒川比古命と寒川比女命だけだ。おそらくこの地方の開拓者の族長とその妃ではないだろうか。普通多くの神社はたくさんの神々、特に大和神話に登場する神々を合祀しているなかでこれはめずらしい。（近代の明治神宮や乃木神社などは単身だがそれは時代が違う。）大和朝廷からの圧力を跳ね返すだけの力を持った族長だったのかもしれない。



れない。

さて次の二の宮は川匂神社（かわわと読む）で、二宮市にあつて海岸の平地から丘陵に入るところにある。二宮市の名前の由来が二の宮から出ているとはうかつにも知らなかった。しかし二宮市の中心にはなく、草深い田舎になつている。この祭神は、大名貴神（おおなむじ）などの名も挙がつているが、元来の祭神は、二番目に上げられた級長津彦（しなつひこ）級長津姫（しなつひめ）であろう。「しなつひこ」の名は古事記に風の神として出ているが、「しなつひめ」はなく、カッブルで上がつてゐるのは、この地方すなわち余綾（よろぎ）と足柄の相模湾の西海岸にあつた磯長国の族長と妃であろう。

このように寒川と川匂の二つの神社は族長の夫婦を氏神としてゐるようだが、この二つは互いに勢力争いをしていたかもしれない。寒川族は相模川流域から平塚までを領域としていたとすれば、川匂のしなつひこ族は小田原から大磯の海岸域を押さえていたのだらう。この両部族は漁業の境界で争つてゐたかもしれない。この両者のあいだに高麗山という海岸に突き出すような小高い山があつて、古い時代には全体として高麗寺があつた。いまは高麗神社となり、高来神社と名前を換えた。この山が両者のあいだに聳え、かつ六所神社には属さない独自の存在である。これも想像すれば物語る何かがある。それはこれ以上詮索はしない。

さてこの寒川族としなつひこ族との争いがあつたことを、六所神社にまつわる古い不思議な祭り「こうのまち」が物語つてゐるのでそれを紹介しよう。

大磯の平野部から数キロいった丘陵の一つに神揃山という文字通り、年に一度神々が集う山がある。ここで行なわれる祭りを「こうのまち」（国府祭と書く）という。いまは五月五日が祭りの日になっている。この祭りは神揃山に相模の六社が集うというのがストーリーになっている。朝早くこの相模六社の各神社を出発した神輿が幟とふれ太鼓に先導されてこの山に上がってくる。山にはご神石がそれぞれあるが、当日は天幕がそれぞれにおかれそこに安置される。



六社の神輿と神官や氏子総代が集まったところで、「座問答」という神事が始まる。それは一の宮寒川と二の宮川勾が互いに虎の皮を神柱ににじり寄せて位取の争いをするのだ。何度となくお互いに進めて、

ひもろぎに近づいて来たところで、やおら三の宮の比々多神社が登場する。そして声高らかに「いずれ明年まで」と宣言し仲裁して収まる。

この神事は相模の神社の位争いという神話を形にしたものだが、その背後には部族間の地位争いを意味している。ここで仲裁する役の三の宮が重要だが、それは次に詳しく見ていきたい。この神事はさらに続き、



舞台はふもとの広場「大矢場」に移って国司役も登場し、鷺の舞などの伝統のにぎやかな祭りが繰り広げ

られる。

先ほどの仲裁役を演じる三の宮を詳しく見てみよう。三の宮は比々多神社といい、伊勢原市三ノ宮にある。祭神は豊国主尊など抽象的な神々が並んでいて迫力がなく、一見して後の代に神々の名づけが出来た後に借用して付けたものである。さらにこれらをひつくるめて三之宮冠大明神と呼称するなどおろかなものだ。



元来は自然神であつた（特に山ノ神であつた）と推定するのが無理のないところだ。すくなくともはつきりいえることは、寒川神社や川勾神社のような族長が祭神ではない。後で詳しく述べるように、族長を祭るようになるのは弥生以降だ。族長ではない自然神を祭るこの「比々多神社」は弥生以前すなわち縄文の神社なのだ。

ここは相模平野から大山に向かってなだらかな傾斜が始まる丘陵地で、縄文海進の時代も陸地であつた。ここは平野から海までの展望が開ける場所であり、この神社の裏にまわると縄文時代の環状配石遺跡があり（元の発掘場所は東名高速道路になってここに移築したようだが、似たような場所であつたようだ。）正面に大山が望める。これは縄文時代に起源のある自然神社である有力な証拠だ。

一の宮と二の宮が競い合うというのは、相模の国の西と東の族長間の勢力争いを示すものであり、族長を祭主とするこの二つの神社は、族間が相争つた弥生以降に成立した神社であることを示している。縄文時代には戦いはなかつたとされているから、平和な縄文の神社である三の宮がこの争いの中に入つて仲裁をするというのは示唆に富む。三の宮の「比々多神社」が古く縄文時代由来の神社であり、寒川などより古い由緒の社格であつたからこそ、仲裁役が務まるのである。四の宮前鳥神社や五の宮の平塚八幡神社はずつと後の世の創建であり、その役は務まらない。

さて、この三の宮の「比々多神社」の祭神に大酒解（おおさかとけ）小酒解（こさかとけ）神という神が合祀されている。合祀されたと年代も大化元年（六四五）相模の国司によるとはつきりしている。文字通

りに見れば酒づくりの神と見えるし、由緒にもそのように書いてあるが、実は酒づくりの神ではなさそうである。この地は養蚕からタバコの産地であつて、酒の産地でなかったから酒づくりの神が祭られたとは思えない。

新撰姓氏録（山城国諸蕃）にこの事情を解く記事がある。新羅にも兵を進めた雄略帝（四六〇年ころ）の記事であるが、雄略帝が養蚕絹布に通じた秦の民を全国から集め、「太秦（うづまさ）に住まわせた。その民の長を秦酒公（はたのさけのきみ）」といった。」とある。京の太秦のことである。秦の民は秦帝国の遺民という説があり、韓国を経由して渡来したが、中国系の高い技術を持つ民として敬意を払われていた。

さてこの三の宮の足下に広がる町は秦野市である。秦族の居たところである。この記事との関係を見ると、時代は二世紀も下がった飛鳥時代に、相模の国の北の地域にこの秦の民の新しいコロニーができたのではないか。族長の先祖の名も秦酒公であろう。秦族があらたなコロニーを作った時、地元神社に挨拶したことであろうが、その折に合祀を願つて、建てたのが相殿の大酒解（おおさかとけ）小酒解（こさかとけ）神ということではないか。

このように「こののまち」祭事は、由緒書きには大化の改新に遡るとあるが、その物語る内容はさらに古く、日本の神社が縄文に始まり、弥生時代に出来た神社を一つの祭りに巻き込んでいったという歴史の断面を物語るものと考えられるのである。

（尚ちなみに相模六社のうち、四の宮は平塚市四の宮にある前鳥神社で、祭神は菟道稚郎子命（う

ぢのわきいらつこのみこと）応神天皇の皇太子で学問に親しんだが、天皇の位争いを兄仁徳帝に譲つてこの地に来たという。五の宮は平塚八幡神社、祭神は全国共通の八幡さまで、応神天皇、その母神功皇后、その後？比売神を合わせて八幡神（八幡三神）としている。したがってこれらは古いといつても、大和朝廷成立後の神社である。）

（ところで「こうのまち」という言葉も興味ふかい。「こう」は国府のことで、「まち」は待つに語源があるのかも知れないが、ある日を決めて集うこととあり、祭りを意味する。人の集いが「まち」につながっていったのかも知れない。このことは五節でキーワードのひとつとしてまた触れたい。）

三 縄文時代の神社 その一



相模三の宮比々多神社は縄文時代に起源のある神社と想像したが、もっと確実な証拠を求めて、インターネットで相模最古と称する神社を訪ねた。海老名市上郷にある有鹿神社がそれである。境内にある由緒書にも最古と書いてあるが、一見してごく普通の神社でそんなに古いとは見えない。祭神は大日靈貴命（おおひるめむち）となっていて太陽神である。太陽神は大和神話ではアマテラスに集約されるが、歴史時代以前から太陽は自然神の筆頭として崇拝の対象となっていた。

この神社の由緒書に寄れば、この神社には奥宮があつて、それはここから五キロもはなれた縄文勝坂遺跡にあるという。カーナビで勝坂歴史公園というのが見つかったので、先ずそこをたずねたが遺跡もないし、それらしい神社もない。近くの人に聞いてもわからないくらいで、散々探してやつと看板一つの広場に立った。

遺跡というのは相模原市西部の丘陵地域で大正時代に発見された縄文時代中期前半頃（約五〇〇

○年前)の大集落跡で、相模原市はここを記念公園とする計画のようだが、今は埋め戻して広い草原になっているだ



けで、たずねる人もない。

もう一度、近くを探し回っていたとき、石盾尾(いわたてお)神社という古そうな神社があつて、遺跡を見下ろす山の上にある。入っていくと、そこで畑作業をしていた老夫婦に出逢った。彼らに有鹿神社のこと

を聞いたら詳しく教えてくれた。

有鹿神社は勝坂遺跡の崖の下にあるのだそう。先ほどの広場に戻って、教えられたとおりに、崖





ぞいに天然記念物に指定されている照葉樹林の一带があつて、案内板もないままに下る小道を行くと、遂にその先に小さな鳥居が目についた。確かに有鹿神社とあり、素朴な石の祠がまつてあつて、祠の側面には鹿の画が刻んであつた。

この石祠の崖づたいの隣には湧水があり、小さな鳥居がかぶせるようにおいてあつた。

ここに住んでいた縄文人たちは、ここに水の神を見、水を飲みに来る鹿に山の神の使いを感じたのである。

ところで、全国で発見される縄文遺跡には神社跡は見つかっているのだろうか。「縄文の心」を書いた根橋章氏によれば、それらしいものが見つかっているという。

巨大建物跡の発見

縄文時代のムラは、ほとんど同じ大きさの家が数軒、あるいは十数軒集まり構成されていました。つまり貧富の差がなかったのではないかと考えられています。しかし、雪がたくさん降る豪雪地帯のムラからは巨大建物跡（ロング・ハウスと呼ばれる）が出土しています。秋田県能代市の杉沢台（前期）遺跡から発掘された大きなロング・ハウスは、長軸三一mで短軸は九m、床面積二二二㎡の小判型の建物であり、青森県の三内丸山遺跡では、それよりも大きいロング・ハウスが数多く発見されています。三内丸山遺跡の場合は、地下二mほど埋められた六本の柱の根元が内側に二度傾しており、周囲が土砂で叩き締められていて、ここに立てられた柱の高さは二〇mを超えると想像されます。これ以外にも東北地方には五〇基に近いロング・ハウスが発見されている。

こうした遺跡の周りからは大型で深い円筒形の土器が出土するので、木の実を乾燥させたり爆製のサケやニシンも作る食料の加工場・共同作業場であり、時にはムラ人たちの集会場として使われたのではないかと考えられています。

しかし、このようなロング・ハウスも、三千二百年ほど前の縄文時代中期かその終わりに終末期になると、千葉県のかね利貝塚遺跡のように、土偶のかげらや石棒（信仰のために造られた男根形の棒）、また日常生活では使われない異形の台付き土器などが出土していますので、後期のロング・ハウスは、おそらく特殊な

祭祀遺跡（祭りを行う場）ではなかったかと推察されています。小さなお宮は祠（ホクラ）ともいわれますが、その元は「ホクラ」、穀物の穂を収納しておく倉であると同時に、縄文人はその前で、来年の収穫を祈ったことと思われます。

柄鏡形建物の出現

四千五百年ほど前の縄文中期後半から後期中頃までのおよそ一千年間、関東地方西部から中部地方東部にわたる地域を中心に、柄鏡形住居が出現します。その平面図は文字通り、円形の鏡に握る柄がついた形に似ている住居ですが、この住居跡には次のような特徴が見られると報告されています。

- ① 一般住居跡の床面が直径およそ5mなのに、この建物は4mと小さい
- ② 建物の柄と見なされる部分が、集落中央の広場に向けられている
- ③ 家の中の炉跡には、ほとんど使われた形跡が見られない。
- ④ 神奈川県川崎市の初山遺跡、横浜市の猿田遺跡や歳勝遺跡などの調査結果によると、柄鏡形住居は各集落で二戸しか発見されず、共同で使用された形跡が濃厚である。
- ⑤ 八ヶ岳山麓の遺跡例では、中期初頭の炉は甕を埋めた炉だが、中頃以降は石囲い炉に変わり、しかも次第に大型化した炉の位置が、建物の奥へ移動する傾向にある』
- ⑥ 炉が大きくなり狭くなった家の奥に、石壇・敷石・立石・石棒等が設置されている。

以上の事実から考えますと、柄鏡形建物は人が暮らした住居跡ではなく、後世の神社を思わせる、特殊な祭祀用建物だと推定されています。

気候の寒冷化が始まり、手に入る食料が少なくなり始めたころ、豪雪地帯のロング・ハウスが作業場や集会場から祈りの場へ変化したように、ロング・ハウスを建てなかった地域の人々は、住居を共同の祈りの場＝祭祀建物に改造し、精霊や神々に祈りを捧げたのかもしれませんが。（縄文の心 p 四八）

長く引用したが、確かに縄文の遺跡には祭祀用の祠や巨大神殿の先駆的なものが発見されているのだ。有鹿神社の元宮や三の宮の比々多神社が縄文遺跡と共に存在して居る状況をみれば、縄文時代からの祠が、時代の変化に生き延びて今の形になった可能性は強い。

縄文中期はまだ海進の時代で、勝坂遺跡がある丘陵地の崖下は入り江になっていたことであろう。やがて相模の南部にやってきた渡来民から農耕を学ぶ弥生期には、相模川は入り江ではなく、広大な川原となっていて稲作に適した土地となっていたことであろう。彼らは自分達部落の守り神である有鹿神社をもつて山を降り真南5kmの所に移住した。元いた勝坂遺跡は標高60mくらいにあり農耕には適さないが、彼らが選んだ新しい有鹿の地は標高10m以下灌漑に適した地である。新しい有鹿神社は相模川に沿った海老名市上郷にある。

移住後も彼らは元宮を忘れることはなかった。日を決めて神輿を元宮まで運んでいった。にぎやかに祭

りをし、彼らのアイデンティティを確認し合った。

先ほどの農夫の話では、祭の時には海老名の本神社からお御輿がやってくるのだそう。忘れられたような存在だが今に生きているのだ。これこそ日本のお祭りの中心をなす神輿渡御のいわれなのだ。

またそれはこの部落の民が、縄文と弥生の両時代を連続した時代として生きていたということの証左ともなる。

四 縄文時代の神社 その二

一万年前の縄文時代は海の水位が高く縄文海進と称され、いまは陸地である都市部もおおくは海であった。その調査が進み、その地図が描けるようになっていく。前節の有鹿神社は縄文海進の時代の陸地のはずれにあつて、海の水位が下がると共に時代は弥生の文化が訪れてきた。民は狩猟採取に適した森のはずれの高台から、農耕の平地に降り、そのとき自らの神社の元宮をのこし、新宮を戴して移動したものの仮説を立てた。

縄文時代の海進地図はよく研究されていて、縄文遺跡の存在場所と重ね合わせて見ると、現代とはおよそ異なった関東が見えてくる。それと古い神社とを重ねてみると、縄文由来の神社が見えてくる。東京にその例がある。ここに東京の海進地図がある。

東京の半分は海の中だ。この図のちょうど真ん中あたり、日本橋が先端で本郷台が半島をなし、不忍池あたりが入り江で上野台地がある。この本郷台半島の入り江に面した急な崖の上に神田明神・妻恋神社・湯島天神が並んでいる。今も歩けばわかるが、東も北も急坂がせまっていて崖の上にあったことがわ



かる。



いまは繁盛している神田明神と湯島天神の二つの神社に挟まれるようにひっそりしたところに妻恋神社がある。路次の入り口には関東総社とあり、注意して探せばやっと見つかる。いまは神主もない寂れた神社だが、関東総社と名乗るからには、律令時代に遡れば位の高い神社であったわけで、今をときめく神田明神や湯島天神は、もしあったとしても格下の存在であった。江戸時代までは初夢の占いで人々が賑わったという。



この神社について、鶴岡静夫氏が「神社の歴史的研究」のなかで取り上げ研究している。それによれば、

妻恋神社の所在地は山手と下町の境をなす南北の線上にあり、かつて下町のところが海だった時代には、海岸であった。そしてその南北の線上に沿ってそのすぐ北にある湯島天神のある湯島の地は、その名から考えて聖地であると考えられる。そうすると妻恋神社のある所の海岸も同じく聖地で、そこで女性の人身を投供するという伝承を背景として、海神を祭っていたのであろうと思われる。

妻恋神社の前の海岸が古く玉浦といわれ、そこに日本武尊の話が結びつき、日本武尊がここに来たという話ができて、それが『日本書紀』に記されたのかも知れない。妻恋稲荷神社の祭神は、倉稲魂命神…第一殿…、日本武尊荒魂…第二殿…、弟橘姫命とみ重ねたものである。まず漁民の信仰する海の稲荷信仰があり、海神を祭っていたが、やがてヤマトタケルと弟橘姫の物語が七世紀後半頃に作られると、ヤマトタケルと弟橘姫とが祭神に加えられた。これら祭神のならべられている順序が、そのままこの神社の信仰の変遷を物語っていると考えて差支えないであろう。

縄文由来と思われる神社は、かつて海進の時代の陸地の限界を示すような場所にある。むろんその時代に海であつた平地にも今は沢山の神社があるが、それは海進が治まつたあとの時代以降のものだ。

日本人が住みついていたところには神社が出来た。我が家がある茅ヶ崎から藤沢にかけての海岸沿いには古い神社はない。このあたりは近年まで人間が住んでいなかった土地である証拠だ。神社もなければ、祭りもなく、したがって神輿も通らないのでちよつとさびしい思いもあるが、寄付を求められるわずらわしさもない。（なお茅ヶ崎の海岸沿いでは相模川近くの旧漁村には集中してさまざまな神社がある。）

五 縄文信仰の残照を古事記に見る

前節までに「日本の神社の本質は縄文時代に起源するところが大きい」という仮説を立て、それを裏付ける神社の存在を身近に見てきた。しかしそれは遺跡や海進といった物理的存在からの推測である。物語や思想として日本神話の中に縄文時代の信仰の照り返しは見つからないか。それをこの説では追求してみたい。

記録されたものとしての日本の神話は古事記より古いものは残っていない。古事記は八世紀初めに編集されたものだが、内容はそのときに創作されたものではない。その時代までに伝承されたさまざまな口承の物語を書きとめ編集したものである。したがってそこには弥生時代以降に大量に移住した渡来民の祖先

を語る神話もあれば、それを受け入れた先住民の縄文神話の名残もあるはずである。

古事記は大和朝廷が自らの覇権を正当化するために編集したものであるから、大筋はその意図に沿って天孫族の征服の系図の物語となっている。その意図に添わない縄文神話は、その大筋から離れたところか、あるいはその筋を邪魔しないところに散らばっているはずである。縄文人と弥生人、さらに古墳時代人は、断絶した間柄ではなく、三節の有鹿神社の例のように、同じ村落の民たちが祖と孫を重ねつつ、歴史を生き抜いていったと考えるのが自然だからだ。

発掘考古学の成果で明らかになってきた縄文文化の特徴とされているものと照らし合わせて考えてみると、古事記神話に分散している次のようなものが縄文神話の名残ではなからうか。わたしはそれを①巨木柱信仰、②自然物神、③動物神、④神々の祝祭の集いの四つに焦点を合わせて検討したい。

① まず大きな柱に対する崇敬の念がそれである。

三内丸山の直径1m高さ20mの栗の巨木柱や金沢市のチカモリ遺跡の巨木柱跡など縄文村落に信仰の対象としての巨木柱がある。

古事記のいざなぎ・いざなみはまず「天の御柱」を見立てて、それを巡る儀式をする。また出雲神話の終わりオクニヌシは「底つ石根に宮柱ふとしり」の宮を作ってそこに引退し蟄居しようという。出雲大社の大黒柱はその名残だ。

巨大な柱は巨木信仰に根源があるだろう。戦災にあった都市の神社には少ないが、田舎の神社には思

わず頭をたれたくなるような、千年の樹齢をもつご神木がある。

来宮神社の大楠は樹齢二〇〇〇年の巨木が明治まで5本あった。(来宮は元来樹の宮かもしれない。)



来宮の楠神木



来宮の大杉祠

② 次に古事記にある豊かな自然神の数々である。

イザナギ・イザナミの子生みはまずオオヤシマ国をつくる。(出雲神話の国引きは矛盾するので、無視し

古事記に採録されなかった。)その後数々の神生みの後、最後に火(ひのかぐつちのかみ)を生んで黄泉の国に行く。死んだイザナミから逃れその穢れを清める時にアマテラス、ツキヨミ、スサノオの三人の主役が生まれるというのが大筋である。

その間に挿入されるのが数々の自然神の誕生であり、筋書きからは脇においてもよい神々である。それは縄文神の記憶であろう。まず岩(いわつちびのかみ) 海(おおわたつみのかみ) 川(みなとのかみ)の神を、川の神から、木の神(ククノチノカミ)、山の神(オオヤマツミノカミ) 野の神(カヤノヒメカミ)に至る自然神である。

縄文信仰はまさしくこれら山であり樹木などの自然神を対象としたのである。これらの自然神は古事記の大筋には何の影響も与えないが、古い日本各地の神社にのこった。巨木に囲まれた自然があつて、そのなかでひととき大きな巨木がご神木というのが多い。

自然神の最高のものとして太陽神があつたことも間違いない。大和神話ではアマテラスオオミカミとなるが、オオヒルメなどの古い呼称が太陽神としてあつた。

西伊豆の松崎町にいった。小さな町だが、古い神社が三つあつた。内二つはこの地方の元締めである三島大神の分社の存在であり、神官も不在であつた。最後の一つは伊那下社といい、神主さんがおられてお話をうかがつた。この町は港町で、船大工が町を支えていたそうだ。彼らの守り神で海の神である住吉大神を祀っているが、「もとのご神体はあの大岩です」と教えてくれた。後ろにひっそりとあつて、それが元のご神

体とは、神主さんから教えられなければならない。縄文信仰から必要に応じて新しい神を招いていったのである。

石廊崎に石室（いろう）神社がある。岩山自体が神社だ。



また伊豆半島は火山活動と海からの陸移動で生まれた過去をもっている。その根本にある三嶋神社は大山祇命（おおやまつみのみこと）なる山の神と、通称恵比寿様なる海からの神で、創建のことも不明であるように縄文由来の神社であろう。火山活動に直接関係ある不思議な神社がある。静岡県函南町畑区にある火雷神社である。昭和5年の北伊豆地震で神社を走る断層のずれが起き、石の鳥居が崩壊し

た。現在も地滑りの位置を示す古い石階段と倒壊した鳥居が記念物として保存されている。本殿の裏は巨大な岩だ。神社の名前が火雷神社で、それが地震源を示すとは出来すぎた話であるが事実である。



② 動物神

アマテラスとスサノオの確執があった後、悪行のスサノオは出雲の国に追放されてしまう。その子孫である出雲のオオクニヌシの成長談が上巻後半の物語となるが、その中では、それまでにはない動物との暖かな交流が語られる。ワニによって裸にされた白兔を救うオオクニヌシは、逆に火を放たれた野の中で逃げ穴を教



えるねずみによつて救われる。これらの話は、動物と共生していた縄文人の姿を物語る。アイヌの熊送りイヨマンテもその精神を物語ってくれる。子神社という不思議な神社を横浜と寒川に見つけた。いずれもオオクニヌシとなつているが、ねずみ神社である。稲荷神社の狐については後に詳しく述べる。

④ また「神々の集い」も縄文起源と考えたい。第三節で引用した「縄文のころ」にあつたように、縄文の祠は共同作業場から生まれたという。古事記では、アマテラスが隠れた時に、神々は集い、踊り騒いで解決した。元来人々を心一つに集めるという必要は、村落

が生きていくためには、数限りなくあつたことだろう。それは神を介在させることがいかにも効果的であつたに違いない。祭りは神妙な動機で人々を集めるが、やがて宴となり、歌と踊りとなる。神の公認の元での狂乱の場と化すことで、人々を一瞬のうちに解放し、また今まで以上に結びつけなおす。これは単調で苦しい生活の中で疲れ、ケガレた（気枯れ↓穢れ）状況から新たなエネルギーを再生する意味がある。引きこもつて世間を暗闇としたアマテラスを、神々の祭りの馬鹿騒ぎで岩戸から引き出して光りの世界を取り戻したという岩戸神話がまさにそれである。

日本の神社の最大の特徴は「祭り」である。その日を待って、人々が集い、熱狂のうちにエネルギーを爆



また「神々の集い」は村落内の行事にとどまらなかった。広い地域の中で、もともと力のある神が主催して、隣り合った村落の神々の交流を呼びかければ、部落間の平和裏の交流となる。二章で紹介した「このまち」も六社の集いであるし、もともと大規模には、出雲に集う一八社の神有月神話がある。茅ヶ崎の浜降祭は三六社の神輿が夜つぴての行進で浜に集う。神々が集う風習は数えれば限らない。

消し、再生する。また普段は心を開くことにはない同士が一瞬にして仲良くなるである。そこでは儀式を伴うが、補助的であらう。儀式が補助的であるのは、祀り上げる対象があいまいであることが原因であつて、たいていの場合その神社の祭神は何であるか気にしない。それは元来自然神であつて、後の世に神の名前をつけ加えていった便宜なことであるためだ。

結局「祭り」と自然神、これらこそ縄文から連綿と受け継がれてきた神社の源泉であつた。この後の各節では、日本の神社が、この縄文神信仰の源流がしぶとく生き残る本質と、支配者たちが神社を支配の道具にしていくとすることの、かつとうの中でもがいていくことを見ていきたい。

六 弥生時代以降に神社はどのように変わって行つたか。

祭り好きの神社の特徴は縄文に起源することを述べてきた。それが弥生時代にどう変わって行つたかを検討していきたい。結論から言えば、縄文の祠は、名をつける必要もない自然神と民衆を直接結ぶセンタ―であり、その前で民は平等で、祭り好きを発揮できたという存在であつたが、弥生時代以降には、人格神を崇拝の対象とするようになり、祠から神社に格が上がり、祭りより儀式を優先する性格を加えていくのである。それ従つて支配者の権威付けに、さらには民衆支配の装置となっていく。



出雲風土記はその変遷を物語る材料を提供している。

ここに縄文から弥生時代にかけての人口分布を推定した資料がある。(小山修三「縄文時代」中公新書より)

これによれば縄文人は中部以北、特に関東東北に多く居住していた。中国山陰にも進出していたが、人口密度はきわめて希薄だ。ところが弥生時代になってこの地方の人口は一挙に増加する。他の地方は二、三倍だが、出雲を含むこの地方だけは二〇倍以上に増加した。これは弥生時代、出雲に大陸から渡来人が次々に来たことを意味する。この時期海洋の渡航技術が進んだことがあったであろうが、出雲だけでなく、北や南の九州にも中国や韓国からの渡来が一挙に増えた。日本全土に弥生時代への移行が始まるのである。

出雲はその対岸が新羅であつたので、国引き伝説にもその名が出るとおり渡来民は新羅系であつた。

「国引き坐しし八束水臣津野命、詔りたまひしく、「八雲立つ出雲の国は狭布稚国在る哉。初国小さく所作れり。故、作り縫はむ」と詔りたまひて、樗衰志羅紀の三埼を、国の余り有りやと見れば、国の余り有り」と詔りたまひて、童女の胸鉦所取らして、大魚のきだ衝き別けて、はたすすき穂振り別けて、三身の綱打ちかけて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそろもそろに、国来々と引き来縫へる国は、去豆の折絶より、八穂迺支豆支の御埼なり。此を以ちて、堅め立つる加志は、石見の国と出雲の国との堺なる、名は佐比売山、是也。亦持ち引ける綱は、藺の長浜、是也。」

国作りは進み、八世紀の初頭には、出雲は日本の先進地方になつた。出雲風土記に記された統計では民戸五〇で構成する郷の数が六二、部落に相当する里の数が一八一とある。一民戸は二〇～二五人と、いう大家族編成といわれているので、出雲地方(今の島根県にほぼ相当)の人口は数万と推定される。そこに「三百九十九社」の神社が登録されているのだ。名もない道祖神のようなものではないことは、その名前がすべて記載されていることで分かる。平均すれば一〇軒くらいで一つの神社をもっていることになる。渡来人と共に神社が増えたと見るほかない。神社の名前からみても、縄文時代からのものと思われる自然神の神社は数少ない。食物神を祀る熊野神社、石壺神社、大山神社、秋鹿神社などはそれらしいが、その他は意味不明の名前が並んでいる。何か新しい事態が起きているのだ。

新羅の国からの民は徐々に渡来し、先住の縄文人と出逢った。

縄文の民も立派な海洋文化をもっていて、ここ出雲の縄文人も東北北陸と海岸を結んだネットワークをもっていた。渡来の民たちも彼らとの交流や援助がなければ生きていけなかったであろうから、そこに征服や非征服の事件は起きなかった。言葉の融合もあったわけで、平和裏に新羅人は縄文文化人と溶け合った。ただ渡来人は鉄と農耕の先進技術をもっていたので、国づくりのリーダーシップをとったことであろう。その様子を古事記は伝える。

「ここに大國主神、愁^{うれ}ひて告^のりたまひしく、「吾^{あれ}獨^{ひと}して何にかよくこの國を得作らむ。いずれの神と吾と、能くこの國を相作らむや。」とのりたまひき。この時に海を光^{てる}して依り來る神ありき。その神の言^のりたまひしく、「よく我が前を治めば、吾能く共^{とも}與^もに相作り成さむ。若し然らずは國成り難^{がた}けむ。」とのりたまひき。ここに大國主神まをししく、「然らば治め奉る状は奈何^{いか}にぞ。」とまをしたまへば、「吾をば倭の青垣の東の山の上に拝^いき奉^{まつ}れ。」と答^のへ言^のりたまひき。こは御^み諸^{もろ}山^への上に坐す神なり。」

伝説によれば、出雲地方のリーダーはスサノオであり、その子孫のオオクニヌシであつた。ここに引用した古事記の部分は族長となつた大國主が、自分ひとりでは国作りはできないと協力者を求め、先住の民の山神を奉ることで成功を約束されるという話だ。縄文人と渡来人との間には摩擦はなく平和裏に先住神との和合があつたことを示すエピソードだ。

おそらく渡来人は技術と共に神信仰に新しい形を持ち込んだ。朝鮮にもアニミズム信仰はあったといわれているが、それ以上に祖先崇拜が強い。一族の族譜を大切にし、宗廟を持ち、時に一族有縁のものが集まり、祖先とのつながりを確認し合う風習を今ももっている。グーグルマップで韓国の神社を検索すると、今韓国に残る神社は唯一つだけ出てくるが、それは申崇謙 신승겸 장군 유적지 Shin Sung-gyeom 神社で一〇世紀の王の墓である。韓国は李王朝四〇〇年儒教の国教化をきびしくすすめたため仏教寺院も迫害されたが、宗廟と合体したアニミズム的神社は壊滅的に消滅したという。日本にその末裔が残ったのである。

すなわち弥生時代に持ち込まれた新しい神社の信仰の対象は祖先という抽象的な人格神なのである。それは小さな祖廟であったために、部落の数以上に社が出来たのであろう。大きな王の神社ではない。王の権威は巨大墓を建てることで示された。この地方に残る四隅突出墓がそれである。決して王が民衆にとつての神として崇められることはなかった。縄文の遺跡にも墓が特別な配置がされているが、それは祭りの広場の中心にはなっていない。弥生から古墳時代に移って、仁徳御陵のような巨大古墳が築かれるようになって、それは神として崇めるのでなく、次の位継承者に崇めることの恐れを鎮めるためであった。まして民衆とは縁遠く、到底信仰の対象とはならなかった。

とはいえ、この時代に、漠とした祖先であつても人格神を祀ることがはじまった。それは縄文時代の自然神たちにも、つぎつぎと人格神すなわち名を持った神となる道をひらいた。山の神は大山祇神（オオヤマツ

ミ)大山咋神(オオヤマクイ)、海の神は綿津見神(ワタツミ)となつたし、食物の神は倉稲魂命(ウカノミタマ)となつた。祠(ほくら)であつたものが神の住む社(やしろ)となり、聖域の門である鳥居も生まれた。神社の誕生である。そしてそれら縄文のアミズム神々も名前を得て、古事記神話に採録されたのである。

この人格神を祀り上げる新しい習俗は、その後神社が支配者の支配のための装置になる道をもひらいたのである。

さて古事記に語られる天孫降臨の神話は、弥生時代韓国からの渡来種族間で起きた覇権争いと、大和朝廷による征服の話である。

出雲族は、縄文の民と交わりつつも、一衣帯水の海で新羅と結ばれていた。先に述べた国引き神話は、まるで宇宙ステーションから島根地方を見おろしているようで、出雲を中心として朝鮮半島の新羅も日本の諸地方も一つの小宇宙として扱っている雄大さがある。彼らはやがて一大王国をつくった。縄文ネットワークとして北陸の縄文部落ともつながったが、そこにはチカモリ遺跡で発掘された巨大木造神殿があった。その技術を学んで、彼らの王として伝説化し神格化したオオクニヌシの住まう巨大神殿を築いた。これは抽象的な人格神を一步すすめて、特定の王を祀った最初の神社であろう。古事記には、オオクニヌシが国譲りの条件として、隠居するために作ってもらったと書かれているが、実際は大和勢との争いが始まる前に、出雲の国の統一の段階で出来上がっていたのであろう。

渡来弥生人と縄文人との接触は平和的であつたが、しかしつぎつぎに渡来する弥生人部族どうしの接

触は、互いに武力をもっていたので、互いに戦い、征服し服属を求める姿となった。倭国大乱の時代である。吉野ヶ里遺跡のように弥生時代の部落が見張り台と環濠で武装した姿で発掘されるのである。

大和朝廷を築いた天孫族はその後の歴史が物語るとおり百済系である。彼らはおそらく北九州に根拠をつくり、やがて瀬戸内海を征服しつつ、大和朝廷を作った。岡山の吉備族（百済系）を介して出雲族を征服したことを歴史学者たちが明らかにした。（出雲の古代史 門脇禎二）「倭の五王」は河内王朝といわれる。この五王時代の幕開けになる神功皇后の三韓征伐の伝説があり、この時代の終わりの雄略帝の時代には、新羅を征服するために朝鮮に攻め入った。結果は成功せず、百済は新羅に滅ぼされる。大和朝廷は百済を支援するために出兵するが敗北し逆に海岸線を国境として防人で固めなければならなかった。出雲風土記の末尾にはその兵力配備が語られる。

古事記の大国主の国譲りの神話は、この史実としての新羅系出雲王国が百済系の天孫族の支配下に征服されたことを語っている。そればかりでなく、さらに遡って、古事記は大国主の祖である須佐之男尊も、天孫族の祖である天照の乱暴な弟神と位置付け、悪行の末追放されて出雲の祖となる。このように古事記では、出雲族の親子二回にわたる対立と服属の物語が語られる。すでに巨大な姿を誇っていた出雲杵築大社の存在は、大和朝廷には目障りであったが、それを物語の中で次のような服属のしるしとすることで存在を許されたのである。

『「この葦原中国は、命の随に既に献らむ。ただ僕が住所をば、…とだる天の御巢如して、底つ石根に宮

柱ふとしり、高天の原に氷木^{ひぎ}たかしりて治めた^{おさ}まはば、僕は百足^{ももた}らず八十^{やそ}くま手に隠りて侍ひ^{さむら}なむ。」と
まをしき。』

この屈辱的な言葉はむろん出雲風土記には出てこない。

この節の最後に新羅神社や高麗神社のことに触れたい。(出羽弘明氏の『新羅の神々と古代日本―新羅神社の語る世界』) 新羅神社は日本全土に数多く残るが、不思議なことに新羅系の本拠地とされる出雲には、風土記の時代三九九の神社があつたにもかかわらず新羅神社はない。出羽弘明氏は出雲が大和朝廷に征服されたときに消されたと考えているが、むしろ出雲は新羅系の本拠であつたので、おのおの祖廟はあつても、全体としての新羅神社は必要なかったのだと考えたほうが自然だ。日本に百済神社がないのも同じ理由であろう。百済は征服者である大和朝廷の祖先であるから、百済神社は必要なかった。

しかし新羅系の民がやがて各地に分散して移住していった時、その段階では氏族は混在していたため、大きな括りとしての新羅とか、高麗国から来た民としてのアイデンティティがなく、やむなく新羅神社や高麗神社を作ったのであろう。



平塚高麗神社



表は高来神社となっているが



白髪神社

平塚と大磯の間に二〇〇mほどの特長ある山が海岸に迫っている。高麗山といい、鎌倉時代は高麗寺として山全体が栄えた。神仏分離令で高麗神社となり、さらに何故か今は高来神社と名を変えた。今高来神社と立派な社殿がある後ろに小さな祠のような高麗神社が残っている。

また海老名の日向薬師のふもとに白髪神社というひなびた神社がある。新羅神社の名を変えた神社であろう。ひっそりとしている。渡来人たちのアイデンティティを示すこれらの神社も今は役目を終えたのであろう。

さてこのような経過で、縄文時代はアニミズムの自然神を祀る祠であったのが、人格を持つ神々を祭るようになり神社となった。第二節で述べたように、相模の寒川神社や川勾神社が、祭神を族長の夫婦としていることから、弥生時代以降の神社である。神社に詳しい平塚の古老に聞けば、今隆盛を誇る寒川神社や二の宮神社より、三の宮の比々多神社の方が格は上であるといっておられた。今は田舎の神社めいている三の宮であるが、縄文由来の古神社らしく処遇され、敬意を払われているのだ。

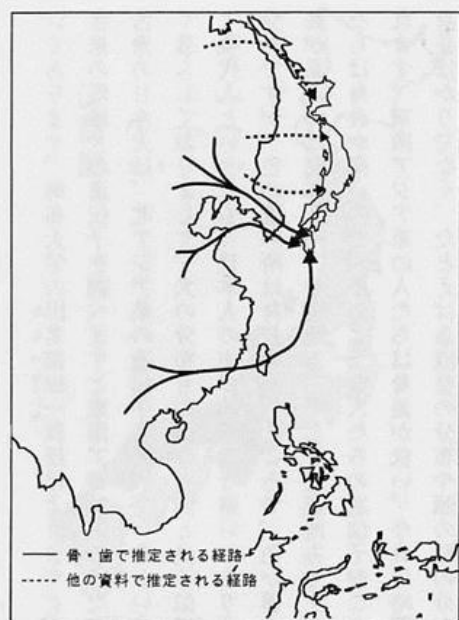
七 仏教と神社の争いと平和共存

出雲風土記をみて奇妙なことに気づく。四百社にも及ぶ神社の名前を記載したところに、神社に優先して仏教寺が紹介されていることだ。神社は名前だけ羅列されているだけだが、寺は建物の構成、面積、建設した者の名前までも丁寧に記載している。これで出雲にも進出してきた仏教寺院が注目の的であったことがわかる。

古事記は、天武帝が果たした国家統一の記念事業として作らせたもので、風土記もその全国版として作られた。古事記の記事は天武の二代前の女帝推古帝で終わっている。推古までの大和朝廷は、特に推古の摂政である聖徳太子は熱心な仏教徒で、仏教をもって国の精神統一を図った支配者であった。古事記の書かれた時の約百年前には仏教が伝わってきている。しかし不思議なことに古事記は仏教のことは完全に無視している。一言も触れないままに終わるのである。

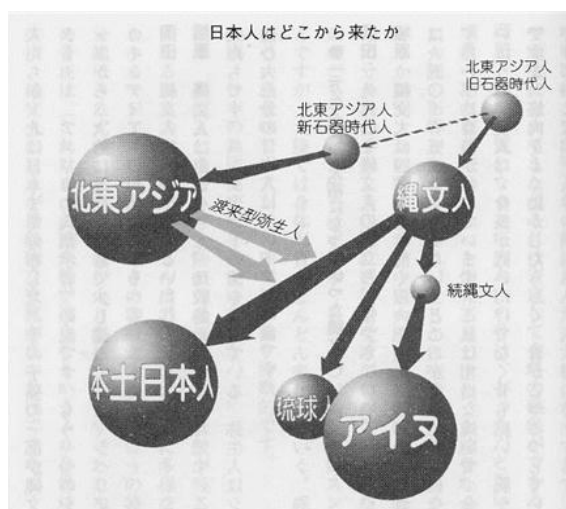
古事記の仏教無視、出雲風土記の仏教寺重視、これはなぜだろうか。その謎を、定説ではない独自の推論で解いてみたい。

大和国家形成をリードした弥生時代の渡来集団にとっては、朝鮮半島と日本はつながった一体の領域であった。朝鮮半島は中国や朝鮮諸部族が入り乱れ覇権争いが絶えなかったが、日本地方には平和な縄文小部族群があった。朝鮮半島にいた部族、特に百済族は戦いを日常としつつ、南下して日本に勢力を



61 日本列島への推定移動経路

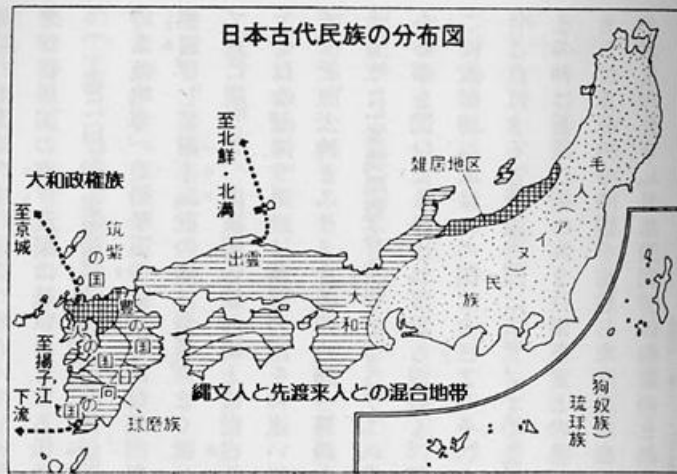
越えて侵入する力が備わっているとは考えられないからだ。特に大きな集団をなして移住してきた百済勢は、朝鮮半島から逃れて日本列島に来て定着し、農耕技術、漢字や鉄の技術をもって、大きな政治的勢力となった。そのときあわせて仏教も持つて来たと考えられる。古事記神話が語る長い闘争を経て大和朝廷が成立したが、その政権は百済系渡来系民族集団であった。すでに仏教を



伸ばした。史実と神話とが茫洋としている時代だが、四世紀には倭国の軍が高句麗と戦い、任那に日本府を作ったとか、「広開土王碑」には倭国の朝鮮進出が記録され、それは新羅と戦った神功皇后とその子応神天皇のことであろうとか、朝鮮半島でのできごとが多く語り継がれている。日本に視点を置いて見る我々には、倭国の軍勢が日本列島から朝鮮に進出したような印象を持つが、逆にこの集団は戦いつ追われつつ、遂に日本列島にたどり着いたと考えたほうが自然だ。まだ幼い倭国の軍勢が海を

宗とする政権であつた可能性が強い。

一方征服されたのは縄文アミニズム集団例えば卑弥呼の邪馬台国や、出雲の国のような国津神と称された縄文と新羅系混合民族集団などであつた。縄文アミニズム集団は仏教を先進の神として尊敬を払



原田常治著『古代日本正史』（婦人生活社刊）より

つてあろうが、自分のものとしては簡単には受け入れなかったであろう。支配者の宗教として押し付けられた時それに抵抗したかもしれない。その象徴となつた事件が五世紀の蘇我と物部との闘争であり、物部氏は敗北した。そして仏教は推古・聖徳太子の時代には国家宗教の地位を確立した。

ところが、聖徳太子没後からの百年近く、日本には宗教的には特異な時期が起きる。それは天智の大化の改新と、壬申の乱による天武の征服を果たしたときから始まるのである。天武帝は初めて天皇と名乗り、万葉集で宮廷歌人は彼を「神」と奉つた歌を残す。「神である天皇」の出現した半世紀だ。

天智は聖徳太子とつながっていた仏教支持の蘇我氏をクーデターで排除して、新しい大和国家を作ろうとした。時あ

たかも、祖国とも言うべき百済は敗北し、支援した倭国軍も白村江で壊滅した。新羅・唐連合がその勢いで日本に攻め込んでくるとの危機感をもった天武王朝は、九州と出雲に防護の配備をするともに、自らの都を海からより遠い大津に遷都したのである。

彼らはこの時初めて朝鮮半島との断裂を経験した。彼らは大和国家を大和らしいものとする必要に駆られた。やまとの国をあらためて振り返れば、日本には縄文以来の豊かなアミニズム宗教があり、神話もあった。渡来依頼数百年もたてば、渡来系も土着の縄文の民も交じり合った。そこにいたる征服話もすでに神話となりつつある。天津神と国津神それぞれの神話がある。渾然としてあつたそれらの神話を大和朝廷にふさわしいものに再編成しなければならなかった。それがいまや「神」としての權威をもった天武の望みであつた。

彼は大日靈貴命（おおひるめむち）なる太陽神を最高のものとし、アマテラスを皇祖神と定めた。都から見て、日の出の方向にある伊勢にあつた一地方神社を皇祖神宮と崇め、皇族の斎宮祭司を派遣して權威つけた。また神祇官制度を創始した。神祇の「神」は天津神である「天神」を、「祇」は国津神である「地祇」を表した。そして全国にある神社を調査し位付けした。

この特異な世紀に日本は神社信仰を、初めて国家的宗教としたのである。土着宗教であつたアミニズム信仰に支配者的宗教色を付与したのである。ただしそれは民衆にはほど遠いところのことであつて、民衆が大切に祭りや地方神社に変化はなかった。朝廷による天津神の祭事は密やかに宮廷内で行なわれ、民

衆を巻き込んだお祭りはありうべくも無かった。伊勢神宮には今も民衆的祭りはない。

このような状況で編纂された古事記がかたくなに仏教を無視し、一方の出雲風土記は仏教の進出も冷静に余裕をもって眺めていたのである。

ところが奈良時代に入ると事情は逆戻りする。聖武天皇は、再び仏教を国家宗教として崇め、国家事業として東大寺大仏建立をすすめ、全国の国司の配置とそこに国分寺、国分尼寺の建立を進めた。そして奈良平安時代の五百年、朝廷・貴族国家は仏教に戻るのである。その頂点には道鏡という僧侶が皇位篡奪を狙うまでに仏教の支配力を高めた事件がおきた。

しかしこの間、国家宗教の高みを経験した神社側も勢力をつけ始めていた。それを物語る宇佐神宮の神託というエピソードがある。大分の宇佐八幡宮は元来地方豪族宇佐氏の氏神であり、巨石信仰由来の縄文の神社であったが、六世紀の終わり、応神天皇（別名廣幡八幡麻呂）の託宣があつたとして、八幡大菩薩を主祭神とする神社となっていた。そして東大寺造営の際は、官司が託宣を携えて都にのぼり、東大寺の加護神となると宣言したのだ。それを良しとした聖武帝は宇佐神宮を伊勢神宮に次ぐ皇室第二の宗廟としたという。また全国に八幡神社を植えつけその総社となった。先の道鏡事件にも宇佐八幡は和氣清麻呂に託宣を下して阻止したといわれている。

この宇佐八幡のエピソードでわかることが三つある。一つは地方神社が天皇を祀り上げること、朝廷の重大事にまで容喙する力をもったことである。第二は逆説的であるが、応神天皇のような大和朝廷の最



大の英雄であつても、かれを葬る巨大な御稜を建設するだけで終わり、国家的神宮をつくつて祭ることはなかつたということだ。その隙間をついて、一地方神社が託宣のかたちで尊称拝借して有力神社となり、国家的神宮としての地位を獲得したのだ。これは神社というもののへの国家の関心程度が知れるのである。天皇制が神道に由来するというのも天武帝の時代の創作であつて、それ以前にはなかつた証拠でもある。もしあれば応神天皇に対して宮廷が主体となつて神社を作つたであらう。

ついでながら伊勢神宮は天武帝が格上げによつて実質的に創作したのであるが、伊勢神宮の由来書には神話時代の崇神天皇が造つたと書いている。しかし古事記の中巻を見れば、崇神天皇は大物主神を三輪山に祭つたと記しているのみである。しかも古事記上巻には三輪山を祀つたのはオオクニヌシだと書いているのだから混乱している。いずれにせよ古事記に伊勢神宮の記載はない。

三つ目にわかることは、この時代神社が仏教にすり寄つてその身を守つたことだ。宇佐神宮の神は八幡大菩薩と称したが、菩薩は仏教界の地位である。そして東大寺の守護神となることで自らの役割を買つて了つたのである。また逆に仏教側も神社



熊野本宮は神様達の長屋



熊野本宮
八咫鳥（やたがらす）は日本サッカーシンボル



那智の大滝遠望

西国三十三か所第一番の那智青岸渡寺
からご神体である那智の滝を遠望する。

を利用した例はたくさんある。興福寺や延暦寺の寺僧は日吉大社の神輿、興福寺は春日大社の神木などの「神威」をかざして洛中内裏に押し掛けて領地の拡大の要求を行なった。白河法皇がままならぬものと嘆いた「賀茂川の水、双六の賽、山法師。」はこれであった。

神社と仏教が融合した自然の聖地となり、これぞ「日本宗教」と思われるのが熊野である。清少納言も登ったという熊野詣の修行は、平安貴族の憧れであった。平安京から紀伊半島の突端の那智本宮まで



それを現代でいえば超ビッグアミューズメントセンターであって、そこでは心身ともに救われるという一大霊界に仕上げたのは大変な宗教信念と経済的組織力であると賛嘆する。明治政府がぶち壊すまで、このような仏教寺と神社の協力は、「世界にもユニークな平和な宗教」として育っていたのではないか。

話はわき道になるが、私の子供の頃のお祭りは大阪の阿倍野王子神社であった。神社は1kmも離れているが、我が家の前の通りをお祭りの行列が通った。天狗の面をつけたサルタヒコが本物の馬に乗っていったのにも感動したし、お兄さん達が赤い直垂帽子でそりかえってバチを振り上げ、枕太鼓をずしんと響かせていくダシがくると子供心に興奮の坩堝に落ちた。その阿倍野王子神社とは阿倍仲麻呂一族の王子かなにかだろうと思っていたが、実はこの熊野詣での道案内として置かれた九十九王子社の第二番神社だったのだ。

八 神社は、生き残り、新たな成長をした。

日本の自然神社は、仏教という高度な宗教に出合ったとき、その存在意義を失いかけた。特に社会的地位の高い層においては

そうであった。しかし神社はさまざまな変化をして生き延びた。その一つの道は、前節で見たように奈良・平安時代、神社は仏教と癒着すること、安堵の道を得たのであった。民衆レベルでは、自然神社のままで、村ごとの大切な存在であり続けたが、村々にまで仏教寺院が出来ると、神社は深刻な事態を迎えた。死というシリアスな人生問題に向き合う仏教寺は、個人の信仰心を根拠にしてスポンサーシップも安定しているが、神社は希薄な集団信仰に依拠しており、祭の時の集中収入に多くを頼るのみで、支える集団が衰えればたちまち荒廃する運命にある。

仏教寺院は個人を支え、神社は集団を支える。その神社の特徴は日本社会の集団性を維持する上で必要であったから、民衆も支配者ともに、神社を衰退に任せず色々な手立てで生き残り拡大させた。その手立てのいくつかをこの節では見ていきたい。

まず神社の担い手となっていた神職集団は、あらたな生き残り策を探った。その有力な実行部隊は御師とよばれる御祈祷師集団であった。御祈祷師は元来仏教寺院から生まれたのであるが、仏教は出家尊重で敷居が高かったが、神社の御師は口達者で丈夫でさえあればよかった。そろそろ農村からの余剰人口のはけ口が必要となってくる時代で、神社御師という職はその大きな吸収口となった。まず平安時代、熊野大社の御師たちの活躍は目覚ましい成果をあげた。熊野詣というコンセプトを広めて、その流通を支える地域連携ネットワークを作り上げて、貴賤を問わず民衆をいざない込んだ。そればかりではない。日本各

地に何万という熊野神社の分社を作った。御師たちの口説で、神々の物語、さらには神道の理論付けがなされるようになる。仏教との融合を説く本地垂迹説など各種の神道理論が生まれる背景だ。自然神社には神理論は無かつたし、不要なものだった。

熊野御師に習って、日吉、三嶋、富士浅間といった全国ブランドの神社ネットワークがそれぞれの御師集団の手で作られていったようだ。格調高いお伊勢さんもその運動を起したのは、遅れて江戸時代であったが、遅れただけあつて、盛り上がりも顕著だった。東海道はお伊勢参りで人が溢れるまでになった。

この御師たちの働きによって、神社は経済的に自立したのであった。

平安末期、武士達という新興集団が台頭したとき、領地争いと民衆支配の手段として、神社が利用された。

藤沢西部には広大な大庭氏の領地があつた。今も大庭城址公園や大庭団地などの名前に残っている。大庭氏の祖・鎌倉権五郎景正は、領土争いに明け暮れるなか、一計を案じた、彼は自分の領土の地を、国家神宮である伊勢神宮に寄進して神領とした。神領として保護してもらい、逆にその保護者として自らを任じてもらったのである。そのとき伊勢神宮を勧請したのが鵜沼皇大神宮である。ここには領地支配に神社が使われて、神社側も神領地からの上がり



で潤うという癒着があった。民衆の神社ではなかった。

なお少しわき道にそれるが、この鵜沼大神宮を訪ねたところ、大きな脇社があつて、石盾尾神社とある。これは今回の神社めぐりですで見覚えた神社だ。これは時代の変遷を物語る証人だと見た。

この石盾尾神社は第3節で縄文神社らしい有鹿神社を訪ねたとき、出逢つた古そうな神社だった。この元宮は神奈川県奥地、藤野町名倉にあり、神体は京塚山の頂上にあつた天然の神籬磐境の「エボシ岩」だという。このエボシ岩の脚部の岩盤が西にのびて地上に現れ出た所が石楯であり、ここが産土路にあたり古代人が神を斎きまつた所・斎庭という。まさに縄文由来の神社であつた。これが弥生時代に石楯尾大神という人格神となり、それを祀つた部族は、海面の低下、陸地の拡大と共に徐々に南下して、先の相模原などにも神社を建て、弥生時代に鵜沼の地にまで南下した。この鵜沼の地は白鳥の舞い降りる沼地であつたので





この名がある。この大神宮の地には弥生期の鵜沼下藤ヶ谷遺跡が発見されている。彼らははるばる神奈川の北端の地から転々と祀り来て、最後に神奈川の最南端の鵜沼の地に石盾尾神社を分社したのだ。鎌倉権五郎景正が伊勢神宮に領地を寄進し大神宮を招いたのはまさにこの石盾尾が祭られていた地であった。本来は脇社でなくそれが本社であったのを、大きな権威の下にその位置を譲ったのであった。さすが神社同士であり、消されてしまうことはなかった。ここにも縄文から弥生そして有史時代までのつながった歴史が生きている神社によって示されているのだ。

茅ヶ崎・藤沢にある神社は、鎌倉武士が支配の手段として興された神社が多い。西神奈川の神社を巡っているとき、青い鳥居の神社に出逢った。御霊神社とあった。祟りを恐れて祀ったという京都の御霊神社を勧請したものと思われるが、由来書の看板ひとつない。ちよつと不気味なのである。

気になつて藤沢市の地図を調べると、藤沢の南部に御霊神社がぞろぞろある。6つほど見つけた。これは異様である。我が家のすぐ近くにある羽鳥の御霊社探索から始めた。地図で見れば、ふだん行きなれている町の真ん中にあるはずなのに、まるで隠れているように探すのが大変なのである。やっと見つけたが、寂れていて鬼気迫るような感じだ。しかし祭りの予告も張り出されており、生きている神社なのだ。

次に藤沢市の東、川名にある御霊社を見つけた。ここは山の半分が削られてかろうじて残った山腹にあった。削られた半分は巨大なマンシヨンがせまっている。ここには由来書の石碑があつて、勧請したのは平良文と言う人であることがわかった。

そしてそこから北に1kのところにまた御霊神社がある。東海道線で大船から藤沢駅に向かう時、南の列車操車場を過ぎて、川を挟んですぐ小さな山がある。(ちょうどツタヤやミズノフットサルの反対側になるところ。)この山に御霊神社があると地図ではわかるのだが、近寄る道がわからない。小さな矢印看板を見つけて、やっとたどり着いた。ここは村岡総鎮守御霊神社とあり、粗末だが案内書も置いてあった。

平良文という人は、桓武天皇の5代目の子孫に当たる人であった。桓武は奈良の都に終止符を打った天皇で、長岡京を試み、ついで京都の平安京への道をひらいた人だ。子沢山で、皇室で賄いきれない子供を平の名を与えて皇孫から外した。そのひとり高見王とその子高望王は、関東一円に領地を与えられた。



当時貴族は、京都に住んで領地を間接支配したが、その例にはならわず、彼らは領地にいつて住み、直接支配した一族である。平良文の従兄弟には例の平将門がいる。将門のことは神社に深い因縁があるので、後にもう一度取り上げるが、ここでは良文に戻る。



平一族は天下りであるので、実際にその地で民衆を支配するのには苦労したはずである。権力・武力だけでは従わせることは出来ない。良文が神奈川の領地で行なったことは、御霊神社の勧請であった。これは恐ろしい崇り神社であり、桓武帝が第一位の位を与えた神社であるという位格は、支配者の権威付けに

ふさわしいものであった。民衆から愛される神社ではなかったであろうが、ひざまずかせることは出来た。川名のも、村岡のも、険しい岡にあつて、人民を見下ろしている。

大船の田谷洞窟のある山の上にも御霊社がある。不気味な雰囲気は保っているが寂れている。

案内書に寄れば村岡御霊神社を関東総社として神奈川南部に二六社あるという。鎌倉時代には御霊神社は五霊神社となり、良文の子孫である大庭・梶原ら領主の先祖を祭るようになっていった。

ところで、見てきたように、川名御霊神社のようにすぐ傍まで開発が及んでも壊して移転することなく、その寸前で止めているのを見ると、現代の土地再開発業者もその崇りを恐れているのではないかと想像される。大手町の銀行倶楽部の横にある将門首塚が移せないのもその類である。

これらの御霊神社の根源社は、京都の上・下御霊神社である。桓武帝が、遷都騒動に絡んで追放し、憤死させた早良親王の崇りを封じ込めるために建てた神社である。これは日本の神社の歴史にかつてなかった類の神社である。縄文由来の自然神社とも、弥生由来の先祖神社とも違い、最近まで実存した人間を神として祭つたのである。それから100年もたたない平安中期、次の崇り神、菅原道真の天満宮ができた。同じように崇りをなだめる目的で建立されたが、御霊神社と違い、菅原道真は不遇の人として判官びいきの庶民の人氣があつた。やがて学問の神として広く信仰を集めた。大阪天満の天神さん、湯島の天神など数え切れないほどの天神がある。受験生の絵馬が境内を飾る。

同じ種類の崇り神は将門を祭る神田明神などの将門神社がある。(なおこれらの崇り系神社に共通す

るのかもしれないが、御霊神社・神田明神や湯島天神には、青い色の鳥居がある。第4節の写真を見て欲しい。）

平将門は、先に上げた桓武帝の子供対策として、平姓を与えられて、関東に降った一族の4代目であり、先の御霊神社を担いだ平良文の甥に当たる人であるが、茨城・千葉北部を本拠として勢力を築いた。その過程で何度も領地トラブルがあり、京都に呼び出されたりしたが、最後は反乱覚悟で新天皇と称した。しかし内部分裂もあり討たれて、その首は京の川原にさらされた。首は胴体を求めて関東に向けて飛び立ったという伝説から、大手町など関東の各地に首塚がある。江戸三大神社の神田明神は将門を祀る。

京都朝廷には逆賊であるが、関東では朝廷に対する反乱の英雄であつた。それに共感した大田道灌は、江戸築城の際、その鎮守として将門を祀った。東京九段の築土神社である。江戸時代は、江戸城の北に広大な境内をもつて民衆の人気を集めた。徳川家も尊重した。同じく将門を祀る神田明神も栄えた。しかし彼の評価は明治の天皇復活で一気に逆転した。逆賊の頭であり、それを祀るのは不忠の行為と



された。神田明神から将門は追放された。軍国日本の聖地となつた九段の地にあつた築土神社はさらに不幸であつた。祭神に天孫ニギノ尊を迎えたが、相殿として将門を祀る事は止めなかつたために、つぎつぎと追われて今は九段坂下にかかる傾斜地のビルの一階にある。

戦後、神田明神は将門公を再び祭神に戻して、三社祭りは盛んになった。

築土神社も人気を取り戻し、今は千代田区や新宿区の区民の参詣は絶えない。

話は、まるで将門の首のように、平安末期から一挙に現代にまで飛んだ。もう一度時代を戻ろう。

平安末期の平族は御霊神社といった貴族の信仰を関東の地にひっぱって来たが、鎌倉時代は武士達の勝利の時代だ。彼らにふさわしい神は、戦いの神・勝利の神、八幡だつた。

宇佐八幡からはじまり、それを京に勧請した石清水八幡は、源氏武士の帰依をうけた。鎌倉幕府は石清水八幡から勧請して鶴岡八幡を幕府の中心においた。九州の宮崎八幡宮は元寇の際に「敵国降伏」を祈願したので有名だ。

茅ヶ崎市の中には鶴嶺八幡がある。ここは鎌倉鶴岡八幡の元宮といわれ、幕府創立より150年前、源頼義は下総の乱を鎮定するため懷島郷（現茅ヶ崎）に石清水八幡宮を勧請して建立し、戦勝祈願をしたという。先の平良文が御霊神社を祭っていた頃からは約百年後のことで、この地も平家から源氏へと勢力が変化していたことを、この神社たちは語ってくれる。



海軍の守り神だった香取神宮



香取神宮本殿

八幡信仰は、戦勝を祈願できる戦いの神として武士文化と共に栄えた。軍国主義が盛んになると戦いの神として、日本神話の出雲征服の神、武甕槌神、経津主神をそれぞれに祭った鹿島神宮・香取神宮が脚光をあび、旧陸軍と海軍がスポンサーになった。元来平和な人々を結ぶ神社が多い中で、これらは戦勝祈願を専門とする異色な存在だ。

九 徳川と明治、二つの権力下の宗教政策に蹂躪された神社

明治政府は政権が樹立すると直ちに発足させた神祇官制度は新体制を天皇制国家とすることを目的としたものであった。手始めに神仏混交から神道の純化を目指した教令をだしたが、受け手たちがオーバーランして全国的な廃仏毀釈運動に進展した。それは仏教寺院に打撃を与えたが、実は寺との分業で成り立ち、寺によつて実質的に支えられていた村社レベルの神社にも、破壊的な影響を与えた。後世から見れば権力を握ったものたちの突然の愚行のようであるが、実はそれを胚胎させた長い民衆運動があったのである。

その民衆運動というのは江戸初期から始った伊勢講や庚申講といった村単位の民間信仰の組織的な運動である。

伊勢講は伊勢神宮の外宮の御師たちによつて普及した運動である。伊勢神宮は戦国時代の混乱で神領は犯され遷宮の費用も賄えなくなったような貧窮状態にあった。天照大神の内宮はそれほどの訴求力はなかったが、外宮は豊受という食の神で、農業やさらに諸産業と商売を保護する神とされたことから、民衆に受け入れられる道を見出して、外宮からの伊勢の御師が各地各層に働きかけて、伊勢参りの風習を打ち立てたのである。

同じように流行した庚申講は道教に由来した民間信仰で、身体にすむ三尸虫が庚申の日に天帝に罪

業の報告に行く日に、それを妨害するために村民全部が寝ずに宴会をして過ごすという風習である。庚申の日は60日ごとに巡ってくるので、村民の楽しみでもあった。これをきちんと続けることは、農作業のことや、凶作や災害などで大変困難なことであったが、無事3年間欠けることなく続けることができれば、記念に庚申塔を建てた。関東の村社に行くと必ずいくつかの庚申塔が見つかる。

このような講が流行した背景があった。それは徳川幕府がとった強圧的な宗教政策である檀家制度であった。キリシタン禁制を徹底するため、1664年(寛文4年)全国の村々に強いたこの制度は、仏教寺院を根本から変質させてしまった。村人を一人残らず登録させる宗門人別帳は1村1寺の檀家寺で作成され、民衆は生まれてから死ぬまで檀寺に拘束された。寺院の住職の生活を保障するため、村民家族1人につき1カ月に米3合ずつ住職に差し出すことが決められ、法事や寺の立替などもすべてを檀家が受け持つのが義務となった。当時の収入からみて年収の数%の支出にも相当し、民衆は藩と寺の二重の支配と負担を背負わされ、怨嗟の的になった。仏教寺院は豊かにはなったが、宗教的にはマイナスであった。寺は安定し固定化され、宣教や寺勢力拡大は必要もなくなった。そこには形骸化と宗教的腐敗が起きた。一方、中小の神社は仏教寺院の付属物となった。(いまは大神社である三嶋大社ですら江戸時代は愛染院という仏教寺院が別当を務めた。三嶋大社の宝物館には江戸中期1728年第六一代神主の矢田部盛富が幕府に訴えを起こして、三嶋大社の独立を得たという歴史を記している。この神主は三嶋大社の中興の師として馬に乗った銅像が建っている。)

このような仏教寺院の権力支配とともに民衆の心は寺から離れていった。そのエネルギーを吸収したのが各種の宗教的な講であった。

伊勢講というのは、村全員から少しの金を集めて、何年かごとに集めた蓄積金をもって、代参者を回り持ちで決め、伊勢参りに送り出すという制度であった。それは「お陰参り」の名前も得たように、日常の生活から解放されて一生に一度の大旅行のチャンスを与えてくれるありがたいものとなっていた。毎年農閑期に人々は出かけたが、60年に一度の周期で爆発的な全国流行を発生した。ひしゃくを腰につければ伊勢参りの代参と認められるような風習が広まり、店を抜け出した奉公人も、てんでにこの列に加わったという。そして禁じられていた村からの脱出の機会として都市へ流れた。明治維新の直前には伊勢参りから発展して「エイジャナイカ」と民衆が踊り狂う騒動になった。天から伊勢神宮のお札が降ってきたといった噂がながれた。田舎の茅ヶ崎でも柳島という相模川河口の村で降ったと伝えられている。伊勢参りの名を借りた世直し騒動であった。明治維新はそんな騒然とした民衆騒動の雰囲気の中で生まれた。しかし王政復古の宣言がなされるやこの騒動は消えた。熱狂的な伊勢参りも一瞬にして消えた。皮肉な結果だが、この期に展開していく日本の歴史の本質を語っている。明治天皇が伊勢神宮を参拝されるときに見苦しい民衆がいては困るのである。

江戸時代の民衆の熱狂的な伊勢崇拜を見て、尊皇攘夷、国粹的神道国家樹立を夢見た明治政府が国民の支持を得ると信じたのも無理はなかった。また神仏混交の中でまどろんでいた仏教寺の寺僧も、戸

惑いながらも明治政府の神仏分離の政策に従った。

当時の江ノ島の寺僧の記録が残っている。江ノ島は、江戸時代まで岩本院、上の坊、下の坊からなる古儀真言宗の仏教寺であった。京都の仁和寺の末寺であった。しかし歌舞伎白波五人男の「弁天小僧菊之助」が、自らを岩本楼の稚児上がり、江ノ島講の宿客の枕探しの悪党と名乗るように、江ノ島は、信仰もさることながら物見遊山の名所であった。寺の僧も真言宗の僧としての自覚も乏しく、岩本院・上の坊・下の坊の僧侶達は、神仏分離令がでると、さっそく率先して還俗し神主になると届けた。その御師たち20名も「祝職」(はふりしょく)に任命してくれるよう政府に嘆願書をだした。江ノ島から仏塔仏像の類は消してしまった。元来江ノ島は山頂に縄文土器が発見されているように縄文時代から人が住み、その特異な地形から聖地とされて、龍伝説と絡んで水の神・弁財天にふさわしい島であった。仏教寺から神社への転向は先祖がえりとも言えた。

ところが明治政府は彼らの希望にてきぱきとは応えなかった。明治政府の天皇神政の象徴である神祇官を千年ぶりに復活して行政機関の筆頭に置いたもののその内部は混乱していた。明治維新の精神的指導を果たした国粹的な平田神道派は次第に開明的なビジョンを持っていた津和野派国学学者の圧力の中で勢





力を失っていった。平田神道の熱心な推進者が一度は希望の燭光を見ながら、絶望していった過程を藤村の「夜明け前」は描いている。江ノ島の僧侶達が意気込んで出した神官任命の嘆願書も何度も繰り返したが、政府から何の音沙汰もなく、生活にも困窮したことが記録されている。そして岩本院は旅館となった。二宮尊徳を神道のなかで位置づけし、尊徳教という宗教として確立しようと苦闘した福住正兄もその野望を果たせずに終わったのもこの頃のことだ。福住もまた箱根に旅館を残したのみに終わった。

結局これから見れば、明治政府は民衆レベルの神道復活運動には興味はなかったのだ。新時代の祭政一致は天皇親祭とされ、国家指導の伊勢内宮を頂点とする神社制度を作つて終わった。それは神社を信仰の世界ではない民衆支配の機構としたのである。

官僚機構としても、明治5年には神祇省が廃止され、次に国民宣教の機関としておかれた教部省すら神道中心では遂行できず、神仏儒の合同布教体制となりその意味を失い、明治10年に廃止された。政府が民衆の信仰の世界に立ちいる無力さにその政策の一部をあきらめたことを意味する。そして宗教的教化でなく、むき出しの権力の元で臣民教育を実行することに転向したのである。やがて我々の時代になされていた強制的な神社参拝も、神社を透かしてはるか天皇の住まいの方向に向いた宮城遥拝となつ

たのだ。

私の子供の頃の心ときめく思い出の阿倍王子神社の祭りも小学校へ上がる頃からふつりとなくなった。神社から祭りを追放したのだ。日本の神社の冬の時代だ。

十 歴史に超然として生きてきた縄文神社 稲荷神社

これまで見てきたように、神社は各時代の支配者の意向で揺り動かされつつ、しかし民衆の支持があつてこそ、その活力を保ってきた。そのなかで支配者交替の歴史に超然として存在してきた神社群がある。お稲荷さんと総称される神社群だ。全国に3万社あるとも言われている。

茅ヶ崎、平塚、藤沢の古い屋敷町には、小さい赤い鳥居があちこちに見え、近づくとも私有地の中にあつて、いわゆる屋敷神であることがわかる。茅ヶ崎市史から屋敷神の稲荷についての調査を引用しよう。この茅ヶ崎市史は、我らが高村直助東大國史学教授も編集委員に参加された学術的に価値の高い歴史書である。各地の市などの地方自治団体の歴史書編纂の嚆矢となつたものと聞いている。

昭和56年に発行された考古・民俗編の「家と親族」の項には、屋敷神として稲荷について述べている。茅ヶ崎西部の古くからの萩園という部落では、20戸のうち7、8つの屋敷に稲荷社が祭られている。稲荷社は、先祖から伝来の屋敷の空間と、家族を守ってくれる屋敷神として祭られ、これによって屋敷が祖



霊からつながった霊的空間と意識される。多くは本家とよばれる家に置かれることが多い。そして、月の初めの初午の日などの節目ごとに、ジリイと呼ばれる血のつながった親族が集まる。本家、分家、新家などの位置づけも再確認され、また一族の統合も強めあったとある。

私のご縁のある平塚の旧家にも立派な屋敷稲荷社がある。普段の会話の中でも稲荷神の保護によつて災厄が少なく済んだといった感謝の気持ちがあらわれる。年初めには本宮である豊川稲荷の参詣は欠かされない。

屋敷神社に稲荷を置くのは関東に多いと書いた本もあるがどうだろうか。屋敷神社はともかく公共の稲荷神社は、北海道から九州まで、全国に分布している。

私がゴルフによく誘われていく埼玉の東松山には、駅前に不思議な巨大鳥居が聳えているのに、神社は見当たらない。駅前交番で聞いたら線路の向こうにある「やきゅう神社」？の鳥居だという。東武東上線の線路がその参道を裂いたのだった。あらためて訪ねたら野球神社ではなく、「箭弓稲荷神社」という大きな稲荷神社だった。歴史は古く、江戸時代は多くの参詣者を集めたという。

しかしなんといっても日本一の稲荷神社は京都伏見の稲荷大社だそう。私の五代先祖は京都五条で

扇屋をしていて、最盛期に店風景の絵馬を伏見稲荷に奉納した。子供の頃絵馬堂に連れて行かれた。店先でにぎやかに客の応接をしている様子を描いた大きな絵馬を、それが掛けられていた絵馬堂空間と共にぼんやりと覚えている。大人になってから訪ねたが絵馬堂そのものがなくなってしまうていて、もしや絵馬だけは保存されているかと社務所に聞いたがわからなかった。

伏見稲荷は、山城国風土記の記事によって、奈良時代の初め711年、帰化族の秦氏が伊奈利山を祀ったのが起源とされている。全国にある稲荷は伏見稲荷を分嗣したのが多いときいていたが、実はこの時代、次に挙げるように全国に古い稲荷神社が独立に続々として出来たのだ。それぞれの由来書によって創立の年代をあげると、山形の浮嶋稲荷は680年、大阪の玉造稲荷587年、神戸の糺屋稲荷594年、茨城の笠間稲荷（胡桃下稲荷と古称）651年、宮崎児原（こぼる）稲荷は718年、先ほどの埼玉箭弓神社712年をそれぞれの起源と主張している。由来書は歴史を誇張して書くために、額面どおりに受け取ることはいらないだろうが、少なくとも伏見稲荷から勧請したとは書いていないので、ここに上げた古い神社はそれぞれ独立に飛鳥・奈良時代に稲荷社となったと考えてよいのではないか。

ではこの時代何があったのだろうか。名前や時代は違っている、稲荷神社群の共通点は、主宰神が食べ物の神であるということだ。宇迦之御魂神（うかのみたま）、保食神（ウケモチ）、豊受姫命（とようけひめ）倉稻魂（うかのみたま）宇賀魂大神（うがのみたま）と、名前はさまざまだが、「うか」「うけ」は食べ物の古語であり、すべて食べ物の神である。

それは縄文信仰であろう。食べ物を確保するのが大変な仕事であった縄文時代は、食べ物の恵みに感謝する気持ちは今では想像できないほど高かったことであろう。食べ物は山からの贈り物が多かったから、山に向って食べ物を恵む神の祠をつくり祀ったのであろう。当時は神社に名前はなかった。伏見稲荷も元は山城の三重の山が神体だといわれている。

食べ物神である「うか」「うけ」神を祀る名もなき神社群が、「いなり」となったのは、弥生時代にはいり、稲作が食生産の代表となったときだろう。さらに奈良時代には文字も自由に使えるようになった。稲倉や稲成りは、いなりになり、稲荷となっていく。そして食べ物を恵んでくださる神は総じて稲荷神社となっていくのだらう。全国的な同時発生的なのはこのような事情が全国で似たような時代環境になったからだ。

狐は早春山から下りてくる。農作業の開始を告げる神の使いにふさわしい。稲荷ときつねは組み合わせになった。これとは対照的なのは、狛犬さんが守る神社で、名前の通り渡来系の犬であり弥生時代以降に氏族祖から発生したものだ。そのように見れば、きつねを使いとする稲荷は縄文由来の証左でもある。

ところで仏教系の稲荷社がある。豊川稲荷と岡山の最上稲荷だ。豊川稲荷の祭神は、吨根尼真天（ダキニシンテン）であり、最上稲荷は最上位経王大菩薩と異なるが、狐を伴っているところが共通だ。写真は大坂阿倍野の松虫聖天さんのきつね、巻物を咥えたいかつい姿だ。



伊勢参りが江戸時代、時代を動かした流行となったことは前節で述べたが、伊勢参りの人々の目当ては外宮であり、そこに祭られた神は豊受大神（とようけ）であった。稲荷信仰と同じ食べ物の神なのだ。時代が下つてくると、食べ物生産の農民だけの神ではなく、産業全体の守護神と格上げされていったから、いわば現世的物質的豊かさへの願いを総体として担ってくれた神であった。農民も商家も鍛冶もいっしょに伊勢参りをしたのである。

江戸からの伊勢参宮の途上には豊川稲荷があった。稲荷さんの気安さは、勧請に特別の許可は必要なかったことである。江戸時代以降、屋敷神社として稲荷が爆発的に増加したのだが、寺が信仰の場でなくなった代償として信心の心を補ってくれたのがこの身近なお稲荷さんだったのだ。神社セツトも販売されていたそうさ。むろんきつねの使いの陶器像もキットになっていた。

東京新橋駅付近は現代的な喧騒の街であるが、意外に古い顔をもっている。烏森神社や日比谷神社、塩釜神社、芝神明大神宮など大小の神社がある。芝神明は平安時代の起源であるが、烏森や日比谷は起源のわからない古い神社で、共に稲荷神社だ。日比谷はサバ（旅泊）稲荷と言い、旅人を守ったという。

稲荷神社は守り神だけではない別の顔がある。それはある種の崇り神でもあるということだ。御霊神社や天神も崇り神社ではあるが、それは恨みをもった人の恐ろしさを抑える崇り抑制神社であった。稲荷の



崇りとはそれとはちがったものだ。それは土地の精霊をおろそかにしてはならないといった民族宗教の基底にある自然への畏怖の念に近い。原野を開拓して人間の居住圏を拡大して行つたとき、そこに住んでいたきつねをはじめとする動物達を山へ追いやつた。文明が追い出してしまったその先住の者達への鎮魂と結びつく。その鎮魂の思いは土地の精霊信仰となり、それを動かしたりつぶしたりすると崇りがあるという怖れにつながつた。都市計画や寺社統合などで移動した稲荷神社は沢山ある。そしてそれにまつわる崇り物語も同じくらいに多くある。崇りを怖れて移動できない例や、移動した後また元に祀りなおした例が此処かしこにある。有名な例は羽田空港の穴守稲荷の大鳥居、先にあげた東松山の線路で分断された箭弓稲荷の

大鳥居もその一つかもしれない。

恵みとその裏に潜む畏怖の念、この重層があつてこそ、信仰を深いものとする。

近隣にある稲荷を2つ紹介しよう。鵜沼に昭和18年に建てられたという新しい伏見稲荷系の稲荷神社がある。由来書には、「保養地であつた鵜沼海岸は、

大正12年の関東大震災後、とりわけ昭和4年小田急電鉄が開通してから、鵜沼海岸駅前を中心に住宅地として、急速に町づくりが進み、神社の無かったこの地の鎮守社として、庶民に最も親しまれ、広く信仰の集まる稲荷大神をお祀りした」とある。昭和18年というのは第2次大戦中日本軍が傾きかけた戦争一色の時代で、戦勝祈願の護国神社か八幡神社かと連想するが、そのときでさえ「庶民に最も親しまれ、広く信仰の集まる」稲荷を選んだというからその人気は大きい証拠だ。この神社はちよつと不思議なところがある。稲荷なのに狛犬さんが迎えてくれる。そして鵜沼稲荷の赤いのぼりのあるのは、本殿の裏横にある脇社のような稲荷社なのだ。宮司さんに聞いてみると、元来地元の屋敷稲荷社があった。その地を拡大して公式に伏見稲荷を勧請した。昭和18年列車で伏見から奉戴したご神体を藤沢駅からは神輿で迎えたという記録があるそうだ。また別の記録である「藤沢一わがまちのあゆみ」（昭和58年刊）によれば近くにある鵜沼の藤森稲荷が関東大震災でその霊泉が枯れてしまつて、そのため社運もふるわなくなつたため、それを移転するとして鵜沼伏見稲荷が創立されたとあつた。それを示すように、この境内には三つも脇社摂社があつていずれも稲荷社である。このようにいろんな事情で、元の地にいることがなくなつた近くの稲荷社をまるで疎開するように、ここに迎え入れることになつていたのであろう。

今ひとつ、このあたりではもつとも古い稲荷神社を紹介したい。それは東海道線で藤沢駅を下り方面に発車してまもなく左の車窓から見える何でもない空き地にひっそりとある。数本の古木に囲まれた小さな社だ。過密な都市藤沢になぜこんな無用の土地が遊んでいるのか前から気にはなっていたが、今回初めて

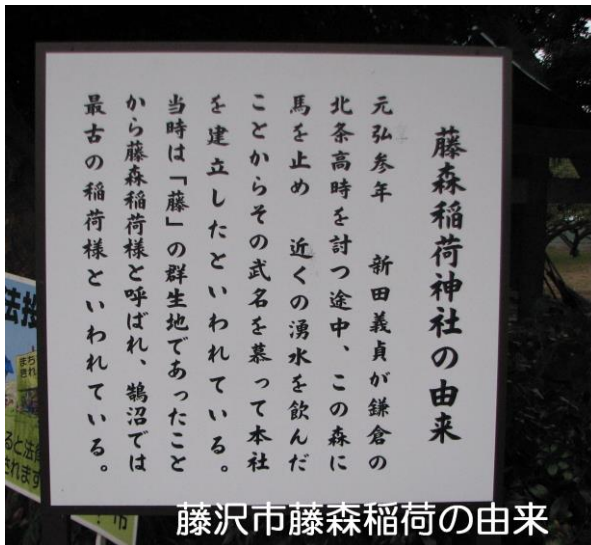


近づいて見た。稲荷社だった。藤森稲荷とあり、鎌倉武士の新田義貞ゆかりで藤沢では最も古い稲荷だという。屋敷稲荷クラスのたたずまいだが、歩いてなら誰でも近寄ることが出来るところなので、公共の神社であることは違いないが、殆んど忘れられた神社である。

「藤森稲荷神社」の名前は、空海の本拠「東寺」の稲荷伝説に出てくる「藤森社ノ縁起」と同じである。空海が苦心してその拠点として作ろうとした京都の『東寺』。その守り神として稲をもった老人

があらわれ、それは稲荷明神だったという物語があった。神をも味方にしようとした空海の政略だったかもしれないが、神仏混交の仏教系の稲荷の始まりに関係する話だ。この鎌倉時代に由来する忘れられた稲荷社はこの名前をいただいたのかも知れない。これが先にあげた鵜沼伏見稲荷の創立の際、受け入れられて移転した筈の稲荷社であった。移転したはずだが、依然としてその後60年その地で頑張っているのだ。

ところで屋敷神社に神明さまや八幡様は見られない。それ



はなぜだろうか。八幡社は元来が、武士達が家来や農民を従えるための權威付けに使った。政權庇護の国家神社も同じで、神社を背にした支配者が民衆を従えた。それに対して稲荷社にあつては支配者も民衆も同じ神の方向を向いて拝んだのだ。稲荷神への祈りである現世の富の願いは、支配者も被支配者も同じだからだ。お稲荷さん信仰には威圧感がないのである。それは縄文信仰の特徴だ。先住のきつねを使者として、平等・平和・繁榮の神だ。すなわち稲荷神社こそ縄文からのアニミズムを現代にまで濃厚に残した神社なのだ。

外国から来た宗教者や研究者が、稲荷神社のきつねに原始的アニミズムを発見して奇異の念に駆られる。また食物の恵みや家内安全など現世的な願いにとどまる稲荷信仰に、日本の神信仰の精神は単純だと評価する。あに外国人に限らず現代の日本人の多くもその感じを共有する。それはそれで間違つてはいない。しかしそこにある人間の支配関係を超越した平和なやすらぎや、地球の先住者達への畏敬の念まで深めてみれば、日本の縄文神信仰を象徴する稲荷社の意味は軽くないと見えてくる。

十一 むすび 神社フラクタル論。

さまざまな神社を見て歩いた。国家的大神社から、屋敷内の稲荷神社まで、姿かたちはさまざまでありながら、共通した特徴があることを感じた。

見てきたように、日本の神道は、縄文人が祠を作つて自然の驚異と恵みに感謝したことからは始めて、時代を経るにしたがつて、渡来文化と混合し、やがて権力の支配の道具にされるといった大きな変化をしていったのだが、それでも全体として、どの神社をとつて見ても似ているのである。

しかもその似ているという現象は構造的でもあり、人間の精神にまで及ぶ立体的なものだ。そして世界を見渡してもそのようなものは、どこにも無いユニークなものなのである。これを何と言ったらいいのだろう。ふと数学の用語「フラクタル」という言葉が浮かんできた。そうだ。日本の神社はフラクタルなのである。個々の神社を部分とすると、それら互いに相似であり、それをひつくるめた日本全体が、あるいは日本人の神社に対する心が、相似なのである。部分と全体が相似という現象を「フラクタル」というのであるが、日本の神社現象はまさにそれなのである。どこが相似なのか。三つにわけて述べたい。

存在と形が似ている。

風習が似ている。

心の向け方が似ている。

① 存在と形が似ている。

鳥居がある。清める手水舎がある。狛犬か狐の使いが迎えてくれる。拝殿があつて、その奥に本殿がある。本殿の中は見えないのが特徴だ。仏教寺院は秘仏とことわらないかぎり本尊を見て拝むようになっている。神社は何がおわしますかわからないようになっていて、見ることはできない。

ご神木がある。境内は老樹に囲まれた静かな雰囲気である。

集会ができる建物がある。普段はひっそりとしている。

神社の建物の形態は、何種類かに分類されるようであるが、その違いよりもその共通性のほうが強い。それは日本縦断して交流がある宮大工という職業集団が活躍したことを見逃せない。ヨーロッパにもフリーメーソンのルーツとなった教会建築の石工集団があつた。特殊な技能を伝承する宮大工は、時の権力者からも厚遇され、代々継承された。木造の神社は建て替えを必要とするし、おやしろの建設がなくとも、お神輿や山車は彼らの作品であつたので仕事は常にあつた。

日本の高級建築で名を上げる竹中工務店は宮大工の後裔である。また関東でひろく活躍した大山神社の宮大工を勤めた明王太郎家（1490～1926）という伝統的な棟梁家がある。秘伝書と図面や契約書、日記など膨大な大工文書を残した。

それから見るとまず徒弟は12歳から10年間は奉公に上がる。日本の宮大工の組織は奉公人、職人、小工、大工、トップは棟梁という職階で成り立っている。大工という名はここから来た。優れた腕

が認められた職人は親方の婿養子になり世襲する。このように世代を繋いでいった明王太郎家は江戸幕府の普請奉行に呼ばれて江戸築城に参加したり、京都の清涼殿普請にも参加した。元来は相模の大山神社の専属大工であり、その他の大きな神社やその神輿を手がけている。（例えば神輿の制作費は、明治の終わりから大正にはじめ300円から500円であった。当時の漱石の朝日新聞社員としての月収は100円であった。）

おそらく日本の宮大工の技能のルーツは、三内丸山の時代からつちかわれた縄文の巨大柱を駆使する建築技術があつて、それが出雲大社の宮殿づくりで開花し、一方で飛鳥時代に中国から伝えられた寺院建築技術によって洗練されて出来たものとみられている。

神社の分布は驚くほど密だ。江戸時代までに人が住んだ歴史のあるところには、数百メートルごとに何らかの神社がある。神社の無いのは新興住宅地だ。私の住む茅ヶ崎の浜須賀海岸には神社はない。戦前まで人の住まない海辺の砂浜だったからだ。しかし同じ海辺でも茅ヶ崎の西へ行けば昔から漁師村だったから、今もたくさん神社がある。

このように日本には、ありふれて、有り余るほどの神社が、実は世界の国にないのだ。ルーツ的に見て近親性のある韓国や中国にも同じものがない。探してみても日本だけのユニークな現象なのだ。かつて森総理が日本は神の国だといって顰蹙を買ったが、**神社の国**だといえは言いあてているのだ。

② 風習が似ている

初詣や、祭日といった決まった日に人々は集う。初参り、七五三といった子供の成長を記念し、感謝する日に集う。成人しても厄除けの年になんともなくおまいりする。ただし葬式には関係ない。(神式の葬儀に出た経験があるので、神道の家庭にはあるのだろうが、明治の神祇官通達で神官は葬儀に関与してはならないとなっていた。)先祖伝来の村で根を降ろしている親戚の葬儀に出たが、通夜・葬儀の間、神棚は白い紙をぶら下げてカバーされた。神に見せたくないのか、神が人の不幸を見たくないからか、いずれにせよ、不幸時に神はふさわしくないのだ。

神社を訪ねていると、ふと若い女性が一人でおまいりに来るのを見かける。中学生が来る。苦しい時の神頼みという言葉はあるが、神社はどちらかというとうれしい成功を祈願しに来るのが似合っている。神社は元氣のないのはケガレ(氣枯れ)で好まない。元氣で成功に向かっていくのにふさわしいのだ。

元氣でお祭をするのが日本の神社の最大の特徴だ。神輿や山車をだして、村中で大騒ぎをする。普段は自然を感じるだけの静かな広場が、祭りになると人で溢れ、屋台の店でうめつくされる。この一日の大騒ぎのために、数ヶ月も前から準備をする。普段は目立たない村の老人もこの日ばかりは役付きの人となり行事の上席に晴れがましく席を占める。普段は着ない紋付袴が身を飾る。

そして神輿だ。「今は担ぎ手がいなくて」と嘆きを聞くが、決して衰えない。むしろ盛んになる。屋台の

店を出す人たちが、各地のお祭日を知っているように、今は神輿連が各地を渡り歩くのだ。むろん彼らに任せることはない。有力な助っ人として招き入れるのである。

③ 心の向け方が似ている。

何を祭っているのか気にしない。

国家が出来てからの神社は、支配者たちの意向に沿って神話などに彩られた人格神を祭り支配の權威としたが、しかし民衆はそれに頓着せず、その向こうに偉大な自然神を見て頭をさげたのである。神社を訪れる人は、それが稲荷であろうと、八幡様であろうと祭神をあえて問うことはしない。明治神宮のように名前からして明治天皇を祭っていると明らかに示されていても、初詣にいく人が明治天皇を慕って参拝しに行くという意識はないだろう。

お寺は、浄土宗か禅宗か宗派をとわれて、宗旨が違えば門をくぐることははばかられる。神社は誰にでも開放されている。逆にお寺の本尊は公開されているが、神社の本殿は開かずの扉でその正体を開放しないが、そこに何がおわすか気にしない。多分鏡か石かお札あたりが入っているのだろうと多寡をくくっている。

なにことの おわしますかは 知らねども かたじけなさの 涙こぼるる 西行

以上三つの面から見てきたように神社はどれも似ている。個々の違いを超えた共役数的なところで相似なのだ。

共役数的なものとは何か。それは千数百年来、歴史が施してきた装飾を洗い流したところに、共役数的なものが見つかるのである。それは、気がつけば、三千年来の縄文神社的信仰なのである。元来文明の曙の時代、世界に共通なものであったが、日本にだけが神社という姿で保存できたといつていい、おおらかな信仰心なのである。日本人には、捨てたくても捨てられないほど身に染み付いたものなのである。

「進化心理学の基礎的仮説は、つぎのようなものである。人間は、進化の結果獲得した、種に普遍的な心のメカニズムを有している。そして、このメカニズムの多くの側面は、現代の環境ではなく、人類進化の歴史の大部分を占める、狩猟採集生活を行っていた時期の環境への適応の結果である。」 岩波講座 哲学 05 心／脳の哲学 心の進化 鈴木貴之

またこの共役数的な神社に重要なことがある。それはこの神的宗教感、他のどの宗教とも親和するものである。それは、世界の宗教対立が不幸を呼んでいる現代社会にとって貴重な特質なのだ。どの宗教とも親和するというのは、言い換えればこの宗教観の上に、どの宗教も違和感なく接木できるということでもある。逆にその上に接木してこそ成熟した人間的宗教になるといえるのである。なぜならば、神社信仰はあまりに

現世的であり、元氣人にふさわしい宗教であり、死の問題には向き合わないからである。しかし元氣な人間も、やがてすべて死に向かうことに気づく。

出雲大社は、神道のこの欠落に思いをいたし、元来出雲の国が黄泉の国の玄関にあるという伝説もあつて、死の問題に正面から取り組んだ神道である。明治の神道改革運動の機に大国主こそ経国治幽の神と訴え出雲大社教を起こした。しかし明治政府はそれを許さず、大社教と出雲大社は別立てとなった。大社教はその主張を貫いて信徒氏子の祖霊を祭る祖霊社まで造った。戦後になって大社教と出雲大社は再び一体運営が行なわれるようになった。

この例でもわかるように、原初の神社信仰も死へのアプローチを元来もっていた。しかし早々と仏教がその答を高度な形で用意したので、それを発展させる必要がなくなってしまったのである。

いわば人生の陽の部分の半分宗教ではあるが、それはそれとして日本の神社は、人間に大自然と共生する意識をうながし、元氣に生きることにとめらいなく味方してくれる存在である。アニミズムで原始的だと軽視せず、一方で常に狭い国家神道に引きずられてきた危険を直視して、ピュアな姿に戻した縄文的信仰心を再発見して、それを大切に受け継いでいきたいものだ。古い神社を訪問すれば自然とそれが出来る。

この心根を失った日本人はどの宗教も受け付けない無神論者になってしまうのかもしれない。

完

注 フラクタルという用語を簡単に説明しよう。これは図形数学の概念で、図形の「部分と全体が自己相似になっているもの」をいう。つまり部分がある形をしていて、それが積み重なってもまた同じ形になっている。全体としてもまた同じ形をしているというものだ。この現象は1975年マンデルブローにより提唱されたが、カオスという概念と同じくこれを使うことで、解明されることが多いことがわかってきている。マンデルブローは「自然はフラクタル」であると言ったが、この意味は、自然の形成原理は「自己相似性」にあるとのこと。つまり簡単な式を繰り返すと複雑さを形成することができる。それもちよつとした複雑さではなくって「無限の複雑さ」を形成できるということ。

二〇〇九年一月三水会にて発表

参考にした文献

古事記 岩波文庫「一」

出雲国風土記 萩原千鶴 講談社学術文庫 1382

出雲大社 第八十二代出雲国造千家尊統著 2005/11/25 学生社

古代出雲の文化 上田正昭+島根県古代文化センター 朝日新聞社 1998-7-30

出雲神話 松前健 講談社新書 1976/7

出雲の古代史 門脇禎二 NHKブックス S51/12

出雲王朝は実在した―最古の統一王朝を探る― 安達巖(あけぼのパン常務) 新泉社 1996/12

三内丸山の世界 岡田康博 小山修三編 1996/11 山川出版

神道 W・G・アストン安田一郎訳 青土社 1992/1/20

日本神道の現代的意義 王守華 本間史訳 農山漁村文化協会 1997/11/30

祭りの現象学 藺田稔 弘文堂 H2/8/10

神社の歴史的研究 神信仰の変遷 鶴岡静夫著 国書刊行会 H4-11-30

縄文の心 平和と豊かさの1万年 根橋章 中日新聞本社平成10年7月

宮大工の技術と伝統 神興と明王太郎 手中正著 東京美術 1996/4

新羅の神々と古代日本―新羅神社の語る世界― 出羽弘明 同成社 2004/7/

すぐわかる 日本の神々 鎌田東二監修 稲田智宏堀越光信著 東京美術 2007/11

茅ヶ崎市史 4 通史編 S56-3-31 茅ヶ崎市史 3 考古・民族編 S56-3-31

豊饒の神さま わかりやすい稲荷信仰 伏見稲荷大社宮司 坪原喜三郎序 H13-5-7 鎌倉新書

稲荷明神 正一位の実像 松前健編 筑摩書房 1988/10/10

岩波講座哲学 05 心／脳の哲学 2008/5/9

縄文の祭り

三内丸山、能登・金沢の遺跡が物語るもの



日本原記その2

縄文の祭り 三内丸山、能登・金沢の遺跡が物語るもの

序

1	三内丸山遺跡の巨木六本柱と岩木山	97
2	深谷の組石遺跡	103
3	北陸の列柱遺跡	110
4	伊豆半島の環状列石遺跡	120
5	町田市田端環状積石遺跡	122
6	結び	127

序

2008年出雲大社を訪問したことがきっかけで、日本の神社の特異性に興味を抱き、1年かけて神奈川県を中心を訪ね歩いた。初めには予想もしていなかった発見があった。それらをまとめて2009年1月に三水会に発表し、その後インターネットで公表した。意外な人が、読んでくれて共感しましたとの反響もあった。

そのまとめを要約すると次のようになる。

- 1、日本の神社は縄文時代にそのルーツが有ると発見した。
- 2、弥生時代から歴史時代に入って、神社はその時代ごとの支配者の道具になるよう変質させられた。
- 3、しかしその根源は覆われつつも残り、日本独特の神社の宗教的本質となった。
- 4、数学の言うフラクタル現象のように、日本全国どの神社も同じ形をしており、また総体としての神社宗教も同じ姿をしている。
- 5、しかもそれは日本以外にないものだ。朝鮮半島にも中国を含めた東洋にもなく、無論世界のどこにもない特別なものとなっている。
- 6、神社宗教は、他の信仰の邪魔をしない性格で、日本人はどの宗教に入ったとしても、正月の風習とか、鎮守の森や山などの自然に宗教的といつてもいい敬意を払うといったように強固なDNAとして

埋め込まれている。その宗教体質は日本人の固有の性格を形作っているといえる。

このような結論に達し、その根源が縄文時代にあるならば、その信仰を探らなければならなかった。2010年から2012年にかけて各地の縄文遺跡を訪ね歩いた。日本の縄文遺跡は、すでに江戸時代から発見され続けているが、明治にはいつてドイツ人モース博士が大森貝塚を発見してからは、近代的な学術手法で発掘調査されるようになった。その後の国土開発で失われた遺跡も多くあるが、それでも文化庁の規制で、遺跡が発見されると一時工事が停止されて、最低限の調査が行われるなどの保護の手が打たれてきた。今では各地で縄文遺跡は、村おこしや観光名所として利用されるなど、熱心な遺跡保存が成功している。専門家考古学者による縄文遺跡調査と記録も進んでいて、有名な遺跡には博物館が作られ、その学術成果も見やすく展示されている。したがって我々素人でも接しやすくなっている。

しかし各地の縄文遺跡の調査結果をみると、大きな欠落がある。縄文人の生活状況は次第に明らかになったが、縄文人がどのような精神生活で、どんな宗教的行動をとったかについての考察は少なく、諸説がおずおずと出されているだけである。その心がわからない限り縄文人はジオラマの人形でしかなく、縁のない別の世界の人間のような存在でしかない。

縄文人の心の探求がないのは、科学的研究に宗教はなじまないとされているためかもしれないし、また縄文人が文字を持たなかったので、精神活動の記録がないからでもある。そのような中でも梅原猛氏は縄文の信仰をテーマとして追求している。彼が館長を務めている三方湖縄文記念館の展示は梅原氏の主張

に沿って作られていて、縄文信仰についても正面から語られている。ここで梅原氏は、縄文人の信仰は「蛇」信仰だという。縄文土器の文様に蛇がくり返し出てくることからの推定だ。それを裏付けるように、例えば諏訪地方の土着神とされるミシャクジ神は蛇のようだ。シャーマンの宗教に馴染みそうな話である。しかし私はそれには納得できそうにない。

私は今回の調査旅行で、**シャーマンの宗教とは全く違う縄文精神に行き当たった**。それは各地に残る縄文時代の巨大構築物が何を目的にして作られたのかをさぐることで発見した結論だ。有名な三内丸山の六本柱、金沢市街のカナモリ遺跡の巨木木柱列、秋田の大湯や町田市、伊豆市の環状列石遺跡などの巨大構築は、驚く程共通で、かつ太陽の出入りを記念するというはっきりした目的を持っていた。縄文集落は日本各地で交流があつたから、お互いに教えあつたこともあつただろう。日本各地で同じ目的のために、違つた構築物が作られたことは驚くに値する。

このような巨大装置の構築は、まず指導者が存在しなければならぬ。彼は数千年の村落の経験知識から太陽の動きを熟知していた。彼は縄文村落の民衆をまとめる力を持っていた。それはむづかしいことではなかった。なぜなら縄文民衆が共通に持っていた心であつたから、語れば簡単に皆の同意がえられたからだと思う。残された遺構から見てそれらは何世代にもわたつての力を結集して作られたものだ。現代では、まずこのような素朴な狙いでは人々が動かないし、またこんな巨木も得られない。二度と生まれない日本人の偉大なモニュメントである。にもかかわらず、現代の考古学では「それが何のためかはわからない」というのが

大方の結論だから寂しい。その意味を再発見しないかぎり、日本人の奥底の心が発見されない。

それを今回探り当てることができたと確信できるのは、現地を訪ね歩いて、そこに残された詳細な記録図を入手できたことと、**その図面をグーグルマップと「日の出日の入りマップ」というインターネットツールで**解析できたからだ。グーグルマップは、伸縮自在に遺跡の周辺の地図情報を与えてくれる。巨大遺構の示す方向に何があるかや、遺跡の標高や周辺の山々と河川などの地形を見定める目を与えてくれる。また PRICE 社というグループが無償で発表している「日の出日の入りマップ」という優れたソフトは、世界中のどの地点でも、瞬時にその日の日の出、日の入りの方向と時刻を教えてくれるばかりでなく、夏至冬至の日の出日没線を常時参考に図示してくれるのである。この二つは、**遺跡を宇宙から観察することができた**ようなものだ。これはおそらくこれまでの考古学者が手にすることのなかったツールである。

そのようにして得られた結論を先に述べると、縄文人の宗教はこれまで言われてきたような、呪術者が密かな空間で行うようなシャーマニズムとは無縁であった。それとは逆に、**オープンな大衆動員型の祭りがその中心であった。今に伝わる日本の熱狂的な祭りの祖型がそこにある。**

その祭りの舞台は、縄文部落の周辺に存在する彼らの聖地だ。それはそれぞれの集落に恵みをもたらす山岳や泉などが、特別の日の太陽によって照らされるのを見ることができる聖地である。そしてそれを望む巨大な装置が近傍に住む縄文人たちの大動員によって作られた。

祭りの時は、太陽の恵みに思いをすることのできる冬至夏至だ。その太陽の出入りの時刻を中心に、縄

文人は住居を出て、聖地に集まり、皆が何世代にわたって作り上げた巨大モニュメントに、その時が現れるのを待ち、記念して、総出で祝い騒いだ。それは今も日本人が持っている祭りという祝祭型の宗教であったのだ。

この結論に至った縄文遺跡の主に巨大構築物について詳しく述べよう。

1 三内丸山遺跡の巨木六本柱と岩木山

1・1 大人の墓と子供の墓

大人の墓と子供の墓が別に作られているということは想像をかきたてられることだ。大人の墓は海に向かう東への広い道の両側とか、南北の道の脇に環状配石墓として発見されている。子供の墓はまとまった場所にあつて住居のそばに作られている。

子供はもう一度生まれ直すようお願い、成人は、あたかも死んで葬られても、村人の労働への出発を見守る役目をしているかのようなのである。転生や黄泉帰りの呪術など原始人に対して抱きがちなもの

はなにもない。

医療の手が入らない縄文人の死は自然死であつた。戦いもなかったし伝染病

もなかったかもしれない。自然死は安らかで苦しみは無いという。苦しみが無い死は周りの人々にも恐怖を与えないから、死者も親しみやすかつた。書物のないこの時代、生きる上の知恵は老人からの伝承しかなか



子供の墓

った。その知恵は尊ばれた。長く生きた人の墓は、必要な時にその伝承を思い出すように道端に置かれたようにみえる。中国大陸にあるシャーマン祖先崇拜はここにはない。もしあれば、死者は生活と離れた山や丘など別のところに敬つて葬つたはずだ。道路脇に埋めたことは、死者がもつと身近な存在だったことを意味する。死者の弔いは宗教心の刺激にはならなかったのだと思う。

1・2 巨大柱建造物

直径1mもの栗の巨木が6本配列された建造物は、



高さ20mもなる建物と想像され復元されている。案内ボランティアさんは、「これは何のために作られたのでしょうか？皆さんの想像は」と問い、ある人は監視塔といい、ある人は灯台といていた。ボランティアもそれ以上は言わなかった。

この遺跡ショップで小林達雄編著の「世界遺産縄文遺跡」をみつけて買ってきた。ここにひとつの示唆を見つけた。この6本の列柱が冬至の日没線にあつて

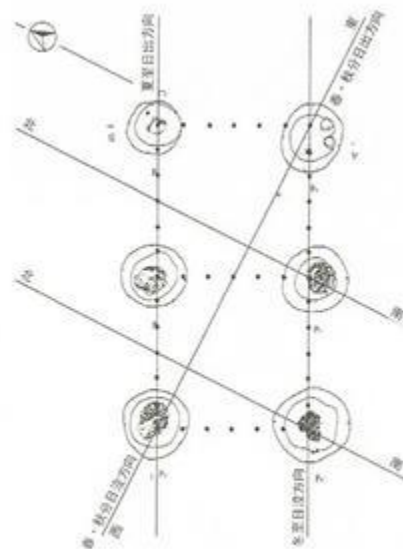


図39 6本柱巨木柱列と方位（太田原調 2000「三内丸山遺跡の6本柱巨木柱列と二型二分」『縄文時代』11、縄文時代文化研究会）



いるというのだ。春分秋分の日出日没線である真東西もこの対角線上にあるという。しかしだからといってそれは何を意味するのか。自明ではない。縄文時代は農耕はまだ始まっていないから、正確なカレンダーの確定のためとは考えられない。単に冬至を記念するために巨大建造物の必要はなかった。この建造に見合うだけの人々の必死の情熱をかきたてる理由が必要だ。

1・3 岩木山神社

その発見のためには別の角度から見るが必要だった。車で案内してくれた友人と道中で縄文信仰が今の日本人の心根にあることを話したら、予定にはない岩木山神社に行ってみましようかと言いついてくれた。彼の住む弘前市の郊外にあるという。30分ほど車を走らせて着いた。

見事な山岳信仰の神社だった。鳥居の正面にすっぽりと岩木山の頂上が望める。津軽富士とも称されるこの山の山頂はギザギザで、この山の噴火が近い過去にあったことを示している。三内丸山遺跡の土器堆積場は発掘断面が見えるよ

うに展示されていたが、何千年にわたり積層状になっていた。積層の原因は噴火降灰によるものかもしれない。それはどの噴火山からのものと知りたく思った。この山かもしれない。

この神社には古そうな社務所があった。夕方になって雨戸を締める準備をしている巫女さんに「噴火のことを知りたいのですが」と尋ねたら、「神主がお答えします。」とはつきりといい奥に引っ込んだ。こんな応答はしばしばあるのかもしれない。しばらくして、神主さんが分厚い本をもって見えた。そこには17世紀初頭からの噴火記録があり、最後は1850年江戸末期まで繰り返す噴火している記録が見えた。山頂の形が険しいわけだ。「三内丸山での積層から繰り返しの降灰を思いました。」と礼を述べて去ろうとしたら神主さんが言葉を継いだ。「このことは誰にも言っていないませんが、三内丸山の遺跡と陸奥湾入り口を結ぶ線の上に岩木山があるのです。」



その言葉をいただいて、帰ってからグーグルマップで三内丸山の巨木構築物と岩木山を結んでみた。

見事だった。岩木山と三内丸山遺跡を結ぶ線はまさに6本柱の方向線上であった。ただし厳密には冬至の日没線ではない。現在の暦では当時から1週間程あとの日の日没線だ。つまり厳密な冬至である必要はなくむしろその頃に岩木山頂上に太陽が沈むのをモニュメントとしたのであった。

再度整理すると、巨木構築物は冬至の頃、集落から岩木山山頂に沈む太陽を拝むための施設だったのだ。集落のまわりはヒバの森林がある。今は開発が進んで森は遠くなっているが、縄文時代は森の真ただ中に集落はあった。

10mをこす巨木の森林に囲まれていたはずだから、ここから岩木山を望むにはその森を越える20m級の高い

望楼を作るほかないのだ。その冬至の観望は村人総出で祝ったはずだ。6本の柱間の間隔は4・2mであるから、望楼の床面積は少なくとも35平米約10坪ある。百名は十分のれる。2層なれば、村落の全住民がこの望楼に登って、岩木山にせずむ冬至の太陽を拝めた。この目的のために村民総出でおそらく世代を超えた構築作業を行なった。生活の全てをそこからいただく太陽と岩木山に熱い感謝の想いこそ縄文信仰心であろう。

また遺跡には村全体の集会に使ったような大型の建物跡が発見されている。案内ガイドさんはその大黒柱は西南の端にあると言った。その方向は岩木山をむいている。風雪で外に出られないときこの大きな建家の中で岩木山に感謝の祈りをささげたのだ。これも村人全員が収容できる大きさだ。西の大黒柱の前には環状列石が発見されている。縄文祭祀跡なのだ。



2 深谷の組石遺跡

2012年5月 かつて勤めていた会社の友人たちの招きがあつて埼玉県深谷市を訪ねた。時間を作つて深谷駅裏にある桜ヶ丘組石遺跡をみせてもらった。友人がこの近くに住んでいるので、あらかじめ探してくれていて、すぐ案内してくれた。インターネットで調べた地図だけでは探し当てることがむづかしかったかも知れないような忘れられた遺跡である。この友人から深谷市の教育委員会が昭和31年に発行した桜ヶ丘遺跡調査報告を送られた。それを参考にしながらこのレポートを書く。

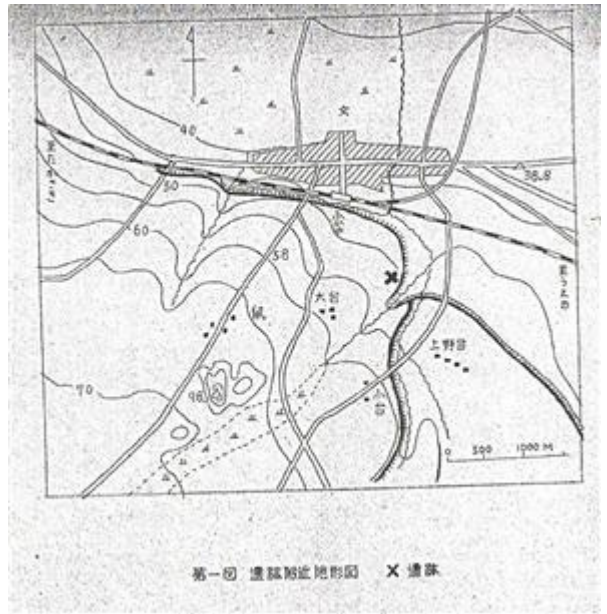
2・1 石礫が並んだだけの遺跡

深谷はネギの名産地であるが、それは高崎線の北側で利根川やその西の支流までの低地で取れる。高崎線の南はすぐ丘陵地になってネギの耕作には適さない。長らく雑木林であった。ここを畑とすべく土を掘り起こしていた農民が地下に多量の石礫があることを発見し、深谷商高の先生に相談したことから始まった。知らせを受けた教育委員会はチームをつくって3日間の発掘を行なった。しかし結果は石礫の配列だけしか発見されず、土器などの期待されたものは何もなく「誠に興味のないことであつた。」測量して埋め戻して調査は終わった。

幸いなことは埋め戻した平らな約400㎡の土地は大部分遺跡に指定されて、そのままにされたことである。今見えるものは1箇所、数個の礫が三角状にかたまつて露出させたものが見えるようにしてあるだけだ。

この報告書は「本遺跡は明快な結論を出すことを得なかつたことは著しく物足りない感があるが、…今後の解決をまつよりほかはなからう。今後の調査研究のため何らかの保存の途を講ずるよう希望する」と結んでいる。少なくともその保存の希望はかなつたわけだ。

2・2 場所の特徴



報告書にある地図をここに示した。中央に「ふかや」と書かれた高崎線深谷駅があり、その上のハッチ部分が深谷の町でここは江戸時代中山道の宿場町であった。だから街の中心線は中山道だ。その中山道が市街地を抜けると鉄道に接近し触れそうなところで方向を東北に曲げて、かつそこがT字路になる。この点はこの地図には何も書いてないが、この遺跡の謎解きのための重要なポイントの滝宮神社がある。それは後に触れる。

近までぐると急な崖となつて斜面が続いていることがわかる。ここから縄文の頃は一望が見渡せたはず

だ。

2・3 石礫の並べ方

発見された石礫の配列集合は8つ。この図の内D8は住宅地に埋まっています今は見ることはできない。A BC1〜7までが埋め戻されて平地になっている。3が露出している。右の道路にそつて説明板が立っている

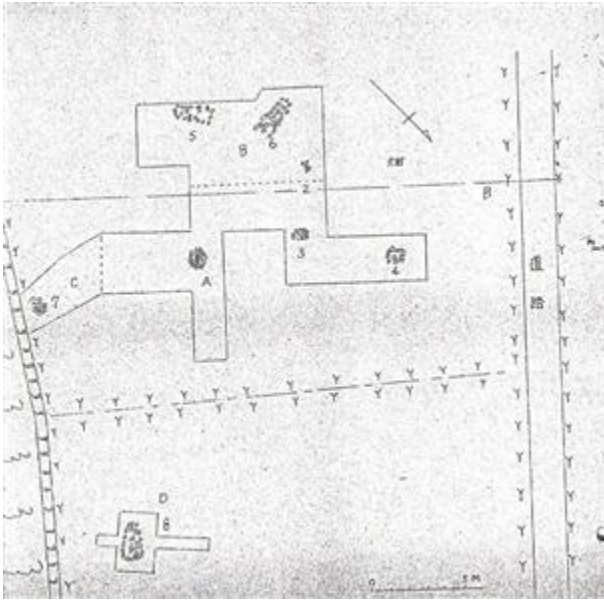
だけの殺風景なものだ。組石は全部河原石でこの遺跡のある丘陵地のもではなく、少なくとも北に数回離れた大きな川から選びとって運んできたものだ。

A1と4、8の組石は方向を示したように長方形に並んでいるが、同じ方向ではない。2、3、7は方向を示しているようには見えない丸い配置だ。多くの縄文遺跡の例に見られるサークルをなすでもなく、雑多な配置をしているのだ。これでは発掘にあたった人が首をかしげ、わからないと投げ出したのも無理はない。

2・4 ここは祭祀跡だった

まずこれは特別な祭祀跡と直感する。その理由は次の3点である。

①ここには縄文人の生活の匂いがない。この付近の深谷や熊谷利根川を挟んだ群馬県新田などには縄文遺跡はたくさん発掘されて見事な火炎式縄文土器なども見つかった。縄文人村落があちこちにあって結構な人口はあったとおもわれる。しかしこの組石遺跡からは期待された出土物品はなかったし、住居跡も近くで発見されていない。



②わざわざ平地にしてそこに遠い河原から100個を越える石礫を運び上げて来て人工的な配置をしている。大勢の村人がある目的で集めて共同作業をした結果である。それは何らかの祭祀しかない。

③高台のはずれにあつて後背は山地で、前方北東から西にむかつて展望できる地を選んでゐる。その方向は暴れ川である利根川流域になり、縄文人の狩猟採取の恵みを与える森林は後背地であつた。集落も森林側にあつたのではないだろうか。

この特別な祭祀の場所が選ばれた謎が解ければ祭祀の意味もわかる。

2. 5 何の祭祀？私の仮説

深谷滞在中の朝、深谷駅近くを散歩していて駅裏に大きな神社があることに気がついた。滝宮神社という。巨木に囲まれた境内だが、湧き水があり用水路に流れ込んでいた。縄文時代の泉の出口を示し御神木となる巨木に囲まれている。この滝宮神社と桜ヶ丘組石遺跡と関係があるに違いないと直感した。それは同じような発見を過去にしたことがあるからだ。

私は2008年、神奈川県勝坂縄文遺跡を訪ねたことがある。相模原市西部の丘陵地域の縄文時代中期前半頃の大集落跡だった。有鹿神社は座間にある有名な神社だが、その由来書にこの神社の元社が北5Kmのところにあったので、それを見たかったのである。それが勝坂遺跡の高台の崖下にあつたの



だ。この石祠の崖づたいの隣には湧水があり、小さな鳥居がかぶせるようについてあった。神奈川県最古の神社というのは、縄文時代にさかのぼるということを知った。縄文人たちが「泉」が生活の基本であり、聖地として大切にすることは容易に想像がつく。

さて組石遺跡の地点から、夏至冬至日没線を描いたのが上の図だ。

なるほど滝宮神社は夏至の日没線上にあるではないか。先の三内丸山遺跡は冬至日没線が岩木山を指していた。深谷の桜ヶ丘遺跡は夏至で泉を指した。対照的だが北国が春への転機をのぞみ、内陸の暑い深谷では冷たい泉の恵みに向かって夏の転機の夏至に祈りを捧げたのは自然だ。



神聖な場としてここに選ばれたのは、滝宮神社のご神木に夏至の日没するのを観測できる丘陵地はここしかないのだ。ここから先は崖に落ちる丘陵の端の地が選ばれている。一方ここから冬至日没線を引くと、その線は深谷の仙元山に当たる。深谷の平野部が広がる中の単独の小山（高さ98m）だけに、古代から地方の霊山として神聖視された。頂上には創立年代不詳の浅間神社がある。

縄文部落民は、この部分の地を10m四方を平たく整地し、河原から手ごろに揃った石をたくさん集めて運んできた。この場所で冬至と夏至の夕刻太陽が沈む日、賑やかな祭りを行ったのだ。

この遺跡は意味不明ということで放置されたままになっているが、幸い空地となつて一部保存されている。再び脚光を浴びて大切にされる時がくることを願う。

3 北陸の列柱遺跡



2012年10月金沢に宿を取りレンタカーで若狭から能登を旅した。縄文文化を知るためには欠かせない若狭三方縄文博物館を見たかったし、西田幾太郎記念哲学館をも訪ねたかったからだ。縄文を訪ねる目的は意外なところで達せられた。金沢市の西はずれにあるチカモリ遺跡だった。

3・1 チカモリ遺跡

縄文のことをインターネットで調べているうちに、数本の巨木の列柱のあるチカモリ遺跡のことは以前から知っていた。それが金沢市内にあるとは知らず今回の旅行の目的にも入れていなかった。それがなんと若狭へ行く行程の途中にあると発見して、寄り道をしてみていくことにした。雨の中誰もいない寂しい公園だが、よく整備されていて



て、遺跡を保護しているささやかな事務所もあった。だがあいにくの休みだった。

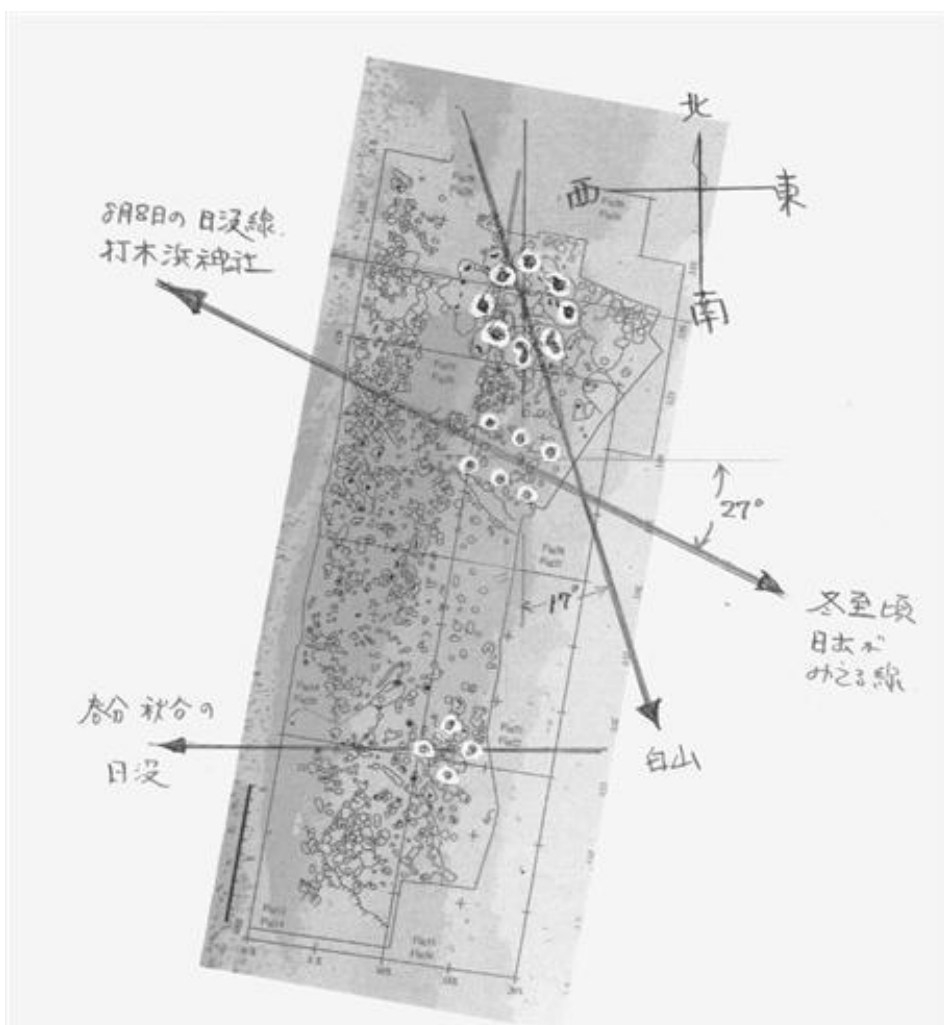


ここは中途半端な遺跡ではなかった。12本の円形列柱の他、青森の三内丸山と同じ6本組柱、更にそのそばに4本組と、3種の違った列柱が所狭しと並んでいるのである。その異様なたずまいに、ただ事ではない雰囲気を感じてしばらくはその場所に立ち止まらざるを得なかった。発掘されたのは地中に埋まった根本だけで、その上の柱は想像の再現物である。

帰ってからこの公園事務所に電話して研究資料「石川考古学研究会会誌第



55号」を送っていただいた。2012年発行の新しい研究誌だ。それによると「チカモリ遺跡は、金沢市南西部の新保本地内に所在する縄文時代後・晩期の集落遺跡である。白山を水源とする手取州扇状地の北辺、標高約7mに位置しており、地盤は砂質で水はけが良く、伏流水の自噴地帯である。」(向井裕知チカモリ遺跡における縄文時代晩期の建物遺構とその年代) この近く2kmくらいのところに縄文遺跡が2箇所発見されていて、縄文時代から、白山の恵みと海の幸を得て、栄えていたところということになる。



これら種類の違う列柱は時代を追って作られたのではなく、同時に存在したとみられるという。それならばこの3種がそれぞれに役割分担していると見るべきだろう。三内丸山の6本柱が冬至の日没線でかつ岩木山を指していたことを参考にすれば、これらは太陽と山岳信仰の記念物ではないかと想像された。これを掲示板にあつた東西南北マークを元に配置を置き直すとこのようになる。

まず12本の円形列柱は唯の円ではなく明らかに出口と見え

るハの字型の4枚のペアーがある。この円サークルはある方向を明示しているとみられる。その方向は南東17度を指している。これは見事に白山とその北西の麓に白山神社を一直線に貫いた線だ。したがってこのサークルは白山を指していることがわかる。この地方はどこからでも白山が神々しく白い姿を眺めることができる。しかしこのチカモリならではの神秘のページェントが隠されている。即ちここからは夏至の早朝にだけ、まだ薄暗い空に白山岳の頂上が日の出で染まるのだ。その秘密は周りの山々との配置と夏至の日の朝に太陽が上がる入射角にあるのだ。普段は日の出の入射は白山の東側にある高い山の猿馬場山と、東北にある金剛堂山に遮られるが夏至の日はそこを避けた朝日が直接白山頂上を輝かせるのだ。



次に6本の並立柱は何を意味しているのか。三内丸山にもある巨大6本柱と似ている。三内丸山と全く同じにこれは冬至の記念ページメントを行おうとしている。この地の冬至の日の出は南東32度であるが、チカモリの6本柱は南東27度で冬至の日の出ではない。この地では東に山岳帯を抱えているた



め冬至の日の出は山に遮られてしまう。太陽は冬至になる前から東南の山に隠れてしまう。日の出は遅く暗い冬の朝が続くのがこの地方だ。それからほぼ1月たったその日、この6本柱の中心線が示す方向に復活した朝日が甦るのだ。今は加賀藩主前田家の墓所があるあたりから浅野川の上流が溪谷に沿って七曲がりする七曲町に向かってこの線は伸びる。近くの山を避けて朝日が差し込むのである。再び元気な日の出を朝早くに拝める日こそ、この地の縄文人が復活のお祭りをした日になるのだろう。

縄文の人たちは、せっかく勢力を使っ
てつくったこの6本柱を、もうひとつの別



のお祭りに使ったに違いないと想像する。夏至を過ぎた夏の盛りの日、この地から広い日本海に太陽が沈む風景がみられるが、6本柱の中心線から日没が望むその日には、太陽と海岸にある打木浜神社の境内が重なるのだ。打木浜神社とは今はさりげない神社で由緒は蝦夷防衛にちなむことになっているが、名前

から素直に想像すれば、浜に木が打ち込まれている所だ。

しからば、縄文期この地は魚を捕る巨木の仕掛けがあつたのではないだろうか。今も能登半島の穴水海岸に残る原始の漁法ボラ待ちやぐらの類を想像すればいい。魚への感謝をこめた夏の宵の祭りが、この6本柱の中心線に日没する日だったのかもしれない。

さて最後の4本柱は東西南北を指し、したがって春分秋分の太陽の日の出日没線を示している。一年の暦を数えたのであろう。

縄文時代のこの地の人々がまずいろんなことを知っていることに驚く。特に冬至から太陽の復活を自然の循環を感謝したといわれる。そのことと、当時噴火を繰り返し、恐れ

られつつ山からの恵みの源である白山を特別な日として記念する仕掛けを作り上げた。
太陽と白山と海の恵みそれを大ページエントとして祝い祭り上げた縄文人に敬意を捧げたい。

3・2 能登半島最大の縄文遺跡 真脇遺跡

能登半島をアザシの頭に例えれば口付近にあたる能登町字真脇にある、真脇遺跡は北陸最大級の縄文時代遺跡だ。富山湾に臨み、三方を丘陵に囲まれた小さな入り江の奥の沖積平野に位置している。遺跡の保存館と温泉が併設されているが、生憎今回の旅の日程では休館日だったので立ち寄りをあきらめたが、インターネット資料によっても報告しなければならない意味がある。

まず真脇遺跡は縄文時代前期初頭から晩期終末のものまで途切れることなく遺物・遺構が出土している、およそ4千年もの間この地で人々が継続的に生活していた。このような遺跡は全国的にも非常にまれで、海と森に恵まれたこの地がいかに縄文人にとつて暮らしやすい土地であつたかがわかる。

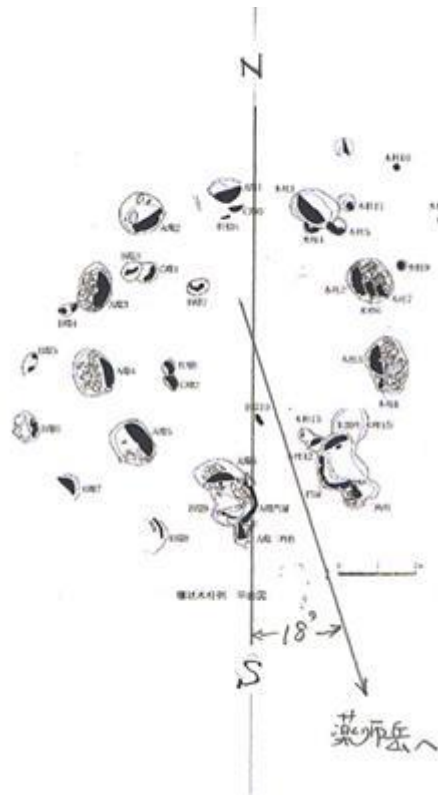
このレポートで欠かすことできない点はこの前節で紹介したチカモリ遺跡と全く同じ「環状木柱列」が発見されていることだ。クリの丸太を半分に割り円形に並べて立てられた構造や配置までそっくりなのだ。

その配置が下の図である。チカモリ遺跡と同じくこの12本の列柱は、門柱とみられる組み柱が出口を示しているようで、全体としてある方向を示している。幸い原図には南北の方向が記入されているので、それで



線引きすると
示す方向は南
南東18度に
なる。

ここは南がす
ぐ海なのでその
方向に何があ
るのか、不
思議だった。例に



よつてインターネットの「日の出日の入りマップ」
にこの18度線を引いて伸ばしていけば、そこに
立山連峰の西はずれに奇立する薬師岳があった。海を隔てて96kmになる。これは房総半島の西海岸か
ら富士山を見る距離だ。
立山連峰は名だたる山々がそびえるが、なんと薬師岳の前にはそれを遮る山は全くないのだ。後代信仰の
対象となった立山などは山々に遮られて地上からは見ることはできない。薬師岳は孤立していて、真脇から
能登湾を隔てて見えるのだ。

それだけではない。このマップの夏至の日の出の太陽の光の入射線を見てみると、その途上には高い山がない。ということは夏至の日に限って薬師岳は朝日に輝いて見えたのだった。その日こそ真脇遺跡近遇に住む縄文人たちが集まり太陽の恵み山の恵みに感謝し祝った祭りの日であつたに違いない。

チカモリ遺跡の列柱が示していたのは北陸きつての名山白山であつた。ただ示しただけではなく夏至の頃に白山の頂上が輝くページェントを用意していた。ここからは白山は見えないので、薬師岳だった。その心と仕掛けの技術は全く同じだ。縄文人たちの交流の強さと、それを単にまねするのではなく自分たちの村固有のものにまで仕上げる確信的文化の深さを物語っている。



4 上白岩環状列石遺跡

伊豆半島の中央、中伊豆に環状列石を含む縄文遺跡がある。2013年1月熱川に行った帰り、伊東駅で降りここが最寄駅とはいえ、駅から車で30分ほどかかって山間のこの地を訪ねた。今は国指定の上白岩遺跡として整備され、環状列石と住居跡が保存されている。

この付近に縄文遺物が発見されることは大正時代から知られていたが、昭和50年代の初め、東京電気の工場敷地になったところから本格的に学術調査が進められた。その詳細な調査報告者が昭和54年1979年に中伊豆町教育委員会から発行されていて、古い本であったが市教育委員会の計らいで入手できた。遺跡のそばに中伊豆歴史民俗資料館があり、館長さんからも丁寧な説明を頂戴した。

4・1 環状配石の謎

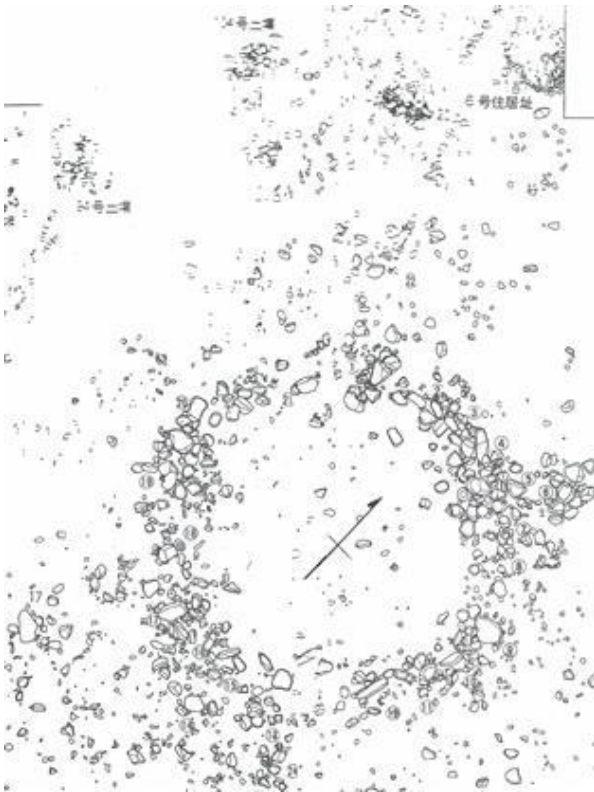
この地はちょうど伊豆半島の中央で、北は修善寺、南は遥か天城山、東は大室山西も西伊豆の山々に囲まれた山間の



盆地で、伊豆半島最大の川である狩野川の支流大見川のほとりの南斜面の段丘地にある。下図のようにこの環状列石遺跡を中心に半径5Km位のところに50箇所以上の縄文住居跡が発見されているので、この地域は山間部に散在する大縄文部落の集合地であつた。今は建物や道路に遮られた狭いグラウンドに過ぎないが、縄文時代この環状列石を中心とした段丘は他の遺跡のあり場所に比べて大きく、周辺の縄文人たちが集まる祭り広場だつたと推察される。

この遺物は環状列石でこれまで見てきた三内丸山やチカモリなどの列柱遺跡が示したようなはっきりした方向性は見えない。しかし何かを意味するように、この環状列石は、図のように半球状になっている。資料館の館員からこの環状列石の描く円は「入り口と出口を持つている」といわれたが、何を意味するだろうか。この方向は北西から南東を向いていて、太陽の夏至冬至の日の出日没の入射角とは関係のない方向だ。

大きな地図でこの方向を延長したら、それは狩野川の河口とその支流大見川の源



流峡谷になった。

川の入り口と出口かもしれない。

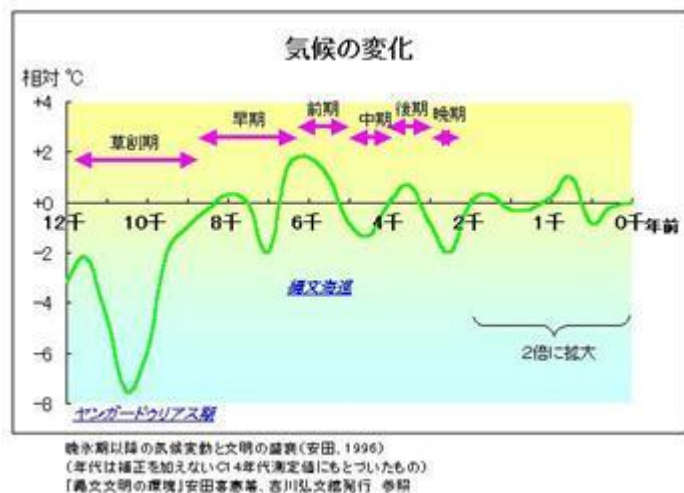
この資料館でおおきな鮭2匹の剥製が展示してあった。昭和50年頃この川で捕れたという。地元の漁師は時々漁れると言ったそうだが、鮭ではないだろうと信用されていない。

しかし、縄文時代は何度も寒冷期を繰り返している。その頃鮭の大群がこの川を産卵のためさかのぼってきて、この地の縄文人たちの最高のご馳走になっていたのかもしれない。

鮭のことは私の空想かもしれないので、更にその謎解きのために、同じような環状列石が発見された町田の例を参考にしながら考えてい。

5 町田市 田端環状積石遺構

多摩ニュータウン通りに面し、京王相模原線多摩境駅近くに田端環状積石遺構はある。相模と武蔵の国の境界だった長い川である境川を見下ろす南斜面の丘陵地にあつて、先の上白岩遺跡と地形条件は酷



似している。

配石の形も大きさもまたそっくりだ。円がほぼ南北に分割されていて、太陽の動きとは関係なくむしろ境川の流れの方向に一致する。これも同じだ。死者を埋めた瓶が散在するのも同じだ。

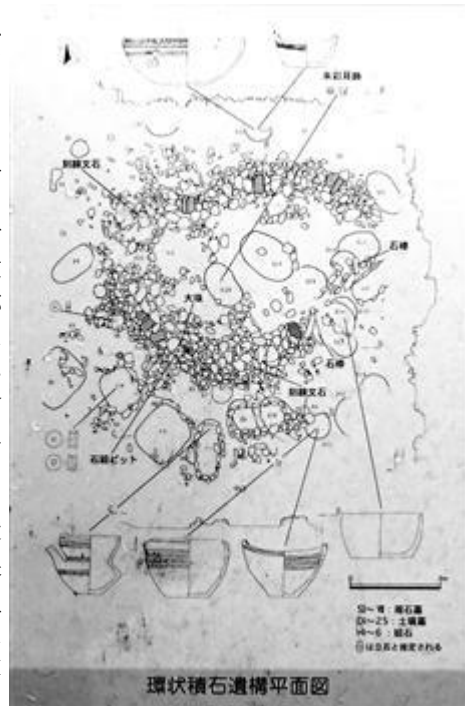
町田市教育委員会の2003年の調査報告によれば、

「積石遺構からは南方の眺望が優れており、丹沢山地蛭ヶ岳頂部に冬至の夕陽が沈む様子が確認できる。季節の節目に太陽の運行が観測できる東日本の各遺跡より報告されていることから、本遺跡もその一例に含まれる」とある。

積石サークルから特定の方角を示すのではなく、この地に立てば冬至の日没が丹沢の最高峰に落ちていく壮大な景色が見られるということだ。この日縄文人たちはこの石のサークルの周りに集まり、なつかしい死者たちとともに、太陽の回帰を祝う祭りをしたのだ。

この田端の縄文集落と、上白岩遺跡のある伊豆半島中部の縄文集落までは、直線距離で約80Km離れているが、濃い交流があったことがわかる。上白岩遺跡のサークルも同じような役割をした





のだろう。上白岩遺跡には冬至の日没線上に大きな目印は見当たらない。その方向を見た写真が次のものである。周りが高い山で囲まれる中で、ただこの方向に空が広がっており、名前もない山がその日没に線にある。130mほどの小さな山に名前は無いが、麓に山を神体にしたようなひっそりとした青埴神社がある。あるいはここが聖地のなごりであったのかもしれない。またその線上の手前には修善寺カントリークラブがある。造成時に山の形が変えられてしまったのかもしれない。



上白岩遺跡の調査報告では、サークル周辺に多くの埋葬土坑があることから墓地であると結論付けているが、単なる墓地でなく、付近の縄文集落集まつの祭りの聖地であり、だから死者も祭りに参加させる意味でここに葬ったのだろう。

なおこの 上白岩遺跡学術調査は、発掘された土器の分析し土器制作の方法や流通までを明らかにしている。報告書から引用すれば、

「当時の土器作製者は、河川流域の崖などから土器作製に必要な粘土を採集し、河原で周辺に堆積する砂粒や水を適量加えながら、土器を整形し、乾燥の後、枯草や流木を用いて、焼成したと思われる。

また、土器焼成場所は河原であるため、その後の河川の活動によつて流失し、発見例が少ないものと思われる。土器中の砂粒鉍物の特徴を調査し、これと各河川に堆積する砂粒鉍物の特徴を比較することにより、土器の作製地を推定できる。」

その結果は出土土器の3割は八ヶ岳南西山麓釜無川の河原で、また3割は多摩川中流域で製作されたもの、残りの4割はこの上白岩移籍付近の狩野川とその支流で製作されたものということだ。黒曜石の矢尻が広くかつ遠く流通していたことは知られているが、重くて壊れやすい縄文土器もまた産地からはるばる運ばれていたことがわかる。縄文時代は流通交易社会であったことのまたひとつの証明であった。また黒曜石の小片は、貨幣がわりに、交換の仲介に役立っていたのかもしれない。

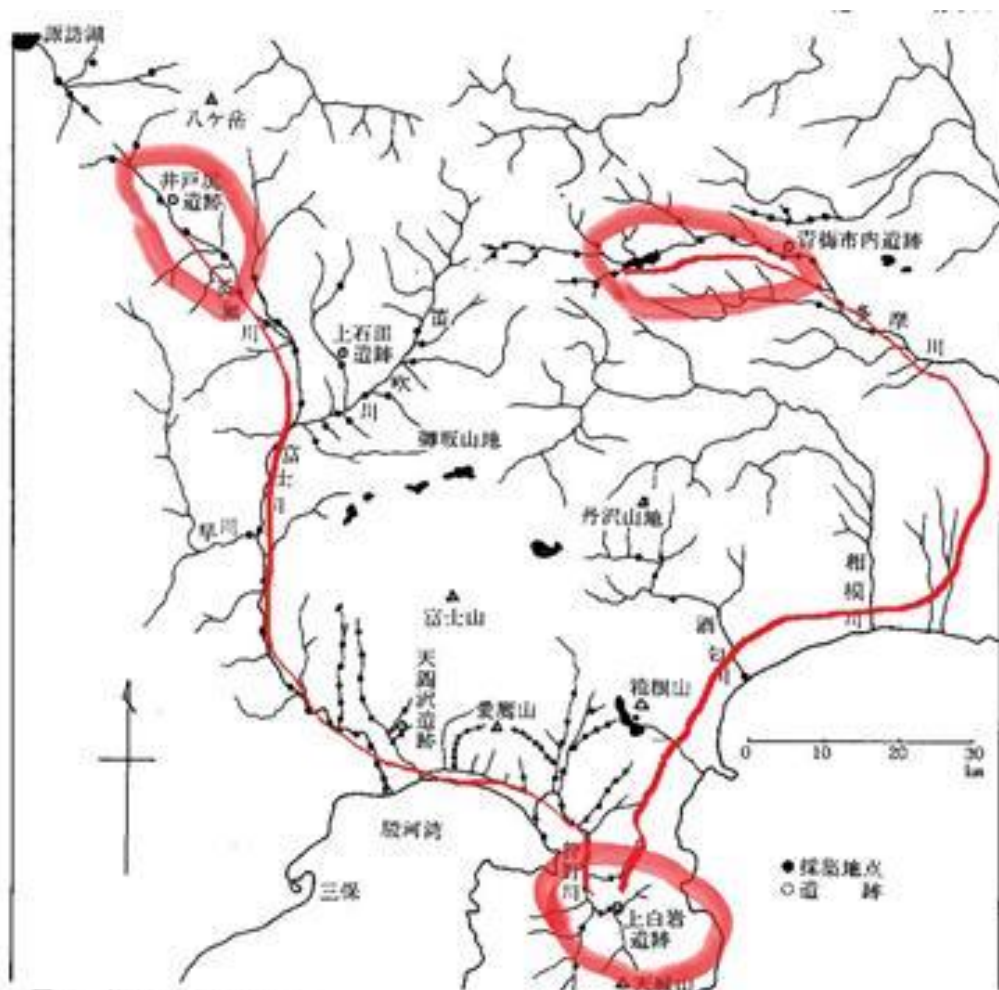


図43 河川砂採集地点図

6 結び

6か所の縄文遺跡を訪ねた。それぞれに竪穴住居跡も見られたがそれはどこも共通していた。興味深かったのは彼らの非日常活動の祭祀跡とみられる遺跡である。これらはいずれも、恵みをもたらす太陽と、山と泉に対する崇敬を示して、広場で大勢の人々が楽しんで作ったお祭りの装置であろつと推測できた。その祭りの縄文人の精神構造は、今の日本人のDNAにきざみこまれたものである。

同時代に作られたヨーロッパ先史時代の巨石遺跡イギリスのストーンヘンジやアイルランドのニューグレンジは、今もどのようにそれを運んだのか、また組み立てたのか想像もできないような巨石遺跡は、少なくとも王とも擬せられる権力の集中がなければできないであろう。

三内丸山や北陸の列柱遺跡は大物だが、大勢の村の衆をうまく指導すれば、できそうな範囲であり、列石遺跡はもっと簡単で、ずっと大衆的だ。権力の集中のなかった時代は、日本では縄文時代だけであつたとおもわれるが、それでも、これだけの縄文遺跡をうみだしたのは、うまく大衆の組織化をする日本の祭り構造であつたのだろう。そのころは今の我々に受け継がれて生きている。

2013年4月17日三水会で発表

2015年5月文庫版のため分割編集

縄文と弥生の接点で生まれた

日本の神社の起源



縄文から弥生へ 諏訪神社が物語るもの

序	130
1 出雲族	132
2 猿田彦	133
3 羽咋市の気多大社	136
4 諏訪地方	138
4・1 諏訪大社の前身は縄文信仰の遺跡	138
4・2 諏訪湖周辺で何が起きたのか	142
5 諏訪大社前宮と守谷長官記念館	143
5・1 諏訪大社の御柱祭	146
5・2 諏訪族の南進	148
6 縄文人の弥生化とともに旅する神様	150
7、結び	153

序

「縄文の祭り」で紹介したように、我々と同じように広々とした野外での大規模のお祭りが好きと分かり、さすがわが祖先と近親感がわいた。彼らが過ごした日本の縄文一万年は、大陸から切り離された孤立文明であつたからこそその平和な繁栄のうちに、世界でも珍しく成熟した土器文明を作った。しかしその孤立はいつまでも存続し続けることはできない運命であつた。彼らに突然のように新時代が訪れた。

大陸から渡来した弥生文化人との遭遇である。それは日本列島を変えるような時代の到来であつたが、それが意外にも、敵対する姿勢はなく、逆に**平和でかつ敬意を持って受け入れた**のである。その様子を述べたい。それを物語る舞台が諏訪大社であり、羽咋大社である。

いま日本に残る神社の祖型がこの時に形作られたと見えた。

ここに述べる縄文人と弥生人との出会いと、その受け入れと和合のところが、今のあなたや私のこのころの原型を示すものである。そしてそこに平和のシンボルとして日本の神社の原型がうまれた。

日本神話に残る争いと征服の物語は、そのあとの第二波、第三波として到来した大陸部族間の関係を物語っているのだ。弥生時代以降、農耕文化が定着し、富の蓄積が生じてからだからこそその争いの登場である。今回のこのモノグラムはその幸せな時代が終わりをつげた激動の時代に何が起きたかを記念するオマージュだ。

この弥生時代への移行がどのような形で行われたかについては歴史学は多くを語らない。神話を含めて書かれた歴史は弥生時代以降の権力争いから生まれたものである。縄文から弥生への移行は土器の様式などの上ではくつきりとした境目を持つて見ることができる。しかし縄文人と弥生人の接触はどのように行われたのか、縄文人たちは抹殺されたのか、平和裡に移行したのか、どのように生活を変えていったのか、ここで起きたはずの大きな動乱については何も分かっていない。できればその痕跡を縄文遺跡のなかに発見したい。

弥生文化は、大陸から直接にまた半島を経由してから波状的に押し寄せた。彼らは勝ち組であれ、負け組であれ、争いの中で大陸から押し出されて日本列島にやってきたわけだから、戦いの技術と征服支配の文化を担っていたはずである。弥生文化をもつ部族が次々に日本に來たとき、先着であれ、後発であれ、それらの弥生部族間では戦闘を伴う勢力あらしが起きたことは容易に想像がつく。農耕文化は余剰生産物の富の蓄積が生まれるので、戦って奪うというインセンティブも生じた。弥生族間の権力争いは記紀にある天孫族の天下りや国津神の抵抗から出雲の国譲りまでの神話に色濃く伝えられている通りだ。

神話から類推して、縄文から弥生時代への移行も、征服によってなされたかのように推測しがちだが、それは違うのだ。**縄文弥生の混在遺跡から教えられる様子は、弥生文化の先頭隊が縄文部族と接したとき、そこに戦闘的緊張はなく、敬意と友好の関係で始まった可能性が高い。**その証拠を、今回能登、北陸、並びに諏訪各地を訪問してわかった。そして意外なことに、この探求全体として求めていた答え「**日本の神社の原型の創生**」を物語っていたのだ。

1 出雲族

縄文と弥生のはじめての接触という歴史的役割をはたしたのは出雲族であった。西村真次博士の著書「大和時代」によれば、出雲族は黒竜江あたりのツングース（女真族）で、BC1800～1000年頃、船で日本海を南下して、樺太―小樽―陸奥―出羽さらに出雲に進出したという。そして出雲の地が良質な砂鉄が取れる為、ここに大きな王朝を作ったとある。

この時代のBC2000年ごろは、中国では最初の征服王朝「夏」が生まれた。NHKが2012年冬「中国文明の謎」と題して中井貴一が出演する連続番組で、夏殷周の3つの古代王朝の出自と変遷を発掘現場からリポートしていた。初の征服国家を作った夏の種族は、その後の中国の伝統となった戦いと支配の形を典礼の宮殿として創出した。青銅器からすぐ鉄器の文化になっていた。

出雲族が日本列島に移ったのはこの時代だから、中国大陸のこのような武力の覇権争いの影響を受けていたと思われる。青銅器や鉄器文化と、平地で灌漑をする穀類の栽培農業技術も知っていた。権力集中の文化をもっていた。当時の縄文人は、森に近い乾燥した高台に住み、その土地では合理的といえる竪穴式住居に住んでいたが、一方の出雲族は、木造の高床式の住居文化を持っていた。この高床式は湿気が多い平地でも作ることができ、変化に富む住宅形式であった。一言で言つて、日本の縄文人たちとは異質のより高い文明をもっていた。

この出雲族が日本大陸で出会ったのが、武力争いとは無縁の、平和な交流しか知らない縄文人たちであった。この集団が日本列島に入ってきたとき、どのように縄文人たちと接したのだろうか。その舞台はまず、新潟から北陸、そして諏訪でおきた。

2 猿田彦

能登半島の中央にある縄文部落、真脇遺跡は前作で紹介したが、その手前に中島町というユニークな町がある。仲代達矢がこの草深い田舎に無名塾という俳優養成所と、壮大な演劇場を建てた。能登演劇堂という。舞台正面の大扉を開くと舞台は自然の山と森が借景となる有名な劇場だ。普段は人を見かけない田舎だが、公演があるとき全国から俳優と観客が押し寄せる。





ここに猿田彦のゆかりの祭りがある。久麻加夫都阿良加志比古神社（くまかぶとあらかしひこ）（熊甲神社）だ。この日本一長い名前の由来は祭神の韓国渡来の王子とのことだが、その大祭お熊甲（おくまかぶと）は、高さ20mもの赤いのぼり旗が20本も林立する能登最大の祭りだ。神社に向かうのぼりの祭列を、飛び跳ねながらひょうきんなしぐさで先導するのが猿田彦だ。猿田彦の存在はこの祭りを象徴するほどであり、近くにその名前を借りた猿田彦温泉がある。湾を一望できる人気の温泉だが、この温泉のマークである猿田彦の滑稽な姿をみて、神話の架空な存在ではなく歴史的リアリティを感じた。古事記神話にある天孫降臨の先導役を務めた国津神の猿田彦は、実はここで実在したのだ。神社の祭神が今は名も知らない伝説の半島渡来の貴人であり、その渡来を先導する猿田彦の活躍を見て、私はこんな想像をした。能登や長野に点在した縄

文部落に、先進文化の出雲族が近づいてきた。縄文人たちは互いに日本列島を広く交易していたので、ほかの地方の縄文人が来ても驚かない、しかしついぞ出会ったことのないような例えばこののぼりでも立てたようなきらびやかな出雲族の出現はショックを巻き起したに違いない。縄文語とのコミュニケーションもはじめは困難だった。そこに無駄な摩擦を起こさないための仕掛けを出雲族は用意したのだ。それは賑やかな先触れ



であつた。おそらく縄文人のなかから出た人たちで、先に出雲族に接してその役割を与えられた人であろう。神話でも国津神とされているから、猿田彦は縄文人だ。通訳でもあつた。猿田彦は「これから来る出雲族は、危害を加えないし、素晴らしいものをもたらしてくれる人たちだから、歓迎して一番いい場所に案内して滞在してもらいなさい。」と吹き込んだのであろう。猿田彦の話聞いて安心した縄文部落の人々は総出で出雲族の到来を待ち受け歓迎した。

その様子を想像させる出来事が2000年後の明治時代にもあつた。明治20年ごろアメリカの冒険家パーシバル・ローウエル（後に火星観測で運河を見たと有名）が、日本の辺境を旅したくて能登を訪れた。彼はその旅行を紀行記「NOTO」としてまとめ、アメリカで出版した。その中で白人の外国人を初めて見た能登の人々を描いている。彼らは前の部落から伝わってくる情報を聞き、大慌てで歓待の準備を整え、村長村役が出迎え、一番いい旅館に泊めて歓待している。その様子をユーモアを交えて描いている。この能登人は間違いなく縄文の末裔であつた。それは縄文末期に出雲族を迎えた様子と同じなのである。

3 羽咋市（ハクイシ）の氣多（ケタ）大社



能登半島の根元に羽咋市という難読の市がある。その町の中心は氣多大社である。市の名前も変わっているが、氣多大社という神社の名前も一癖ありそうだ。大己貴命が出雲から舟で能登に入り、国土を開拓した後に守護神として鎮まったとされる。重要文化財の社殿群の背後に広がる原始林は清らかな清水が流れ、今は国の天然記念物の「入らずの森」で知られる。氣多神社は、出雲や諏訪と同じく大社を名乗っている。国家神道の名残の神社本庁から離脱する訴訟を起こすほど独立心の強い神社だ。出雲大社も戦前国家権力と戦って独立の出雲教を設立したことは有名だ。

さて社務所でこの変わった名前の由来について尋ねた。社務所のおばさんは由来記を何種類かをくれて、「確定的な由来は不明ながら、ひとつの説としてアイヌ語のコタから来たとの説がある、姉妹神社にコタ神社というのがある」と教えてくれた。コタというのは「滞在した」という意味だそうだ。コタンは村だ。居多神社（こたじんじや）は、新潟県上越市



にある神社で、大己貴命（おおなむちのみこと）である。なるほどみな兄弟の出雲系だ。

気多大社は海から近いが小高い森にある。参道は海に面した大鳥居からはじまる。その近くの麓には縄文住居の遺跡が発見されている。縄文集落から見上げる森と清流が縄文人の聖地であり、今も御神体である気多大社になっている。この地に船で出雲族が来たとき、先導役の猿田彦の前触れがあつて、部落総出で歓迎したことだろう。自分たちの部落にお留めするのは恐れ多い、一番の場所は彼らの聖地である神聖の森と清流の入り口であつた。彼らは、この地を提供し、出雲族はここにヤシロを構えた。縄文人はその後、森と清流の聖地を崇めたが、それは出雲族の族長大己貴命を祀る社となつたのだ。聖地であり、貴人の社という二重の意味を持つようになった。日本中の神社が同じような経過

をたどつていったのだ。

気多大社という不思議な名前の神社はそんなことを物語っている。

4 諏訪地方

諏訪地方は縄文遺跡がおびただしくある地帯であるが、その中心にあるのが諏訪湖とそれを挟むようにある諏訪大社の上社下社だ。その配置をはじめとして多くの不思議な顔を持った神社であるが、この諏訪大社の成立の事情は、気多大社と同じように、縄文と弥生を結ぶドラマを今に見せてくれる稀有の神社なのだ。

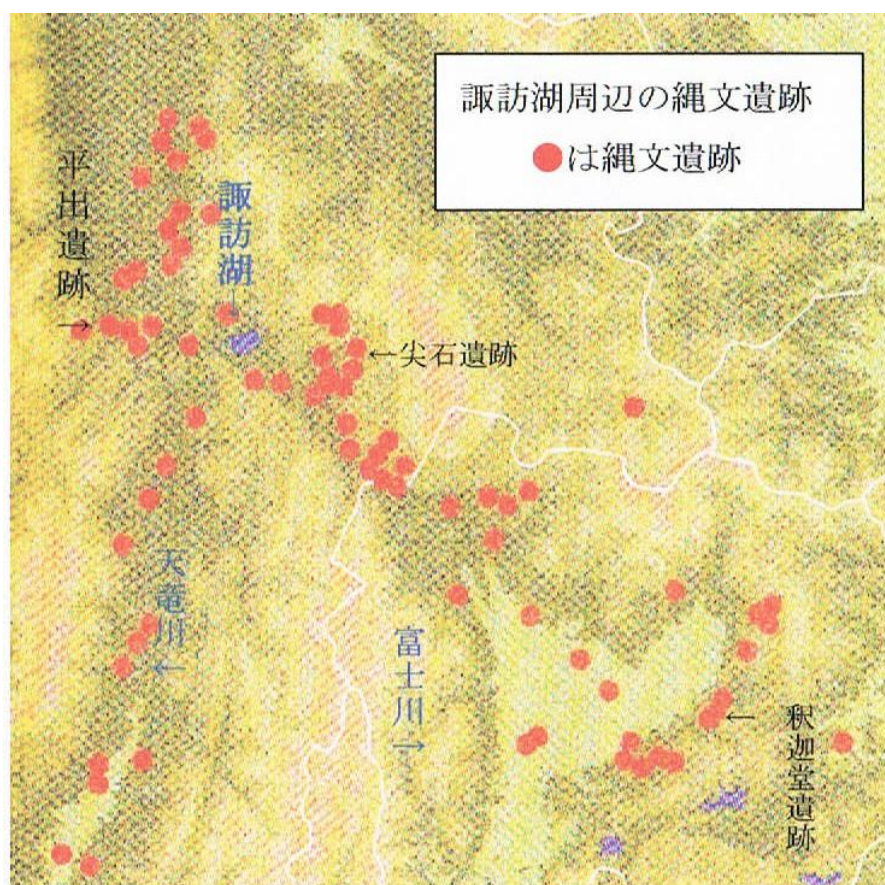
4・1 諏訪大社の前身は縄文信仰の遺跡

諏訪大社の次の様な特徴を知れば、これがこの地における縄文信仰の聖地であることがわかる。

まずご神体が守矢山とそこから流れ出す泉であること。その聖地を取り囲む四本柱を立てることが重要な神事であること。上社と下社それぞれが縄文居住地の限界に位置すること。

これらの重要な本質は、弥生時代の大発展によつて諏訪大社と呼ばれるようになった今も、変わっていないのだ。

まず諏訪湖周辺には縄文遺跡が多いので、それを概略つかんでおこう。



長野県松本平の南端にあたり、西に穂高岳や常念岳など北アルプスの峻嶺を、また東に鉢伏山や高ボッチ山など東山山麓のなだらかな山並みを仰ぎ見る平出遺跡は縄文時代の、早期から晩期までのほぼ全期間の痕跡をたどることができる。

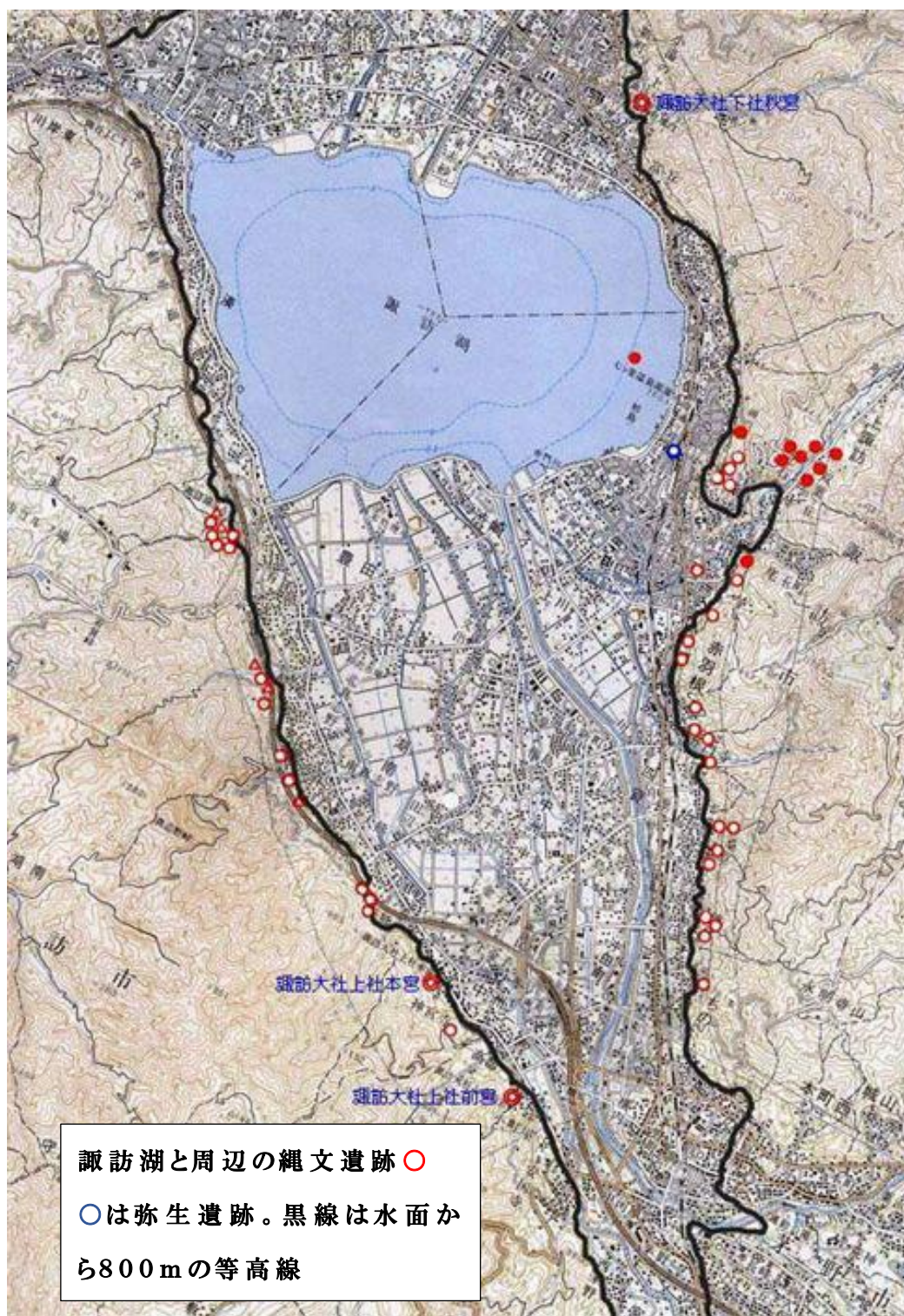
最も栄えたのは中期（約4500年前～5000年前）で、116軒の住居が見つかっていて、これらの住居からは、豪華な文様で飾られた土器や石器類が多量に出土している。また土偶や立石といった信仰に関する遺構・遺物も多く、豊かで安定した暮らしが続けられたことがうかがえる。

尖石・与助尾根遺跡（とがりいし・よすけおねいせき）は、長野県茅野市豊平南大塩にある縄文時代中期の集落遺跡で戦前から発掘されてきた縄文時代を代表する遺跡の一つとして知られている。現在は立派な博物館がある。

釈迦堂遺跡は中央高速道のPA釈迦堂の南側の高台にあつておおきな博物館が置かれている。PAに車を置いて入場することができる。ここの遺跡群は、甲府盆地東部、京戸川扇状地の扇央地に位置し、南北450メートルにわたって分布する。標高は450メートル前後。1980年（昭和55年）から翌年にかけて中央自動車道の工事にあたり、山梨県教育委員会による発掘調査が行われ、多数の縄文時代（前期・中期・後期）の竪穴式住居跡や千点以上におよぶ土偶などが出土した。博物館にはおびただしい数の土器土偶が展示されている。ユニークなのは可愛い人面土偶だ。

このように諏訪湖周辺の高台からはじまって、釜無川、笛吹川、天竜川の渓谷沿いに、まるで縄文銀座のように分布している。このあたり縄文時代を通じて、富士山や浅間のような噴火の災害もさけられ、気候も温暖で、鹿などの狩猟、栗などの採取、水が豊かに湧き、川魚も取れ生活しやすかったのだろう。





4・2 諏訪湖周辺で何が起きたのか

これほどの縄文銀座であっても、諏訪湖周辺に注目すれば、諏訪湖湖畔には遺跡は発見されていないのだ。先の図のとおり、縄文遺跡はすべて水面から800m（図の黒線）より上に存在しているという調査結果がある。諏訪大社の前の宮、上社、下社の三社がいずれもこの線上にあることに注目。先に述べたこれが縄文由来の証左の一つでもある。この線の意味するところは、諏訪湖の水位が変化しても、浸水しない高台の土地でないと堅穴住居はできないことを示していれば縄文人の生活圏の境界なのである。

現代の湖畔は高級リゾートで開発され尽くしているが、諏訪湖南東の湖畔にぽつんと遺跡がある。これが数少ない弥生遺跡なのだ。弥生遺跡が残りにくいのはそのまま歴史代に人々が住み続けたからだろう。縄文遺跡が比較的によく見つかるのは、縄文人が住んだ場所が山麓で、その後は住居地としては放棄されたから保存されてしまったと考えられる。

さて、この縄文銀座にもついに出雲族がやってきた。気多大社の例のごとく、ここでも猿田彦役の先導があつて賑やかに到来したのであろう。出雲族は北日本から日本列島に入ってきたのでこの地には、上越あたりから長野盆地を経て南下してきたと見られる。出雲族の到着を示す伝説の遺跡が塩尻にある。その道筋に当たる塩尻の銀嶺カントリーゴルフ場三番ホールティーグラウンドのそばには十五社平という石塚が残

つている。ここは建御名方命の妻八坂刀売命が子供を産んだところだという。ここから塩尻峠を越えれば縄文銀座だ。この名前はこれから物語の中心となるので覚えておいてほしい。

この周辺の縄文部落は共通の聖地を持っていた。守谷山（モリヤはアイヌ語で小山の土地）とそこから流れる清流だ。いまでも諏訪大社上社の御神体だ。上社の拝殿から守矢山があがめられるようになってい

5 諏訪大社前宮と守矢長官記念館

さらにその諏訪大社の元の宮が残つていて、前宮といい古色蒼然とした姿のまま残っている。守矢山を見



上げる神社の境内は4本柱がたつて、その脇にこんこんと清水が湧き出し聖地にふさわしい場所とわかる。右上の写真は、清流が湧き出しているところを囲んでいる巨木の柱の1本である。

ところが上社前宮の神籬にかこまれた境内はその泉水の横にあつて、中はこんもりとした墓があつて、それは建御名方命の妻八坂刀売命の墓だと書いてある。つまり今の諏訪大社のご神体はもはや山ではなく八坂刀売命だというのだ。

建御名方命は古事記神話によれば、出雲の大国命の子供で国譲りに反対して、大和朝廷に敗れて逃げ、諏訪に敗退した神ということになっている。古事記は大和朝廷の立場に立つて作話しているのでこの通りとすることはない。少なくともこの古事記のように逃げてきた敗戦の将ならばその妻が神社の祭神にされることはないだろう。

私は平和友好の弥生族第一陣であつた出雲族の直系の大物であつた建御名方命家族一族の集団を率いてついにこの地に來たのだとおもう。先のゴルフ場あたりに來たとき、縄文人たちのなかで彼らをどのような受け止めるかで多少の緊張感があつたはずで、戦つて縄文側が敗れたという伝説もあるが、縄文族は戦うことは知らないから、この伝説はもつと後大和族と出雲族の戦いがこの地にまで及んだ時のことであろう。

かれらは大歓迎を受けた。前宮の祭神変更が示すように、この守矢神の聖地に建御名方命とその妻八坂刀売命をむかえ入れた。彼らへの饗応の場が前社の境内に残っている。写真の能舞台のようなものが「神原郷」と称されて、饗応の舞台だ。



建御名方命の妻八坂刀売命とその子孫は大祝（おおほうり）という神人となり、彼らに服した縄文人たちのトップは守矢神長官の名前で残った。出雲族である大祝（おおほうり）は、守矢長官とその下の縄文人からあがめられ、毎年鹿75頭の貢物を捧げられることが慣例となった。守矢神長官の家と資料館が前宮の近くにある。特殊な建築は地元出身の建築家藤森照信氏の設計で、この建築で世界的にも有名になった。内部に鹿などの貢物の頭が飾ってあってその饗応の姿を今に伝えている。

縄文人たちは、自然に出雲族の指導に服しながら、狩猟採取の山麓生活から平野でも農耕生活に移行していった。その過程で諏訪地方の神事もその支配体制に準じていった。最高権威である大祝（おおほうり）という生神は建御名方命の子孫を名乗る諏訪氏が任じ、縄文信仰の神官守矢氏はその配下に置かれた。この大祝と神長官の体制はその時以来、明治時代までつづいたのだ。

しかし、生神様がいるのは、明治時代までは良かったが、天皇御一人が現人神でおられる明治政策ではゆるされなくなった。誇り高い先住の出雲族としては、大祝（おおほうり）の地位家系をそのまま継続したかったが、抵抗むなしく、明治の宗教政策に屈し廃止された。

諏訪湖東北にある諏訪大社下社はさらに東北にある御射山（ミサヤマ）が御神体だ。ミシャグチ神とも呼ばれている。アイヌ語のマクイーシリ（太古の）からなまったのかもしれない。今は建御名方命の妻八坂刀売命を祭っていることになっている。

5・1 諏訪大社の御柱祭

切りとった4本の巨木を立てて聖地を囲むのは縄文由来の祭りに違いない。三内丸山の6本柱、チカモリ遺跡 真脇遺跡の列柱は太陽の祭りに関係付けられたが、諏訪の4本の巨木は聖地を聖別した。

柱の巨木はここでは杉だ。栗の木のように長持ちはしない。7年毎に立て替えになる。祭りするには良いタイミングかもしれない。ハケ岳の西山麓は縄文遺跡の宝庫だが、ここで御柱の原木が取り出されるまでには多くの準備の神事がある。そしてこれを縄文の各村を通して、諏訪大社まで運ぶのが御柱祭だ。途中の山おろしの勇壮なところだけが有名だが、この全行程で全部落総出で担ぎ送るのが、縄文から現代まで続くお祭りなのだ。

最後にこの高さ16mもの巨大な宮柱を綱で引き立てて終わる。



5・2 諏訪族の南進

さてこの地に落ち着いた建御名方命の集団はまず諏訪湖湖畔に耕稼地を開き穀類の栽培を指導した。先に示した湖畔にわずかに残る弥生時代の遺跡だ。縄文人たちはおおよそ800m下の湖畔に降り立った。ここはアイヌ語で言うサハ（平野）だ。弥生文化の特別な意味を込めて湖畔に住む出雲派遣人たちをサハ氏と呼び、やがてサワ（沢）からスワ（諏訪）と呼ぶようになっていったのではないだろうか。

諏訪の名前を得た出雲族即ち建御名方命の集団は、この地の成功を元に、次々と南下していった。**勢力範囲を広げないと生きていけなかったのだ**。なぜなら農耕を指導して初めて、収穫にいたるには何年もかかる。その間は狩猟採取の縄文部落からの貢物で生きていかなければならない。その生産力は低いので、ひろく多くの縄文部落を支配下に収めなければならなかった。各地に諏訪神社が多いのは、後世の勧請もあるだろうが、出雲族の南下の迹を記念するものとも推測できる。

そのような事情で、関東ではどこにも諏訪神社が見られるが、特別な一例を挙げよう。富士山麓の富士吉田市にある浅間神社は富士信仰のメッカである。江戸時代に江戸八百八丁に組織された富士講はこの浅間神社に参ることから始まる。縄文時代神奈川では近くの大山や丹沢の蛭ヶ岳を指し示す山信仰があつたが、富士山は度々の噴火で恐れられたがそれを信仰することはなかったようだ。この富士**吉田浅間神社も元社は諏訪神社**だった。諏訪一族は富士川を南下してついに富士山麓に達したのだった。今も諏



訪社は元社として大切にされ富士登山を終了する秋祭りの大祭には富士の形をした神輿が境内のこの二つのやしろを往復する。
写真は上が富士浅間神社前門、2段目が浅間神社の片隅に今も残る元宮である諏訪神社3段目が富士神輿だ。

6 縄文人の弥生化とともに旅する神様

縄文人が出雲族を受け入れ、弥生時代への幕開けが始まった。その移行期の出来事を、気多大社と諏訪大社の二つの例で見えてきた。いずれも縄文の信仰の聖地を、弥生族の先陣であった出雲族へ饗応として差し出すことで聖なる社となり神社となつていった。農耕を始めた縄文人たちは、山ふところを離れ、川に沿って平地に降りた。縄文神社も行動を共にした移動していった。その2つの例を見ていきたい。

神奈川県 の代表的縄文遺跡は相模原の勝坂縄文遺跡である。最初の発掘調査は昭和のはじめ、大山巖元帥の長男大山柏（考古学者）によつて行われ世界に発表された。その後の考古学調査で土器様式の年代別標準の基準の一つになった勝坂様式はこの発掘によつてゐる。その貴重なものとは戦災で焼け残っていない。2012年12月に神奈川県立博物館で勝坂縄文遺跡展が行われた。土偶の展示が多く、岡本太郎が感動して世界に紹介した縄文人形と岡本太郎の太陽の塔の原型が並べ



てあった。芸術に関係することのほか、大山時代の発掘で打製石斧の発見から原初農耕説が唱えられたが、祭りや宗教に関する研究はない。

この勝山遺跡には、二つの聖地がある。そのひとつがその遺跡の高台の崖から湧き出す泉に置かれた有鹿神社と、東のがわに遺跡台地に接して小さい山があり、そこにおそらく山を神体とした石楯尾神社がある。忘れられたような小さな神社だ。この二つの神社は縄文人部落の移動とともに旅する神様なのだ。



遺跡崖下の有鹿神社



現在の有鹿神社

有鹿（アリガ）は古代語の水を意味するという説があり、勝坂遺跡にある泉が湧く洞窟が有鹿神社の縄文時代の原型である。それがその後の縄文人たちの農耕民化によって、川辺に降り、三回にわたつてくだつていった。泉の源流が鳩川となるとところに中宮がある。現在の本宮は海老名市上郷にあつて鳩川が相模川



勝坂遺跡の裏山にある石楯尾神社の入口



鵜沼大神宮の元宮

に合流するところにあつて、海老名第一の神社だ。今も相模最古の神社とされている。ここ古い住民であつた親友の祖母がこの神社の祭りを「オアリガサン」と呼んで親しんでいたそうだ。この神社の移転を祝う水引祭り（遷座祭）は本宮から奥宮まで6 Kmを神輿が旅をする。

石楯尾神社もまた旅する神社だ。元社は相模湖の源流桂川近くの甲斐の国と相模の国の境にあつて、

巨石が神体の縄文神社だ。縄文人の移動とともに相模の国上野原に行き、先の勝原遺跡のそばに移り、最後は相模湾の近くの鵜沼まで下がってきた。ここまでくれば弥生時代以降だろう。鵜沼の石楯尾神社は、鎌倉時代に地元武士が伊勢皇太宮を招請したので、今は鵜沼皇大神宮となっている。しかし石楯尾神社は写真のように、この敷地の元社としての待遇はうけている。富士宮浅間神社の元社諏訪神社も同じく

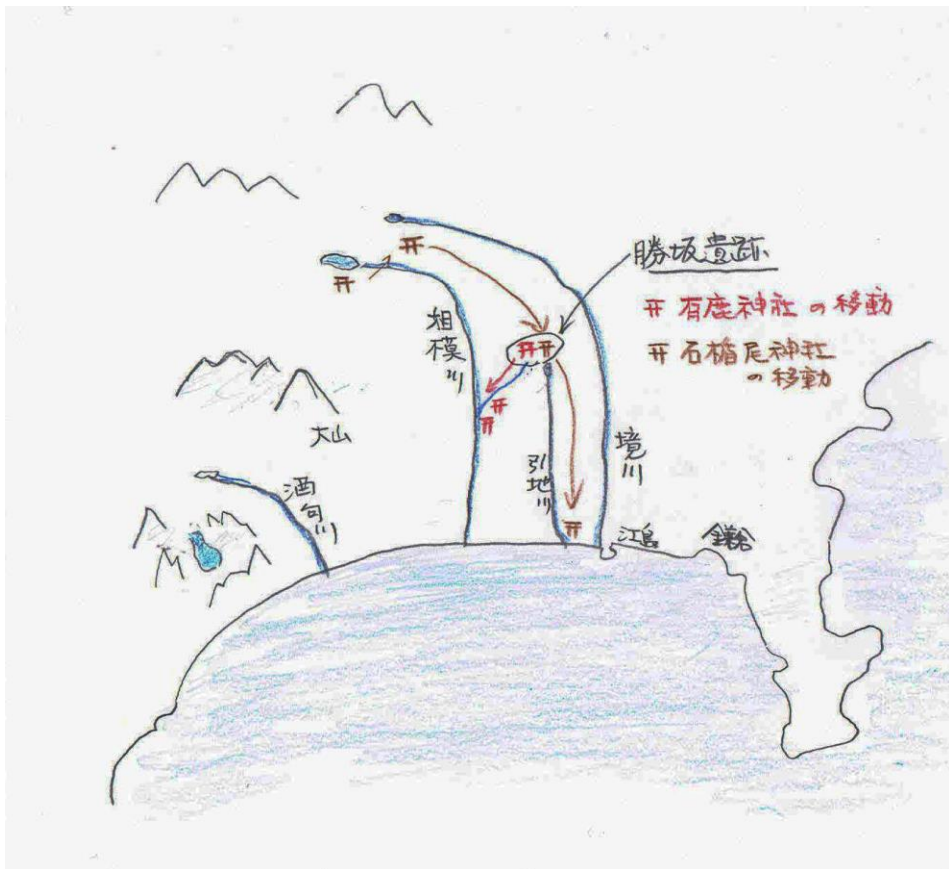
残って大切にされていた。神社には平和共存の精神がある。

7、結び

神社が移動していったということは、弥生文化に飲み込まれていった縄文人たちが農耕民化して、平野に降りて行った時に自分たちの祭り神も一緒にもっていったことを示しているのだろう。この連続性が示していることは、縄文人は決して征服されて消されたわけではなく、彼らが見事に弥生人となつていったことを示している。むしろ弥生社会の担い手たちがかつての縄文人たちであり、すなわち我々大部分の先祖なのである。

初めに縄文人に接したのが出雲族であつたことは、幸運であつた。神話にも語られているように出雲族は国作りに熱心で、鉄の生産や農耕の技術を社会に植え付けるリーダーシップにとんでいた。重要なことは戦いを好まなかつたことだ。平和で友好の雰囲気の中で接してくれたので、縄文人たちは、出雲族をリーダーとして奉り、気持ちよく指導者としての役割を果たさせた。これは縄文人の見事なフォロワーシップといえよう。模範的なリーダーシップとフォロワーシップの関係が、初めの縄文から弥生の移行期にあつたのだ。

諏訪族は出雲の支流だが、本体の出雲族も北陸や日本海に面した出雲王国から南下した。京都を通り、鴨（加茂）一族を置き、大和に至って卑弥呼王朝を築いたのも彼らであつた。大和の三輪山の神体は



出雲の神だ。

ハッピーな移行期は、別の弥生族が九州に上陸したことで終わり、戦乱の時期を迎えた。そして記紀に書かれたように、天孫族の勝利で終わったこの国の歴史時代が始まる。その後も支配者間の争いがこの国の歴史となってしまった。

しかし縄文人はフォロワーシップを大切にしてい、歴史の底流をしぶとく太く生き抜いた。幸か不幸か日本人の気質にはそれが色濃くのかつている。今も日本人は米国をリーダーとし、良いフォロワーの役割を果たしていかねければ落ち着かない。サイレントマジョリティとも言われる大勢も、そのような縄文人氣質かもしれない。政治や経済は、リーダーシップ

をもちたがる弥生人気質にまかせればいい。しかしどうこい、こちらは全く別次元の分野の芸術や祭りの世界で、大いに生きる力を発揮させてもらう、それこそが人間の本分だと考えるのが縄文人気質だ。

日本人は、かくして縄文人であり、同時に弥生人でもある。日常は弥生人として冷徹に生き、いざ祭りになれば、生きがいをここにすべて賭けるような情熱的縄文人にもどるのである。祭りには何年もかけてできるだけ大掛かりの仕掛けを準備し、当日近くになれば練習に日時を費やし、そして爆発させるのである。そこには縄文人の顔が蘇っているのだ。東北のねぶた祭り神田の三社祭、私の地元茅ヶ崎浜降祭など、全国どこにでも見られる風景だ。

元来山とか巨岩とか泉を聖地とし、鳥居や柱で印をしたのが、縄文に由来する日本の神社の原型であったのが、弥生時代に、この聖地に指導者・支配者をたてまつり、祭神としたとき、オヤシロをもつ日本の神社は完成した。どこの神社も神話に出てくる神のどれかを祭神としつつも、参拝する人たちは、祭神が誰かにはあまり頓着せず、「何事のおわしますかは知らねども、ありがたさに涙こぼる」という日本特有の神



社信仰が生まれたのだ。たてまつっておいて、そして忘れる。見事な棚上げ思想だった。

村の鎮守の八幡様が応神天皇の化身とは誰も気にしない。八幡様の元締め宇佐八幡は元来が山と巨石の縄文神社であった。奈良時代大仏様の開眼式が国家行事として行われるのに危機感を覚えた宇佐の神官たちは勢力回復にある戦術を編み出した。天皇家の祖先の大王である応神天皇が宇佐に現れたと話をこしらえて、奈良に乗り込んだ。大仏の上に行く守護の役を買って出たというわけだ。宇佐八幡宮は、今もそのような神話を乗り越えてその自然の素晴らしい舞台に人々は集う。

村の鎮守の八幡様も、むらの森という自然を守っている。

初出は、二〇一三年四月十七日三水会にて発表

文庫本とするため分割再編集二〇一五年五月

日本原記その4

日本語のルーツを探る旅

縄文語の名残を話していた人たち



黄八丈姿で踊る八丈島の島人たち

目次

はじめに

第 1 部、八丈島の島言葉

- a まずこの不思議な言葉を聞いてください。
- b 時代による重層言語
- c 八丈島島言葉は縄文語の名残を伝えている
- d 方言系統の研究

第 2 部、日本語の起源： 日本石器語の仮説

- a 日本列島に渡来した人間たち
- b 日本石器語をもって日本列島縦断
- c 縄文語とアイヌ語の分離
- d 日本石器語から縄文標準語へ、そして弥生時代の試練

第 3 部 八丈島になぜ縄文人が渡来したのか

- a 八丈島の縄文遺跡
- b 縄文人が部落総出でこの島に渡った理由はなにか。
- c その後の遮断で保存された縄文語。
- d 昭和に入って破壊され、絶滅危惧言語となった島言葉

参考文献

	159
	161
	170
	171
	173
	176
	177
	182
	183
	184
	187
	191
	193
	194
	200

はじめに

数年前から縄文時代の信仰遺跡や古い神社を訪ね歩き、彼ら縄文人の心根が今の日本人にも生きていと身近に感じるようになった。

昨年は群馬県の岩宿石器遺跡を訪ね、また北海道宗谷岬の周氷河地形を見る機会を得たことで、思いがけず自分の視野が一挙に広がった。三万年以上前から石器を手にした人類が、ユーラシア大陸から北海道経由で渡来し、日本列島の各地にひろがっていった。彼らは、集団の狩りのわざで、ナウマン象や鹿などの大型動物を追い求め、魚や貝を採って暮らし始めていたが、器用に削った石器で作った道具をつくり、それをもつて広い範囲で交流していた。

それから二万年の長い時間をかけて、土器の文化をつくり、固い木の実も食糧とした。実用からはじまった土器をやがて日本の独自の芸術作品にまで仕上げたが、それ以上に彼らがやり遂げた**もつとも偉大な仕事は、「日本語」の原型を作り上げたことだ**。おそらくその日本語創生こそが、日本人の生活文化を、世界に類例のない穏やかで、多能で、平和な秩序を大切にする縄文人を仕上げた根本である。その言語の原型はどんなものだったのだろうか。

今回の報告は、その原型である古日本語の名残をとどめた貴重な言語を、つい百年位前まで、

普通に使っていた人たちの驚くべき存在を紹介したい。

二〇一四年二月、八丈島に旅行したとき、ここにそのような不思議なことがあるとは知らなかった。江戸時代は流人の島で、その中にいた知識人にとって、この島の八丈方言が、特異なものとして認識されて、記録されてきたことは知っていたが、ただの方言の一つとおもっていた。

島から帰る時、みあげもの屋で八丈島方言カルタがあるのを手に取ってみた。そこに八丈町教育委員会の説明がつけられていて、八丈島方言が絶滅の危機にあり、その保存の一助とするため子供用につくったとあり、さらにこの「**八丈島方言は縄文人の言葉を残している**」の説明文がつけられている。にわかには信じがたいことだが、町の教育委員会が書いていることなら、何らかの根拠があるのだろうと思う、その真偽を追求しなくなった。以下はそれが本当かもしれないという調査報告である。

第1部 八丈島の島言葉

a まずこの不思議な言葉を聞いてください。

縄文人はこんな言葉を話していたのかもしれませんが。

男1	菊池庄之助	1890年生	農業
男2	浅沼行信	1893年生	農業
女1	沖山いちえ	1885年生	農業
女2	山下玉花	1898年生	農業

1、あいさつ 朝

女1 ヤスミヤロワカーイ

よくおやすみでしたか。

男1 オー

ええ。

女1 キヨー テンキガ ヨケンテ オメヤーラガ モミオロシヨ コガン ネガツテメヤラー ダイジノードーグデオ
ジャレドー

きょうは 天気がいいので、あなたのところの もみおろしをこのようにお願いに來ました。たいせつな 道具
でしようけれど。

男1 ツケヤラバ ヨク オジャロジャンウノ マーヤノ トボーニ ヒツカケートキータータラー
お使いになれば ようございましょう。あの牛小屋 の戸口にひっかけておいてありますから。

女1 ドコン オジャルカワカリイタシノアンテ オミヤラー ミツケテ カシテ タモアレ

どこに ありますか わかりませんので、あなたが 見つけて 貸してください。

男1 オー ホイジャ アガ トツダシテ アゲイタソアワ

ええ それではわたしが 取り出して あげましょう。

女1 ソイジャ オカゲサマデ カリテメアロワ

それでは おかげさまで 借りて まいりましょう

男1 オー

ええ

2 タ

女1 オカゲサマデ デアジナ ドーグーモドシテ メアーリイタシター キョー オテンキガ ヨクテ コゴアニハヤ

クシミヤイタシター

おかげさまで たいせつな 道具を返しにまいりました。今日は 天気がよくて このように 早くしまいました。

男1 オツカネノ ハヤク シミヤッター

たいへん 早く しまったね。

女1 オカゲサヤデ モミモ カンゲアーヨリモ シツカリ オジャツテノー

おかげさまで もみも 考えたよりも たくさん ありましてね。

男1 ヨノ オジャツタノー

よかったですねえ。

女1 オカゲサマデ ソイジャ ヤスミヤルター

おかげさまで それでは、おやすみなさい。

男1 オー ソイジャー ヤスミヤレー

ええ、それでは おやすみなさい。

女1 オー

はい

3 道で

女1 ンードケーソゴン オジャリヤロー

おや どこへ そうして おいでですか

男1 ヤメーシボーカリーイキイタソアア

畑に まぐさを 刈りに行きますよ

女1 ゲンキデ ヨク オジャルノ！

元気でいいですねえ。

男1 オー オカゲサマデ ジョーブデ オジャロワー

ええ、おかげさまで じょうぶで いますよ。

女1 タマニワ アスビー オジャリヤレー

たまには 遊びに いらっしやい。

男1 オー ホイジャー コノ モーリノアメフリン ナラバ アスツデ イキイタソアンテヨーイ

ええ。それでは この 次の 雨降りに なったら 遊びに 行きますからね

女1 オー ソイジャノア オゲンキデガマンシヤロガン

はい、それではねえ お元気で 精を出してください。

男1 オー

ええ

4 買物

男1 オジャリヤロカーイ

いらっしやいますか

女1 オー

はい。

男1 オチャト セツケンヨ カイー メーララー

お茶と セツけんを 買いに来ました、

女1 ドラエ アゲテ ヨク オジャラ

どれを あげれば いいでしょうか。

男一 コレト コレイ タモーレー

これと これを ください。

女一 エー オチャガ ゴジューエン セッケンガ サンジューエンデ オジャロワ

ええ お茶が50円 せつけんが 30円 ですよ。

男一 ホー ホイジャ コレデ トツテタモーレ

ほう、それでは これで とつてください。

女一 ハイ ニジューエンノ オツリ

はい 20円のおつり。

男一 オーソイジャ イキイタソワー

それでは さようなら。

女一 オー

はい。

5 送り

男二 ケーワ イモーショーキリー イコンテ ヒョーロー シマツシトー

きょうは さといもを開墾しに 行くから 昼食を用意してくれ

女二 ムー

はい

男2 アーソレカラ ウシメア ソコンノーツナナンドコーテ ソレニ シボーヤットー
ああ それから牛を そこにねえ つないで おくから それにかいばを やつてくれ。
女2 オー スイジャ ナタカマデ オジャロンテ ケゴー シヤラズン モドリヤロゴンニ
はい それでは「なた・かま」でしょうから けがをなさらずに お帰りになるよう。

男2 オー

うん。

6 迎え

男2 マニ モドツテ キトーガ

いま 帰って 来たよ

女2 オー ケーワ コゲーテ タイヘンデ オジャランノーガ

ああ きょうは 寒くて たいへんだったでしょうね

男2 オー コゲーテ コゲーテ シドーガマンシテ ケツコー ハコーヤロー ガフロア ワツタアルダローカ

ああ 寒くて 寒くて 非常に 精を出して かなり はかどったが、ふろは湧いているか。

女2 ワツテ オジャロガ スグ ハイリヤロゴンニ

沸いて いますよ。すぐ おはりになるように

男2 アー マニ テー イレテ ミトーガ シヤシャクテ シヤシャクテ ションテヌルショ クツデオクレ

ああ いま 手を 入れてみたが 熱くて熱くて だから うめる水を 汲んでくれ。

女2 ホイジャ マニ ミズ イレイタソアンテ

それでは いま 水を 入れますから。

7 不祝儀

男1 オジャリヤロカーイ

おいでになりますか。

女1 オー

はい。

男1 キキイタセバ オジャロガ マルビーターダッテージャー
伺いますと弟さんも 亡くなったそうですね。

女1 オシユワサマデ オジャロガ マルビーイタシタラ

お世話さまになりましたが、なくなりました。

男1 ホントー マダ ワカクモ オジャルシ チト イッテ オジャレバ ヨク オジャローモノノー

ほんとに まだ 若くもあるし もう少し生きていらつしゃれば よう ございましたのにねえ。

女1 ノー コドモモ マダ ネットケガオジャロンテ アトホド チカラン シテウレン シーイタソンテ メアカケ

テタモーリヤルゴワニ

ねえ こどもも まだ小さいのが おりますから 今後も カにして 頼みにいたしますから 目をかけてくださいますように

男1 チカラオ オトシヤラズンノー ガマンシニ シヤロゴン

力をお落としにならずに元氣をお出しますように。

女1 オー

はい。

8 祝儀

男1 オジャリヤルカー

おいでになりますか

女1 オー

はい

男1 ハツマゴノ ウマレエアタッタシタツテエアニ チットモ コヤ キモ シーイタサズ

初孫が お生まれになったそうでそうですが、少しも こりや 来もいたしませんで。

男1 ホヤ……

そりや……

女1 コレー ヘンドウア モンデ オジャレドー アカチャンノユーウエアニ モツテ ミャーロアンテ

コレエア オシメンデモ シテ タモアリヤロガン

これは 変なものです、赤ちゃんのお祝いに持つて 来ましたから、 これ おしめにでもして くださいませ、

男1 オー ソヤ オカゲサマデー ヨッキアンバーニ カゼ ヨーキモ ヨシー ヤスーク ヒンナシー
テーター

はい、それは おかげさまで、いいあんばいに風 陽気もいいし、やすやすと 生んでしまいましたよ。

女1 アカチャンノ カウオ一モ チョットミセテ タモアリヤレ

赤ちゃんの顔も ちよつと 見せて くださいませ、

男1 ヨク オジャラジャー マバツテタモ一レー

いいですよ。見て ください。

女1 コレ ヨケコドア アカチャンデ オジャロジャー

これ いい 赤ちゃんですね。

まず、まるで能・狂言の世界だ。ゆつくりと格調が高いと感じる言葉だ。

「こんにちは」のあいさつに近い「オジャリヤロカーイ」（いらつしゃいますか）

「おはようございます」に近い「ヤスミヤロワカーイ」（よくおやすみでしたか）

で会話は始まる。

その返答は、どんな時も、まるでぶっきらぼーに「オー」（はい）だ。

聞いたこともないが何か古そうな言葉が出る。

「貸してください」 「カシテ タモアレ」

「やすやすと生まれました」 「ヤスーク ヒンナシーテータラー」

「死んでしまいました」 「マルビーイタシタラ」

八丈島町教育委員会の解説では、音節のきれ目を、はつきりさせて、一つずつ区切って発音する傾向が目立つ。ぎくしゃくした音声印象はそのためである。アクセントは、型の区別のない「無アクセント」である。といった特徴をあげている。

b 時代による重層言語

会話を聞いていて、われわれにはなじみの言葉が混じっている。逆にこの混在に違和感を覚えるほど、それらは際立っている。それは、「五〇エン」などの貨幣表現、と「オカゲサマデ」だ。きっとこれらは近代に標準語として入ってきた言葉に違いない。

また昼の弁当を用意するよう妻に言いつける言葉が、「ヒーローシマツシトー」である。昼食は「ヒーロー」昼を「ヒョウラドキ」という。想像するに、島言葉は「アサゲ」「ユウゲ」しかなかった。彼らの元来は朝晩の二食生活であったことを示しているのだろう。鎌倉時代以降、島が武家支配に入ったとき、彼らが昼食の習慣をもちこみ、昼の弁当を「兵糧」と呼びそれが昼食の言葉となったのだろう。

さらにさかのぼって、秦の始皇帝の遣い徐福の同行船が流れ着いて絹織物の技術をもたらしたという伝説がある。奄美大島にも大島紬という絹織物があるから、弥生時代に、相次いで、はるばるとした西からの海洋伝来なのかもしれない。黄八丈は北条が支配した時には、すでに島の産物であり、これに目をつけて献上させたのだから、北条時代より古い伝来である。蚕は「コナサマ」といい、ハルゴ、ナツゴ、アキゴの三回の養蚕ができた。蚕を古くは「コ」と呼んでいたことからきたものである。黄八丈は、古くはタンゴと呼ばれているが、北条の役人が京丹後の織物と同じとみてそう名づけたのかもしれない。

このように八丈島言葉は 縄文的古語に、弥生・中世・江戸・現代と時代ごとに新しい語彙が重なって

いったものであることがわかる。言語の重層は、日本語全体にいえることだが、重要なことは、ここは古語を残しながら新言語の重なりがここでは、まるで断層として残って見えるという不思議な言語なのだ。

c、八丈島言葉は縄文語の名残を伝えている

私が八丈町教育委員会に、カルタに「八丈方言は縄文時代の言語のなごりを留めるもの」と書いた根拠を尋ねたところ、「この方に聞いてください」と紹介された千葉大の金田章宏教授は、メールでこう答えてくれた。なお金田氏は八丈島方言を収集分析し、「八丈方言のいきたことば」を書いておられる八丈方言の学術研究者である。

「縄文系の言語のなごりを伝えている可能性がある、と私が推測する理由は、奈良時代の奈良中央に対して、その支配の及ぶ東の端の関東周辺は異民族的（＝縄文的）な東北に対する最前線であり、つまり弥生化がもつとも遅れた地域Ⅱ縄文的な要素がもつとも残された地域Ⅱであることです。

言葉の点で奈良中央と違いがあるとしたら、そうしたことも視野に入れてもいいのではないかと考えました。ところが、八丈方言の才連体形に相当する語形が沖縄の石垣方言にもありそうなのが最近になってわかりました。琉大の研究者が年内に発表するはずです。

それが確実であれば、状況は変わってきます。つまり、北の縄文系と西の縄文系では別の言語を使用して

いた可能性がありますが、八丈と石垣とでおなじような古い特徴を持っているということは、奈良中央の言語より古い共通の特徴が同心円状にもっとも周辺に残されたことになるので、どちらにも共通の言語がその土台になっていることになります。奈良中央がうしなってしまった弥生系の古い特徴が八丈と石垣に残った、という可能性が高くなるわけです。

研究が進むにつれて、推測の範囲がだんだん狭まっていき、より断定的な表現が可能になります。石垣方言との共通点が確認されれば、私はもう「縄文的な」という表現は使わなくなるでしょう。

いずれにしても、八丈方言が琉球諸方言の一部とともに、日本語の中でもっとも古い特徴を持っていることは確実だと思います。」

ウイキペディアの八丈方言の解説者は、島言葉の基本形が、万葉集の東歌に残っているような、古い語形を残していると次のように書いている。

『万葉集』に記録された東国方言には、四段動詞と形容詞の連体形は、「立と月」「愛（かな）しけ妹（いも）」のように中央語とは異なる独特の語形を取るが、八丈島で話される八丈方言は「書こ時」「高け山」のように、上代東国方言と同様の語形を取ることでは知られている。日本語に方言は数あれど、このような活用を残すのは八丈方言など少数である。」

八丈島は東京都に属するので、学校の先生は東京都から派遣される。昭和五〇年から三年間中学校の校長として赴任した内藤茂氏は、着いた空港で出迎えてくれた人に「ようけにおじゃりあれ」といわ

れてそれが「夕食に来てください」という言葉だと知り、びっくりしたという。かれもこの方言に取りつかれて、三年間島言葉を収集して、東京に戻って整理して「八丈島の方言」という本を自費出版した。彼はこの島言葉の印象を、優雅な響き、古典でなければ知らない日本の古語の現存、丁寧な敬語と上下の使い分けがはつきりしていることなどをあげている。

d、方言系統の研究

八丈島方言の系統についてこれまで、様々な研究がなされてきた。国語研究所の報告書からその一つを引用する。

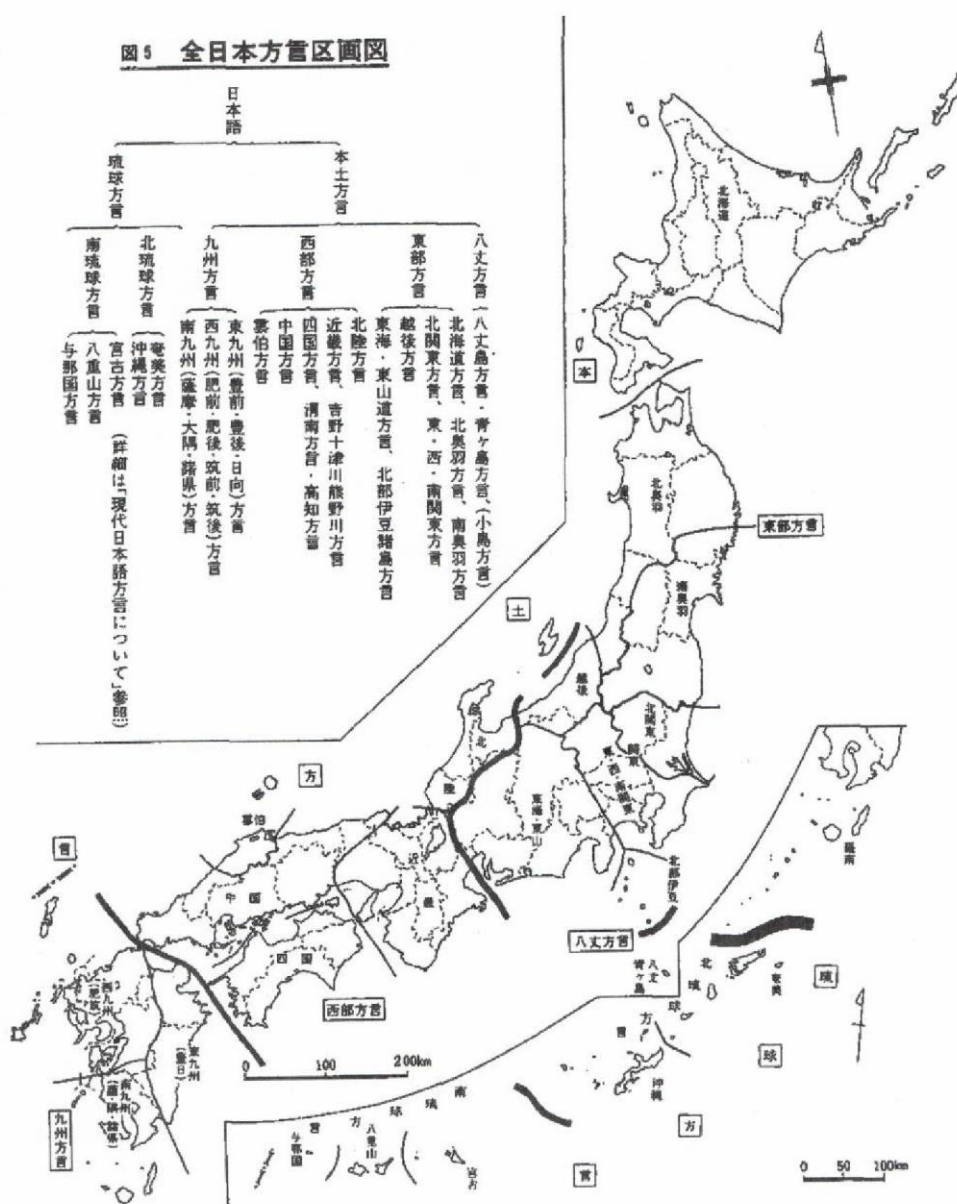
昭和十一年（一九三六）。橘正一著「方言学概論」所収丸尾芳男「五二・八丈島方言」は日本の各地の言語と比較して・八丈島の言語の系統について述べた。すなわち、八丈島固有の言語のうち・イサナ（東南風）、ナライ（北風）など七十二語の語彙をとりあげ、それらの語が日本のどのような地域に用いられているかを調べた。その結果として、地方としては東北地方が、縣としては岩手縣と静岡縣とが・もつとも近いということになった。関東地方について見ると「関東の海岸部の方言とは共通性が多いが、東京や山間部の方言とは似ても似つかぬものである」という結果になっている。そこで、八丈島方言は「黒潮方言」とも名つくべきものであるが、黒潮の流れる関東、東海道の海岸とともに「黒潮方言区」を設けることは

適当と考えられない。結局、「八丈島方言」は孤立したものと言う外はない、と結論を出している。

「縄文語の発見」を書いた小泉保氏によると、日本語のアクセントは、東京アクセント・京阪アクセントとアクセントのない一型アクセントがある。一型アクセントを温存している地帯が奥羽南部、関東北部八丈島、大井川上流、宮崎 北部琉球であり、これは日本語の古層を保存しているといっている。彼の結論は縄文前期に原日本語が生まれ、九州から琉球へとの道筋を述べているが、残念ながら小泉氏は八丈島言葉の研究がふれられないで終わった。

八丈町教育委員会のパンフレットによると、八丈島方言の位置づけについて、次の図でその独自性を説いている。

図5 全日本方言区画図



「危機的な状況にある言語・方言に関する調査研究事業報告書」より

第2部 日本語の起源Ⅱ 日本石器語の 仮説Ⅱ

縄文語というからには、日本語の原型がどのように作られたのかを尋ねなければならない。古来このテーマは多くの学者が取り組んできたテーマだ。まず日本語という孤立言語は、江戸時代に来た外国人にも好奇心を招いた。ドイツ人の医師ケンプエルは、オランダ使節に同行して江戸にも来たが、彼は帰国後に書いた「日本誌」に、聖書のバベルの塔の物語で、分裂させられた一群がカスピ海を北上してシベリアから渡来して日本にもたらした言語であるとの説をたてた。

江戸末期から明治大正昭和と多くの言語学者は、あるいは、朝鮮から来たとか、ウラル・アルタイ語、特にツングース語に起源があるとか、あるいはオセアニア語（川本崇雄）やインドのタミル語が原型だなどという様々な学説を発表した。いずれも語彙・発音・文法を収集し比較してつくられた学説である。

しかし不思議なことに、**日本語は、縄文語として、この列島で生まれたという一番ありそうな説は、ずっと無かったのだ。**

たとえば、タミル語説で有名な大野晋は、タミル語が食料文化とともに日本にもたらされ、日本語の文法や単語の基礎すなわち日本語の原型を形作ったと主張しているが、最近の著書では、そのタミル語とその文化が伝来したとき、「すでにそこには人間がいて言語を使っていた」と書き、消極的に先在の言語を認めている。がそれは先進的言語文化によって消え去ったという説である。



やつと 二十一世紀になって、日本には独自の縄文言語が先在して成立していたという説が 小泉保氏や、前掲の金田氏によって出され始めた。私もそれが正しいとおもい、それはどのように生まれどのようなものだったかを推定したい。

a 日本列島に渡来した人間たち

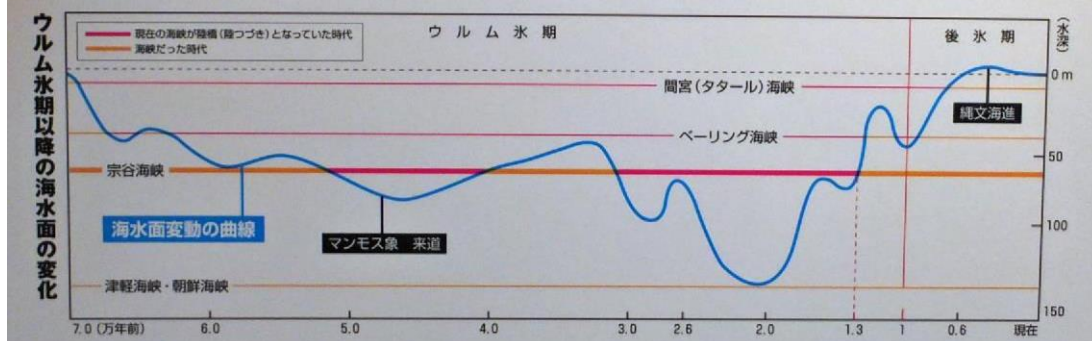
二〇一四年一〇月 日本の最北端、稚内宗谷岬を訪ねた。

岬といえば竜飛岬や、足摺岬など断崖で終わる風景を想像するが、宗谷岬は異様だった。海岸からなだらかな丘陵が続くのである。それは海岸付近ばかりでなく内陸20 kmに入っても連続して、青々した牧草に覆われた牧場になっているのだ。この異様な地形は周氷河地形というのだと表示板があった。さてそれではどこに氷河があったのか、稚内教育委員会が主催している稚内北方記念館にその説明展示があった。

すなわち数万年前のウルム氷河期の終り、氷河は地と海を覆い、ユーラシア大陸、樺太北海道は陸続きとなっていた。さらに二万年前には津軽海峡も消え、日本本土まで陸続きとなった。マンモスやナウマン象、大形の鹿を追って人類は北海道に入り、さらに日本列島に広がっていった。しかし縄文時代が始まるころは再び北海道は切り離され



稚内地方に人が現れたのは、最後の氷期・ウルム氷期の終わり、今から2万年ほど前のことです。当時はまだ北海道と樺太は陸続きで、マンモスを追って人も渡ってきたと考えられています。これら旧石器時代の人々の遺跡が1973年(昭和48年)に釧路で発見されています。その後、気温の上昇に伴い海面も上昇し、北海道は宗谷海峡で分断され、今から8000年ほど前、縄文文化がはじまりました。続いて、本州が弥生時代になると稲の栽培をしない北海道は続縄文時代となりました。



た。このあたりの地理の変化を理解しておくことは、**日本列島進出の人類種がやがて、アイヌ族、日本縄文族と分離して成長していった**という考えを導くうえで重要なことである。

日本列島に渡来した人類種はすでに石器を手に入っていた。狩りには欠かせない道具として持っていた。一九七三年周氷河地の丘陵地の豊別に二万年まえのものである旧石器遺跡が発見されている。

恐竜は骨を残したが、人類は石器を残した。すべての人間の歴史遺産はやがて消え去るものだが、石器だけは消えず残った。日本列島に石器遺産が存在すると認識されたのは、一九四八年にアマチュア考古学者の相沢忠洋が群馬県岩宿で黒曜石槍先型尖頭石器を発見したことによるが、それ以降全国で競うように石器遺跡が発掘され、一種のブームを生んだほどだ。



その結果石器の形状や材料の全国分布がくわしくわかってきた。石器といえば原始的の代名詞のように思ってしまうが、刃先を尖らせ磨きさえかけられた石器を見ると原始的などとは言えない。石の中の石「黒曜石」などは貴重だった。それはどこに

でもあるものではなく、とれるところから遠くはるばるとはこばれてきたのだ。おびただしい数の黒曜石の細石片を見ていると、これは縄文時代の貨幣であつたのではないかと見えてくる。石器時代は立派な文化なのだ。

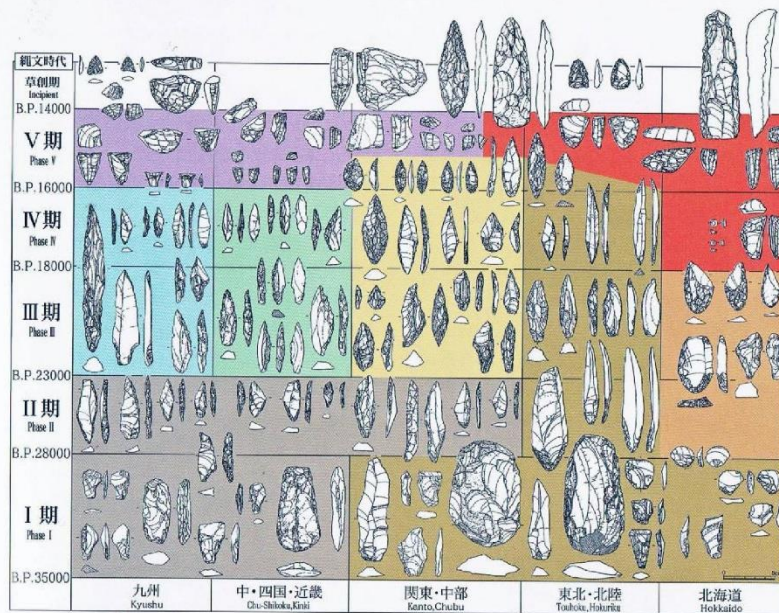
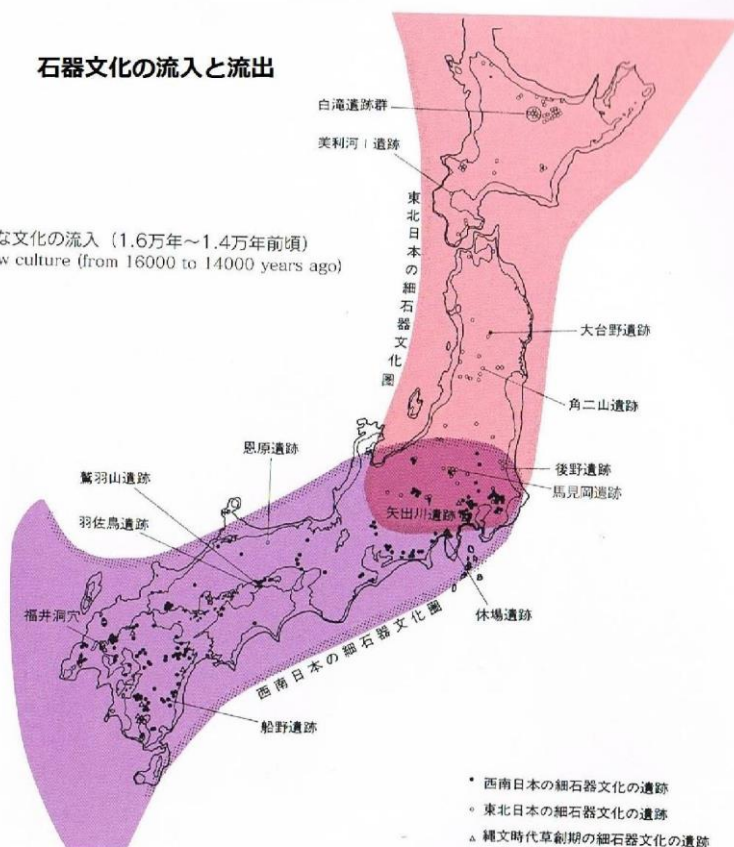
それは流通していたのである。そしてその時代の人間の生活が見えてきた。原始時代と思われていたこの長い時代に、石器は荒いものから。細かいものへ、尖ったものや、鋭い滑らかな刃を持つものへ、と進化した。また地方によつて採れる石材にあつた特産物石器も育つた。

驚くべきことに石器の量産工場までできていたことが発見された。相沢がいた群馬県岩宿にも近い赤城山麓の武井遺跡である。石材は各地から持ち込まれた。加工中の廃材も無数に発見された。ここで加工され各地に運ばれたことは確実である。

縄文一万年と一口に言うが、それに先立つ石器時代は二万五千年の間継続したのである。この間縄文土器が各地で特徴ある展開をしたが、それ以上に石器も地域性のある展開をしたという証拠が発見されている。次ページの図は岩宿博物館が作成された日本各地石器編年図である。石器とその材料は各地で交流していたことを考慮すると、長い石器時代に日本列島には相当優れたコミュニケーション言語が出来上がつていたと考えるほかないのである。

石器文化の流入と流出

第28図 新たな文化の流入 (1.6万年~1.4万年前頃)
Inflowing of new culture (from 16000 to 14000 years ago)



岩宿時代の石器編年 Cultural Chronology of Japanese Paleolithic age

b、日本石器語をもつて日本列島縦断

陸続きに大陸から北海道を通り 日本列島に進出した人類種は、石器と石器語を持っていた。定住をはじめた三万五千年前ごろ使われた言葉を**日本石器語**と名付けておこう。

大陸まで含めた交易圏と会話圏を推定すると、その言葉は単音で単純なものだった。むしろ複雑では通じなくなる。

それを推測することができるのが地名だ。地名は人々が言い出したときは意味があり、その意味が忘れられても地名だけは変化せず残るという世界共通の知見がある。今では現代日本語では意味が失われている不思議な地名こそ日本石器語の名残なのだ。そのような不思議な地名は日本の北部から始まり、九州南部さらに沖縄まで発見される。

石器を持った人類種は三万年の間にそこまで行きついていたのだ。一万五千年で南米大陸の南端まで到達した人類種の移動能力のことを考えれば不思議なことではない。

さてその日本石器語の時代についてと考えられる古い地名だが、それを古アイヌ語で読もうと研究した人たちがいる。たとえば大友幸男氏だ。古アイヌ語は近代まで残った古いユーカラなどから推定できるとすれば、それは日本石器語を推定できる有力な方法だ。石器語からアイヌ語が分離していく直前か直後の言葉である可能性が強いからだ。彼は日本各地にのこる須賀（スカ）が、「砂浜」という意味だし、三

内丸山遺跡のサンナイは「前に開けた沢」、野毛山や能登のノは「あご」の意で岬を指していると指摘した。彼の研究によれば古アイヌ語は5つの母音から成り立ち、語順は今の日本語とおなじであり、単音が意味を持っていた。

その一例を引用すると

ウ おたがい エー あなた ク 私 シ 自分の ポ子

ヤ 陸 ワ 岸 ペ 水 サ 浜 ト 沼 海 ピ 小石

単音多義語は身振りを伴ってやつと通じるものだったろう。オノマトペといわれる自然の擬音がふんだんに取り入れられていた

c、石器語から縄文語とアイヌ語に分離

一万六千年前には海面が上がる海進で津軽海峡ができ、北海道は分断されて孤立した。それまでは同じ人類種で同じ石器語を使っていた北海道人は、本土人とは文化も言葉も分離して、北海道の自然に合わせた生活文化を作り、近代アイヌ語を完成させていった。本土縄文語とは異なる言語になった。

北海道の縄文相当時代の文化も本土とは違った展開を見せた。先に述べた周氷河地帯につながる天塩川



川岸に日本の縄文遺跡に似た竪穴住居の集落川口遺跡が見つかっている。本土の竪穴住居は掘りが浅い狭いが、この竪穴住居は階段をつけてはいるほど深い中も広く一見立派だ。しかしこの遺跡は八世紀のもので、本土ではすでに奈良時代を迎えていて、大陸からの弥生文化で高床式の立派な宮殿もできていたころのものだ。

遅れているともいえるが、一方北海道の寒さ対策としては、高床式よりもこのような地面より1m近く深く中で火が炊けるほど広い竪穴住居のほうが暖かだったのだろう。この時期、土器もむろん作られていたが、擦文土器と分類され本土とは違った独特のものである。

d、石器語から縄文標準語へ、そして弥生時代の試練

日本石器語を受け継ぎ発展した縄文語は、石器語がそうであったように日本列島の広範囲で同じ言葉、いかなれば縄文標準語が使われていたと推定できる。村々は小集団から成り立っていたが、交流は活発で、社会はオープンだった。狩猟採取の生活はその日暮らして蓄積はなく、したがって争奪ということ

を知らない社会であった。それにふさわしい言語は、アクセントがフラットで、丁重で、ゆつくりと音節を区切って発音するといった特徴を持っていたと推定される。八丈島言葉のように、である。

やがて世界から隔離されていた平和の縄文社会に**大陸からの船による渡来**が始まり弥生時代に突入する。中国大陸ではすでに夏殷の時代であり武力による徹底した征服を繰り返すようになっていた。

海を渡って日本列島にやってくる人類種は、それぞれのつぴきならぬ理由があった。石器時代人が獲物となるマンモスなどの大型動物をおって樺太からきたようにである。弥生時代の船による渡来は朝鮮半島や中国からだが、まずは征服や戦火を逃れての避難部族であつたろう。中には、おなじく敗退ではあつたが、戦闘性は残し、捲土重来を誓つてあらたな拠点作りのために日本列島に上陸した集団もあつた。弥生族でも特徴があつたのだ。前者は平和友好を願ひ、後者はこの地で覇権を求めた。

渡来の先頭をきつたのが平和友好派の出雲族であつたことは幸いであつた。

彼らは先進文明を持っていたが、おそらく、もつと強力な戦闘部族に追い払われて、日本に逃亡してきた人々であつたのかもしれない。彼らは神話にあるように国津神すなわち縄文人の娘をめとり、縄文語を学んでつかつた。先住の縄文人たちに歓迎されて、彼らの聖地まで提供された。神社の形成はそのような経過で生まれたと推定できる証拠が日本のあちこちにある（二〇一三年四月「縄文の祭り」で発表）。ともかくも彼らは平和のうちに融合した。

農作をもたらした弥生時代、その社会は基本的に変わった。農業は組織が必要である。階層がうまれた。蓄積のあるところと、少ないところも生まれたので、奪われる危険が生まれ、村々は閉鎖的になり、環濠で自衛した。そこに今度は戦いに勝利してきた天孫族が渡来してきた。彼らはやがて日本の支配者となる。

次々に波状的に渡来した弥生族は、農耕文化と、社会の組織化、支配術、さらには金属による武装や戦争技術をもたらした。それらの先進技術とともに、先進的なテクニカルターム（特殊な単語群）をもちこんだ。大野晋氏ら多くの言語学者が、その分析をして多くの学説を立てているのはこの弥生時代以降のことだ。

言語にも深刻な影響が出た。共通であるよりも仲間同士であることがはつきりしたほうがよかった。方言が生まれてきたのである。方言化は自衛のためにも促進されたのである。

中央政府が生まれると、さらにそれは促進した。支配の強化のために、中央政府のある地方の言葉が標準語となり、地方語は卑しめられるという、言語の序列が生まれた。地方の人々の反抗心も育てた。自分たちの方言が自らのアイデンティティとなり、方言化を促進した。

しかし**日本語の成立にとって重要なことは、その先進渡来人たちも、土着の縄文語を放逐できなかったことだ。もし放逐されていれば日本語は朝鮮語か、中国語の親戚言語になっていたはずだ。**実際にはそれは起きなかった。縄文語はテクニカルタームをどんどん吸収していったが、基本は変わらなかったのである。**縄文語**

が、パルバース氏がいうように極めて柔軟で、外国語を飲み込んでしまう性格であったからだろう。それなりに成熟していた縄文社会の人口は大きく、いつも先進渡来人は少数派で、彼らを征服するような規模ではなかったからでもあろう。

第3部 八丈島になぜ縄文人が渡来し生き残ったのか

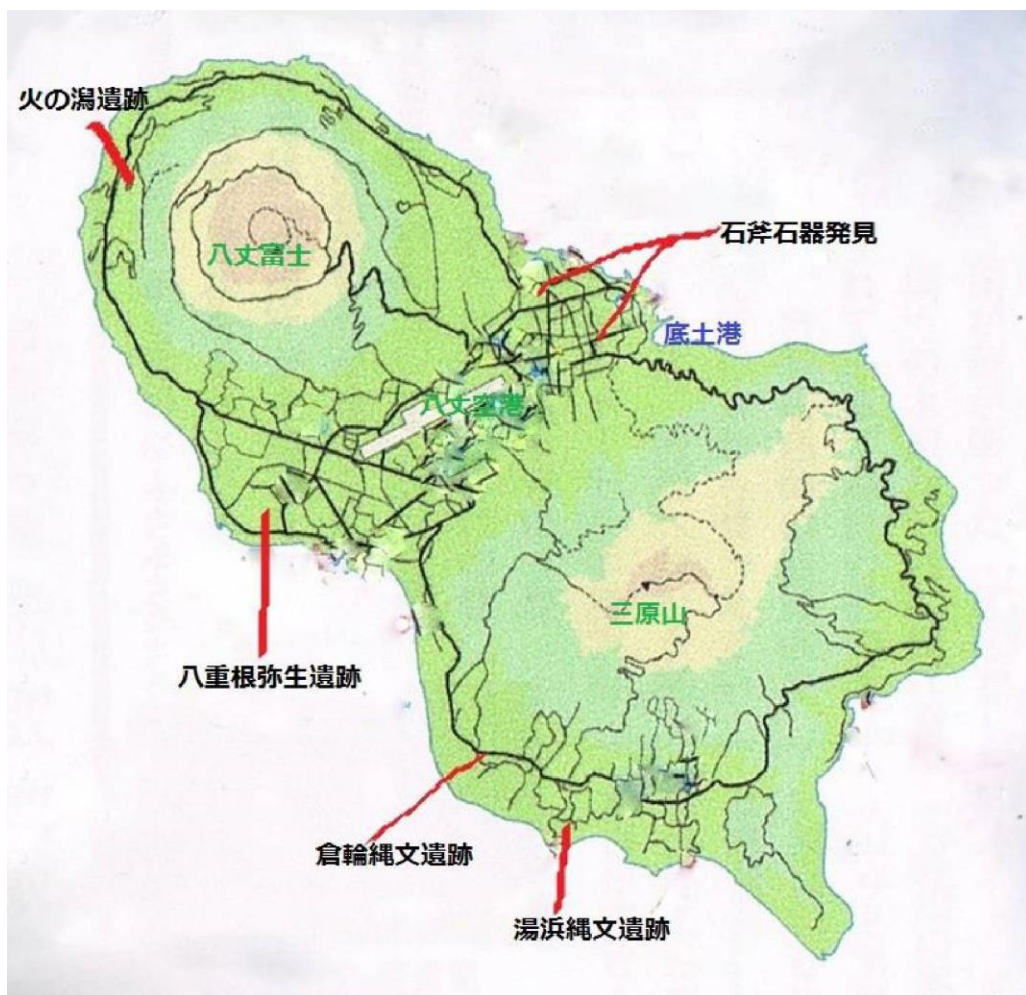
a 八丈島の縄文遺跡

古い日本語をめぐる序説をひとまず終えて本論の八丈島に話を戻す。

二〇一四年二月、東海汽船の新鋭船で、夜の一〇時に東京竹島栈橋を出て、翌朝九時に八丈島に着いた。はるばる来たといった思いである。江戸時代は流人の島だったから、人跡の外れの地と思っていたが、ここに縄文遺跡があったというので驚きであった。

次の図は八丈島である。島は二つの火山がつながって出来た島だ。周囲の海岸はほとんど険しいが、その二つの山の中央部は平地で船も接岸できる。現在東海汽船が着岸するのもこの底土港だ。島の中核部もこの平地にある。





縄文遺跡が発見されたのは、断崖にある二か所、湯浜と倉輪であり人は立ち入らないところだ。

この島を考古学的に調査した人たちの説では、縄文人たちは来ることは来たが、その後絶滅して弥生時代に再び来たという。(橋口尚武：海を渡った縄文人(1999小学館))

その根拠は発見された縄文遺跡が二件だけで、それから弥生時代の遺跡まで何も発見されていないからということがあるが、想像力に欠ける推定だ。

私は縄文時代に上陸した彼らが生き延びて今の八丈島の原住民になっていると考える。その理由は次のよ

うなものだ。縄文時代にこの島まで渡来するということは、物見遊山ではないし漂着でもない。後に述べるような生死をかけたのつびきならない事情で、この人跡まれな遠島に來たのだ。

彼らは当時の知恵を絞って、社会的に生存していける移住者群の規模と条件をそろえてやってきた。この島に來る前に三宅島や御蔵島を中継点として滞在し、十分に準備を整えて、この島に移住してきたのだから、簡単に絶滅するわけがない。食料にするためイノシシまで連れてきていたのだ。それから数千年集団として生きて、人口を増やし社会を成功させた。遺跡が無いのは逆にこの地に生き続けた証拠だ。

日本でも石器遺跡や縄文遺跡はおびただしく発見されるが、弥生時代の遺跡は極めて少ない。弥生時代は住居が少なかったのか？

そうではあるまい。弥生時代以降は農耕文明で、それ以降はそこに定住し、同じところに居住を積み重ねていったから、住居跡が発見されないのだ。石器・縄文時代は農耕に適さない山岳部に住み、農耕時代にそこを放棄して平地に降りてきたので、逆に遺跡として残ったのだ。

その類推でいけば、八丈島で縄文遺跡として発見された少数例は、不便で放棄したところと考えられる。初めに発見された湯浜遺跡、次の倉輪縄文遺跡は先の図の通りで、いずれも断崖の上にあり、初め



人も通らぬところにある湯浜遺跡

て八丈島に来た集団がここに上陸して居を構えたとは考えにくい。やはり今も東海汽船が船をつける底土港付近、二つの山がなだらかに裾野を作る平地が広がる土地に上陸したであろう。この付近は長年住み続けたために、遺跡は発見されないだけで、事実この付近では石斧石器がたびたび発見されたのである。地下に埋もれた石器は保存されるのである。彼らの主力はここに住んだが、数千年のスパンで人口は増えて、海外沿いに展開していった。そしてやがて住みにくい山沿いにも広がっていった。

湯浜や倉輪は初めの上陸地から一番遠い三原山の反対の山麓になる。しかし収まっていた三原山が、再び四千年前に噴火した。倉輪は溶岩流が海に落ちこむところに近く、いったんは住み着いたものの、危険になって慌てて逃げ出したのではないだろうか。だからこの倉輪遺跡からは、貴重な残留品が多く発見された。骨器釣り針が本土で発見されるより精巧にできていて、多くの種類の魚やサメ、クジラをとっていた証拠が見つかった。またイノシシの骨が発見されていて、本土から来たとき、イノシシの子供を連れてきて島に放牧したと推定されている。このように優れた能力を持った漁民の彼らが死に絶えてしまったとは考えられず、ずっと子孫を増やしていった。彼らは、その後たびたび漂着する漂流船がもたらした新しい時代の文化を吸収して、弥生化し、奈良時代人となつていったのだ。覚悟して生き延びるべく渡来した始まりの縄文集団と、その後にも漂着した人々とは、数も準備も違うのだ。

古文書の記録では、一四七四年から一八六五年までの三九〇年間に一九九艘の漂着船が確認されている。一五世紀くらいには二年に一槽漂着した。中国からも多かったようだ。

b、縄文人が部落総出でこの島に渡った理由はなにか。

では縄文前期、ある集団が社会的規模で八丈島に來たのはどの集団でどの時期なのか。

神奈川、相模丘陵から大磯平塚付近にいた縄文人たちと推定する。理由は二つある。

一つは言語学者の報告にあるように八丈島言葉の語彙は南関東沿岸のものに近いからだ。

第二に、彼らの前に広がる相模湾に浮かぶ大島はいつも見慣れたものだし、天気が良ければその先の伊豆七島が目視出來た。石器時代から神津島の黒曜石、装飾用の大型貝の産出で交流が盛んだった。隣村くらいの感覚だった。

次に決行した時期であるが、それは、新富士の噴火と相模湾大地震のあった紀元前六〇〇〇年のころと推定する。遺跡発掘の遺物もその時代とみなされた。

古富士は約一〇万年前に大噴火し、広範囲の関東ローム層を形成したが、その後いったん収まり、一万五



縄文時代の丸木舟

〇〇〇年前から新富士の形ができ、またしばらく静かになって、今度は新富士の激しい噴火活動が五〇〇年前ころから始まる。それと連動した相模湾地震は相模湾の海岸線にあった中村湾を埋めてしまうほどの激しさだった。相次ぐ噴火と地震は、森も海岸も変えてしまい、狩猟採取の生活を決定的に脅かしたに違いない。逃げ場を求めて内陸に向こうとすれば、浅間、赤城、榛名などの噴火で彼らの祖先が苦しんだ伝承もあったであろう。新天地を海の向こうに求めたのである。

そのころは縄文海進が最も進んだ時で、相模丘陵まで海が迫っていた。巨木森林のそばまで海岸が来ていたので、丸木舟を制作進水されるのも容易だった。写真は前掲の樋口氏の本から借用したもので、千葉で出土した縄文中期の丸木舟。長さ7.5m 幅70cm 木はムクノキだ。一〇名は十分に乗れる。

新富士の噴火と相模湾地震で、相模丘陵付近の縄文人村落はまず、大島や伊豆七島に逃げたが、そこには定住者もいたし、島の人口許容量もそう多くない。そこまでいけば、その先が次々と見えてくる。八丈島は三宅島からもかすかに見える。次に向かう目標となりえた。

縄文海進の時代、海の水の量が増えていたので、海水の塩分が今の3%より低かった可能性がある。

2.5%なら飲める範囲になる。魚は豊富に捕れる。丸木舟であつても、気候と天気を見て渡海すれば、御蔵島と八丈の間に流れる黒潮も乗り越えられた。このようなある意味でのつぴきならぬ事情と、行き着くために自然が支援してくれた事情で、集団的社会的移住がこの時期だけ可能となったのだ。

6000年前八丈島に上陸した縄文人たちは、部落をあげての大渡海移住の決断を相談して決めたの

であるから、それにふさわしい成熟した縄文日本語で話し合っていた。今八丈島言葉としてかろうじて残っている言葉だった。

同じような状況が九州南部でも起きていた。鹿児島は石器時代縄文初期からの遺跡がたくさん出る。縄文文化はこの地から始まったと見る学者もいるくらいだ。人口も多かった。この場所が歴史上の記録となるほどの大噴火にあつている。始良大噴火二万五千年前、桜島二万年前このプレッシャーは石器人たちを、さしずめ屋久島・種子島などに追いやった。さら鬼界島の大噴火が富士噴火と同じ時期の紀元前六五〇〇年に起きた。琉球諸島に大量の移住が発生したのもこの時期だろう。同じ縄文標準語を携えて。

c、その後の遮断で保存された縄文語。

縄文海進は終わり、再び海は遠くなった。富士の噴火もおさまった。縄文後期から弥生時代に、社会は豊かになったので、あえて危険の多い海洋進出の冒険の必要もなくなった。弥生時代は農耕が始まったために人は定着していなければならぬから、さらに渡海して移住するという人たちはいなくなった。**八丈島はこのような事情で自然に隔離されたのである。**

その後この島を訪れる人は漂流民か、ある目的を持った人たちといった少数の人たちに限られた。たとえば伝説の徐福一行の一つの船が流れてきたのかもしれない。徐福は長命の薬を求めてきた。この島で常生す

る明日葉がその葉になったとも島の伝説は語る。徐福でなくとも、その時代に養蚕を伝えた人がやってきたことは間違いない。奄美大島の大島紬は、黄八丈と並ぶ絹の名品だ。

鎌倉時代以降やってきたのは、ここを支配して絹を上納させるための北条など武家領主の役人であり、ついで江戸幕府の代官と流人である。彼らはいつも異文化と異言語をもたらししたが、島人に比較していつも少数だったので、彼らが話す言葉が島言葉にとって替わるようなことはなく、一部専門語として必要な単語は受け入れられた。養蚕の述語コナサマや兵糧、貨幣、新しい挨拶「おかげさまで」などである。それらはいつも、ある敬意を持って受け入れられ、柔軟に吸収されていった。縄文語の基本を乱すほどのことはなかった。

これがこの島に縄文語が六〇〇〇年に亘って残りえた可能仮説である。

d、昭和に入って破壊され、絶滅危惧言語となった島言葉

戦後まもなくの一九四九年六月国立国語研究所第一研究室の一行七名が一〇数日の計画で八丈島言葉の調査研究に赴いた。翌年三月に発行された調査報告書によってその様子を詳細に知ることができ。当時の国語研究所の目的は明確なもので、「標準語を普及させる」ことであった。すなわち「標準語を話す度合いをたかめる」ためどんな対策が必要なのかを立案し実行することであった。島言葉の研究保存

が目的ではなかった！

八丈島を調査対象の第一に選んだ理由も書かれている。八丈言葉は共通語とはかなり違った特殊な言語であり、独立した生活体をしているので、共通語を話す度合いを調べるのに適していたからだ。

もしこの調査の結果「共通語を話す度合い」とそれをきめる要因が明らかになれば、「共通語を話す度合い」を高める施策を強めることもできる。これが共通語による国語教育、さらには国語政策に寄与するものだ述べている。

調査対象になった島人に村役場から配られた依頼状がそのまま残っている。

こんど国立国語研究所「文部省」では八丈島の言葉を調べることになり、東京から係官が八名まいておられます。この調査は八丈島の言葉の性質をよく調べるとともに、標準語がどのように廣まっていくなものであるかをくわしく調べるものであります。この調査の結果は八丈島の歴史を明らかにし、国語教育、標準語教育を改良するための大切な材料になります。

そこで、入丈島ぜんたいで数百名の方方について、その言葉を調べさせていただきますと思います。お忙しいところ御迷惑とは存じますが、どうか調査の目的を御了解下さって、なにぶんの御協力をお願いします。

なお、あなたさまにお願いするようになったのは、配給台帳によってクジビキ式に選んだのでありまし

て、特別の事情によつてしたものではありません。また、なんらかの能力を調べるためでもありません。お名前を書いていただくようなこともいたしません。

一、日時 七月〇〇日 午前午後 時から 時までにお集り下さい。

一、場所 〇〇

一、用意していただくもの なにもありません。

一、都合の悪い場合は〇〇へお知らせ下さい。

一、かならず本人がおいで下さい。

昭和二十四年六月二十九日

國立國語研究所長 西尾 實 東京都新宿区四谷霞丘明治神宮絵画館内

〇〇様

そしてあらかじめ用意された調査表によつて面接調査が進められた。これは静穩だった島に大きな波紋を起こしたに違いない。標準語プレッシャーが国の名前で押し寄せたと実感したのであろう。いわば島言葉の放逐のための先兵だったのだ。

報告書の内容は、統計学を使った難解なもので理解しにくいものだが、結論は簡単「共通語を話さなければならぬ場面が積み重ねられることによつて共通語を話す度合いは高まっていく」であった。いふなれば

教育の場の標準語化徹底を図るということになったのであろう。

このわかりきった本文よりも、興味がひかれるのは調査原資料のほうにあった。

人口 一二七三三人 調査に応じた人二一六名

子供に標準語をしゃべらせたか イエス 一〇八 ノー九 不明 九九

家で使う言葉 島言葉九八 共通語三一 使い分け四〇

共通語への関心 拒否六 空白一八六 時に使う一〇

「共通語への関心」の項目で、実際に調査員が行った問いは「なぜ標準語をお話にならないのですか？」であり、標準語使用へのプレッシャーをあからさまにした問いだが、

それに対して約九割の島人が「答えなかった」に分類された。いうなればこのプレッシャーにも関わらず、圧倒的多数の島民が標準語への拒否反応を示したのである。この島言葉への愛着が八〇〇〇年八丈島言葉を連綿とつないできた原動力だった。

しかし国家の破壊工作も激しいものだった。特に子供の義務教育で島言葉を破壊した。全国共通の出来事だった。冒頭に挙げた昭和五〇年に中学校の校長として赴任した内藤茂氏によれば、その当時はまだ中学生の作文でも島言葉を色濃く使っていた。

しかしそれから六〇年、国家の標準語教育は進み、戦後本土との交流が著しく盛んになった。空港もできて、観光客や本土の資本の流入などで、島民が生活や仕事上で、標準語が必要になる場面が増加した。

我々が訪問した時、お世話になった民宿の家族の人たち、レンタカーの会社の人、食堂やスーパーなどで出会った人たちもみな当たり前のように標準語を話していた。堅立で八丈太鼓と地元の手踊りシヨメ節を見せてもらった時も、島言葉には接することはなかった。大阪に行けば、新幹線から地下鉄に乗り継げば、そこはもう大阪弁の世界だが、八丈島は索漠とした標準語の世界だった。

国連教育科学文化機関（ユネスコ）が二〇〇九年二月に世界で消滅の危険にさらされている言語についての調査を発表した。そこでは、消滅の危機の程度を、アイヌ語を「極めて深刻」、沖縄の八重山語、与那国語を「重大な危険」、八丈島の言語を「危険」と分類警告した。ユネスコの担当者は、「これらの言語が日本で方言として扱われているのは認識しているが、国際的な基準だと独立の言語と扱うのが妥当と考えた」

この報告は、八丈島にもまた日本の言語界にもショックを与えた。世界からの目で危機を指摘されて、やつとその大切さに気付いたわけだ。八丈島教育委員会も島言葉の絶滅危機を訴え、保存を訴えるようになった。島言葉カルタを作って子供に与え、島言葉による芝居を上演するようになった。学校の学芸会でも、方言劇を取り組むようになり、シア劇団「かぶつ」が島言葉の民話劇を作り機会を得て本土でも公演し、また学校へ出前公演し始めた。そして昨年から島の全小中学校で年間3時間ではあるが、方言学習をカリキュラム化した。

この貴重な八丈島言葉が、生きた常用言葉として回復することは、もはやむつかしいとしても、博物館的保存の希望はまだ残されている。

それによつて日本語の誕生物語の推定ができ、さらには、もっと広くわれわれ日本人を語るには欠かせない縄文文化の生身の姿を想像させてもらえるのである。

参考文献

- 日本語はいかに成立したか 大野晋 中公文庫二〇〇二
じやつで方言なおもしろか 木部暢子 岩波書店二〇一三・12
驚くべき日本語 ロジャー・パールバス 集英社二〇〇四・五・一二第三刷
岩宿時代常設展示解説図録 岩宿博物館 平成二三・三・一五
八丈島の方言 内藤茂 昭和三四年初版。平成一四年三月復刻再版
八丈方言のいきたことば 金田章宏(千葉大) 笠間書院二〇〇二・五・三一
八丈島の観光を考える会「ルンルンガイド」二〇〇八盛夏号
オセアニアから来た日本語 川本崇雄 二〇〇七東洋出版
縄文語の発見 小泉保 元日本言語学会会長 青土社二〇一四・六・一〇
日本のアイヌ語地名 大友幸男 三一書房一九九七
縄文語の発掘 鈴木健 新読書社 二〇〇〇・二・二二
古代日本史と縄文語の謎に迫る 大山元 きこ書房二〇〇一・七・七
国立国語研究所報告1、八丈島の言語調査 秀英出版一九五〇・一一・一五

日本原記 5

縄文・弥生からやまと時代へ

〔邪馬台国と古事記神話との接読〕



高千穂町歴史民俗資料館ポスター

承前の序論、日本原記その五の位置づけ

2007年出雲大社を訪ねてその異様なたたずまいに触れてから、十二年間、日本各地の神社と縄文遺跡を訪ね回った。北は北海道宗谷岬に民族渡来の足跡を感じ、南は縄文人の言葉を最後まで話していた生き残りかもしれない八丈島まで訪ねた。

まとめてみればそれは日本人のルーツ探しだった。求めていた神社の元型は、縄文人の聖地と弥生人受入れの記念が合わさって生まれたものと結論付けた。これらは三回に分けて三水会に報告した。

第五編は、この日本原記第一から第四編に続けて、縄文・弥生からやまと時代への移行の物語、具体的には邪馬台国と古事記神話との接読を目論む。

このテーマは学会的には曖昧模糊の分野で残されている。まず中国古代文献に描かれた日本の弥生時代の国々のうち北九州の国々はほぼ実体とその所在地が判明したが、中核となる邪馬台国に関しては近畿か九州かをめぐって未だ学会では結論が出ていない。

また古事記などの日本神話は、天皇制を支える国民総動員のイデオロギーとしての苦い過去があるため、今は根拠のない物語として軽んじられ、むしろ歴史検証の対象とはされず、真面目に論じられてはいない。これらが曖昧模糊のままとなっている原因だ。

最近、古代研究の手法に、新しい科学的な進展が生まれている。それは遺伝子学である。民族移動の痕跡とその年代推定が遺伝子の特定の部位の追跡で、地球規模でわかるようになったのだ。それもこの20年単位でどんどん進歩して国際学会的に権威あるものとなってきた。まずはその成果を踏まえてこの問題に光をあてたい。

私は神話を形成した伝承の物語は民族の古い記憶に何らかの根拠があると考えている。それに今回挑戦した。日本原記の時と同じく、歴史的現場に行けば何かをつかめると考え、今回はその舞台となった北九州一円に足を運んだ。また周辺国として済州島を旅した。この地を歩くことで、多くの実感的歴史観を得ることができた。表紙に飾ったのは高千穂町歴史民俗資料館で見かけた絵であるが、そのリアルさに一つのヒントをもらった。この論考は次の目次で進めたい。

目次

承前の序論、日本原記1～4編と子の5編の意味	202
1, DNA分析による日本人ルーツ探しが進展した。その結果の要約	205
2, 第一段階の移住者	209
3, 第二段階の移住者は長江文明の呉・越の亡命移民	210
4, 第三段階の移住者は黄河文明の燕の亡命政権～邪馬台国と記紀神話の接読	220
5, 古事記神話の本質	227
6, まとめ	232
7, 学会の諸説との比較	234
文献と注	236
別添 魏志倭人伝原文と現代文訳（ウィキペディアより）	240

なおこの論考は「日本の精神風土の形成」の論考につながり、引き続き別稿で詳説する。

1、DNA分析による日本人ルーツ探しが進展した。

人間の体内に刻み込まれたさまざまな生体情報は、その個体にたどり着くまでの長い人類の歴史を記録している。生化学情報を人間ルーツ探索に使う研究が前世紀から始まっていた。その一例は大阪医大の松本秀雄氏の研究で、免疫グロブリンの構造の歴史的变化を解析し、日本人のルーツはバイカル湖湖畔の北方蒙古系民族にあると報告された。（文献1）

2004年には、ひとのDNAの全面解読が達成された。DNAは人間らしさの全情報であるとともに、霊長類からホモサピエンスに発達するまでの長い歴史の記録でもある。人間のルーツ探索にさまざまな切り口で使われた。まず母系遺伝のミトコンドリア遺伝子の追及で、人類は出アフリカの「ミトコンドリア・イブ」からすべてのホモサピエンスが生まれたと報告されて大きな話題となった。

この10年位の間に、コンピュータと生化学分析の組み合わせたDNA解読装置が急激に進歩して、数億円の国家プロジェクトだったのが、今や一万円クラスの費用でだれのDNAでも解読されるようになった。世界中の民族の遺伝子情報が得られたのみならず、遺跡の中から得られた骨から数万年も過去の世代の人類のそれも、得られるようになった。

その知見の中から今回の縄文からヤマトまでのテーマにかかわるものを紹介する。

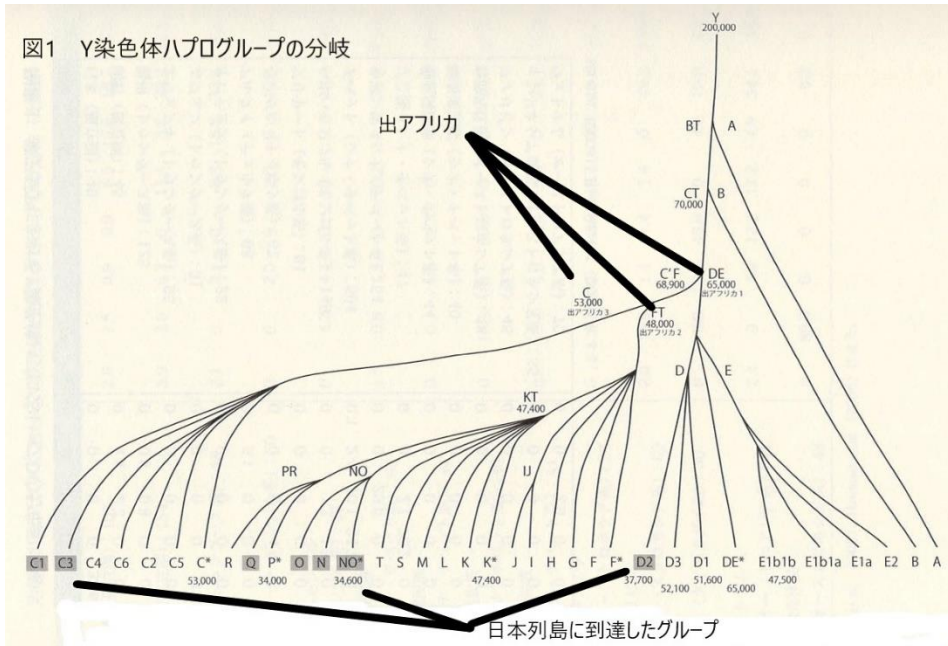
まず Y染色体の遺伝変化からの追及（文献2）である。

父系遺伝のY染色体は原則的には人間の共通の配列を持っているが、ある部分には個性的な配列をしたところがありそれが遺伝してある系統のグループが形成されていることがわかった。それをハプログループと呼んでいる。そのグループ形成の分岐時点が歴史を遡って計算できる技術が国際的な協力で二〇〇八年に完成した。その結果が次ページの図一である。

人類の出アフリカは3度にわたり、六万五千年前に出たグループはハプログループDとEで、ユーラシアから日本にまで到達。二度目に出たのは五万三千年前のCグループでアジアへ、三度目の四万八千年前のF T グループはヨーロッパに向かったことがわかった。

Dから三七七〇〇年前に分離したD2は後に詳述するが日本列島にほぼ固有で所謂縄文人のイメージである。

図1 Y染色体ハプログループの分岐（文献1 崎谷満著より）



DNA分析が簡単にできるようになったため、Y染色体だけではなく本体32億個のDNA全体を対象とした起源研究が始まった。一つは古墳や遺跡方発掘された古代人骨のDNAを採取し、もう一方で現代人の地域ごとのDNAを直接比較するという方法である。(注1)

切り口は違っても遺伝子からの紀元追及はほぼ同じ結論となっている。それをまとめると、石器時代から縄文弥生時代からヤマトに至る日本列島への人類の移住は3つの段階で起きている。

第1段階 4万年前 (第2図)

氷河期日本列島がまだ樺太北海道でまた北九州と中国大陆と地続きとなっていた、北と南より狩猟採集民が入ってきた。九州にはD2 北海道へはC3の遺伝子を持った集団であった。D2などの記号はY染色体ハプログループの名称である。



第2段階 4400, 3000年前 (第3図)

縄文後期～晩期すでに列島は大陸から分離していたが、海上を活躍する「海の民」が北九州から移住してきた。長江由来の稲作文化を持ってきた。彼らの遺伝子はO2である。

第3段階 3000年前1紀元前後 (第4図)

大陸からの移住。彼らは鉄と武力による社会統一文明を持ってきた。彼らは黄河漢民族と同じO3である。

このように3段階に分けて移住したY染色体ハプログループは、現代日本人にはつきりと証拠を残している。



第3図



第4図

分類	日本分布	近隣諸国分布
D2	アイヌ 88 東京 40 九州 28	0
C3	アイヌ 13 東京 2 九州 8	シベリア 80 モンゴル 84 カザフ 74
O2b	アイヌ 0 東京 26 八重山 67	朝鮮 51 ベトナム 14 インドネシア 20
O3	アイヌ 0 東京 14 九州 26	漠北 66 漠南 33 チベット 33 朝鮮 38

D2はアイヌから琉球人まで日本全土に30〜40%存在するが、他国には存在しない。日本固有種でありめずらしい現象で日本の特異点でもある。

2、第1段階の移住者

国立遺伝学研究所斉藤成也教授の核DNA解析でたどる日本人の源流の中で、万年前の日本列島地図があった。その図にはその時代九州は大陸につながっていることを示していた。第1段階の人類移動は樺太北海道ルートのほか大陸九州ルートがあったことを教えられた。日本原記3では北ルートのみ注目していたのを改めたい。沖縄に最古の人骨が発見されたり、九州の南部に縄文早期の集落が発見されたことなどが九州ルートの重要性を示している。

日本原記4までを完成したころ、NHKの番組で「3万年前の航海」という国立科学博物館の海部陽介氏のプロジェクトを紹介していた。彼が唱える「日本人のルーツは南から渡海して来た」という説を実証しようとする実験であった。この実験は成功しなかったが、海からの渡来説の著書を発行した。この説には賛成

できない。渡海の技術を探求しても人類の移動を立証したことにならない、人類の移動は技術探究のためではない。ましてや冒険のためでもない。彼らは食の確保のため、狩猟採取の獲物を追って、日本列島が大陸と地続きの部分を通って入ってきたのだ。生きるための必然の結果だ。女子供もいた集団移動だから、安全な陸続きルートを通ってきたに違いない。八丈島や、沖縄への移住を危険な原始船で渡海したことは事実だが、それらのケースは、ともに巨大な火山活動で生活の場を失って、南の島影を求めて逃避行した場合だけだと考えている。

また「日本原記4」では新石器時代に北海道・本土共通の石器語が創造され、その後北海道の切り離しによってアイヌ語と日本縄文語が分かれたとの仮説を述べた。これも修正が必要のようだ。遺伝子からの研究の方々は日本語の創出は北九州特に長崎周辺と考えておられた。ただ日本語の源流を海外に求めたかつての言語学者の説は支持されていないので、その点では同じ発想である。今後の学際共同研究に期待したい。

3、第2段階の移住者は長江文明の呉・越の亡命移民。

今回のテーマに関係するのは移住第2段階からであり、それを詳しく見ていきたい。

第1段階であった4万年前、日本列島は北と南で大陸とつながっていたが、1万6000年前、海面上昇

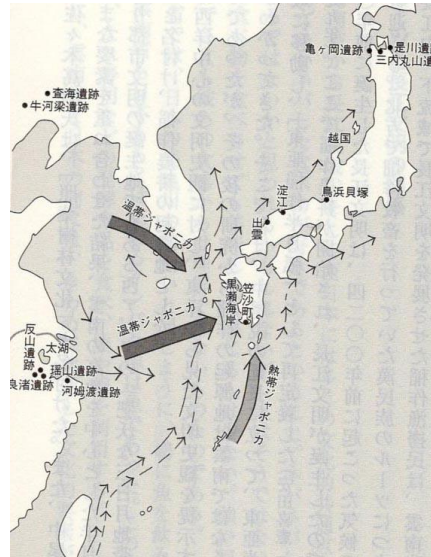
により切り離された。6000年前には縄文海進があり、列島噴火活動が活発な時代を経て日本列島の様相は変わっていった。その間も海上交流はあったが、縄文人相互の移動であって、しばらく列島は外界から孤立した状態が続いた。意図的なものではないが、江戸時代の鎖国に等しい状態が続いた。その間の1万年、平和で平等の独特の縄文文化を花開かせた。日本語もこの時期に創出された。世界に他にない遺伝子D2と密接に結びついているとみられる。

鎖国はやがて破られる。原因は中国の事情であった。

日本は縄文の悠々たる安住の中であったが、中国はすでに農耕文明に入り国家の覇権争いと栄枯盛衰を繰り返すようになっていた。中国の王朝は夏・殷・商・周・秦といった黄河文明の都市国家であるが、考古学的に確認されているのは、BC17世紀に成立した殷からだ。彼らは文字を遺したので時間に埋没されずに記録された。

しかし最近の発掘で温暖であった長江流域で生まれた文明が、黄河文明より先に都市国家を作ったと判明してきた。浙江省河姆

第5図 江南の民



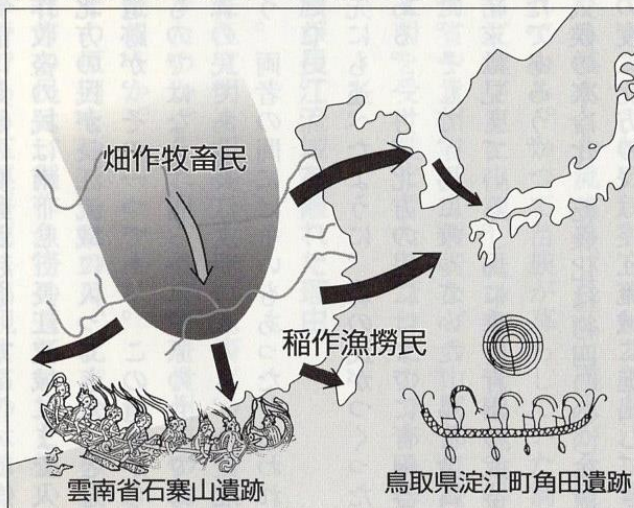
渡遺跡は7600年前である。長江文明は稲作と漁労で生活し、武装権力を作らず、文字ももたなかった。中国の正史に現れるのは、ずっと後の時代になった。ところが日本列島の最初の鎖国を破ったのは彼ら江南長江文明の民であった。

長江文明の担い手たちが中国を離れて日本に移住したのには理由がある。気候の変化が原因だ。長江文明とあまり変わらない時代に北の黄河流域でも文明が起きた。こちらは麦作と牧畜が生活の手段であった。馬を使うために機動性が高かった。青銅器や鉄の金属文化も持ち集中した支配権力を作り上げていった。

長江地帯は稲作と漁労の文明であって、せいぜい祭祀と行政の権力であって侵入に対して防御力は弱かった。

4000年と3000年前に気候の寒冷化があったため、北の黄河文明の北方騎馬国は食を求めて南方に生存圏を広げなければならなくなった。武に対する備えの無い長江文明の稲作民は各地に逃亡した。主力であった苗族は雲南省など南方高地に移動せざるを得なかった。一部は海のかなたへの逃亡的移住となった。

図6 畑作牧畜民の侵入と稲作漁撈民の逃亡



遺伝子分析から解明された第2段階は4400年前から3000年前とされている。遺伝子は江南の民であるO2をもち現代の東京36%九州36%を占める。苗族の遺伝子のO3cはあまり伝わっておらず、かろうじて2.0%である。

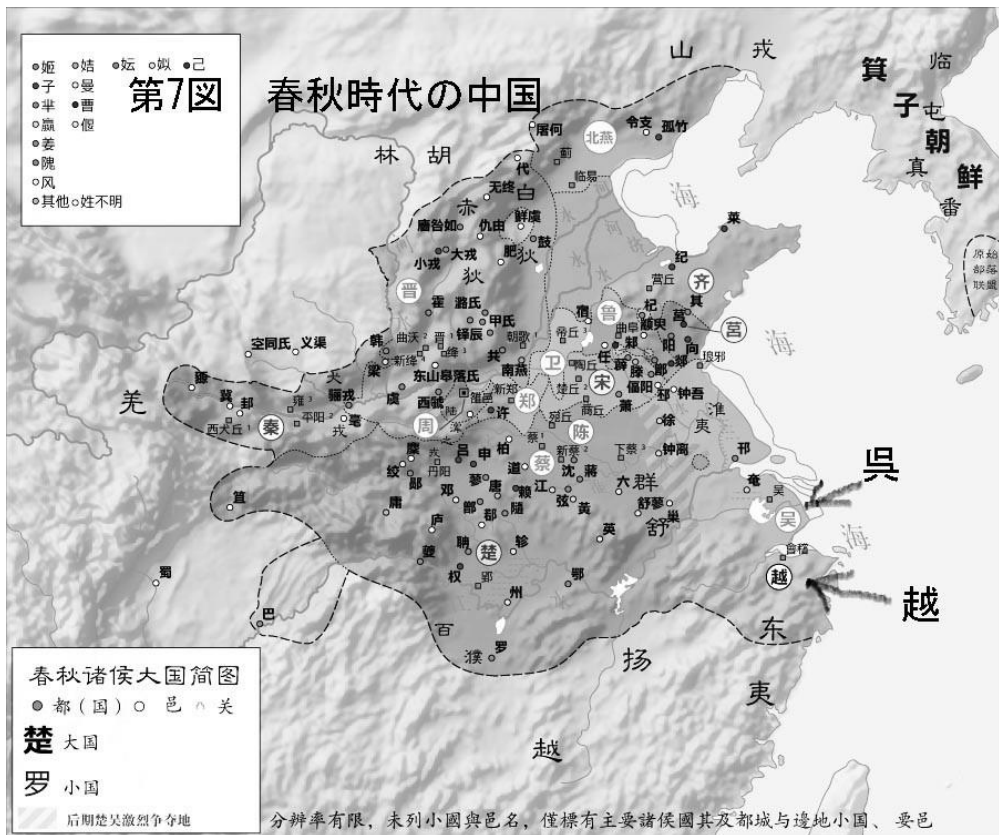
江南の民でも海に近い民は稲作とともに漁労の民で「海の民」ともいわれていた。生活の手段としての木造船をもち、渡海の技術も持っていた。少数の集団がばらばらと移住してきたことがあったのだろう。BC10世紀以前のことになる。

この逃亡経路には濟州島がある。当然ここも移住先となったであろう。

濟州島は海女の国だ。現代も沿岸の家庭で女の子が生まれると子供のころから海女としての訓練を受ける。生計は海女の仕事で稼ぎ出される。立派な海女博物館があり、古来から海女たちは濟州島から朝鮮半島や日本に海女の仕事を伝えていったとされている。また濟州島の国家創生伝説は、島中央にそびえる火山漢拏（ハルラ）山の洞窟に住んでいた原住民の先祖の3人の男が、「三姓穴」から飛び出し狩猟の生活を始めた。そこに東の海から船で3人の女性が稲の種をもって来て結婚して民をなしたという伝説である。日本の古事記には宗像三姉妹の伝説があり、地理的にも近いので、近親感の持てる話である。魏志倭人伝にあるマツラ国は。素潜りで漁をしているとあり、共通の海の民であったことと推定できる。

さらに時代が下がつてBC400年頃のことになるが、中国では春秋と呼ばれる時代に倭国形成に大きな影響を与えた事件が中国南部にあった。呉と越の興亡史である。呉と越は殷・周のような北方漢民族の覇権国ではなく、両方とも長江河口に近い長江文明の国である。この呉越の抗争は人口に膾炙する物語を生んだ。

まず呉の国は、BC12世紀周の王室の流れの太伯なる王子が、周を継がず、南方の野蛮な地方に移り地元の民に迎えられて作ったとの伝説がある。呉と越は隣国同士で同じ民族であるのでライバルで抗争を続け、7代後の王夫差が越王勾践によって紀元前473年滅ぼされた。臥薪嘗胆などの言葉がこの物語



の中で生まれている。また中国では「倭は太伯の末」という伝えが残っているように呉と倭はつながっているとみられていた。この呉と越は互いに抗争したが、他から見れば「呉越同舟」と一塊に見られていた。(注2)

一方の越(紀元前600年頃)は、南方の長江流域の百越に属する民族を主体に建設されたと言われる。呉を滅ぼして一度は中元に覇を唱えるまでに強大になったが、楚の国に紀元前334年滅ぼされた。下の8図に越の民衆の木像と9図に越の持っていた船の模型がある。

民衆は入れ墨をした断髪姿である。またその船は数百人をのせて海洋を乗り切る能力がありそうだ。魏志倭人伝に残された倭人が入れ墨をしていると記載している。また周の貴人が呉の国を樹立した時入れ墨をして江南の文化に合わせたという記述もあった。入れ墨は江南文化のシンボルであった。



そして彼らは初めて王侯指導者を擁して亡命移民群として日本列島に亡命してきたとみられる。まず初めは呉の亡命移民であろう。時は呉が滅びた紀元前473年の後BC5世紀のことであろう。彼らは稲作とすでに鉄の文明を持ってきた。

北九州を通過して山口から北日本に入った。

日本はまだ縄文時代であって狩猟採集の生活をしていたが、この江南の民が初めて稲作りを教えてくれた。彼らを神のように敬い従った。彼らが出雲王国を作り上げたのだ。

前回の日本原記でも述べたようにこの移住民を縄文人たちは尊敬の念をもって受け入れた。彼らを大切にし、縄文人たちの聖地を彼らの住居に奉った。それが縄文聖地と結びついた日本の神社の始まりだとの説を立てた。

北日本の島根を根拠として、2〜3百年かけて北へ南へと展開し、瀬戸内海圏も近畿圏も出雲の指導圏となった。各地に残る大国主を祭る神社がその足跡を物語る。奈良の三輪山も大物主大神が鎮まる神の山とされているのだ。

呉の亡命移民が、与えた影響は現代日本にその痕跡を残している。まず呉音と呼ばれる漢字の読み方がある。一 二 三 四 五 六 七 八 九 十をイチ ニ サン シ ゴ ロク シチ ハチ クー ジュウと呼ぶのは呉の言葉だ。この数詞の訓読みは他にないので、イチ ニ サンの呉の数え方がそのま

ま縄文語に取り入れられたという推測が成り立つ。後の漢音ではイーアールサンスーウーリュウチーパー
チュウシーであり感じは全く違う。(文献17 p13)

また絹織物の高級和服は後の世も「呉服」と呼び、粗末な木綿の衣類は太物と区別した。平安以降の豪華な衣は唐衣(からころも)と呼んだ。

遅れて越の国の亡命移民が渡来してきた。紀元前334年呉の亡命から100年あとだ。彼らは北九州を拠点とし、出雲王国を避けて東北の新潟付近にも植民地を作った越の国の名前が残っている。縄文の民に迎えられた彼らはそれぞれに安泰な小国を作った。

本土中国では引き続き長江文明の民は北の漢民族に圧迫され続けられた。秦と対抗した反骨の詩人屈原は長江の詩人といわれ江南の人だ。(文献4)

越が減んだ100年後BC200年に秦が中国に統一国家を作り始皇帝となる。始皇帝は「東方の三神山に長生不老(不老不死)の霊薬がある」と具申した徐福に、3千人の童男童女(若い男女)と百工(多くの技術者)を従えさせ、五穀の種を持って、東方に船出した。徐福が寄港したと記録されている済州島には西帰浦にその記念公園がある。また日本各地に彼の足跡が残っている。佐賀市、熊野市、新宮市、出水市、富士吉田市、東京都八丈島、延岡市などが有名である。徐福の伝説が教えることはこの時代3千名からなる集団が渡海できて各地に足跡を残せたということであり、それにもかかわらず、記念碑が残され

たぐらゐの一過的事件であり、出雲や越の国のような拠点形成はしなかったのだ。徐福の薬草探しは貿易の立ち寄りであつたが、呉や越の亡命移民は元に戻ることにない移住地創成の意図であつた違いがある。

この時代になると倭の状況は次々に作られた中国史書によって知ることができる。

すでに弥生時代に入っていた日本列島は、北九州や北日本から徐々に稲作が始まり、組織的な社会が原始的な国々を作り始めていた。吉野ヶ里遺跡にみられるように、環濠で囲んだ孤立集落でそれぞれはばらばらであつた。その中でも豊かになつた国の中には中国の支配王朝と交流を求めて使者を派遣するところも出てきた。中国の歴史書もその状況を記している。

漢書には周の時代のこととして、「周の時、天下太平にして、倭人來たりて暢草を献ず 越裳は白雉を献じ、倭人は鬯草を貢す。」とあり、江南の越と並べて薬草を献じたと記している。もつとも古い出来事の記録である。前節で述べた江南の民と結びついた倭国として認識されていたことがわかる。

『漢書』の地理志には「楽浪海中に倭人あり、分ちて百余国と為し、歳時をもつて來たりて献見す」とある。楽浪とは漢に征服された朝鮮の漢植民地である。

『後漢書』『東夷傳』には「建武中元二年（57年）、倭奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てす」

「安帝永初元年（107年）倭国王帥升等、生口160人を献じ請見を願う」

最後に有名な魏志倭人伝の『三国志』魏書卷三〇「烏丸鮮卑東夷伝 倭人の条」をそのまま巻末に添付する。ここには北九州の倭の諸国の名前と人口位置関係をまずしるし、その後当時の倭人の風習を観察した記録が続く。牛馬はもたず、貫頭衣を着、入れ墨をしている。長寿で礼儀正しい。弥生時代の階層分化が見られ、目上に合えば拍手してうづくまって敬意を示すなど興味深い。最後に魏との交流が記録されている。

3、第3段階の移住者は黄河文明の燕の亡命政権

邪馬台国と神話の接読



遺伝子解析では第3段階の移住者はBC1000年前〜紀元前後に大陸から来たもので、第2段階の江南の民とは違い、逆に彼らを圧迫し逃亡させた黄河文明の漢民族の一部である。彼らは漢民族がもつ遺伝子グループO3を持っていたのである。第3段階の江南の亡命の民よりずっと闘いにたけた文明を持ってきた。

ではそれは誰だろう。勝者が来るわけではないので、北方漢民族の中の敗者であろう。この時代の中国北部は、周が秦に滅ぼされ、すぐ漢に替わり戦国時代になるなど敗者は沢山ある。その中で倭に亡

命しそうな敗者がある。秦にBC220に滅ぼされた燕の国の王族だ。

燕とは周王朝の一族が北中国に作った国である。首都は今の北京付近にあった。最盛期は遼東半島から朝鮮北部まで支配した。

人材登用を重んじ「「まず隗より始めよ」との格言を遺した王朝である。（注4）

この燕についてはB C 4頃書かれた山海経に「倭は燕に属す。」との記述がある。「蓋国は鉅燕の南、倭の北にあり。倭は燕に属す。」「蓋や鉅燕」は朝鮮半島の国であろう。この意味は不明であるが、これに注目していた我が国の学者はおおい。

燕の王族がはるばる倭国まで亡命しようとした理由はいくつかある。まず彼らが朝鮮半島に最も近いことだ。陸続きで移動していくときの障害が少ない。次に「倭は燕に属す」との歴史書にあった。その根拠は判然としないが、倭が彼らに近いとの意識があった可能性がある。また倭については良い国だという情報が伝わっていたことはこれまでの歴史書にもあるので、亡命先に選びやすかったことであろう。

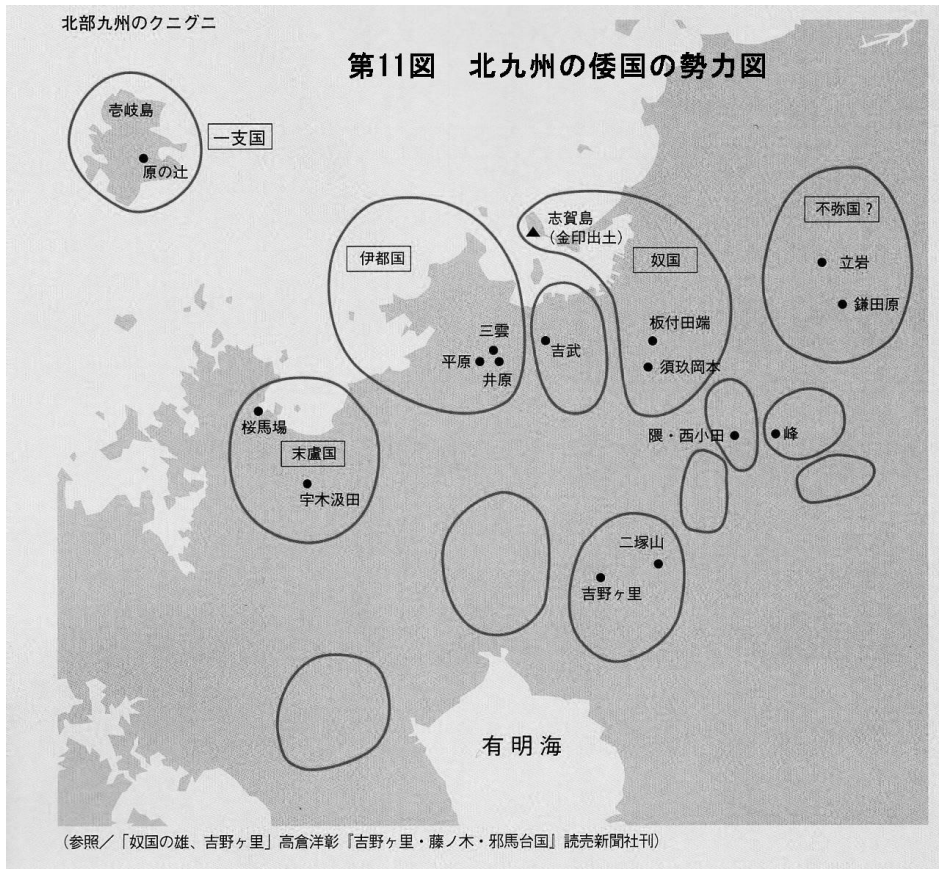
燕の亡命政権は優秀な人材団であったのだろう。朝鮮半島に逃れながらB C 220年からA D 0年前後まで世代交代を経ながら、倭国での国家再興の目標でまとまっていた。漢の時代漢民族の前衛地であった楽浪郡（現在の平城）にしばらく滞在したので、倭の情報や言葉を習得する時間はあった。古事記に出てくる高天原での神々の協議は作戦を立てた朝鮮半島でのことかもしれない。やがて楽浪郡は一世紀のはじめごろ反乱で戦地となったので、彼らはかねてからの目標国である倭を目指して動き出した。

そのころ倭の国は魏志倭人伝にあるごとく北九州は江南系の海の民の小国群で互いに競争していた。

(文献5) 一支国 末盧国 伊都国 奴国 不弥国 などは福岡県の沿岸にあって、遺跡の発掘が進み第11図のようにそれぞれ位置が確認されている。

これらの国々はすべて江南の出身の指導者が王となっていて、すでに後漢や魏との朝貢関係を結ぶところまでいていたので、それと紛糾する怖れのある北の漢民族の末裔である燕の王室一行は歓迎されなかった。受け入れられる余地はなかったのだ。

しかし幸い彼らを支援する一族もいた。後の大和神話に道の神 三姉妹としてあがめられた宗像氏である。海の民の頭領であ



った。対馬海峡に浮かぶ沖ノ島から宗像海岸までを支配下に置いていたこの一族は彼らの上陸を助けた。その助けて、やっと倭国にたどり着けたが、簡単には彼らの亡命王国を樹立することはできなかった。彼らの苦難の行程が始まる。北九州の沿岸から南を眺めると延々と山並みが立ちはだかつて見える。阿蘇の外輪山だ。

彼らはその山の向こうに北九州諸国の支配が及ばない縄文人の大部落があるとの情報を得ていた。そこそ新天地と見定めて、険しい何重もの山越えを進んだ。高千穂の峰を越えたときそこに広い盆地をみた。その山あいの広い盆地で狩猟採集の生活を送っている縄文人の大部落がそこにあった。

山越えを成功した彼らの安堵と喜びを描いたような絵が高千穂歴史資料館に飾ってあった。表紙に使った絵である。2世紀に入っていたころだ。

縄文人たちは、この山を越えてきた一族を迎えた。これまで見たことの無い美しい衣装に身を固め、光り輝く鉄器を持つ姿に驚き、たちまち尊敬の意を表しすべてを捧げ従う姿勢を見せた。表紙裏に掲載した「日向風土記」にはこのように記されている。

「天津彦瓊瓊杵尊、天の磐座を離れ、天の八重雲を排けて、陵威の道別き、道別きて、日向の高千穂の二上の峰に天降りましき。時に天暗冥く、夜昼別かず、人物道を失い…ここに土蜘蛛、名を大祖 小祖というものの二人ありて、奏言ししく、「皇孫の尊、尊の御手もちて、稲千穂を抜きて粃となして、四方に投げ散らしたまはば、必ず開晴りなむ」と申しき。…即ち天開晴り、日月照り光きき。…」

後の世に「天孫降臨」として語られる事件だった。土蜘蛛と称された地元の縄文人との出会いも物語っているのだろう。ここから念願の新国の誕生にいたったのであろう。仮にN国と名付けておこう。それは阿蘇の南から西の熊本地方では狗奴国となったのかもしれない。しかしまだ名前のしれないN国の方が話しを進めやすい。高千穂台地から熊本にかけて力を得たN国は東の日向に降りてきた。2世紀のことになる。

今回北九州を旅行して驚いたのは神話の神であるニギノミコトの墓が日向に近い延岡市の郊外にあるのを見たことである。この墓は日向灘を一望できる高台にある。高千穂から日向への道の途中で彼は亡くなったのかもしれない。

日向の隣は当時の北九州諸国最大の邪馬台国であった。宇佐を都として豊の国を卑弥呼なる女王が支配していた。魏に朝貢したのはAD237年3世紀のことである。邪馬台国はあくまで江南系の国であったので、武力による支配でなく、巫女としての神がかりの支配であった。（文献6）



N 国の武装集団には敵対できないことを悟った卑弥呼はすぐさま連携関係を結んだ。当時のやり方で、婚姻関係を結び、逆にN 国の母国としたのであろう。それから、卑弥呼はN 国の最高神として扱われた可能性がある。やがてつくられる神話ではアマテラスと呼ばれるようになる。(注3)

その連合によってN 国は武と巫術を兼ね備えた無敵の強さを誇り、たちまち北九州諸国を支配下に置いた。海の民も支配下に入り、瀬戸内海海路もすぐ支配下になった。3 世紀のことだ。



最後の相手は出雲王国であった。すでに第2段階で述べたように出雲王国は近畿にその拠点を築いていた。三輪山の神が大物主大神で現在も続いている。出雲国も当然のことながら中国の王朝と結びついていた。相手が三国時代の一方の覇国呉の国であった。(文献7) 同じで呉で紛らわしいがこの二つの呉は時代が異なる。春秋時代の呉越の抗争とその民の亡命があったのはBC300〜400年。三国時代に再度生まれた呉の国はAD1世紀である。先に逃亡民であった呉の民による出雲王国は、むろん1世紀頃の三国時代の呉とも結んだ。この2代の呉の影響は出雲王国とともに日本全土におよんでいることは先に述べた。

しかし三国時代の呉も晋に滅ぼされる。魏はまだ健在であった。魏と組んだ九州勢が高姿勢に出る情勢で、N国を代表とする九州国から国譲りの交渉を持ち掛けられた時、出雲王国はそれに合意し国譲りに合意せざるを得なかった。

しかし部分的には反抗勢力がでた。その闘いは後の世の神話で神武東征として語られるようになる。初戦で痛手を被ったN国軍は、先祖の山越えの威力を覚えていたため、対大和の戦争でも熊野を経て東の山越えで攻め、その威勢で大和を収めた。闘いは部分的であり、交渉で統一を勝ち取ったのである。

N国は晴れて檜原の宮でヤマトの国の建国を宣言したのである。3世紀の末になっていた。日本列島に初めてのヤマト統一国家が成立したのである。この政権は、紆余曲折はあっても他国からの侵略を見るこ

となく継続した。7世紀に自分たちの国家形成の物語を天孫降臨神話として古事記日本書紀にまとめ上げたのだ。(注4)

5、古事記神話の本質

古事記は、天孫族によるヤマト国支配の正当性を打ち出すために、神話の物語から初め、当時の現世に生きる天皇までの継続性を書いたものである。古事記が書かれた時代、天孫族による大和国支配が揺るぎのないところに来たので、それを中国のように史記として正統性を主張したかったのであるが、神話の積み重ねで物語る筋書きは、無理が多く当時も荒唐無稽感がぬぐえなかったのではないだろうか。

天孫族によって支配を確立するまでには、数多くの支援者の協力があり、それを得つつも幾多の苦労があったことは歴史的事実で、そのポイントポイントで忘れがたい事件があり、支援者の手柄への感謝の記録の意味もあって、数多くの事件の記憶が神話として語り継がれてきたのであろう。

一方集められた神話的エピソードはバラバラにあったので、それを一つのシナリオにつなぎ合わせたので、順序は混乱している。例えば出雲神話が天孫族国に先立って語られるのは史実としてもあっているが、その古事記では国譲りが終わった後に天孫降臨、神武東征が出てくる。これはおそらく順序は逆で、天孫

族の支配確立のための闘争の中で、最大の相手国であった出雲国の国譲りが行われたはずである。それでこそ初めて統一ヤマト国が出現するのが順序だ。

歴史の事実である天孫族の出現からヤマト制覇までのエピソードを古事記から拾い揚げ、時の流れの順に並べてみよう。

古事記項目	内容	該当する歴史項目
活躍する神々の出現	いざなぎのみそぎ「竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原に坐して、禊ぎ祓ひたまひき。 アマテラスとスサノオができる	北九州地方に江南より稲作文明がもたらされ、結果国々と支配者が出来始めた。
出雲国成立	素戔鳴尊が乱暴のため地上に放逐され、出雲地方におり、その子孫の大国主が出雲国を支配する。	北九州の諸国からはみ出した一族が山口から北に進み出雲国を作る。
天孫降臨の失敗	アメノホヒアメノワカヒコなど何度も着地を試みるも失敗。	いよいよ天孫族の北九州上陸を図るが、失踪
宗像三姉妹	アマテラスとスサノオの確執の中で宗像三姉妹が生まれる。	天孫族の上陸を助ける支援者登場。海の支配者
山彦海彦の戦い	海幸彦・山幸彦の兄弟喧嘩で山幸彦が勝利する	天孫族は上陸したが海の王国群は受け入れないので、山越えをして縄文族を味方にする

天孫降臨の実行	ニニギノミコトは猿田彦の出迎えを得て 5 人の部下と筑紫の日向の高千穂の降臨	高千穂の山越えをし、そこに縄文族が迎えた。
高千穂の宮	日子穂穂手見命は、高千穂の宮に伍佰捌拾歳坐しき	高千穂の宮から勢力を拡大していった。 狗奴国かもしれない
神武の東征の発想	神武とその兄が高千穂宮で相談「何れの地に坐さば、平らけく天の下の政を聞こしめさむ。なほ東に行かむと思ふ」	力をつけた天孫国は全国制覇の意図をもって高千穂から日向に降りた。
宇佐	豊国の宇沙に到りましし時、その土人、名は宇沙都比古・宇沙都比売の二人、足一騰宮を作りて、大御饗献りき。	豊の国宇佐は邪馬台国卑弥呼の国、たちまち同盟、アマテラス神話が生まれた。 また北九州地区の最強国となった。
神武北九州制覇	筑紫の岡田宮に一年坐しき。またその国より上り幸でまして、阿岐国の多祁理宮に七年坐しき。またその国より遷り上り幸でまして、吉備の高島宮に八年坐しき。	筑紫に回った。不弥国・奴国・伊都国・末蘆国と江南系の諸国が並んでいるが、これらの国を次々調略していった。さらに

		四国と岡山瀬戸内海を制覇した。
出雲国譲り	天津国の使いタケミカズチの要求に対し、大国主その子たちは此の国は「天つ神の御子に立奉らむ。」	出雲国も交渉で戦わずして、天孫族に主権を譲った。
奈良制覇	安芸に七年吉備に八年浪速に来てナガスネヒコに攻められ熊野から山下りで奈良大阪を攻略	天孫族の内紛に悩まされたが北九州連合軍の神武が勝利
大和朝廷誕生	イワレビコは久米兵と共に各地を回り、大和の地を平定すると奈良県の橿原に宮を置いた。そして辛酉年の春正月に『初代 神武天皇』として即位。	天孫族が天皇として支配を確立した。

6、まとめ

まとめてみると大胆な仮説を立てることができたものだとおもう。遺伝子調査の結果は冷静な歴史的事実を示しているが、それを成り立たせた人間群の動きは、自然現象ではない。また難破船の漂着のようなバラバラの出来事の積み重ねでもない。歴史を動かした熱い思いを持った人間集団がいたはずだ。それを率いていた卓越した指導者がいたはずだ。彼らの願いを発生させた事情が存在する筈だ。

遺伝子調査がしめす諸民族の動きとその時系列を、実際の歴史的事件とを克明に対照させていけば、ごく自然に物語が浮かび上がってきたのだ。神話として語られた日本列島内部の物語と、先進国であった中国の歴史書の記述、そして遺伝子の語ること、その心点がスムーズに結び付けることそれができたのが今回の結果だ。

縄文の眠りを最初に起こしたのが、江南文明の呉と越の敗北者移民集団であったことは幸いであった。彼らは征服を目指してきたわけではない。だから縄文人は彼らを歓迎しその高い文化を尊敬し受け入れたのだ。

なぜか我々は呉や越のことを、なぜか親密に感じる。たとえば呉服は高級和服と承知していたり、ライバル同士が一緒に席に居合わせたら「呉越同舟」と冷やかしたりした。「臥薪嘗胆」や「隗より始めよ」

(注2) といったこの時にうまれた言葉に慣れ親しんでいる。これは彼らが築き上げた古代出雲王国が長く影響を遺した証左かもしれない。

天皇家の祖先が呉の太伯であるという説が、江戸末期の歴史家儒家たちの論争を生み、畏れ多いとしてうやむやに消された事があるが、強いていえば呉の太伯は出雲王国につながっていたのだ。

そして最後に仕上げをしたのが黄河文明の燕の王族集団であった。彼らの統一国家再興の決意と能力が倭のバラバラ小国群を、国際的にも通用する統一国家ヤマトに作り上げたのである。その過程も持ち込んだ武力による征服ではなく、内部の諸勢力の婚姻や懐柔などの政治的統合で成し遂げたのである。歴史の偶然とは片づけられない、ある人間集団がもつ強い意志とノウハウがあった。それは幸運なことであった。国際感覚をもった統一国家が20世紀ごろにできたことは、日本列島の自主独立に大きな出来事であった。中国や朝鮮半島で見られた相次ぐ民族の征服や王朝の転覆混乱の歴史が、初期の日本にはなくて済んだのである。王権樹立の強い意志が一方にあって、もう一方で受容力の大きな縄文人と江南文明の民がそれを良しとして協力したことがその状態をもたらした。世界的にも稀有な出来事であった。

バラバラな部族のままだったアフリカ大陸はヨーロッパの植民地にされ、インカやアステカ王国で分散していた南米が、スペインの支配に屈した悲劇が歴史の現実なのだ。

呉・越・燕の、今は名も知れず歴史の闇に消えてしまった優れた指導者たちの執念と努力にささやかな感謝を捧げたい。彼らの名は、思いがけない形で、古事記神話の神々の名として残されているはずだ。

7. 学会の諸説との比較

6節のまとめまで書いて、親しい諸兄に査読をお願いして、いろいろのご指摘をいただいた。その一つに朝鮮半島との関連が不足していること、またこの時代に関する学説で未読のものがあるのをご紹介していただいた。これは後追いで補足することとしたが、驚いたことに権威の方々の説いておられることは私のまとめを補強してくださるばかりで修正する必要はないことがわかった。

今から半世紀ほど前、北方騎馬民族征服説を江上波夫氏が発表して論議を巻き起こしていたことは知っていたが、珍説として消えてしまったと思っていた。冒頭でも述べたように邪馬台国の所在とともに、今だにこの時代の歴史は学会では公式な見解はなさそうだった。

今回改めてその北方騎馬民族征服説を読みなおして、実は本稿の趣旨とほとんど同じであることを知って驚いた。江上波夫氏は東大東洋史学名誉教授で、文化勲章受章者であるが、この学説は学会では否定されているのだ。

江波教授の「日本における民族の形成と国家の起源」(1965年 東洋文化研究所紀要第32)は、私の第2段階の江南の民の渡来、第3段階の北方黄河漢民族の渡来という基本線で同じ説を述べられている。第3段階の渡来は、北方騎馬民族の王族が朝鮮半島を南下し半島南部の任那で一度滞留してのち九州北部に上陸したことを詳細に検討されている。

基本的には同じであるが、違っているのは「北方黄河漢民族」をどこの集団であるかは特定されていないで、『朝鮮半島に流移してきた辰王が、弁辰の地を支配した征服王朝的性格の強い王』とされ、朝鮮半島南部に拠点を置いたときの名前辰王から話を起こしておられる。その一族を騎馬民族とし、九州上陸から倭国の征服を行ったとされておられる。しかし総論として「騎馬民族征服」説となると、かなり印象の違うことになってしまう。筋としては同じでも、私の元燕の王室の統一国家建設は征服という言葉のイメージではない。彼らはかつての燕の国を建設した時の理想と夢を、この列島で再現する夢を捨てず、策略と何よりも先住の民たちの合意で歓迎されつつ達成したとの印象を持っている。そこが違うのである。

最後に京大ご出身の日本古代史研究家の安本美典氏の見解を紹介しよう。彼は現在も「邪馬台国の会」という研究会で自説を発表し続けておられる、その代表作「大和朝廷の起源」から彼の説を紹介する。まず記紀は政治的な意味で修正は施されているが、歴史的事実を反映しているとして、文献批判学の方

法で、時間尺度の政治的修正を発見して、元の事実を発見しようとされた。

その結論は、神武東征は3世紀にあった歴史的事実である。神武は九州北部にあった邪馬台国が根拠である。そして卑弥呼は天照大神である。

これら二つの学説は、このように、はからずも素人の私が数々の旅行先で考え到達した説を補強してくれたのである。

2019年2月20日三水会発表

文献

- 1、日本人は何処から来たか 血液型遺伝子から解く 松本秀雄 NHK BOOKS 1992/10
- 2、DNAでたどる日本人10万年の旅 崎谷満 CCC研究所所長 昭和堂 2008/1/30
- 3、日本人の源流 核DNA解析でたどる 斉藤成也 国立遺伝学研究所教授 河出書房新社 2017/11/5
- 4、古代日本のルーツ 長江文明の謎 安田善憲 青春出版社 2003/6/15
- 5、古代九州 別冊太陽 2005-8-22 平凡社
- 6、卑弥呼と宇佐王国 神話から古代への軌跡 清輔道生 彩流社 1995-12-25
- 7、渡部雅史著 大和朝廷成立の謎 古代出雲王国から邪馬台国へ 幻冬舎 2012/10/15

- 8、武光誠 渡来人とは何者だったか 河出書房新社 2016-6-20
- 9、門脇禎二 邪馬台国と地域王国 吉川弘文館 2008-6-10
- 10、安田嘉治著 倭人伝古事記の謎が解けた 新人物往来社 H4-11-30
- 11、卑弥呼以前の倭国五〇〇年 銅鐸。明刀銭、多紐鏡をめぐる 大平裕 2018-5-29 PHP
- 12、神武天皇VS卑弥呼 ヤマト建国を推理する 関裕二 新潮新書 2018-4-20
- 13、三浦佑之著 古事記を読みなおす ちくま新書 2010-11
- 14、海部陽介（国立科学博物館人類史研究グループ長）著 日本人はどこから来たのか？文芸春秋社 2016-2-10

15、論集 騎馬民族征服王朝説 江上波夫大和書房 1975-3

16、安本美典 大和朝廷の起源 勉誠出版 2017-7

17、外郎売の科白 坂井清成著 三恵出版 昭和55年8月p13

（注1）32億からなるDNA配列の99.9%はホモサピエンスとして共通であるが、0.1% 40万個は個性があり、その配列場所をSNPと呼んでいる。その部分を取り出して分類し比較するのである。この方法から導かれる結論はデータが膨大過ぎるためだろう、前節のY染色体ハプロ分析のような単純明快な答えは出せない。

（注2）隗より始めよ

「戦国策・燕策・昭王」によると、戦国時代、燕の昭王は天下の人材を集めようと思いつき、その方法に有能の士である郭隗に尋ねました。郭隗は「今、王、誠に士を致さんと欲せば、先ず隗より始めよ」つまり「今から、王がほんとうに天下の人材を集めたいと考えるなら、この私、隗から採用してスタートしなさい」と言ったと言います。「自分のように凡庸な失敗の多い人物でも採用されるなら、私以上の人は進んで応募するでしょう」と述べたかったのでしょう。

かくして王は郭隗を採用し、その果敢な決定を知った天下の人材が、昭王君のもとに、こぞって集まったといえます。自己推薦した郭隗もなかなかの人物だったといえます。現在では一般に「隗」を自分のことと受け取り、「自分が先ず率先する」というように使っている場合も見えます。

(注3) 宇佐を含めて今は豊前豊後と分かれているが古代は豊の国で一つだった。その中央にみやこ町がある。いまの京都が平安京となりみやこと呼ばれるよりずっと古い時代から、「京都郡みやこ」と名乗っていた町である。おそらく邪馬台国時代にさかのぼるのではないだろうか。このみやこ町歴史資料博物館があり、弥生時代各地に王国ができ、その中心地であったためにこの名前が付いたとあった。

(注4) 編纂1300年を迎えた古事記の神話について「なぜ天の子でなく、孫なのか？」と題する一文があった。<http://www.kankou-shimane.com/shinwa/kiso/index.html>

「このとき、ニニギが降臨した地は日向（宮崎県）の高千穂とされます。オオクニヌシが国を譲った場所が出雲であるにもかかわらず、ニニギはなぜ日向に降りたのでしょうか。さらに、最初はアメノオシホミ

ミが天降る予定であったのが、直前になって子のニニギ（アマテラスの孫）に代わったのはなぜか。そこも見逃せない謎ですが、この点については、七世紀後半に即位した持統天皇とのかかわりが指摘されています。

持統天皇は夫の天武天皇が崩御したのち、皇后の立場で政治を執ったものの、皇子の草壁皇子（くさかべのみこ）が亡くなったため、自らが天皇に即位しました。その後、草壁皇子の子、すなわち持統天皇の孫にあたる文武天皇に譲位したのです。ここには、祖母から孫への継承という関係が読み取られ、「アマテラス↓ニニギ」の天孫降臨神話と同じパターンを見ることができます。

天孫降臨神話の原型は七世紀後半に生まれた！

持統天皇にとって、我が子の草壁皇子が亡くなったあと、自分と天武天皇の血統を受けつぐ文武天皇を即位させることは最大の願いでした。持統から文武への皇位継承を正統化し、保証するための大きな抛り所として形成されたのが、アマテラスを天孫降臨の司令神とし、孫のニニギがその命を受けて天降るという「天孫降臨神話」に他なりません。天孫降臨神話の歴史的背景をこのように読み取るならば、この神話の成立も持統天皇の時代と考えることができます。つまり、天孫降臨神話が形づくられたのは七世紀後半の段階ということになります。記・紀神話を形成する個々の神話がいつごろ、どのようにして形成されたかについては、なかなか知ることが難しいものです。その意味でも天孫降臨神話は、成立の事情が推測することのできる貴重な神話といえます。

別添 魏志倭人伝原文と現代文訳（ウィキペディアより）

行程について

原文	日本語訳
倭人在帶方東南大海之中、依山島爲國邑。舊百餘國、漢時有朝見者。今使譯所通三十國。	倭人は帶方郡の東南の大海の中に在り、山島に依って国邑とし、もとは百余国で、漢の頃から大陸への朝貢があり、記述の時点では 30 箇国が使者を通わせている。
從郡至倭、循海岸水行、歷韓國、乍南乍東、到其北岸狗邪韓國、七千餘里。	帶方郡から倭国に至るには、水行で海岸を循って韓国を経て南へ、東へ、7000 余里で〔倭の〕北岸の狗邪韓国（こやかんこく）に到着する。
始度一海千餘里、至對馬國、其大官曰卑狗、副曰卑奴母離、所居絶島、方可四百餘里。土地山險、多深林、道路如禽鹿徑。有千餘戸。無良田、食海物自活、乗船南北市糴。	始めて海を 1000 余里渡ると、対馬国に至る。大官は卑狗（ひこ）、副官は卑奴母離（ひなもり）。絶島で 400 余里四方の広さ。1000 余戸が有る。山は険しく、道は獣道のように、林は深く、良い田畑がなく、海産物で自活。船で南北岸の市へいく。
又南渡一海千餘里、名曰瀚海、至一大國。官亦曰卑狗、副曰卑奴母離。方可三百里。多竹木叢林。有三千許家。差有田地、耕田猶不足食、亦南北市糴。	また南に瀚海と呼ばれる海を 1000 余里渡ると一大国に至る。官は対馬国と同じ。300 余里四方。竹、木、草むら、林が多い。3000 許りの家が有る。田畑は有るが田を耕すが食糧には足りず、南北から市へいく。
又渡一海千餘里、至末廬國。有四千餘戸、濱山海居。草木茂盛、行不見前人。好捕魚鰔、水無深淺、皆沈没取之。	また海を 1000 余里渡ると、末廬国に至る。4000 余戸が有り、山海に沿って住む。草木が茂り、前を行く人が見えない。魚やアワビを捕るのを好み、皆が潜る。
東南陸行五百里、到伊都國。官曰爾支、副曰泄謨觚・柄渠觚。有千餘戸。世有王、皆統屬女王國。郡使往來常所駐。	東南に陸行し、500 里で伊都国に到着する。長官は爾支（にき）、副官は泄謨觚（せもこ）と柄渠觚（へくこ）。1000 余戸が有る。世、王が居た。

	皆、女王国に属する。帯方郡の使者の往来では常に駐在する所。
東南至奴國百里。官曰兕馬觚、副曰卑奴母離。有二萬餘戸。	東南に 100 里進むと 奴国 に至る。長官は兕馬觚（しまこ）、副官は卑奴母離（ひなもり）。2 万余戸が有る。
東行至不彌國百里。官曰多模、副曰卑奴母離。有千餘家。	東へ 100 里行くと、 不弥国 に至る。長官は多模（たも）、副官は卑奴母離（ひなもり）。1000 余の家族が有る。
南至投馬國、水行二十日。官曰彌彌、副曰彌彌那利。可五萬餘戸。	南へ水行 20 日で、 投馬国 に至る。長官は彌彌（みみ）、副官は彌彌那利（みみなり）である。推計 5 万余戸。
南至邪馬壹國、女王之所都、水行十日、陸行一月。官有伊支馬、次曰彌馬升、次曰彌馬獲支、次曰奴佳鞮。可七萬餘戸。	南に水行 10 日と陸行 1 月で女王の都のある邪馬台国に至る。官に伊支馬（いきま）、弥馬升（みましょう）、弥馬獲支（みまかくき）、奴佳鞮（なかてい）があり、推計 7 万余戸。

国々の関係

原文	日本語訳
自女王國以北、其戸數道里可得略載、其餘旁國遠絶、不可得詳。 次有斯馬國、次有已百支國、次有伊邪國、次有都支國、次有彌奴國、次有好古都國、次有不呼國、次有姐奴國、次有對蘇國、次有蘇奴國、次有呼邑國、次有華奴蘇奴國、次有鬼國、次有爲吾國、次有鬼奴國、次有邪馬國、次有躬臣國、次有巴利國、次有支惟國、次有烏奴國、次有奴國。 此女王境界所盡。	女王国の以北は、其の戸数・道里を略載することが可能だが、其の他の傍国は遠く絶（へだ）たっていて、詳（つまびらか）に得ることができない。斯馬国、己百支国、伊邪国、都支国、彌奴国、好古都国、不呼国、姐奴国、對蘇国、蘇奴国、呼邑国、華奴蘇奴国、鬼国、爲吾国、鬼奴国、邪馬国、躬臣国、巴利国、支惟国、烏奴国、奴国。此れが女王の境界が尽きる所である。

其南有狗奴國。男子爲王、其官有狗古智卑狗。不屬女王。	其の南には狗奴国がある。男子を王と為し、其の官に狗古智卑狗（くこちひく）が有る。女王に属せず。
自郡至女王國、萬二千餘里。	帯方郡から女王国に至る、1万2000余里である。

倭国の様子

原文	日本語訳
男子無大小、皆黥面文身。	男性は大人も子供も、みな顔や体に入墨をしている。（黥面は顔の入れ墨、文身は体の入れ墨）
自古以來、其使詣中國、皆自稱大夫。	古くから、中国に来た倭の使者はみんな自らを大夫と称している。
夏后少康之子、封於會稽、斷髮文身、以避蛟龍之害。今倭水人好沈没捕魚蛤、文身亦以厭大魚水禽、後稍以爲飾。	夏（中国の王朝）の王の少康の子が、會稽に封ぜられた時、断髪して入墨をし、蛟（みずち）の害を避けたという。今、倭の漁師も好んで水にもぐって魚や蛤を捕り、身体に入墨をして大魚や水禽を避けていたが、後には飾りになった。
諸國文身各異、或左或右、或大或小、尊卑有差。	入墨は国ごとに異なり、あるいは左に右に、あるいは大に小に、階級によって差が有る。
計其道里、當在會稽東冶之東。	その（倭国の）位置を計てみると、ちょうど會稽や東冶の東にある。
其風俗不淫。男子皆露紒、以木縣頭。其衣橫幅、但結束相連、略無縫。婦人被髮屈紒、作衣如單被、穿其中央、貫頭衣之。	その風俗は淫らではない。男子は皆鬘を露わにし、木綿の布を頭に巻いている。その衣服は幅広い布を結び合わせているだけであり、ほとんど縫われていない。婦人は髪に被り物をし後ろで束ねており、衣服は単衣（一重）のように作られ、中央に孔をあけ、貫頭衣である。
種禾稻・紵麻、蠶桑緝績、出細紵・縑・縣。	稻、紵麻（からむし）を植えている。桑と蚕を育てており、糸を紡いで上質の絹織物を作っている。

其地無牛馬虎豹羊鵲。	牛・馬・虎・豹・羊・鵲（かささぎ）はいない。
兵用矛・楯・木弓。木弓短下長上、竹箭或鐵鏃或骨鏃。所有無與儋耳・朱崖同。	兵器は矛・楯・木弓を用いる。木弓は下が短く、上が長くなっている。矢は竹であり、矢先には鉄や骨の鏃（やじり）が付いている。
倭地温暖、冬夏食生菜、皆徒跣。	土地は温暖で、冬夏も生野菜を食べている。みな、裸足である。
有屋室、父母兄弟臥息異處。以朱丹塗其身體、如中國用粉也。食飲用籩豆、手食。	家屋があり、寝床は父母兄弟は別である。身体に朱丹を塗っており、あたかも中国で用いる白粉のようである。飲食は高坏（たかつき）を用いて、手づかみで食べる。
其死、有棺無槨、封土作冢。始死停喪十餘日。當時不食肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒。已葬、舉家詣水中澡浴、以如練沐。	人が死ぬと、棺はあるが槨のない土で封じた塚を作る。死してから10日あまりもがり（喪）し、その間は肉を食さない。喪主は哭泣し、他の人々は飲酒して歌舞する。埋葬が終わると家の者は水に入り体を清める、これは練沐の如し。
其行來渡海詣中國、恒使一人、不梳頭、不去蟣蝨、衣服垢汚、不食肉、不近婦人、如喪人。名之爲持衰。若行者吉善、共顧其生口財物。若有疾病、遭暴害、便欲殺之、謂其持衰不謹。	倭の者が中国に詣るのに海を渡る時は、いつも一人が選ばれ、頭（髪）をとかず、虱を取らず、服は汚れ放題、肉は食わず、婦人を近づけず、喪人のごとく。名づけて持衰（じさい）という。もし行く者が善ければ生口や財物が得られる。もし病気があったり暴害にあえば、その持衰が謹まなかったからだとして殺される。
出真珠・青玉。其山有丹、其木有柁・杼・櫟樟・榉・櫪・投櫃・烏號・楓香、其竹篠・簞・桃支。有薑・橘・椒・蘘荷、不知以爲滋味。有獼猴・黑雉。	真珠と青玉が産出する。倭の山には丹があり、倭の木には柁（タブノキ）、杼（ドングリ）、櫟樟（クスノキ）、榉（ボケ）、櫪（クヌギ）、投櫃（カシ）、烏号（クワ）、楓香（カエデ）。竹は篠（しょう）、簞（かん）、桃支（とうし）がある。薑（ショウガ）、橘（タチバナ）、椒（サンショウ）、蘘荷（ミョウガ）があるが、美味しいのを知らない。また、猿、雉（きじ）もいる。

其俗舉事行來、有所云爲、輒灼骨而卜、以占吉凶。先告所卜、其辭如令龜法、視火坼占兆。	特別なことをするときには骨を焼き、割れ目を見て吉凶を占うト（ぼく）を行う。まず占うところを告げ、その解釈は令龜の法のように、火で焼けて出来る割れ目を見て、兆しを占う。
其會同坐起、父子男女無別。人性嗜酒。見大人所敬、但搏手以當脆拜。其人壽考、或百年、或八九十年。	集会での振る舞いには、父子・男女の区別がない。人々は酒が好きである。敬意を示す作法は、拍手を打って、うづくまり、拝む。人は長命であり、百歳や九十、八十歳の者もいる。
其俗、國大人皆四五婦、下戸或二三婦。	身分の高い者は4、5人の妻を持ち、身分の低い者でも2、3人の妻を持つものがある。
婦人不淫、不妒忌。	女は慎み深く嫉妬しない。
不盜竊、少諍訟。	盗みはなく、争論も少ない。
其犯法、輕者没其妻子、重者滅其門戸及宗族。	法を犯す者は軽い者は妻子を没収し、重い者は一族を根絶やしにする。
尊卑各有差序、足相臣服。	宗族には尊卑の序列があり、上のもののいいつけはよく守られる。

交流年表

原文	日本語訳
景初二年六月 倭女王遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻 太守劉夏遣吏將送詣京都	景初2年（西暦238年）6月 倭の女王は大夫の難升米等を（帯方）郡に詣いるよう遣わし、天子に朝獻を求める。太守の劉夏は吏將をつけて京都（魏の都）に送った。
其年十二月 詔書報倭女王曰（中略）	その年の12月、倭の女王に報いる詔書が出された。曰く（中略）
正始元年 太守弓遵遣建中校尉梯儁等 奉詔書印綬詣倭國 拜假倭王 并齎詔賜金帛 錦	正始元年（西暦240年）、太守の弓遵が中校尉の梯儁らを遣わし、倭國に詣りて詔書・印綬を奉じ倭王に拜假した。また、金帛・錦・罽・刀・鏡・采物をもたらした。倭王は謝恩の上表文を詔した。

鬬 刀 鏡 采物 倭王因使 上表答謝恩詔	
其四年 倭王復遣使大夫伊聲耆 掖邪狗等八人 上獻生口倭錦 絳青縑 縣衣 帛布 丹木 拊 短弓矢 掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬	その4年、倭王はまた大夫の伊聲耆・掖邪狗たち8人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・縣衣・帛布・丹木・拊（搏拊）・短弓矢を獻じた。掖邪狗たちは善中郎將の印綬をさずかった。
其六年 詔賜倭難升米黃幢 付郡假授	その6年、倭の難升米に黃幢を賜えと、郡に假授するよう詔が出された。
其八年 太守王頡到官 倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和 遣倭載斯 烏越等詣郡 說相攻撃狀 遣塞曹掾史張政等 因齎詔書 黃幢 拜假難升米 爲檄告諭之 卑彌呼以死 大作冢 徑百餘步 狗葬者奴碑百餘人 更立男王 國中不服 更相誅殺 當時殺千餘人 復立卑彌呼宗女壹與 年十三爲王 國中遂定 政等以檄告諭壹與 壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人 送政等還 因詣臺 獻上男女生口三十人 貢白珠五千孔 青大句珠二枚 異文雜錦二十四匹	その8年、太守に王頡が到官。倭の女王の卑彌呼と狗奴國の男王の卑彌弓呼は元より不和で、倭は載斯・烏越たちを郡に遣わし、互いに攻撃している状態を説明した。塞曹掾史の張政たちを遣わし、詔書と黃幢を難升米に拜假し、告諭しこれを檄した（木札に書いた）。卑彌呼は死んでおり、塚が大いに作られ径100歩ほど、狗葬者は奴碑100人ほど。つぎに男王が立つが國中が従わず、互いに殺し合い当時1000人くらい殺された。その後また卑彌呼の宗女の壹與という13歳の者が王になり、國中がついに定まった。そういう訳で政（張政）たちは壹與に告諭し檄したのである。壹與は倭の大夫の率善中郎將の掖邪狗たち20人を遣わし、政（張政）たちが還るのを送るとともに、臺（魏の都）に詣り、男女生口30人、貢白珠5000孔、青大句珠2枚、異文雜錦20匹を獻上した。

日本原記
その6

日本の精神風土の形成



目次

1. 総論 現日本精神の誕生	248
2、基底にある縄文精神 〈従順 しかし精神の自由人〉	251
3、江南の稲作人を受け入れた弥生時代 〈勤勉な組織人〉	257
4、天孫族が支配者となったやまと時代 〈支配層としての役柄本位〉	259
5、これら3つの混合が生んだ原日本精神	264
6、奈良時代から近代までの日本精神の試練	266
6-1 仏教伝来とその日本化	266
6-2 キリスト教伝来と宗教への危険視	267
6-3 儒教と江戸哲学	268
6-4 明治維新と西欧文明の受け入れ	272
6-5 敗戦と戦後	273
7、地球時代のヒューマニズム思想から見る日本精神の弱点	274

今後の課題と展望

2019年5月15日 三水会発表

1、総論 原日本精神の誕生

日本原記5で、これまで定説の無い日本という統一国が生まれるまでの歴史過程を、遺伝子追跡という新しい科学の目を借りて推論してきた。大陸から付かず離れずの存在でありながら、しかも海で隔離された円弧諸島ならではの特質が見事に活かされた歴史であった。しかもその円弧諸島は生きるための資源には恵まれていたために、そこに住む人々の間で死活をかけた奪い合いが不要で、共存共栄が可能であったことが幸いした。そのために、縄文 弥生 そしてやまと時代に至る三種の人間集団の混成が、武力による制圧という場面は少なく、ほぼ平和裏に積み重なって出来たのであり、それは世界的にも例の少ないものであった。すなわち、どの歴史段階でもどれか特定の階層が全滅するといったことが無く、それぞれの階層が並存して生き延び、それぞれの個性を温存しつつ、相互に影響をあたえつつ、交わりつづけたわけで、この積み重なるの精神風土が後世に続く「原日本精神」の基本になったと考える。

そのユニークさは、この民族混交の歴史の中で、縄文日本語が継続して使われたという貴重な歴史的事実でも見ることができる。その貴重さを考える上で少し時代をずらして考えてみよう。

この始原期間を経て、国家統一を果たした大和朝廷は、その後に新たに中国や百済、新羅、高句麗などから続々と人材を受け入れた。先の時代と決定的に違うことは、これら渡来人を受け入れた飛鳥 奈良時

代は、受け入れる主体となる国家が確立していたことだ。したがって彼ら渡来人は受け入れられるためには、縄文以来の日本語を習得しそれを使うほかなかったのは当然のことである。

しかし元に戻って、縄文・弥生・大和政権樹立までの始原時代を考えると、主体的国家などないままの縄文諸部落の世界に、自然態で江南の民や天孫族がなだれ込んだのである。かれらは母国語をもちこんだはずである。しかも彼らが文明的には優越した存在であったので、その言語で原住民をリードし、使用させることができたはずである。その例は前回のレポートでも触れたように日本語の 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十をイチ ニ サン シ ゴ ロク シチ ハチ クー ジュウと呼ぶのは呉の言葉だとされる。原日本語で漢字を読むのは訓読みである。桜花を「さくらばな」と読むのは訓読み、「おうか」と読むのは音読みで中国からの伝来の読み方だ。ところがこの数詞の訓読みはない！ので、イチ ニ サンの呉の数え方がそのまま縄文語に取り入れられたという推測が成り立つ。このように原日本語である縄文語に無い数詞のような言葉は移住者である江南の民の言葉を移入したが、日本語の骨格は変えることなく移住者も、縄文日本語で生きることを選んだのである。

特に最後に支配統一した天孫族は、北方中国語を使っていたし、原初的漢文字すら持っていたと思われるが、北方中国語を被支配民に押し付けることはなかった。おそらく日本列島に上陸する以前、朝鮮半島滞在時に倭人から縄文日本語を習得することを準備行動の一つとして行ったとみられる。彼らの行動が江南の民が支配する北九州地域を避け、隘路を通過して山越えをして、縄文部落に接しそこで拠点確立して

いったことから推察できる。持ってきた文字も縄文語に合わせた使い方をしたのである。

このことを考えれば、社会的な人間関係においては、縄文人は常に従順な服従をもって、社会的地位は下位に置かれることを良しとしたにもかかわらず、縄文語を代表とする縄文文明の包容力は侵入した二つの文明を包摂したほど強かったと言える。原日本精神を探るためには、この言葉の選びが示すように、縄文文明が基底として残っていることは重要な点である。

とはいえ、この縄文文明に稲作をもちこんだ江南人は指導者としての思想を植え付けたであろうし、執念をもってこの列島に統一国家を形成した北方系中国人天孫族が持ち込んだ高度な政治思想は、表立った社会には決定的な影響を与えたであろうから、底流の縄文、中堅が弥生、表層が天孫支配層といった三重の混成から「原日本精神」は成り立ったのであろう。

丸山真男教授が名著「日本の思想」でこう語っている。「日本における思想的座標軸の欠如…自己を歴史的に位置づけるような中核あるいは座標軸に当たる思想的伝統は我が国には形成されなかった。」

実はそうではなかったのだ。我が国の思想的伝統は、この3つの面を持つ万華鏡がその正体で、照らす方向で玉虫色に輝くのである。それを理解しないで、一つの明確な体系を期待する限り、我が国は「無思想」だと嘆くことになる。

それから2000年、様々な歴史的な事件が日本を襲い、精神風土も成長していった。特に影響の大きかった事件は奈良時代の仏教伝来、戦国時代のキリスト教伝来、そして明治維新以降の西欧文明の流れ込みと第2次世界大戦の敗北である。

これらの時代時代における新たな思想流入によって、日本精神は変化し豊かになっていったことは間違いない。しかしその際に、日本は基底にある「原日本精神」をもって受けとめ、それぞれを日本流に消化して、いわば日本流翻訳が施していったことは歴史的事実として有識者の多くが指摘するところである。

とすればそのしぶとい「三位一体の原日本精神」とは何だったのか、いささか単純化することによって、大筋を描き出してみよう。

2, 基底にある縄文精神

〈従順 しかし精神の自由人〉

縄文文明は1万年の間、日本で純粹培養された。現代に続く縄文日本語もこの時代に創生された。文字をもたなかったので、書誌的記録は伝わらなかったのだが、その精神風土は遺跡と遺物で



推定するほかない。

まずは「祭り好き」だった。三内丸山の巨大六本柱祭り台に示されるように、冬至の日没が岩木山山頂に落ちるのをこの巨大な祭り台で祝ったのだ。金沢のカナモリ遺跡、青森の列石遺跡などすべて、その規模の大きさから言って、当然近隣の村落の群衆が総出でこれを作り、太陽の甦りを祝ったのだ。しかし太陽信仰というような一つの超絶への信仰といったものではなく、巨石や巨木、特徴ある



山などのさまざまな自然物を信仰の対象とした痕跡があるので、いふなれば自然信仰心を基本とし、特徴はシャーマンのリーダーの女性を中心としてよく準備された祭りこそが、その基本であった。発掘される縄文土偶は現代人には奇怪な像としか見えないが、同時に作られているイノシシなどの動物土偶の造形のリアルさを見る時、例えば有名な遮光仮面を付けた土偶も実はリアルな女性シャーマンを写實的に表現しているのではないかと思われる。思い切った仮装で着飾った女性シャーマンを中心にそれが表すような想像を絶する巨大な祭りが特徴であった。いまの日本人の約7割が無宗教と称し、かつ同時に自然的宗教心は大切と答え、年一回の祭りには年間を通して準備して参加する宗教観はそのまま縄文人のそれに近いのである。

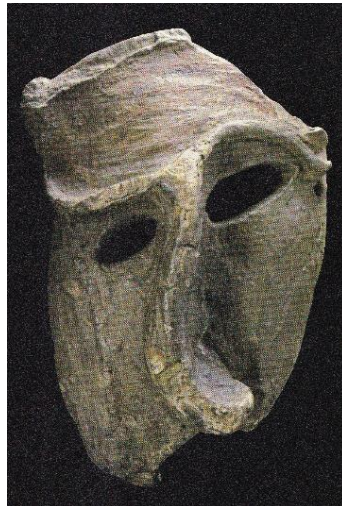
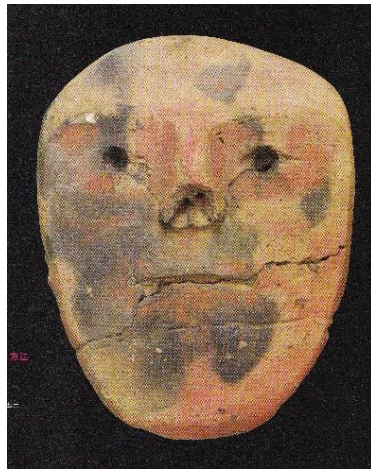
祭につながって、芸術が尊重された。狩猟・漁撈採取でも日本は気候温暖だったから食生活には余裕があったので、巨大な祭り空間を作り上げ、それを飾り上げるためのさまざまな芸術的作品を作った。代表的なものは火炎土器である。それは尊重され交換された。

表紙を飾ったのは縄文中期南アルプス市鋳物師屋遺跡で出土した人形装飾付有孔罌付土器（高さ54・8cm）である。浮彫されている人物は、祭りの踊り手でおそらく男性で、手を挙げて大声で歌いながら踊っている姿であろう。

弥生時代になると、縄文人は稲作文明をもたらした江南の民を尊敬して受け入れ、その指導に喜んで従った。まずは従順であった。魏志倭人伝に民衆の姿を表現した文がある。「敬意を示す作法は、拍手を打って、うづくまり、拝む。」私は日本の神社の発祥は、縄文人部落が大木や奇岩のある丘を聖地として祭の場としていたが、弥生人の渡来を受け入れたときに、その聖地を住みどころとして提供し、そこには踏み込まないように、入口に柱や鳥居などの結界を施したのが神社の始まりであったと考えた。敬意を示すのが拍手だとあるのが今に伝わる神社の参拝儀礼なのだと思う。



農民となった縄文人は農業もたちまち芸術としたことであろう。四季に従い自然を尊重する神事を農に取り入れた。芸能もそれに伴ったのであろう。能狂言の源流となる田楽や散楽を生みだし楽しんだことであろう。下図に縄文仮面のいくつかを紹介する。いずれも滑稽味があつて、個性的で、能面の源流になつていったことが髭髯とする。奈良時代に伝つた西方の伎楽面とは異なり人間味がある。



羽生市発戸 縄文後期

能代市麻生 縄文晩期

岩手県一戸町 縄文後期

縄文人の祭りには祝い唄はつきものであつたであろう。何も残されていないが、想像する上で有力な手掛かりがある。一つは七五調という日本語と切っても切れない語調がある。他国言語に無いこの語調は縄

文人の祭り歌に起源を発しているに違いない。弥生人や天孫族などの大陸から持ち込まれたことはありえない。母音で終わる日本語であればこそこの語調が生まれるからだ。万葉集歌謡から始まり、和歌・俳句のルールとなり、能狂言以降の古典演劇の科白の基本として受け継がれた。

万葉集に残された縄文人階層の歌である防人の歌がある。防人の兵士として徴用された彼らの苦しみの歌である。加藤周一氏の日本文学史序説からその箇所を引用する。

『防人の歌は、徴兵を嘆き、徴兵官を憎むものであった。』

国^{くに}の 防^{さきもり}人つどひ 船^{ふね}乗りて 別^{わか}るを見れば いとも為^な方^{かた}無し(巻二〇、四三八一)

「防人」の出発は、「いともすべ無し」であって、実にどうしようもなく悲しいものであった。

ふた^{ふた}ほがみ 悪^あしけ人なり あた^{やまい}病 わがする時に 防人にさす(巻二〇、四三八二)

急病の時に自分を徴集した男は全く悪いやつだという感想。そういう感想が一方にあり、他方には妻を思う美しい歌があったのである。

筑^{つく}波^ば嶺^ねの さ百合^{さゆり}の花の 夜^よ床^{どこ}にも愛^{かな}しけ妹^{いもうと}そ 昼^{ひる}も愛^{かな}しけ(巻二〇、四三六九)

これが兵役三年、東国から筑紫へ送られた大衆の声である。以上の三首は、いずれも、「丁」^{よぼろ}、すなわち雑兵の歌である。』

最下層の兵士は無理やり徴用された農民であり、縄文人層の民であったと思われる。同じ防人の歌でも階層が上のものは違った歌を詠んだ。引用を続ける。

『「防人」には階級があり、その指導者を「火長」といった（「養老令」、七一七～七二三、「軍防令」）。「火長」の歌のなかには、次のようなものもあった。

今日よりは 顧みなくて 大君の 醜の御楯と 出で立つわれは（卷二〇、四三七三）

大衆は決してそういうことをいわなかった。』

ここに使命感を吐露している「火長」は、縄文族でなく弥生族か天孫族の防人であろう。万葉集は天孫族である天皇から縄文族までを網羅した稀有の歌集である。縄文人である最下層の民の文芸は、万葉集を最後として、その後の古今集など以降の歌集にはもはや登場しない。

要約すれば縄文族は、社会権力からは疎外されたが、逆に「政治からの自由」を自らのものとした。政治に関与せず、政治は支配者層が苦勞するものと眺めている。支配に従順に従いながら、自分たちの本領である精神の自由人であることを求めた。言語文化を豊かにもち、自然な信仰心をもち、それを表現する祭りを好み人の紐帯を強めた。祭りにつきものの芸能を好み育んだ。日本の芸能の源流はここにある。建て前にとらわれことが無いため、独創的な人材を生みだすことができたであろう。

3、江南の稲作人を受け入れた弥生時代

〈勤勉な組織人〉

江南の文明の特徴は稲作と女系家族だといわれる。日本に渡来した江南の民は追われて逃亡し避難場所を求めてきた民である。縄文の社会も女系だったとすればこの稲作の民と融合しやすかった。

女系家族からシャーマン指導者は出た。卑弥呼がその典型で、女性シャーマンが支配者である時代は平和であった。

農業によって富の蓄積が生まれ、それを守るための武力が社

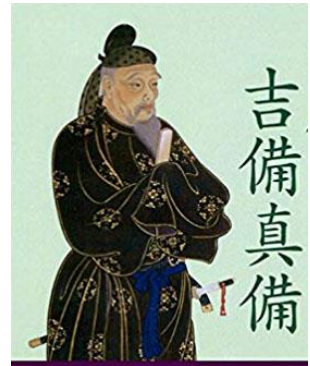


会をリードする世になるにつれて、シャーマンの夫が権力に登るようになる。山口県の土井ヶ浜遺跡のように弥生時代の人骨から武器による殺傷傷つけたものが見つかると。縄文時代にはなかったことで、村は、吉野ヶ里遺跡のような環濠を作り見張り台を建てた。

卑弥呼の邪馬台国は、北九州宇佐に拠点を置いたと推定する学者が多い。

北九州の江南族より先に同じ江南からの移民が出雲に古代王国を作り、出雲を起点として各地の縄文人の歓迎を受けながら、東方に、そして南下して、ついには大和地方まで支配した。彼らは出雲風土記に残る国引き神話のように国土開発に熱心に取り組んだ。彼ら出雲族の残した思想影響力は大きかった。それは稲作王国である組織を重んじる特徴を持っていた。組織に同化して働く組織人という日本人の特質は、この弥生文明の指導者層の力量と、従順に組織に従う縄文人のコラボレーションで生まれた。勤労を尊ぶころも、思想化されるようになった。

一方この弥生族は、下に縄文族を従え、天孫族が来てからは彼らを上に祭り上げた。その結果彼らは社会の上と下の社会層を見渡せる位置にいることになる。勤勉で上昇志向を常に持っていた。古代中世を通じて、中国に留学して知的指導者となった人達はこの階層の出身者である。吉備真備などの遣唐使出身の官僚や、最澄 空海 日蓮などの仏教指導者がそうだ。



彼らは社会哲学を持つことができたし、そこから日本の思想家が生まれることになった。ずっと時代は下がるが例えば二宮尊徳はその代表的存在である。彼の思想のユニークなことは、農民に勤労の大切さを説き、一方で上層支配層に分度を押し付けたことだ。世界的にもこの種の発想はないほどユニークは実践思想家である。

4、天孫族が支配者となったやまと時代 〈支配層としての役割本位〉

弥生時代に全国にうまれていた小国群をまとめて、ついにヤマトの国を統一した天孫族は、日本の支配

者の思想の骨格を体现する。

天孫族の祖であると推定できる燕王国の亡命王朝の人たちはどのような思想をもっていたのか。燕の母体は周王朝だ。周は殷を滅ぼして覇権を打ち立てた統一国家である。殷はシャーマン連合であったといわれる。それを倒したとき周の思想は「天命」であった。天命によって覇者となったと主張し正統性の根拠とした。その理念は覇者が単なる武力の持ち主ではなく、天に恥じることの無い倫理を持っているから天命を受けることが出来たと主張した。この倫理観はこの後生まれる儒教に影響を与えた。逆に儒教が理想とするのが周王朝であった。

燕の王室は、周王朝の有力な分家であったので、同じような「天命」の思想を持っていた。後に燕王国は、秦の始皇帝に追われて敗退して中国大陆を追われ朝鮮半島に亡命したが、その王室は別の天地で政権を再現するべき「天命」を帯びていると信じていた。彼らは倭の国でその「天命」を果たす国家を建設するという目的意識を鮮明に持ち続けていた。100年以上の歳月と朝鮮半島を縦断する道を突破して、ついに念願の倭の国に覇権を実現したのである。その「天命」による国家を、武力による征服ではなく、支配下の民に彼らに「天命」があることを承認させ、その意識を植え付けることによって達成したのである。

古事記にその宣言がある。『天照大御神の命以ちて、「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国は、我が御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命知らず国ぞ。」と言因さし賜ひて、天降したまひき。』理屈抜きの支配宣言である。

それが被支配者一同に受け入れられるだけの存在感が天孫族にはあったのだ。弥生時代の群小国家は、吉

野ヶ里遺跡にみられるように、環濠と見張り台を立て、お互いを敵視し合っていたのである。それが天孫族の巧みな説得で統一できた時、狭い垣根がもはや不要となったのだ。それが歓迎されない筈はない。

彼らが打ち立てた制度的思想的仕組みは天皇制として結実した。それは日本の表看板となりそのユニークさは世界にも際立っている。天皇制の確立は7世紀の天武朝になるが、源流は天孫族のヤマト朝廷樹立の時、遅くとも3世紀にある。天皇制の本質は理屈抜きの「万世一系」にある。また天皇はシャーマン的な祭祀長である点で、縄文族、弥生族共に親和性を持って受け入れやすかったこともある。

覆されることのない仕組みは決して支配者が自ら名乗るだけではない。むしろ被支配層がそれを良しとし維持しようと承認したから継続したのである。中国や朝鮮半島の王朝と比べるとその違いがはっきりしている。

その名を確立した天皇制は、政治実権を持っていた天武時代に名実ともに成立したが、天皇自身が実質支配したのはわずかな時代である。そののち政治実権を失った後も天皇制は宗主権を持ち続け、日本社会の持続性統一性を持ち続けることに貢献した。摂関政治にせよ、武家の幕府にせよ彼らは常に天皇を旗印として



自らの権威の後ろ盾としたのである。

天皇制の持つ功は日本社会に安定をもたらしたことである。権力争いはいつの時代にもあったが、天皇制が奇妙なカウンターバランスの役を果たして争いを集約させていた。一方弊害は次のようなものだ。まづ建て前としての絶対的権威すなわちアラヒト神なる存在を世襲の人間に憑依させたが、当の天皇は欠点のある人間であり、神的存在であり続けるわけにはいかない。建て前と実体の乖離はいつの時代にもあった。そのため日本人は超越的権威を本音では相対化してしまい、超越的至高的存在を本音では信じない性向を持ってしまった。

第2に建前としての絶対権威を上にとってしまった限り、それを後ろ盾にして施政を行うものは、上の支持さえ得ていれば安泰なので、下に対する責任は持つ必要がないことになったことだ。上に対する無限責任と、下方に対する責任欠如である。この後の時代は、天皇制を利用して支配階層内部の権力争いのみ専念できることになるのだ。それは摂関制の平安時代といわず、太平洋戦争を起こした昭和の軍部に至るまで、一貫して為政者の共通の姿勢であった。真の超越を失い、逆に極大の政治的無責任をもたらした負の遺産を日本は背負うことになった。

第3に建前と本音の分離は黙認されたが故に、建て前は道義的に立派なものにした。「武士は食わねど高楊枝」といったように世俗の富には軽蔑のまなざしすら向けた。忠孝の名誉に命を懸けた。後に武士道と名付けられた道義となった。彼らは統治者の側に立つ一人であるとの誇りを持てた代償として、人間味の

無い堅苦しさの中で生きることをやむなくされた。

天孫族による支配体制は天皇制という日本独自のスタイルをとって進められたが、それを運営したのは天孫族を中心とした天津神の子孫たち貴族と、協力者となった弥生族である国津神の子孫たち 豪族である。源氏・平家などの武士階級も源流は天皇の傍系子孫か同盟豪族である。その点で武家支配も天孫同盟族の流れの支配である。明治時代まで続いた武士階級は人口の数%であるが、決して農民や商業の人々から武士に登るものはおらず、階級区分は厳しかった。だから戦国時代の覇権争いも、明治維新もまた、この支配層の中での覇権争いであって、日本ではついに本質的な「下克上」は一度も起きなかったのだ。(秀吉は下層足輕の出であっても自らを上流階級に仮想したのであるから、同類だとみてよい。)

実は敗戦という最大の転換点を経ても、時代が安定してくると再びその支配同盟族が現代でも継続しているのである。戦後間もないころの片山哲総理がほとんど唯一の庶民出身の総理で、それも短期で終わったあとの歴代総理はやはりこの支配階層の出自であり続けた。共産党だけは絶対排除という価値観が共通で、現代も支配を続けている。

天孫族はその天皇制の説得力を作り上げるために、天とのつながりを神話として完成させなければならなかった。それは7世紀になってようやく記紀神話として完成した。物語だけではない。社会的装置としての国家的神社を作り上げた。それは縄文文明の太陽の祭りを巧みに利用したのだ。縄文人たちが大

切にした祭りの聖地を、神社として形式を与え、主祭神に記紀神話の神々をあてることにさせた。縄文人たちはその聖地が飾られ、盛大な祭りを行うことができれば、主祭神が誰であれ、異をとえなかった。日本の神道が内容の無い、何でもありで、しかし形式だけは尊重する底の浅い宗教となったのはこの成立の事情によるのである。

まとめて言えば天孫族とその同盟族に共通する特質は、国家統一の意欲を持ち続けたことだ。「国体護持」が究極の望みであった。常にあった権力争いも、より強力な国家統一の指導者になる意欲から生まれた。トップまでいけないものも、いつも勝馬を探し、その馬にぶら下がることで自らの位置づけと生き残りを図るのが彼らの生きがいであった。彼らの目は下には向かず、作り上げた中味の無い天皇の権威を利用して支配し続けた。究極の無責任を内に秘めていた。

空疎であってもそれに仕えるために、自然に建て前を重んじ本音を押し殺した人間味の無い堅苦しい生き方となるのはやむを得なかった。

5、これら3つの混合が生んだ原日本精神。

結論を要約すると、日本は、大多数を占めた農民は第1の縄文の出自であり、社会の中核の指導者層は

第2の江南弥生人の出自、政治支配をし続けた上層の貴族武士階層は第3の天孫族を出自として、それぞれ長い歴史を階層の逆転などなく安定して継続した。それぞれの階層はその思想的特徴を維持し続けた。即ち上層の貴族武士階層は、統一国家の維持という役割重視型の思想、中層は農村指導者や商工階層として組織重視の勤勉重視、下層は農民で従順で政治から距離を置き芸能や祭り好きというそれぞれの気質を持って相互補完し合ってきたのである。日本思想というのは、全体を統一したものはなく、万華鏡のごとく、どこに焦点を当てるかで見え方は変わるものである。

ひっくり返して日本人の源思想の特徴として語られる次のようなことは、万華鏡のどれかに焦点をあてれば光るものであり、逆にすべてに当てはまるものではないのだ。

- 1、外部からもたらされた新しいものは歓迎し受け入れるが、まずは表面的で、深層はしぶとく残る。
- 2、祭り好きで奔放な発想に富み、ノーベル賞級の成果を上げることもある。
- 3、組織として働くことが性に合っていて、かつ勤勉である。
- 4、建て前を重んじ、本音は控える。政治的責任も深刻に受け止めず、特に下に向かっては無責任となる。

- 5、絶対神が無いので、世俗的現世主義である。
- 6、人間と自然との垣根が低い。

このような万華鏡的原初の精神構造を内に持ちつつ、やまと国は統一国家として世界に乗り出した。その後の2000年の間、奈良時代の仏教伝来、戦国時代のキリスト教伝来、江戸時代の儒教とり入れ、明治維新の西洋科学技術思想の受け入れ、そして昭和の敗戦という5つの外からの試練に次々に遭遇していくが、この原日本精神はその特徴をもって、世界からの新思想の流入に日本流の対処をし鍛えられていったのである。次にその試練の様相を詳しく見ていこう。

6、奈良時代から近代までの日本の精神の試練

6.1 仏教伝来とその日本化

まず奈良時代 仏教が渡来した。異質の宗教の到来であったから、衝撃的であり、拒絶反応があったと予想されるが、実際はすんなりと受容された。縄文族は祭りを通じて太陽や自然宗教を持っていたが、この層にとつては、仏教伝来はよそごとであった。天孫族 弥生族が当事者であったが、彼らの神話は神道という宗教にまで高まっていなかったもので、いわば白紙の中に仏教は伝来したことになり、抵抗はなく歓迎されつつ受容された。



しかしその受容は日本化を伴うものであった。

元来釈迦の教えは人間の心の救いを目指していたが、仏教を受け入れた奈良時代、それは国家鎮護の宗教として天皇の治世の後ろ盾とされた。やがて土着信仰のシャーマニズムと融合して病氣治癒、災害除去祈願の宗教となり、自然崇拜の風習とも融合して山岳仏教にもなった。それらはいずれも釈迦の仏教とは無縁である。

武家社会になり、騒乱とともに死と隣り合わせの社会ともなり、来世に希望を与える浄土信仰が力を得るが、江戸時代の総檀家制度はキリシタン弾圧の道具となり、さらに釈迦の仏教とは離れて、日本独自の仏教となっていった。

明治大正時代に始めて西欧の仏教学者を通じて、釈迦の本来の原始仏教を伝えられるまで、驚くべきことに日本の仏教は釈迦の教えは何であつたかを知らずにきたのだ。

6.2 キリスト教伝来と宗教への危険視

十六世紀欧州の大航海時代の流れに沿って日本にキリスト教が伝来した。大名たちはキリスト教布教者から世界観を教えられるとともに、貿易の経済的利益を求めてキリスト教に帰依したものも多かった。彼らは禁教令が出るとほとんどは棄教した。しかし洗礼を受けた縄文由来の農民たちは来世を約束するキリ

スト教にいのちを捧げ、弾圧されても棄教しなかった。来世を約束した点では浄土宗も同じであるが、僧たちは社会的地位が高かったので布教に熱心ではなかったが、キリスト教宣教者は貧しいまま裸足で宣教していたし、受洗を受けたものはこれでパラíso（天国）に入れるとの実感を持った。五十年のうちに日本人口の1%がキリシタンになったのである。この農民キリシタンは悲惨な弾圧に身を挺して闘って死んでいったのである。極めて希少な部落に隠れキリシタンとして江戸時代を耐え生き延びたものがいて後に世界を驚かせた。

宗教的に抵抗したのは日本的仏教を奉じていた僧侶たちである。また天皇の上に神の存在をおくキリスト教を日本の支配者たちは許さなかった。禁教令を発し宣教師を追放した。一部隠れキリシタンは生き延びたが、実質的に日本は世界的宗教であるキリスト教を日本では廃絶したという実績を持ったのである。日本精神に与えた影響は、日本では宗教より世俗権力が上位だと認識したことであろう。それは世界的にユニークな現象なのだ

6-3. 儒教と江戸哲学



文明の先進国でありつづけた中国の中核思想である儒教と老壮思想は、上層支配階層に影響を与え続けた。それらも日本化した形に変化して定着した。儒教に関しては、日本が天皇を絶対化する都合上、儒教がもつ世界観と宗教性は受け入れず、音楽も取り入れず、単に上に立つものの道德律としてうけいれられ、武士道に結実した。老壮思想もその世界観は受け入れず、理屈抜きの情感的な受け入れにとどまった。たとえば出家へのあこがれや、わびさびの文化として発展した。受け入れた階層はむろん天孫族から由来する武士階級である。

特に儒学が江戸時代幕府の公認学とされたときは、林羅山のように宋学・朱子学をまっとうに受け入れたのである。ただし朱子学を中心概念である太極とは実は天之御仲命であると記紀神話に結びつける改革を加えた。このような読み替え解釈が江戸時代の連綿と続く儒家たちの活動だったのだ。その特徴は幕府の御用学である範囲を超えることなく、理念を避け、幕藩体制保全の理論となったことだ。例えば荻生徂徠のように藩主向けに君主なる道の学に仕立てた。

中世期の主従関係は主君と郎党間の契約関係で何度も主君を変えることをよしとしていたのだが、江戸時代の安定した幕藩体制にはいり、それを維持するイデオロギーが要求された。そこで中国風の儒教的な倫理（「仁義」「忠孝」など）に加えて、新たに「主君は絶対的で命を懸けて尽くすもの」、が主な道德として加えられた。「葉隠」にある「武士道と云ふは、死ぬ事と見付けたり」なる殺伐な気風となった。主命による切腹や敵討ちといった武士の間のいのちの軽い処分は日常的

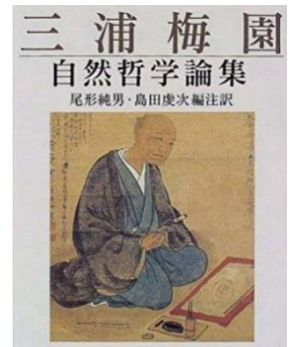
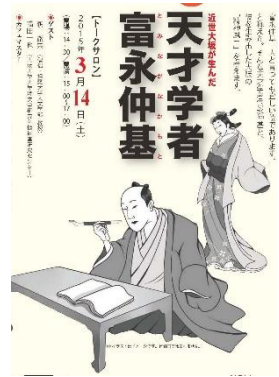
な覚悟とされたが、武士は町民に向かつては「切り捨て御免」の特権を持っているとの無残な考えが生まれた。日本では草薙剣以来、刀剣に対するフェティズムがあるが、「刀剣が血を呼ぶ」ままに人が従う「大菩薩峠」の机龍之介のような冷酷無残な辻斬魔が実在横行した時代となった。

いのちを賭して主君を守ることを最高の道徳としたという根幹を隠して「武士道」を美しく表現せざるを得なかったのが、世界に目を向けたクリスチャン新渡戸稲造であった。いまでも武士道をそのように見る人は存在する。

しかし命を懸けて主を守る思想は、さらに明治以降士分を越えて国民全体に拡大され、二十世紀の戦争時代明治大正昭和の時代を導いたイデオロギーとなり、ついに「一億玉砕」の敗戦でようやくやむという国民の代表的思想となってしまった。

このように江戸時代三百年の間の、武家の儒教文化は死の文化を生んだが、一方でこの時代初めて華やかな町民文化が花開いた。町民とは中には少数の没落武家浪人の出もいたが、中心は裕福な農家出身の弥生族と、さらに上昇志望の縄文族である農民からの成り上がりもいたのである。彼らのなかに儒学者とな





ったものもいた。大阪の町民出の富永仲基、東北出の安藤昌益、国東半島の農民三浦梅園などがそれぞれの儒学を展開した。さらに大阪商人の石田梅岩は禅の悟りを実学に取り入れたユニークな心学を作った多くの弟子を得た。彼らの儒学はこれまでの粹を出て儒佛批判、身分制批判まで含んでいたのである。

一方で三重の本居宣長は、祖先は高貴な武家との誇りを持っていたので、おそらく天孫族の子孫だとみられるが、古事記伝を和文で書き表した、先祖のやり残した大和心の哲学を開拓した。

このように儒学という言葉は公認の学会の場合が江戸時代にうまれて、天孫族・弥生族・縄文族の3階級の混在の中で様々な日本哲学を生みだした。それは世界に通用するレベルではなかったかもしれないが、少なくとも我が国での「学問という世界」を作り出したのである。そして新井白石を端緒とした蘭学につながって世界への窓を開



いていった。

このように江戸の町民文化は、学問芸能分野で、はじめて三階級の相互浸透が生み出したのである。天孫族弥生族の連合支配 縄文族の下支えという三位一体の構造は基本的には変わらず、ただその間に相互浸透がうまれたため、あるいは強固な一体化が進んだともいえよう。江戸時代の寺子屋に始まる庶民教育の普及がそれを促した。

6. | 4. 明治維新と西欧文明の受け入れ

明治維新は西欧列強の脅威を目の前にした日本の支配階級の再編成であり、支配階層での上下入れ替えなどは全く起きなかった。名目的には絶対的天皇制への復帰という形はとっているが、天皇支配が復活したわけではない。より近代的な形態での利用に変わっただけだ。また士分の解体はあったが、国民皆兵とするための手段で、士分の最下層が解体されただけで、国家支配の実権は、支配階層内のたらいまわしで維持され逆に強化された。形式上の天皇制は見かけ上すべての権力集中と、上御一人に形だけを背負わせた総無責任という最悪の形となった。

統制国家体制での効率的な国家経済の導入育成ができたので、西欧列強への実力接近は素早く行われた。ここでも日本原思想は有効であった。支配階層の統率、実指導層の組織的实力、従順な国民性の三位一体

が有効に作用したのである。しかしその欠陥も見事に発揮された。支配階層の独善と究極の無責任は世界大戦に導き、国家を焦土にまでしてしまった。

6.5. 敗戦と戦後

敗戦と占領時代に日本の軍国主義は解体され、財閥解体 農地解放 爵位廃止などの変化はあったが、国体護持を最後までこだわった支配体制はしぶとく生き延びた。占領した米国もそれを支持した。

頂点の天皇制は国民統合の象徴とされ、本質は数百年前にもどって維持された。ほぼ維持された三位一体社会が、その関係のまま再び稼働し始めると、変わり身も早かった、戦後は経済だとなれば、得意の組織人ぶりを発揮して、瞬く間にジャパンアズNO.1といわれるまでになった。

平和憲法こそ縄文精神的であり、身に合っているので戦後七十年保持できた。新しいものが好き、どんな取り入れる。日本人にノーベル賞やイグノーベル賞受賞者が多いのは縄文精神だと指摘する人もいる。欠点もそのままに残り、それが顕著にあらわれているのがアジア近隣諸国との戦争責任の処理である。国内的な無責任処理はうやむやに許容されたが、朝鮮半島 中国 アジア諸国に対する戦争責任無視は国際的批判の目は厳しい。ドイツとは対照的である。

天皇制が変身して生き残ったため、日本政治の遺伝的欠陥も未解決のままである。人間としての天皇は、

基本的人権もない存在のまま「国民統合の象徴」とは何かを天皇本人が模索し表現する以外ない。天皇個人の資質と努力が問われる危い存在だ。その一方では、象徴天皇制を実質的に絶対化することによって、無責任政治をカバーしてくれるバックボーンとして利用しようとする反動的努力は、今も為政者の大半が所属する復古的団体で隠すことなく継続している。特に今回の退位と即位の騒動で日本中が新たな洗脳作用を受けている。日本内部からの批判の目は薄弱だ。

7、地球時代のヒューマニズム思想から見る日本精神の弱点

今後の課題と展望

5つの試練を経てもなお日本の三位一体の万華鏡体質は継続している。上部支配構造の親方追従と下への無責任構造、中間を支える層の経済最優先思想、道義心より利益優先の世俗的現世主義。下部層の現状追認・無反抗の従順が続いている。

この日本の体質は内側からは馴れてしまって奇妙にも思わないが、世界の目から見れば、尊敬されないものだ。いわば駄々っ子日本なのだ。

地球に危機が迫りつつある現代、それなりに存在感のある日本が、地球的問題解決に役立つ存在である

ためには、2000年続いた本質を自らの力で脱皮しなければならないであろう。実はそれは日本のためだけでなく地球規模で重要なのだ。

直面している地球的規模の危機とは何だろうか。

生存を脅かしつつある地球温暖化と、グローバルな格差拡大による貧困化である。いずれも人間集団のエゴが、ITと金の力が相乗して、指数関数的に拡大作用しているから起きているのである。今はそれを止める手段を人間は持っていない。なぜなら人間が、まだエゴで生きる動物的側面を捨てることができないでいるためだ。

人間が動物的エゴを克服して「地球時代のヒューマニズム」にたつことできるのは、ベルグソンの言う人間の新たな進化を成し遂げたときにできることであり、容易なことではない。しかし、人間が現世だけの存在ではないとの確信は、かつては空想的とされたことが、今多くに人々に理解支持されるようになっておりつつあり、また逆にそのような新人類への脱皮しか人間の存続が出来ないような状況になったのだ。

そのように考えると反エゴ、反金権、反核などの「地球時代のヒューマニズム」への脱皮が必要なのは日本だけではない人類的課題だと知れる。しかしこれまで分析してきたように日本社会がもつ欠陥は、最も世俗的な社会という点ではつきりしており、その転換効果がおおきいし、対応するべき人間の教育レベルが高いから解決に近づきやすい可能性がある。いや先行すべき義務があると考えたい。

「地球時代のヒューマニズム思想」から見えてくる日本精神の弱点は何だろうか。

第1に、多くの欠陥が集約的に現れている日本政治であろう。上への絶対服従と周りと下への無責任は、今天皇の替わりに米国が置き換わっているだけである。沖縄民衆を無視し米国の戦争戦略に追従する。米国が抱える矛盾を小国である我が国で引き受け再生産すれば破綻する。

天孫族政治が過去破綻したのは敗戦の時であった。その時政権維持はきわどかったが、当時の冷戦下で米国の世界支配の野望に加担して生き延びたのである。

天孫族が巧みな天皇制シンボルを掲げて統一国家を作り日本列島を護ったことは、弥生時代から十九世紀の帝国主義世界の時代までは確かに意味のあることであった。（むしろそれが逆作用で日本列島を惨禍に導いたのではあるが）

しかし人類はその段階をようやく脱皮した。コストリカや本来の敗戦日本のように無軍備こそ国際社会で安全に生き延びる環境が二十世紀の後半から生まれているのである。そのような環境下では、天皇制賛美のナショナリズムで統一国家を維持しようとするのは時代錯誤で無用となっている。それに酔いしれる日本人だけでは、この美しい日本列島の風土も社会もはや維持できなくなっており、否応なしに多民族共生の場とならざるを得ない。そのような新たな日本列島の育成のためには、いまや有害である。

おそらくいまの三体制の政治破たんは、今後国際関係の中で起きる。その時、物言わぬ服従の縄文族が

二〇〇〇年来の沈黙をやぶって、初めて政治を任せてきた天孫族への反乱となり、せめて弥生族への政治のバトンタッチが生まれる時代になるだろう。

それはITという道具が出そろった現代にして可能となり、破たんしに耐えきれなくなった縄文弥生族が自覚した時に起きる。

第2.に利益優先の世俗・現世主義という限界は、老人国日本の内部から変化を求められるだろう。日本が直面している少子高齢化社会の中の老人の存在のむつかしさに、このままの原日本精神では解決の道が見えない。脱皮が必要なのである。

経済万能の世俗主義の尺度からすれば、老人は経済効率の悪い脱落者として評価されなくなった。老人は周りに面倒を掛けるだけとみられ、また高齢者自身もそのように自らを見るようになった。自堕落になるほかないのである。問題の解決その対極にある。

老人が人生の達人として尊敬される存在になってこそ、望むべき老人問題の解決がみえてくるのだ。それが実践されている例も残っている。それは日本の祭りである。縄文の伝統を受けている巨大な祭りは、たとえば東北のねぶたであり、四国のよさこい、九州のどんたくなど各地に数多くのこっている。これらの巨大祭りは今年が終わればすぐ来年の準備を始める、一年を祭りを軸として回るそうだ。そこでは唯一尊敬される老人の出番がある。しかしそれは思想化されないし一般化されない限界がある。

人間は老いていくにしたがって身体は衰えるが、精神は衰えることなく「成熟」していかなければなら

ないし、それが可能なのが人間なのだ。なぜなら成熟した精神は身体から、やがて独立して飛翔していくようにできている。「成熟」とは何か、この特質を認識して、死に近づいて行くまでその成熟につとめ、またそれを楽しく覚悟ができることであり、新たな生への転機を待ち望めるようになることだ。

死の先の世界に気づくことによって、若い世代が先に転機をもたらし始めているのがアニメなどの文芸だ。二一世紀になって前の世紀では見ることでできない傾向が出始めている。それは死後の世界との交流がひんばんに題材に取り込み始まったことだ。前世紀はこのテーマは科学的でないとして一蹴され、むしろタブーとされていた。二〇世紀の後半、科学技術信仰が力を失った。原子力技術が人類の救世主から悪魔に転落した、本流の科学も「超ひも理論」で物質の究極に迫ったと見えた瞬間、それは実はわずか4%の物質しか相手にしていなくて96%は科学が扱えない物質であると分かった。

科学的でないという批判は力を失った。霊界との交流物語は新しい重要なテーマとして一挙に噴出したのである。「原日本精神」の「超越を拒絶する世俗現世主義」は、ここからその一角が崩れて始めている。

いつの日か科学は、この宇宙の最大構成要素であるダークマター・ダークエネルギーの科学が生まれる時代が必ず到来する。その時今は解明できないでいる人間の精神の存在が解明される。なぜなら人間の精神は、ダークマター・ダークエネルギーによって構成されていると私は推定しているからだ。ベルグソンは、人間の精神こそすべての生命進化の頂点として人間に内在してきた存在であり、肉体の「死」と共に消滅することのない存在であると考えた。「死」が新たな生への「転換点」「精神体の5次元世界への飛翔」

であることを、解き明かしてくれる時が来るであろう。

その時こそ、超絶拒否の世俗現世主義は消滅し、日本の老人の心に成熟への努力の決意は訪れ、老人への尊敬を認める社会へ変身する。それは老人ばかりでなく全世代にとっても生き甲斐の高度化をもたらすことであろう。

日本の脱皮は、その課題があらさまに見えているだけに解決は早い可能性があり、もし日本が根本的解決への道を歩み始め得たとすれば、それは今まで迷惑ばかりかけてきたダダっ子 日本が初めてできる人類世界への貢献となるのだ。

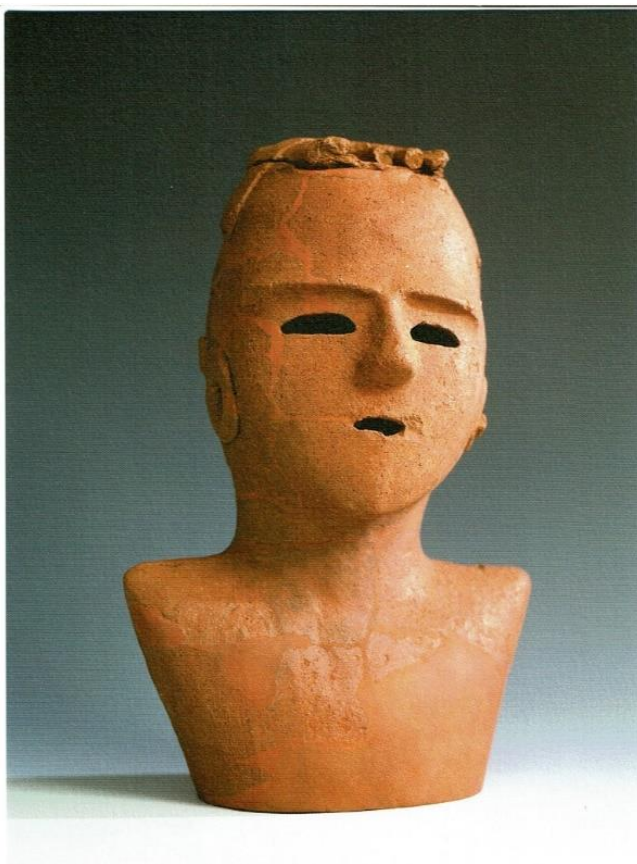
参考文献

- 古代人の精神世界 湯浅泰雄 ミネルヴァ書房 1980/11/20
- 日本の思想 丸山真男 岩波新書 1961/11/20
- 武士の日本史 高橋昌明 岩波新書 2018/5/22
- 日本文学史序説 上下 加藤周一 筑摩書房 1980-4-10
- いま宗教に向きあうー現代日本の宗教事情国内編Ⅰ堀江宗正編 岩波書店 2018-9-26
- 階級社会日本 橋本健二 青木書店 2001-5-23

〈完〉

湘南記 日本原記 7

埴輪のほほえみ



(千葉県芝山町はにわ博物館の展示品)

2022年3月16日ズーム三水会発表

はじめに

1 古墳との遭遇

小学生5年の昭和20年春、空襲被害を避けるため、大阪市内から大阪南の田舎、古市誉田の農家に一家をあげて疎開した。通った古市国民学校は、今白鳥小学校と名前が変わっているが、近くにヤマトタケルの白鳥陵があり、そこからその名をとっている、また家の裏は大きな応神天皇陵古墳があった。所謂河内古墳群の真ただ中であつた。しかしそれらはうっそうとして不気味な場所というだけであつた。

2020年7月1日コロナ禍の中のGOTOキャンペーンにそそのかされて、湯檜曾に連泊しながら群馬の古墳群を訪ねたときの驚きはただならぬものがあつた。それで続けるように8月には下総の国にある古墳群はにわをみる旅をおこなつた。成田空港近くの芝山町はにわ博物館で見た「埴輪のほほえみ」が問いかけるものは、そのままにはしておけない深い意味を持ったものであつた。これはその探索のリポートである。

2 日本原記の完成

2008年に出雲大社を訪れたときの好奇心から日本原記の旅は始まった。数多くの縄文遺跡を、北は北海道から南は八丈島まで訪ねた。最新の遺伝子調査による学術的知見はバラバラだった観察記録を一本の

筋を与えてくれ、2019年には日本列島2万年の歴史が、いかに現在の我々の存在につながっているかを「日本の精神風土の形成」としてまとめることができた。さらに翌年には能楽を通じて縄文から現代の芸能までも見通せた。正統的史学から見れば、独断的で偏見史観であるとは思うが、そのユニークなところを評価してくれた亡き畏友村尾行一教授から野口史学と名付けられ恐縮した。

この埴輪論はこれまでの野口史学が縄文・弥生で終わっていたのを、あと3世紀分延長したものある。即ち弥生時代から古墳時代までである。日本列島で起きたこの激動の時代を、日本は世界史的に比較して見て如何に幸運であったかを「埴輪」が語っていると考えた。私の恣意的な史論の締めくくりが、幸福論で終えることができたのは幸せである。

目次

1,	縄文から弥生時から古墳時代への歴史的大変換	285
2,	埴輪のほほえみに出会う旅	88
3,	ここに埋葬された王はどんな人たちか 指導者の威力に感謝	94
4,	ストーンヘンジの悲劇との比較	99
5,	埴輪のほほえみは消えていった。	00
6,	結び	03

九州博物館メルマガ第67回に、私の題名と同じ「埴輪のほほえみ」と題する一文を見つけた。河野一隆氏の文である。

「アルカイックスマイル」と言うのはギリシャ彫刻に対する形容かと思ったら、日本にもあった。今から1千年以上前に作られた粘土の造形、人物埴輪である。と言っても、日本の埴輪の場合は、目や口をへうでアンズ形に切り抜くことで、結果的に「スマイル」になるのだが、この写真に写っている埴輪はどうだろう。口を凹形に切り抜いているから、まさに「大爆笑」に近い。こんな埴輪を作った人たちは、さぞかし毎日が幸せだったのだろう。

この埴輪、宮崎県の百足塚古墳という、世紀の前方後円墳から出土したもので、文化交流展室「神話のふるさと 日向の考古学」のコーナーで公開中である。ぜひ会いに来て、幸せのおすそ分けにあやかりたい。」



1. 縄文・弥生時代から古墳時代への歴史的変換

野口史論として、これまでに書き留めた「日本原記」を簡単に要約する。

4万年前大陸からはみ出して生まれた日本列島弧は、出来あがった頃は、樺太と北海道、朝鮮半島と北九州で大陸と地続きであった。そこにD2の遺伝子を持った人類が朝鮮半島から、C3遺伝子の人類が樺太経由で北海道に入ってきた。日本列島はすべて地続きであった。この二つの人類は融合し縄文族となった。

その後日本列島は大陸から切り離された。1万以上この地は縄文族で純粹培養された。幸い海の幸・山の幸で食料は豊富であったので、争いは無く交流し合い、縄文語が生まれた。太陽と自然を崇める祭りを行い、土器の芸術で飾り 仮面をつけた祝祭芸能を花開かせた。

1万年前、気候変化で北方民族の南下で圧迫された中国江南の農耕文化民が逃亡先の一つとして日本列島に來たのだ。彼らの遺伝子はO2bである。縄文人は稲作と鉄器の先進文化もった彼らを歓迎し、学び、崇めた。弥生時代である。その弥生部族の中に出雲に拠点を置いた出雲族は力をつけ、奈良まで進出した。また北九州にも多数の小国を開き、その最有力国は大分県の宇佐を中心にした卑弥呼を女王に持つ邪馬台国であった。

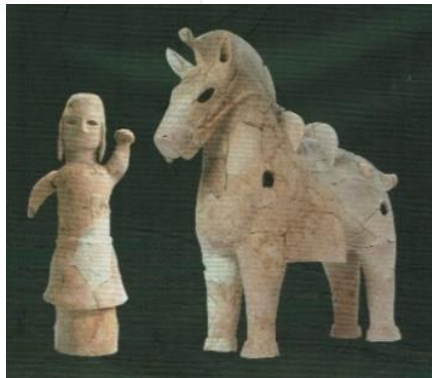
そして3千年前、朝鮮半島を経由して今度は北方騎馬民族が渡來した。おそらく燕の国の亡命王の流れ

であった。彼らは周王朝の思想の元、天命をもって建国治国の夢をもっていた、そしてこの列島にその夢を果たすため渡来した。遣伝子はO3であり天孫族と名付けよう。彼らは馬と鉄を持ち、国家経営の技術と思想を持っていた。それらを持っていなかった弥生族、縄文族は、この天孫族を素直に受け入れた。しかし彼らが戦勝国として更なる制覇を目指して乗り込んだのではなく、負け組の亡命政権であったのが幸いであった。天孫族はその支配の実現のために、武力は使わず、現地の人民と融和しなければならなかった。自分らの言語を捨て縄文語を受入れ学んだ。逆にそれを漢字で表現することで初めて記録できるようにし、文化を豊かにした。後の世に万葉集を生み出す基礎をつくった。そして武力でなく威力と連携策で支配を進め、紆余曲折はあったが比較的短期間で制覇を進め、ついに19世紀の末、檜原の宮でヤマトの国の建国を宣言したのである。

しかしそこからその政権を列島全土に拡大し認めさせていく仕事があった。既に天孫族は単独ではなく、弥生系の豪族たちと連携しての連合政権をつくっていた。農業指導者であった弥生系の豪族は大和政権と連携しつつ、それから3百年5百年かかって、日本列島を徐々に農業国家に仕上げていった。水稻栽培に至る道は強力な指導力がなければできない。大和政権との結びつきはその指導に威力を付け加えた。人民層をなしている縄文族は、日本列島が温暖で食料には恵まれていたとはいえ、狩猟採取の生活よりも安定して豊かになったのである。彼らはその指導者ぶりを歓迎し、支配者をあがめた。民衆の歓迎ぶりを象徴するモニュメントが巨大古墳であり、埴輪なのである。その時代を古墳時代と呼ぶのだ。

埴輪を生んだ技能者群は縄文人たちだ。彼らは縄文1万年の間に優れた芸術品を残した。火炎土器や縄文土偶だ。彼らの技量が埴輪にも結実した。発掘された土偶の表情と見比べて、その人間描写の変化を見てみよう。

上3つの縄文土偶は無表情か、何か思い詰めている。下3つの埴輪には解放感がある。



2, 埴輪のほほえみに出会う旅

2・1 群馬保渡田古墳群を訪ねる旅

高崎市にある保渡田古墳群とかみつけの里博物館をみた。

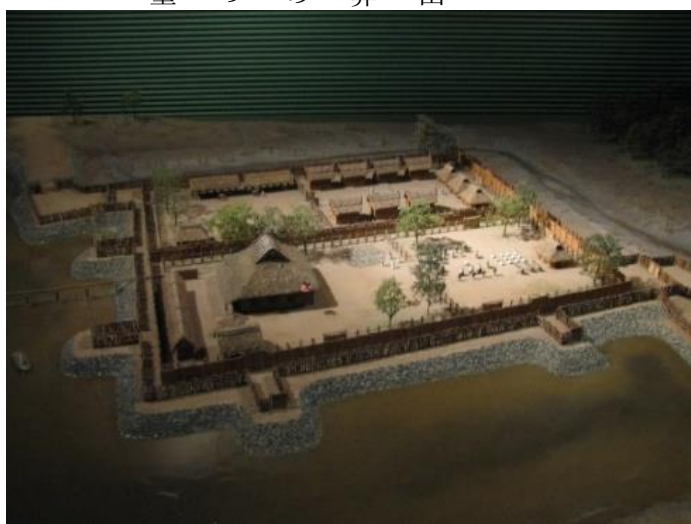
5世紀、ここには有力な地方王権が栄えた世界があった。広大な水田が開かれ、集落は豊かであった。王は王権のシンボルとして自分が葬られる丘陵墓を作った。設計はヤマトから土師氏が派遣された。この建設には当時の技術の粋と人力が結集された。巨大な前方後円墳の

玄室には何もないが、墓の外延部には大量の埴輪人形が配置されていた。

それが突然の榛名山の噴火火砕流ですべてのみこまれて、ポンペイの日本版となった。

それが幸いしてすべてがそのままの配列で発掘されたのである。

博物館の前には巨大な八幡塚古墳が再現されていた。登ると頂上から博物館黄一帯が見張らせる。後円部の頂上には石棺のある墓穴が再現されている





古墳の頂上から博物館を見下ろす。前方後円墳の外周部に埴輪の一群がいた



指揮者がいる演奏団！ 博物館内にも多種の埴輪群があった。



2・2 芝山町 埴輪博物館



成田ビューホテルに泊まり、成田空港の横道路を縦断すると芝山町だ。町に入るとあちこちで埴輪が迎える。芝山はにわ道と名付けられている。馬を引く人と、背の高い山高帽にほほ髭の人物は異様で目を引く。町のはずれに芝山町はにわ博物館がある。

玄関にも、ひとときわ目立つこの人物像が立っている。ユダヤ人埴輪と称される埴輪だ。このユダヤ人埴輪が特徴的なのは、

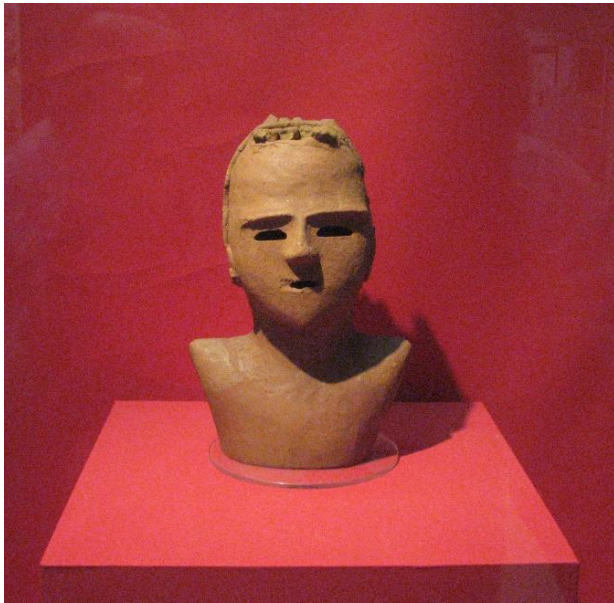
まずその相貌が精緻にユダヤ人の特徴を示していることであり、ほかの埴輪が単純化されシンプルなのだが、これは極めて入念な細かい細工を施されていることだ。この点は埴輪の存在意義を考える点でもヒントを与えているので後で詳しく検討する。

この博物館に入室すると古墳の由縁が揭示されていた。

古代において死は身近であった、縄文時代は集落の中に埋葬され、弥生時



代になると集落の外に墓域を作った。古代人は、死は肉体と靈魂が分離することと考えていた、人が死ぬと残されたものは必死に靈魂を肉体に呼び戻そうと祈り、儀式を行った。もがりである。特に首長・リーダーの靈は特別でした。受け継がれないと共同体の存続が危ぶくなると考え、特別な行事が行われた。土を盛り上げ形見の品々をささげた。



それは悲しみであり魂鎮めであるがまた遊びでもあった。新たな指導者のに受け継がれて生活が続く喜びでもあったのだ。古代人の思いへの共感と感動 時代を越えた感性を持ちたい。この若い女性の埴輪のまなざしや語り掛けそうな口元に何を感じますか？

とあった。私もこの埴輪女性のほほえみに感銘を覚えた。これに代表されるようにこの博物館の埴輪たちすべてが穏やかな表情を持っている。先に述べたユダヤ人埴輪を例外として、すべて一刀彫のようなシンプルな形相の中に、穏やかな安心感のある顔をしているのである。縄文土偶に見られる緊張した恐ろ



芝山古墳群に出るユダヤ人埴輪は何を示すのだろうか。2019年に出版された考古学者田中英道の「発見！ユダヤ人埴輪の謎を解く」によれば、この姿は、まさしくディアスポラで世界に拡散したユダヤ人の姿である。先にも述べように、ほかの人形埴輪に比べて、造形が細かく、現在も続くユダヤ人の特徴を描き出している。

彼らは、ウイグルカザフスタン付近にあった弓月国

し気な顔とはおよそ正反対の、のんきな顔、笑っている顔なのだ。

この町の人たちは埴輪をまねて毎年十一月には、はにわ祭りをする。その衣装と扮装が展示されている。

博物館を出ると前の公園にもユダヤ人と馬の埴輪群があった。





から中国を経て我が国に招聘されたユダヤ人であった。医術や財政などの術にたけていた。秦氏としてその名を残している。後世になるが聖徳太子の後見人として、また能楽の支援者としてその名を残した秦河勝もその一人だ。彼は秦の始皇帝の末裔と称したそうだ。ネストリウス派のキリスト教景教を中国にもたらしたのも彼らだ。

芝山古墳のユダヤ人埴輪は、後世に秦氏として大和国の貴族として和風に同化する前の、渡来直後の純粹のユダヤ人としての姿のまま、この地の指導者として存在したという貴重な証言なのだ。彼らはその出自からして決して権力者ではなかった。

3、ここに埋葬された王はどんな人たちか。

古墳時代は3世紀から6世紀をさし、大和王朝政権が王権の形を整えながら、東に支配力を及ぼしていく時代である。支配者としての権威を示すために巨大な前方後円墳を作った。そして大和王朝に仕える地方王族にもこの形の墳墓をつくらせた。この時代に各地に前方後円墳がつくられるのである。王たちの宝物である刀剣や飾り馬具などが埋葬室に残されることと、

供え物を載せる円筒埴輪が並べられることまでは、全国各地の古墳に共通しているが、人型埴輪は分布は一樣でなく主として東北に偏っている。

そこに注目して王権の支配の在り方に差をみいだせるのである。

まず前節に述べた保渡田古墳群（かみつけの里博物館）から見ていこう。

ここは1500年前、榛名山は2度の大噴火を起こした地である。「怒る峰」の記憶は今もこの地の地名イカホ（伊香保）の名前に刻まれている。榛名山の噴火は激しい火砕流と土石流となり、麓の村を一気に埋没させた。イタリアのヴェスビオ山噴火とポンペイの悲劇がここにもあったのである。榛名山噴火では幅3km長さ5kmが埋没 深さ4mの地下に沈んだ。それが20世紀になって高崎市三ツ寺町の上越新幹線工事で初めて発見された。始めに発見されたのはこの村の王の館跡であった。それからこの地全体の遺跡発掘作業が進められ、村とその広大な耕作地、さらに壮大な王の古墳群が発掘されたのである。

ここに葬られた王は、博物館の解説書によれば、この地の有力豪族で、後の上毛野氏の祖であろうとしている。さらにその祖は崇神天皇で、その子豊城入彦を東国支配に派遣したと日本書紀の記載を紹介している。つまりこの豪族は天孫族の子孫とみているのだ。崇神天皇は神武天皇ほど有名ではないが、歴史的研究によれば、彼こそは実在した初代の天皇ではないかとみられている。つまり神武から崇神までの九代の天皇の名は歴史を引き延ばすために神話的に創作された人物とみられるのである。いずれにせよ天皇

の名は後世の贈り名だから、神話の神武天皇は、本当は崇神であるかもしれない。とすれば、彼は中国の北方王朝である周の一氏族である燕の王朝が秦に滅ぼされて、その亡命政権が朝鮮半島を経由して倭国に苦勞して入国して、奈良までその支配を打ち立てた人物なのかもしれない。彼らは天命の思想を持ち、自らの支配を天命により受けたものと信じて、倭の国に新国家の建設を夢見て倭国に渡ってきたのである。先に支配していた江南の弥生族豪族たちを、鉄と馬と統一力の権威で懷柔し、統一国家倭国を三世紀に樹立した。神武とは実はこの崇神天皇のことだった可能性が高い。彼はその統一の仕事の続きとして、自分の子孫を東北に向かって派遣した。

彼らの支配樹立のために武力は必要なかった。権威の象徴である鉄器と馬を持込み、我らこそ統治の主であると宣言すればそれでよかった。周王朝から受け継いだ統治の術にはたけていた。巨大古墳の建設はその権威の象徴であり、権威を知らしめる手段でもあった。ヤマトに始まり各地に規格を決めた古墳をつくらせた。

天孫族はその権威力でもって、各地方にバラバラであった縄文の民や、米つくりの方法を教えて小集団を先に作っていた弥生族指導者を味方につけて、一挙に大規模な灌漑と田づくりを指導した。

当時日本列島は、温暖な気候で、深い森林におおわれていて、縄文人はそこに狩猟採取の場を見出していた。しかし森林地帯は農耕には適さない。したがって拠点としては深い森林を避け、例えば榛名山の山懷のようになだらかで森林でなく川が流れている平坦な地に民衆を集めた。群馬県の山あいにはそのような

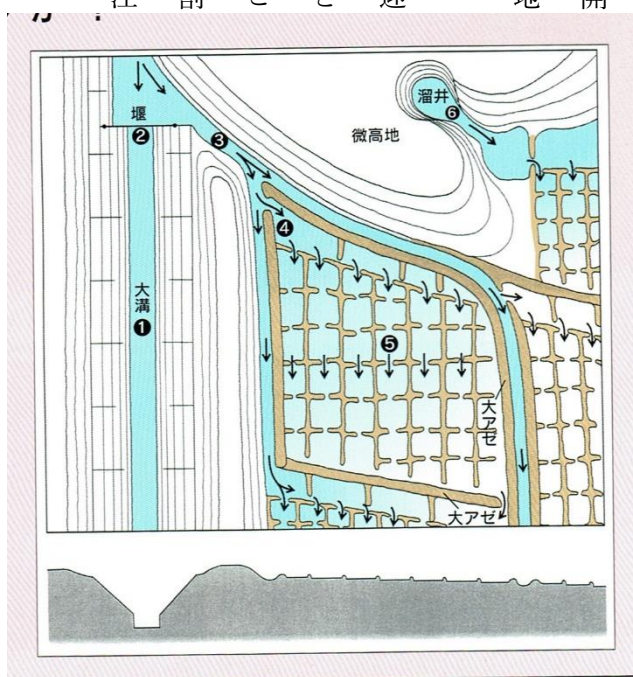
適地は多かった。

このようにして天孫族の統率による大規模な農業地の開拓が進んだのである。この図は榛名山山ろくの噴火埋没地から発掘された当時の田である。

この事業は縄文族の民衆にも、指導者の弥生族にも歓迎された。縄文族には食の安定が保証されたし、弥生族にとってもこれだけの大規模な事業を、権威をもって進めることは無理であり、その事業に高い地位で働く技術者の役割に甘んじることができたので喜んで協力した。天孫族と江南弥生族との連携は後世まで続いていく。

天孫族統率者として臨んだ王は農作業の閑期に民衆に大規模な仕事を与えた、それが前方後円墳の築製である。王の墓として、形の設計図は本拠地大和から受け継いであった。民衆は営々としてよろこんで働いた。作業の報酬は当時得難い鉄の農機具であったり、牛馬であった。

さて4世紀になりヤマト以西の西日本では大和朝廷の政権は確立し、さっそく大和政権は朝鮮半島の紛争



に巻き込まれていく。仲哀天皇―神功皇后の時代九州南部にも朝鮮半島の紛争に便乗して反乱がおきる。磐井の乱である。神功皇后は身重の身を案じながら夫と共にヤマトを離れ、九州から半島にむかう。このようにヤマト本拠地では軍事力が必要ではあったが、東北地方はまだ統一の途上である。ここかみつけの国にはまだ租税の制度も徴兵の制度もまだ導入されていないであろう。余剰農産資源は民衆への配分に当てることができた。為政者は王としての威厳は見せているが、民衆に近い存在で、むしろ人気者であった。民衆はよろこんで、王が生きているうちに作る彼のための陵墓の建設に参加したのだ。供え物として埴輪をつくった。始めは供え物の形円筒埴輪を並べた。そのうち人形埴輪を登場させた。集団としてよろこんでいる自分たちを人形として参加させたのである。埴輪人形の表情はすべて屈託がなく可愛げで、希望の微笑みを見せている。

為政者たる王がこのように民衆から慕われ死後も人形の微笑みを贈られるよう時代は、この300年の奇跡的なことであつた。

それはいろいろの条件がそろっていた。まず天命に従う天孫族は、徳による仁政を、同盟の弥生族にも、また働く民衆の縄文族にもみせる必要があつた。一方弥生族も水稻の技術は持って伝えてはいたが、大規模な灌漑施設設置のためには、それを指導する権威が必要であつたので天孫族の権威付けを歓迎した。

縄文族民衆はこれで不安定だった生活が安定し豊かになったのだ。

この2つの条件がそろった時代の奇跡だったのだ。

芸術的才覚に恵まれていた縄文人たちはこれまで多種多様の縄文土偶を制作してきたが、その表情は真剣であったり異様であったり決して朗らかなものではなかった。その才能を駆使して、天真爛漫の表情を持つ埴輪土偶として開花させたのである。

この奇跡が日本列島に起きたのは、ある意味で、歴史的偶然というしかない。孤立した文明へ別の先進的文明が侵入する場合は日本列島のこのケース以外では大抵悲劇が起きた。その一例として同じ島国の独自文化を花開かせてきたブリトン人社会に大陸からのビーカー人が侵入した時の悲劇を次に見ていきたい。

4、古代ブリトン島の悲劇との比較 ストーンヘンジの謎

古代ブリトン人は石器技術に秀でていた、巨大な石の精緻な加工をする技術を持っていた。ブリテン島に1000個もの巨石遺跡がある、それぞれの地方で競うようにモニュメントを作っていた。島の最北端が発祥の地である。

約5000年前、各地のブリトン人が集まって、太陽の夏至を祝う巨大なストーンヘンジをつくった。そのための集落も作り、数年かけて完成させた。石は平等に入る材料なのでこの社会は基本的に平等社会であった、住まいも石で作った。狩猟採取と農耕を併用していた。

ストーンヘンジが完成したBC3000年から数百年後、突然古代ブリトン人は姿を消した。その頃大陸から鉄文明をもつビーカー人が侵攻してきたのだ、彼らはブリトン人と交わることなく交替してしまった。それは遺伝子研究の結果判明したことである。ビーカー人の遺伝子は今の英国人に残っているが、古代ブリトン人の遺伝子は残っていないのだ。

ビーカー人には免疫がある病原菌が持ち込まれ、それを持たないブリトン人が感染し病死で壊滅したのかもしれない。石器技術で高い文明を築き、誇り高いブリトン人には、侵入者を受け入れず、敵対したので、鉄器文明の武力をもつビーカー人が武力で完全制覇したのかもしれない。

史料が何も残っていないので真相は不明だが、絶滅という悲劇があったことは確かだ。日本における縄文から弥生への平和的移行とは全く違った歴史変化をたどったのだ。

5, 埴輪のほほえみは消えていった。



埴輪のほほえみは消えていった。原因は支配者の権力化である。その先例を示す例が近くにある。埼玉県の名前の起源となる「さきたま古墳群」である。先に見た群馬県の古墳群よりも大きな古墳群である。それは埼玉県のほぼ中央にあって9つの古墳が集中している。

この9つの古墳の中で最初につくられたものは最も北にある稲荷山古墳である。5世紀後半につくられた。ここからは考古学上の大発見である金錯銘鉄剣が発掘された。その金象翫文字からこの墓に葬られた王は大和王朝の雄略天皇に仕えた有力貴族であることがわかった。このことからこのさきたま古墳群に葬られた王たちは群馬や芝山の王たちと比べると、大和朝廷との結び付きが強い支配者たちであった。

ここからは「ほほえみの埴輪」は発見されないのである。埋葬品は当時の渡来飾りや馬具などが主で、人物埴輪はあるが、盾持人埴輪のような強面のものである。



それは大和政権の天皇のなかでも特徴的な継承をした継体天皇陵とされる今城塚古墳でも同じことがいえるのだ。

天皇陵は発掘調査ができないので、はっきりしたことは言えないが、この継体天皇陵は例外的に多くの埴輪が発見された。特に3層建ての巨大宮殿の埴輪や、巫女集団 力士や武人の行列が備えられていたことが確認された。しかしそれらは硬い表情でほほえみはないのだ。

さきたま古墳群と継体天皇陵で見るように、人形埴輪は存在するが、彼らは葬られた王に親愛の情を示してはいないのだ。

さらに6世紀の終わりには前方後円墳などの古墳の築造もなくなり、古墳時代が終焉する。

7世紀大和朝廷が熾烈な内戦の末、天武王朝が日本国を樹立した時、全国に国司制度ができ、防人の徴集と軍事費のための過酷な税金取りが始まる。巨大古墳の築造の意味もなくなり消えていった。支配のための国家制度が全国的に整備されたからである。埴輪も消えた。

そして7世紀には全国支配をおさめ、同族内の反乱を抑えた天武天皇の武力制圧によって、天孫族の国家形成は完成した。

国家が確立したのは大陸の諸国との関係である。朝鮮半島の武力抗争に参加することで、軍事力を持たねばならず、全土からの税金と徴兵が必要となった。それを実現するためにはこれまでの「威力」融和政策でなく、「権力」支配の国家日本への移行が必要であった。

天孫降臨神話の古事記日本書記が作られ、ゆるぎなき正統化が行われた。国家財政の納税徴収のための行政組織が生まれ、軍備のための徴兵防人制度も生まれた。

ここに古墳時代は終わり、「埴輪の微笑み」も消えたのである。

6、結び

埴輪研究の第一人者である若狭徹明治大学教授はその著『埴輪は語る』（ちくま新書 2021/6）の結びにこう書いている。『埴輪は、歴史に関心をもたない市民にも人気である。歴史に関心をもつための入口に、埴輪の「カワイイ」があることを大いに歓迎する。しかし埴輪の笑いは「喜びの笑い」ではない。』と書いておられる。これまで述べてきたように、確かにさきたま古墳や今城塚古墳の埴輪のように無表情でまじめな表情の埴輪も多い。

しかし古墳時代のある時期、ある地域では、その墓地に葬る指導者に対して、限らない感謝をささげた「ほほえみの埴輪」が作られ飾られたことも見てきた。また当時渡来直後で民族の姿そのままであったユダヤ人指導者には、限らない敬意をこめてその姿を埴輪として残した。

それは歴史上で見てほんの一瞬、またローカルな出来事であったかもしれないが、そこに残された人間の喜び 幸福感が、埴輪として結実したことの意味は大きい。それはそこに埋葬された王は、従者に満足な生活を提供し、従者から尊敬と親愛の心をささげられたことを示している。そのような指導者が存在しえた歴史的條件が当時日本列島に生まれたことを示しているのである。そのような歴史を持っていたに日本列島に祝意を言いたい。なぜなら：

人間は未熟でいつも指導者を必要としている。人生の節目によい指導者に巡り合える人は幸いである。心の指導者は偉大な宗教者として1000年に一度現れた、ブツダでありイエスである。社会の組織指導者も又貴重であるが、簡単には現れない。この古墳時代のある地方には、王と特権指導者というその時代ならではの形態ではあったが、良い条件に恵まれてその理想的な指導者が実現したのである。その条件は縄文人弥生人天孫族という平和な組み合わせの中で生まれたことをこの埴輪のほほえみは語っているのである。

日本原記 8

能狂言

その縄文の源流からの軌跡



大山阿夫利神社の火祭り薪能舞台

目次

はじめに

3 0 6

I、能狂言の世界

3 1 0

1、能「高砂」の大筋を紹介しよう

3 1 0

2、「高砂」は協能である。協能の意味とその他の能の種類

3 1 1

3、観客席には権力者が座っていた

3 1 2

4、和歌の世界に通じていなければわからない知的レベル

3 1 2

5、人生の成熟への寿ぎ

3 1 3

6、地理紹介の面白さ

3 1 4

7、間狂言とそこから独立した笑い劇「狂言」

3 1 5

8、能面の話

3 1 8

9、能の音楽

3 2 1

10 能の舞

3 2 7

II、縄文の源流から能までの軌跡

3 2 8

1、縄文の祈舞

3 2 8

2、祈り舞からドラマのある仮面劇へ

3 3 2

3、	やがて弥生時代の農耕の祝い舞	3	3	4
4、	散楽 田楽から 申楽へ	3	3	4
5、	秦河勝の存在	3	2	5
III	能楽と権力者との結びつき	3	3	7
1、	観阿弥から世阿弥そして音阿弥へ	3	3	7
2、	戦国大名のたしなみ	3	3	8
3、	徳川幕府の政策	3	3	8
4、	明治維新の危機と知識層の支援	3	3	9
IV	現代能に活気を点じた非家元系能役者	3	3	9
V	能の魅力 その世界観	3	4	2
参考文献 付	太子町能面	3	4	7

2019年10月2日初稿

2021年8月18日 ZOOM三水会にて発表

はじめに

昨年遺伝子研究にもとづく「縄文弥生からヤマトまで」と、その続編として「日本の精神風土の形成」を報告した。村尾学兄から野口史学を確立したといっていただけだ。今回はその具体的な例として能狂言を取り上げてその補論としたい。

縄文1万年の間、縄文人たちは縄文土器や土偶に代表される芸術作品を生み残した。また縄文人の宗教観は、太陽の復活と、死者の魂が戻る山への畏敬を軸としたものであり、壮大な舞台を作り、芸術感あふれる仮面劇を祈劇として生み出した。

数千年前、弥生時代からは、大陸から流入した支配文明を受け入れた縄文人は、その支配に従順に従いながら彼らをパトロンとし、その庇護によって自らの芸能芸術が花咲くことを追求してきた。能狂言が完成されたのは中世のことであるが、その源流が日本の文化の精華である縄文文化に由来するからこそ、長く日本人に愛され、世界にも類例のない舞台芸術となったのだ。

演劇は人類が文化を持った時から始まっている。ギリシャ悲劇、中国の古代の巫覡（ふげき）の歌舞がある。しかしそれらは原形をとどめて演じられることはない。

これら世界中の古典劇、そしてそこから発展した演劇を見渡してみても、能狂言が際立った特徴をしめしている点が二つある。その第1はその演技形態が世界中で類例が見当たらないほど特異であることであり、第2には、中世に完成した姿のままを、その極めた技を磨きつつ世襲する役者集団を中心に現代に伝えられているという点にある。この二つの特徴それぞれに深い原因がある。

第1の演技形態が独自であるといっても、むしろどの民族演劇も独自のものではあるが、能狂言の特徴は、原始の時代の特徴を基本に保全しながら、高い芸術性を獲得していることにある。その始原は1万年続いた日本の固有文明の縄文時代の演技に発している特質である仮面劇や朗詠にあると思われる。

第2の継続性の特徴は、世阿弥に発する演能者と、政治権力との結びつきによって保護されて育ち、その後500年近く、武家統治者たちが、たとえ交替しても、その保護を継続したという世界に類のない背景があったからである。一方それを支えた家元制度がやがて桎梏となり、明治から戦争時代にかけて衰退の危機に面したが、その家元制を打ち破る動きが、熱意ある市民愛好者の中から生まれ、逆に家元の活性化を刺激し、能狂言は再び活性をよみがえらせてきている。

I 能狂言の世界

まず初めに能狂言の世界を紹介したい。題材として能「高砂」を取り上げ、その内容を分析する中で能狂言の本質に迫っていきたい。

1 能「高砂」の大筋を紹介しよう。

阿蘇の宮の神主 友成は、初めて都に旅行する途中、名所の相生の松を見るべく高砂に立ちよる。そこで白髪のお夫婦が松の落ち葉掃除をしているのに出会う。彼らに高砂の有名な松はどれかを尋ね、また高砂と住之江の松が相生であるといわれている由縁を聞く。彼らは万葉・古今の歌や言葉を引用しながら、この松の高貴なことを解き明かす。そして驚くことに老翁は住之江の松、老嫗は高砂の松の精で、ここに年を経た夫婦として共に暮らしているのだという。遠く海を隔てているのにと問えば、山川万里を隔てていてもここぞ遣いの夫婦の道は遠くないといなされてしまう。そして老翁はこれから住之江に行つて待つているから来なさいと行つてしまう。ここで間狂言（あいきょうげん）になる。狂言方の高砂の浦人が出てくる。友成は彼にここまで聞いた話を確



能「高砂」 浅見慈一
©2012 TESSEN-KAI All Right Reserved.



能「高砂」 浅見慈一
©2012 TESSEN-KAI All Right Reserved.

かめ、浦人からも住之江に行くことを勧められ、船を出してもらって追いかける。

高砂から淡路島、鳴尾の沖をへて瞬く間に住之江に着く。この間の一瞬の舟旅を語る一節が有名で、今も結婚式の祝い唄として謡われるところである。

場面は後半 住吉の宮となる、老翁は後シテとして神々しい住吉明神に姿を変えて登場する。そして友成の見ている前で、莊重に神の舞 万歳楽、千秋楽を舞いこの世を寿ぐ。

2、この高砂は「脇能」である。脇能の意味とその他の能の種類

今でこそ演能会のプログラムは、能一つ、狂言一つが出し物でせいぜい2時間足らずで終わることが多いので、忙しくても気軽に行ける。しかし室町・鎌倉・江戸時

代の正式の演能は「翁」に始まり、初番目を脇能（神能）、2

番目 修羅能 3番目 女能（鬘能）4番目 物狂能 5番目

鬼能と一日かがりで演じられた。

高砂はシテが住吉明神であり、代表的な初番目脇能（神能）である。2番目の修羅能は平家物語からとられた物語が多く敦盛など無念の最期を遂げた武将の救いが語られる、3番目の女能は、美しい能のイメージを形作ったものであるが、羽衣、



井筒、杜若、隅田川など能を知らない人にも名前は聞いたことがあるものが多い。上の写真は杜若である。

4番目の物狂能には、怖ろしい般若面で嫉妬する六条御息所が葵上を責める葵上や小町を亡霊の深草の少将が責める通小町などがある、5番目の切能には超人的な存在が活躍する。紅葉狩、道成寺 狸々などが有名だ。全体として序破急の次第となっている。

3、 観客席には権力者が座っていたことをうかがわせる。

一日がかりの演能の始めである「翁」や、この「高砂」では、この世の繁栄を寿ぎ、その安定をもたらし、た政権への賛辞の言葉が過剰にも思えるほど繰り返される。

例えば、松のめでたさを褒める時も「かかる世に住める民とて豊かなる。君の恵みのありがたき」、また翁が旅立つとき、「かしこき御代とて、土も木も我が大君の国なれば、何時までも君が代に」など、主催する幕府権力者へのへつらいを感じる。能という演技が時の権力者の恩顧のもとで開催されていることを感じさせる。

4、 和歌の世界に詳しくなければわからない知的レベル

「高砂」は能の大成者といわれる世阿弥の作である。父の観阿弥までは下層の芸人であったが、観阿弥一家が将軍や宮廷に引き立てられたことから、生活の格は一変する。とくにその子世阿弥は、幼い時から殿

上人と交わり、心は貴族に近くなって、深い教養を身に着けた。だから彼の作品は特に和歌の道に深い造詣を示しているのだ。（世阿弥以前の作品には和歌引用はあまりない。）

詠嘆的な台詞は、すべてが和歌からの引用であり、また元来この題材となる高砂と住吉がそれぞれ万葉集と古今和歌集で歌われていて、その時代をつないでいるということ、またこの二つの松が相生のようだというのは古今集の序に書かれていると述べるなど和歌の知識が無ければ読み解けない。作者の世阿弥もさることながら、これを楽しんだ足利義満などの武人たち観客側の和歌の教養も高い。

5、 人生の成熟への寿ぎ

シテとツレは共白髪のお翁とお姫である。「過ぎ越し世々は白雪の積もり積もりて老いの鶴」といいながら松の落ち葉をかき集める仕事に努めている。翁は津の国 住吉のもの、お姫は当所 高砂のものと名乗る。当時の夫婦はまだ通い婚であった。それにしても海を隔てて遠いといふかしむ友成に対して、お姫は山川万里を隔てても心遣いの夫婦の道は遠からずと軽くなすのだ。これぞ理想の夫婦の姿というわけだ、後代 結婚式には高砂の一曲が祝い謡とされたのだ。



能には年老いた主人公が多い。美人の誉れの高い小野小町が卒塔婆小町では老婆として登場し、楊貴妃もあの世の人となって登場する。この世とあの世を接続したストーリーが展開する能では必然的に年老いた主人公が活躍するのだ。老いを見る目も敬意と暖かさを感じるのだ。

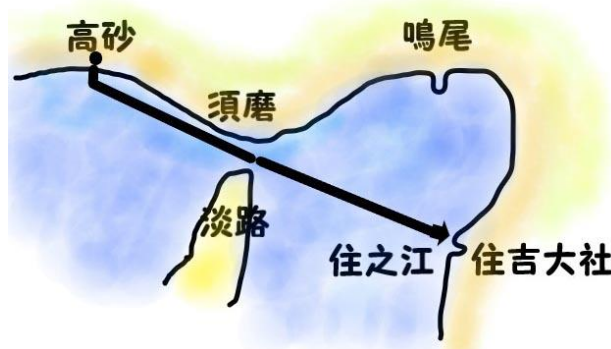
6、地理紹介の面白さ

高砂は優れた旅行案内になっている。ワキの旅の僧は阿蘇の神社の神主であり、一念発起して都見物に出て、その旅の途中に立ち寄った先が播州の高砂という名勝地である。そこで会った老夫婦が住之江からの通い婚だと聞いて驚き、この遠距離をいぶかしく思う。そしてこの能の前半と後半をつなぐ間に、まるで高速ジェットクルーザのように高砂から住之江まで瀬戸内海空間をあっという間に巡行する。

「高砂やこの浦舟に帆をあげて、月もろともに出汐の。波の淡路の島影や、とおく鳴尾の沖過ぎてはや住吉に着きにけり。」

この名吟の中に瀬戸内海の順路がしっかりと謡われているのだ。

この能の神は住吉明神であるが、そのゆかりの名所を能の中ですべて紹介する。まず高砂神社は、神功皇后が三韓征伐の祈願を住吉明神にし、その戦勝記念が能の中で謡われる「尾上の鐘」であるとの伝説があ



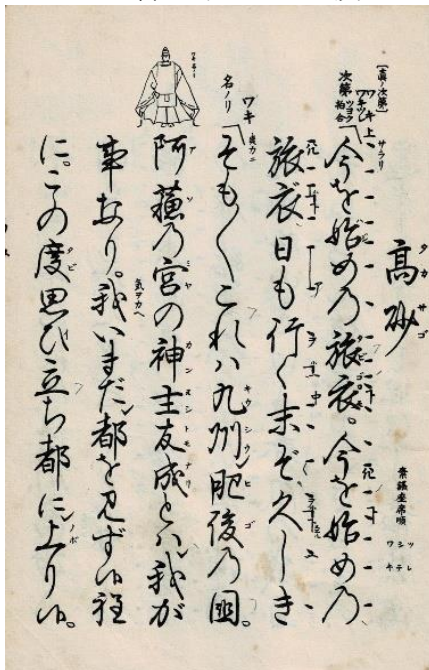
る。後半、明神自身が現れて舞う中で、古事記に書かれた住吉明神の誕生の地とされる福岡の西の海 檣原（あはきはら）を紹介する。ここには日本中の住吉神社の元社が置かれている。そして今ここが、新たに祀られた住之江の住吉大社というので3つの住吉社の紹介をするのだ。

「高砂」に限らず能にはその時代の寺社や名所に関する情報が詰まっていることが多い。「能はあの当時の寺社のコマ―シヤルです」と、鎌倉能の中森貫太郎氏は解説で述べておられた。

7、間狂言（あいきょうげん）と、そこから独立した笑い劇「狂言」

ここで能と狂言の関係について述べたい。「高砂」では 身分を明かした翁が船に帆をあげてあつという間に消えていったあと、間狂言となる。狂言方が演じる高砂の浦人が登場する。友成は不思議な老夫婦に出会ったことをつけると、浦人はこの地の謂れを説明し、新しい船を用意してくれて住吉に行くように勧める。友成はその新造船に乗り追いかけるのだ。

この部分は謡の本には省略されてしまう。高砂に限らず観世の家元が出版している謡の書では、ここに「間狂言が入る」と記入されているだけで内容は分からないのだ。能の世界の一つのしきたりが見える。



能の世界では主役のシテを演じるのは代々シテ役を勤める家 例えは観世家などに限られる。同様ワキだけを勤める家元がある。笛・鼓の囃子方も同じように世襲だ。

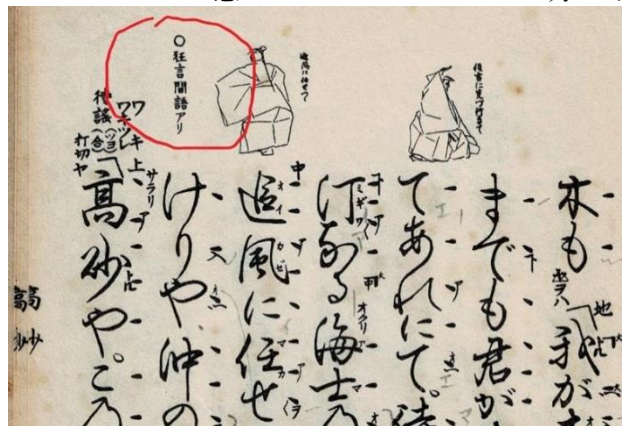
狂言師も同じく家元がある。例えば和泉流の野村氏 大蔵流の茂山氏などである。

ここで間狂言が入るとだけ注記されているで、その内容が書かれないのは、大筋さえ合っていれば、中味は狂言師に一切を任せるということを意味しているのだろう。狂言師はその流派に伝わる脚本にそって演じた。

「高砂」という能を書で知ろうとすれば謡本が一番詳しいと思うと、そのような落とし穴があつて全容はわからない。

昭和代に出版された日本文学全集の「謡曲集」には謡本に加えて、間狂言の場面を狂言流派の伝承本から引用し補っている。能と狂言はこのように同じ舞台で協力して一つの演目を演じるが、独立的である。この「間狂言」の間、シテ役は鏡の間に引き込んで「後シテ」となる準備に忙しい。そしてこの間舞台の雰囲気は典雅な世界から卑俗の日常の世界にがらりと変わる。観客もリラックスする時間だ。

間狂言は、例外はあるが、ほぼすべての能に存在する。前シテと後シテが別の面と扮装で登場する能はそ



の身替りの時間を休むわけにいかず、その間を埋めるためには間狂言は欠かせないといえるのだ。

しかしもっと重要な存在意義がある。間狂言の登場人物は、その事件が起きている現場に居合わせ、事件には関係のない里人である。日常の人なのだ。だから面はつけず素顔で出てくる。話し言葉もその時代の日常語なのだ。だから観客は一挙に現実の世界に引き戻される。そして間狂言がおわると、再び一声の笛で幽玄の世界に引き戻され、この世のものではない後シテを迎える。このコントラストの強さが観能の面白さである。

能と狂言が一体であったということを示す証拠は、すべての演能の始めに置かれた「翁」の構成が物語っている。能のシテ役が恭しく神の舞を舞って引き込んだ後、狂言方が農民の祝姿を思わせる三番叟の黒面をつけて鈴を振って五穀豊穡を願って、舞台を踊りまわるのだ。このように狂言は能の中の一役を受け持った世に出てきた。

このような雰囲気を生み出す狂言は、独自の人気を得て、やがて独立して演じられるようになった。歴史を追跡した学者はそれを15世紀とみている。能の成立は14世紀だから100年は後になる。当時は、時



に観客の公家とその風刺性に眉を顰め、「場所柄もわきまえず」と演能者を叱責したことが記録されている。しかし民衆はその風刺性とそこから生まれる笑いを支持した。そして笑劇として大成していくのである。国際的にも笑劇は普遍的であって先に人気が出た。

NHKの子供番組日本語であそぼうで知られた狂言師野村萬斎などは、シテ役の観世宗家より人気がある。狂言師は素顔で出るのもその特徴ある顔も知られるが、格式ある観世宗家は能のシテ役として登場する際は能面をつけて出るので、顔は知られないのである。やむを得ないこととは言え残念なことである。

8・能面の話

能面は能より先行して存在していた。いや能面が能を完成させたと言えるのである。

観阿弥や世阿弥が指示して作らせたのではなく、彼らが能を完成させる以前から十作六作という優れた能面があつたのである。能研究者もそれは不思議なこととして、なぜそうなのか説明できないでいる。

また逆に「能面が能を作った」といわれるほどの能面の重要性は、能役者の体験から説明できるのである。 金春流の宗家金



春信高は能面についてこう語る。「能面は能のいのちであった、世界でも唯一無二を誇る仮面芸術―能、その能のゆるぎない王座に君臨して能面は今後も能を支配していくだろう。」と語っている。

シテ役が能面をつけるのは、橋掛かりの後ろ、揚幕で仕切られた

鏡の間である。まず能面の裏に綿の入った布袋を3個 額と両頬に貼る。能面を顔から浮かしてかぶるためである。これで呼吸と発声ができるようになる。能面は顔から浮いてつけるので、両眼の穴は目から離れた位置にある。その穴を通して外界が覗けるのだ。能役者は能面をつけてから一時間以上かけて、眼前の穴からの視野に慣れるのを待つ。その間にシテ役に徐々になりきっていくのだ。幕が上がり橋掛かりに出る一瞬、遠くに舞台がかすむようにみえる。普通には歩けない。能の基本動作がすり足で歩むことはここからきている。それでしか歩けないのだ。「能楽師は皆すり足の錬磨に生涯をかける。摺り足こそは能面から生まれたものであった。」

遠近感、距離感も失われるその中で演技は緩慢な動きしかできない。逆に緩慢な動きの芸術として完成したのだという。

能面は変装し、その役柄を演じるためのシンボルではない。そのように見てしまうと観能は失敗する。



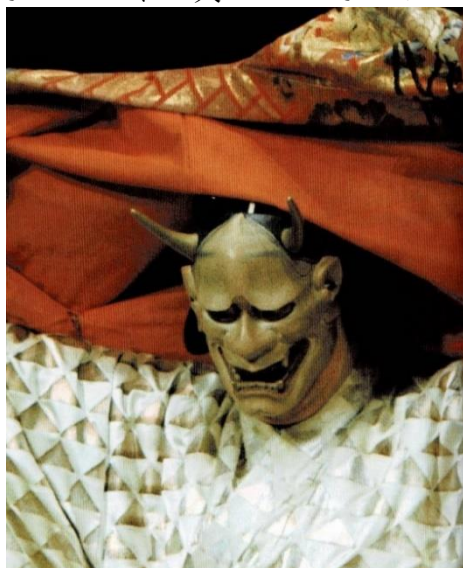
写真は江口（シテ金春信高）

例えば今日のシテは観世何某が演じていると見てしまう場合
がありがちだ。特に女面は小さくできているので、面は演者の
顔の2割ははみ出している。完全にカバーしてしまうと謡がで
きないという点からも口の下半分は面の下にはみ出している。
能面の顔を横から見るとわかる。若い女の美しい能面から老大
家のしわの寄ったあごがはみ出しているところを見るといく
ら人間国宝であっても興ざめする。

それは見てはいけないのだ。「秘すれば花」とは世阿弥の言葉で
あり、面の下の生身の人間にも当てはまる。

正しい観能の方法は、能面をつけた能役者と見ないで「能面が生きて動いている」とみるのだ。観能者の
思い込み態が必要で、そのつもりになりさえすれば、それは成功する。それを成功させることによって、
観能は実を結ぶ。能面は仮装の道具ではなく能の心なのだ。

そして能面の美しさ、恐ろしさ、きびしさなどを心ゆくまで観賞すればいい。このような芸術性の高い
仮面は、世界に無いのだ。



（「葵上」の生霊 嫉妬の般若面）

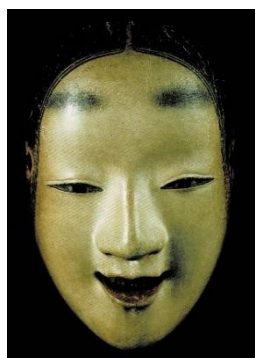
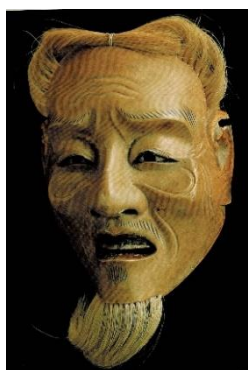
代表的な面を紹介する。カッコ内は面の名称である。（いずれも能面入門平凡社刊より）

翁（子牛尉）

女（孫次郎）

雷神（大飛出）

美少年（中喝食）



9、能狂言の音楽

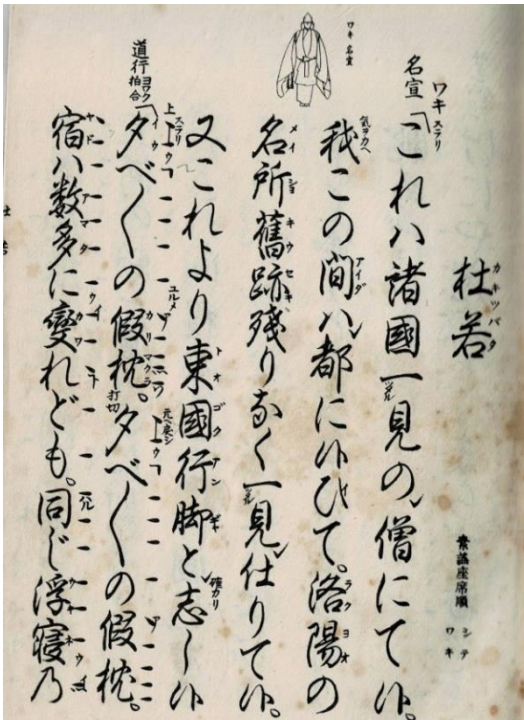
我々日本人は小学校の時から西洋流音楽教育を受けている。五線譜でドレミの音階を習った。その音階からは外れているインド音楽や中国の京劇の唄なども、まだ音楽ととらえる。しかし能の音の世界は音楽とは縁遠いと感じる。

謡はシテやワキそして地謡の連中が発声する節をつけた朗誦であるが、まず発声法が世界にその類例を見ないものだ。まず上半身を立て気管をまっすぐにし、横隔膜から圧力を掛けて、筒のようにした気管に空気を送り出す。下あごを強く後に引いて、空気を上顎部に当て反射させて独特のビブラートをさせながら、言葉の音のかたちにした口から空気を送り出す。説明をしても伝わらず、やってみせるほかない。

この発声法で出す音は大きく、遠くまで届く。能舞台は音響反射板もないが、能役者の声は会堂に響き渡

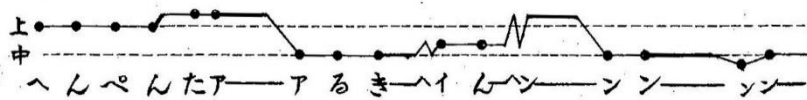
謡といつても独立したメロディはない。七五調で語られる文章を朗詠するのだが、自由な朗読ではなく、文章の一字ごとに発声の高低が細かく定められているのだ。杜若の謡本によってそれを見ていこう。

謡本の冒頭に「名宣　ワキ　スラリ」との指定で「これは諸国一見の僧にて候。」から始まる。この部分はゴマがふつてないので、節のある謡ではない。語りである。しかし決まりはある。「一見の」と、「僧にて候」の間にレ点がある。「一見の」で小さくなって「僧」で大きく強調する指定である。そして5行目から「道行、ヨワク拍合　上」と指定があり、文章の横にゴマという点や様々なしるしが付いている。このゴマのあるところから、抑揚のある謡が始まるのである。そのいく

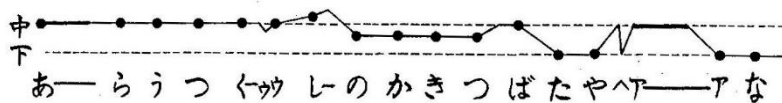


つかを紹介しよう。

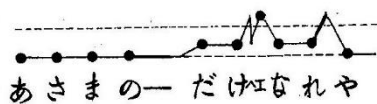
と
片
々
た
る
金



あ
ら
美
の
杜
若
や
な



浅
間
の
嶽
な
れ
や



謡の音程は 上音 中音 下音の3階音が基本で、例外的に上音の上にクリ音 下音の下に呂音がある。上音と中音には浮き音 中と下の下に崩しという半音階があり、合計9音階ある。ただし絶対音ではなく、それぞれの謡手の出しやすい音が中音となり、相対的に上下する。9音階もあるので複雑な音楽もできそうであるが、上下の動きの原則があつて、音階を跳び越すことはしない規則になっている。だから謡手が結構複雑な音を紡いでいても聞く方は単調に聞こえる。

舞台ではシテや ワキそれに地謡がそれぞれ謡うがそれが重なることはない、舞台を征するのは一音のみだ。地謡の連中は地頭の発声に合わせて6名が謡うが、斉唱であり、ハーモニーの思想は無い。

次に音楽の要素であるリズムは、それに酔い楽しむ現代人には、能にリズムはないと思うかもしれないが、実はある。結構複雑だ。笛と鼓、大鼓の囃子が入るが、笛は鋭く空間を引き裂くが、そこにはメロディーもリズムもない。大鼓の掛け声があつて鼓などが叩かれ空間を緊迫感に包むが、およそリズムに乗るという感じではない。むしろ次にどんな音が発せられるのかと「間」を感じるのだ。

しかし謡曲には拍子と称されるリズムがある。8拍子が基本だ。しかし五七調の詞句から成り立つ謡は、十二語の連続が基本であるから、八拍子には初めから合わない。語尾を引っ張るとか、1拍抜くとかやりくりして8拍子にしている。

また謡本を見ると、欄外に拍合とか拍不合の指定がある。拍合の節句は8拍の拍子を意識して謡えとかいう指示である。拍不合の指定がある章句はシテ役の出など印象的な詩句である。なめらかな拍子感から外

れるだけ印象的に聞こえるというわけだ。

謡は女能に多い柔吟（よわぎん）と、男能の脇能や切能に多い剛吟（つよぎん）がある。上中下の音をすべて使い、幅の大きく揺れる柔吟が、中世能が完成した元型であるが、戦国時代や江戸時代武将や大名が参加する時代に簡素化され、中音と下音しか使わない男性的な剛吟が生まれたといわれている。現代に残された能は江戸幕府の式楽以来の能であるので、柔吟、剛吟も確定的にされている。

このような能の音空間は、世界に類例のない音楽なのだ。音楽の常識からは計り知れない「音楽」なのだ。先に記譜や音程図を示したが、これは西欧風の音楽に慣れた読者のために書かれた最近の解説であるが、これを見ても謡えるわけではない。

謡曲の伝承は今もすべて口移しである。謡を習うときは、むしろ謡本を見てはいけないとされる。見るのは師匠の口元と身体であり、それを忠実に一句づつまねておぼえていくのである。いまでこそテープなどの録音があつて反復練習ができるが、それがなかった頃は只々教師からじかに聞いて反復するしかない。教師から口移しの伝承というのは考えてみれば、教育の原点かもしれない。習う謡の事ばかりでなく、対面する先生の迫力を直に感じ、全人格を尊敬して受け入れなければならないからだ。

能の謡を趣味とすることが、江戸時代の上流武士のたしなみであったが、明治維新後も士分の知識層に引き継がれた。やってみれば大変な教養が身に着くし、身体訓練にもなることがわかるためだ。

例えば明治時代の代表的知識人である漱石は熊本五高の教師の頃に謡を学び始めた。イギリス留学で中断したが、帰国後 宝生新に師事した。彼の最初の小説「吾輩は猫である」の苦沙弥先生が、毎日後架（トイレ）で「これは平の宗盛にて候」の出だしを唸って後架先生と揶揄されたと出てくる。ある元旦には高浜虚子の鼓で謡をうったといった出来事も書かれている。このように仲間とともに能を学び楽しんだ。漱石門下生には明治時代の能の研究の第一人者となった野上豊一郎が出た。

私が私淑しベルグソンを読むように教えてくれた高津高校の加藤先生を転居先にお訪ねした時の事である。場が盛り上がって来たとき、先生は謡曲「紅葉狩」の出だしを謡われた。「これ以上やっても君たちには屈だろうから」と出だしだけで終わられた。我々が尊敬する英語や数学の先生方と一緒に習っておられたのだそうだ。学校では知ることのなかった教師群像がそこにはあった。我々が聞く耳を持っていれば、想像もつかない先生方の豊かな裏面を知るいい機会であったが、当時は馬の耳に念仏であって、きょとんとしたただけだった。今になれば残念なことであった。



私が、手ほどきを受けた九〇才の媼　大塚先生は女学校で謡をおやりになって、今でも朗々とした発声でお謡いになる。しかも百曲はそらんじておられる。謡はすさまじいエレルギーを生み出すものである。

10 能の舞

能の中でシテ役は必ず舞をする。例えば「小鍛冶」のシテは稲荷明神の使いである狐であるので、動作は狐を表してわかりやすいが、3番目の女能のシテの舞など、多くは優雅だが単純に見える。面の所でも述べたが、歩みは摺り足でゆっくりである。その動作には「型」がある。カマエ、ハコビ、サシ込みヒラキ、など70種ほど名付けられている。これを組み合わせることで舞が成立する。その一連の動作には意味はない。謡の意味に合わせていることでもない。

しかし面の所でも述べたように、シテは能面の存在を、舞によっていのちを吹き込むのであり、この単純化された所作こそ能のすべてとなるのだ。世阿弥の残した難解な芸術論は、如何にそれを究極のレベルに高めるかにある。

世阿弥も、それをわかるのはレベルの高い観客だけで、それでいいのだと突き放している。能を見る我々もそのつもりで観能しなければならないのだ。

Ⅱ 縄文の源流から能までの軌跡

1、 縄文の祈舞

三内丸山集落で行われた縄文の冬至の祀りの場面を想像する。

この祭りのために近隣の部落の人々も集まって20mもの栗の巨木を6本も使って祭りの舞台を作った。高い測量技術 建築技術を持ってでなければできない建築だ。その長方形の対角線が示す方向は、冬至の太陽が岩木山の頂上に沈むところである。20mもの高樓としたのは、近くの森林の樹木にも邪魔されることなく最も北に寄った日没を見るためだ。初冬の日没であるが、しばらくはまだ明るい。そのうちにかがり火が焚かれる。この日を境に太陽は蘇りに向かう。縄文人は親しい死者たちの魂は、部落を見下ろす山々に行くと思っていた。冬至の太陽に祈りをささげるのは、そのよみがえりと生ける人々を見守ってくれる存在と信じていたからだ。

その日集落を統べる巫女が仮面（おそらく太陽に面するので遮光仮面であろう）をかぶり盛装して、3層の楼の最上階に登壇する。男性を一人か2人伴っている。夏至の太陽の刻々沈むのに別れを惜しみ、再びの復活を声高らかに



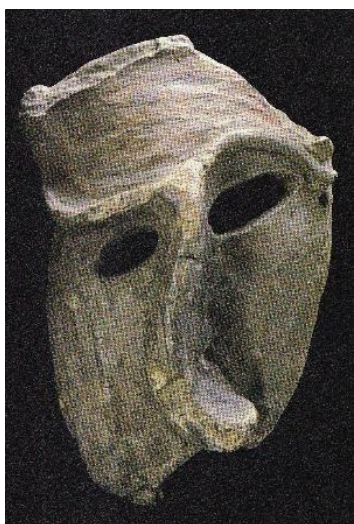
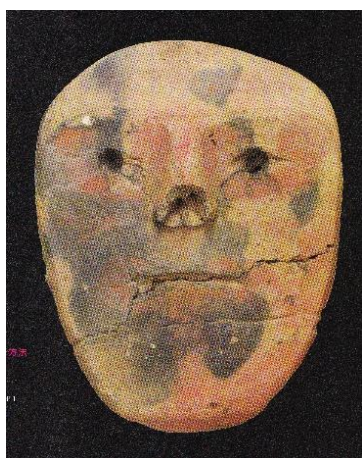
に祈り朗々と謡った。その謡い方は今に伝わる謡曲の謡い方発声法でなければ、遠くには伝わらなかった。

縄文遺跡から発掘された面がある。

おそらく左から太陽神の面 真中の面は神官 右は死者の

面かもしれない。「死者の面」と書いたが、縄文人は死者とは言わなかった。死という言葉は大陸からの輸入語である。それは、こ

の言葉にはシという音読みだけで、訓読みがないことからわかる。それでは縄文人たちは、死を何と言ったか？



八丈島には縄文語が江戸時代まで残っていたとされる。近代の標準語教育で多くは失われたが、絶滅前に古老たちの会話が録音されて今に伝えられた。死に関する会話もある。まるで狂言の言葉のやり取りだ。

男1 オジャリヤロカーイ

おいでになりますか。

女1 オー

はい。

男1 キキイタセバ オジャロガ マルビーテーダッテージャー

伺いますと 弟さんも 亡くなったそうですね。

女1 オシユワサマデ オジャロガ マルビーイタシタラ

お世話さまに なりましたが、なくなりました。

男1 ホントー マダ ワカクモ オジャルシ チト イッテ オジャレバ ヨク オジャロー

モノノー

ほんとにまだ若くもあるし もう少し生きていらつしゃれば ようございましたのにねえ。

女1 ノー コドモモ マダ ネットケガオジャロンテ アトホド チカラン シテウレン シー

イタソソソ テ メアカケテ タモーリヤルゴワニ

ねえ こどもも まだ小さいのが おりますから 今後力にして頼みにいたしますから 目をかけて
くださいますように

男1 チカラオ オトシヤラズンノー ガマンシニ シヤロゴン

力をお落としにならずにね。元気をお出しますように。

女1 オー

はい。

「死んだ」は「マルビーイタシタラ」であった。なんと柔らかい暖かな表現である。

18世紀の国学者平田篤胤は各地の異界伝説を収集し、古代の死者の霊はこの世に残る、現世の眼には見えないだけで、隠れた目には見える幽界はこの世に重なっていると見ていたとの発見をした。

縄文人たちはマルビーした死者の魂は見えないけれども、共に生きていると考えていた。（現代科学は、我々には見えない5次元の世界こそが、この世界の本質であり、肉体が減んだ時、重力だけの精神体は解放され、5次元の世界を自由に飛翔する可能性を示唆する。なんとこの縄文人の死後観を否定しない。）

縄文の祈り舞は、太陽の再生祈り、マルビーした魂を慰め言葉を交わすものであったのだ。

金沢郊外のカナモリ遺跡や能登半島の真脇遺跡には同型の馬蹄形のウッドサークルがある。これも太陽信仰と山頂を結び付けることができ、祝祭の場とみられる。青森と北陸では遠く離れているが、縄文土器や

矢じりとなった黒曜石の交易が活発であったことから、この祝祭のスタイルも交流があったと見ても不思議ではない。この祈舞の上手の人たちが、組を組んで各地を回ったことも想像できる。

2、 祈り舞からドラマのある仮面劇へ

太陽信仰とマルビーした魂を慰める祈り舞はやがてドラマを持った仮面劇へと発展する。その題材は日本各地に神話・伝説である。

例えば三内丸山遺跡のある青森秋田地方には十和田湖・八郎潟・田沢湖を舞台とする壮大な三湖伝説がある。十和田湖に住む龍 八郎太郎は戦いに敗れて八郎潟に逃れ、やがて美しい女性・田沢湖の辰子と結ばれたという伝説だ。

常陸には筑波山伝説がある。昔、祖先の大神が、諸国の神たちを巡り歩く旅の途中、駿河の国の富士山で日が暮れてしまった。そこで福慈（富士）の神に宿を請ふと、「新嘗祭のために今家中が物忌をしているので、」と断られた。大神は、悲しみ残念がつて、「我は汝の祖先であるのに、なぜ宿を貸さぬのだ。汝が住む山は、これからずっと、冬も夏も、雪や霜に覆はれ、寒さに襲はれ、人も登らず、御食を献てまつる者もゐないだらう。」とおっしゃった。さて今度は、筑波の山に登って宿を請ふと、筑波の神は、「今宵は新嘗祭だが、敢へてお断りも出来ますまい。」と答へた。そして食事を用意し、敬ひ、拝み つつしんでもてなした。大神はいたく喜んで歌を詠まれた。

「愛はしきかも我がすゑ 高きかも神つ宮 天地と等しく 日月とともに 民草 集ひ賀ことほぎ 御食 御酒 豊けく 代々に絶ゆることなく 日に日に弥栄え 千秋万歳に たのしみ尽きじ」

かうして、富士の山は、いつも雪に覆はれて登ることのできぬ山となった。一方、筑波の山は、人が集ひ歌ひ 踊り、神とともに飲み食ひ、宴する人々の絶えたことは無い。坂東の諸国の男女は、桜の花咲く春に、あるいは紅葉の赤染む秋に、手を取り連れ立って、神に供へる食物を携へ、馬に乗りあるいは歩いて山に登り、楽しみ遊ぶ。そして思ひ思ひの歌が歌はれる。歌垣となった。

「筑波嶺の集ひに、妻問のたからを得ざれば、娘とせず」といはれる。

これら各地の神話伝説は、書き言葉の無い縄文時代すべて口伝伝承で伝えられた。それは覚えやすいように節つきの朗詠で語られ、記憶されていた。七五調が生まれ、単純な節回しは謡曲の元型であったに違いない。

朗詠伝承の証拠は古事記の作成に記されている。八世紀、文字をようやく大陸から受け入れて、この口伝伝承を文字化することが始まった時、若き天才稗田阿礼が「誦習」していた大量の伝承を、太安万侶が苦心しながら漢字を使って倭の言葉を表現して、編纂したのが古事記である。各地に同じように風土記として作成させたのが一部残存しているのだ。

縄文遺跡から発見される唯一の楽器は石笛である。石笛の音色は、現代の能



で使われる独特の横笛に近い空間をつんざくような音が出ると専門家は証言している。これで伴奏もできた。

この物語を 朗詠の伴奏付きで、面をつけ 不思議な衣装を着けて演じたら、それは原始の能の出現であった。

3、やがて弥生時代の農耕の祝いへ、

米の農耕をもたらしたのは中国の江南の民である。彼らは指導者となって縄文の民に米作の文明を教えた。ここでも新しい祝いの場が生まれた、山の神に水の恵みを求め、田植えを寿いだ。田楽となった。歌舞の担い手はあの縄文祈舞部隊である。

4、散楽から田楽 申楽へ

大陸騎馬民族により大和朝廷が成立し、大陸からの文化交流が政府レベルで始まった。奈良時代に入ると伎楽や雅楽が、朝鮮半島や中国から伝えられた。百済経由で伝わった伎楽は上から冠る形の大きな面が特徴的で、単純な行列とパントマイムだった。

平安朝になると朝廷に雅楽寮が置かれ、唐楽、高麗楽 百済楽、散楽などの芸能を、渡来芸人も含めて保護し研鑽させた。これらのうち、渡来元がはっきりしている雅楽・伎楽などは、宮廷音楽として尊重され

た。しかし「散楽」はやがて雅楽寮からは放逐され野に下った。散楽なる得体のしれない芸能集団も、雅楽寮の管轄に収めようと役所は努力したが、素性も楽師も整った渡来の雅楽集団と「散楽」は違っていたのである。

この「散楽」を大陸由来と見て、これが能の元になったから、能も渡来芸能であるとのべている学説が多い。しかし散楽の中には確かに唐の曲芸も含まれていたが、日本列島古来の芸能も含まれていた。宮廷音楽から追放された散楽の一部こそ、縄文の祈舞団であり、そこから能狂言が生まれた。能に近い芸能は大陸のどこにも発見されていないので、私は散楽の一部の縄文歌舞こそ能の起源と見たい。散楽が、雅楽寮から外されたこともそれを裏付けるのではないかとおもう。

この民衆の芸能 散楽は、やがて猿楽ともいわれ、観阿弥の時代に突入する。

5、秦河勝の存在

世阿弥の風姿花伝の第4章には猿楽が申楽と改名された由来を含めて能楽の歴史が書かれている。

第四 神儀云（しんぎにいはいく）

①申楽の始まりは天岩戸の神楽である。

②釈迦が祇園精舎で説法をされるとき、外道が来て邪魔をするので、舍利弗が後戸で鼓や笛をつけて六六種の物まね劇をして収めた。天竺の芸の始めである。

③日本では聖徳太子の時代、世の中の騒乱を治めるために、渡来の秦河勝に命じて、六六番の面付きのまねを紫宸殿でやらせた。聖徳太子はこの神樂を残すために神の文字の偏をのぞいて申樂とした。この河勝はその芸を子孫に伝えた。その遠い子孫が秦氏康で六六番の芸を伝えた。金春の当代までは二九代目である。ここには聖徳太子が作った面が残っている。

④奈良興福寺の維摩会で、祇園精舎の例の通り、外道をやわらげるため大和四座が申樂を奉納した。

この風姿花伝の第4章は、後の能学者 例えば野上弥一郎らは、神話に過ぎないと無視する。そして唐などから来た散樂が起源だと決めて、能の外来芸能起源説をとるのだ。

私は縄文由来と考えているので、この世阿弥の口伝にながしかの史実が隠されていると考え、次のような仮説を考えた。

秦河勝は渡来人でありながら、その出身ははっきりせず、伝説で秦の始皇帝の子孫で川に流れてきたのを拾われたという。つまり当時多かった百済とか唐などの渡来人とは一線を画する外人であった。彼には財力があり聖徳太子のバックアップとなった。

一方当時、伎楽や高麗楽などは、楽人とともに渡来した芸能であり、宮廷で尊重された。秦河勝は、自らの出自をかっての中国秦王朝の出と名乗っているのです、これら当時の宮廷芸能である雅楽系の芸能を尊重しなかった。彼は逆に土着の芸能である縄文由来の「散樂」を評価した。現代フランス文化人が一見して能の魅力に取りつかれるようなことが起きた。河勝は聖徳太子の側近である地位を利用し、かつ豊かな財

力を活かして、この土着系の芸能集団「散楽」を育てる決心をした。新しく面を増やし、六六種の演目を定めた。

秦河勝は能の創始者ではない。身分の低いこの「散楽」の演能者を、支援し表舞台へと引き上げたのである。今でいえばパトロンとなり、プロデューサーの役をやったのである。その後、散楽芸能集団は、宮廷寺社の支援を得るために、秦河勝の令名を受け継いで、その子孫だと名乗ったのである。

これが私の仮説である。何らかのかかわりが無ければ、世阿弥が秦河勝という歴史的人物の名前を引用する筈がない。なお秦河勝は中国に伝わったキリスト教景教の信徒であったという伝説もある。能とは関係はないが。

Ⅲ 能楽と権力者との結びつき

1、 観阿弥から世阿弥 そして音阿弥へ

観阿弥が生まれたのは1333年鎌倉幕府が崩壊した年である。本格的な武家政権が生まれ、戦乱とともに室町幕府に引き継がれていった時代の誕生である。貴族文化から武家文化への移行時代に能は生まれた。観阿弥は奈良の申楽一座の座長で、申楽に当時流行していたくせ舞などを取り入れて能の基本を完成させた。

その子世阿弥(1363・1443)は、室町幕府三代將軍足利義満の寵愛を受け、貴族社会に深く交わる。和歌などの貴族文化を吸収し、能を幽玄のものとした。その養子音阿弥も歴代將軍の庇護を受けて能の地位を確固たるものに育てた。

2、 戦国大名のたしなみ

戦国大名は野蛮人ではなかった。天皇族を中心とした女性的宮廷貴族文化に対抗して、男性的で質素な中に奥の深い文化を生み出した。むろん武力のシンボルである甲冑や刀にも芸術的な好みを持ち込んだが、文化という面の代表が能であり、茶道である。信長、秀吉、家康たち戦国武将たちは競って、謡曲で和歌や文学の道を学び、能のシテ役を演じる趣味を自分の楽しみとした。戦国文学である平家物語の武将の物語が多く能に取り入れられたのもそのためである。

自らを主役として武勲を誇る能を創作したほどである。

3、 徳川幕府の政策

家康、秀忠、家光の三代にわたって能狂言を大切にし、四代家綱の時には、武家の式楽としての演能体制が整えられた。家元制度も統制された。諸藩の大名もその地の能楽者を保護育成した。幕府の統制下各演目の演出も確定され、家元の継承も厳密に管理された。能は確実な伝承を保証されるようになったが、そ

れと引き換えに硬直したものとなったことは否めない。

4、 明治時代の知識層の支援

明治維新は幕府の崩壊とともに能はその後ろ盾を失った。能役者は路頭に迷い、芸を捨てるものも多かった。10年の空白期を経て、能は東京で細々と立ちあがる。維新の一部の元勲が保護にのりだした。岩倉や宮内庁の能好きが崩壊を救うため天皇に見せる能を企画し、支援団体として能楽社を設立した。

申楽の言う名称に替わって「能」が公式に使われたのはこの時が始めである。(世阿弥の風姿花伝にも能楽という言葉は使われてはいたが、公式には申楽であった。)

幕藩体制下の武士の子孫たちは明治維新後も謡を愛し、能の家元はその師範料で生活を成り立たせた時代が長い。

大正昭和の戦争時代を通じて、「能」は鳴かず飛ばずであり衰退の道をたどり始めた。

IV 現代能に活気を点じた非家元系能役者

戦後平和日本となった時代、能にも新しい時代が訪れた。それを生み出したのは伝統と因習の流派家元たちではなかった。能好きの市民たちだった。

鎌倉といえば鎌倉幕府のあったところであり、さぞかし能舞台が数あるだろうと思われるだろうが、実は

一箇所もなかった。ところが全国に先駆けて行われた鎌倉宮の薪能は、わずか60年の歴史を持つだけの能の世界ではほんの新参者だが、今や入場料1万円以上する日本一の人気舞台となっている。

この創始者こそ、能の家元の出ではない言わば能素人の中森晶三氏である。彼は一高理科一年の時、親戚にめずらしい女性の能楽師がおられ、謡曲の手ほどきを受けた。たちまちその魅力にとりこになり、大師匠の大槻十三師の指導で本格的な能修行をした。家元出身でないことが幸いして、勝手に鎌倉能の会を立ち上げ、ホテルの大広間で有料公演を始めた。さらに鎌倉観光協会に薪能を鎌倉でやろうと持ちかけ、場所を鎌倉宮から提供を受け、鎌倉では初めての薪能を、最初は無料で入場者を集めて開催した。1959年昭和34年の事である。さらに鎌倉大仏の参詣道の奥まった土地を得てここに鎌倉能舞台を作った。1971年(昭和46年)の事である。私事だが、能に親しむことができたのはこの鎌倉能のお蔭である。

いまは晶三氏の子供 貫太郎氏が演能し、解説されて、素人にも能の面白さを広めておられる。

晶三氏はその後も日本各地の薪能を開発され20か所以上も開発された。すべてが続いているわけではないが、その運動は他の地方の人々にも影響を与え、また各流派の家元も負けてはならじと、伝統を復活されたりして、今や各地で薪能ばやりになった。これが能の第3次のブームに火をつけたのだ。

この報告書の表紙を飾ったのは大山阿夫利神社の火祭薪能である。これは江戸時代に幕府の肝いりで行われた伝統のものであるが、一時途絶えていたのが1981年に再興し、観世宗家の出演で行われ、大変な人気である。

藤沢市にある一遍上人の時宗 総本山遊行寺は念仏踊りで有名だが、ここでも1986年から薪能が始まった。これも伝統あるものではない。今年も境内に取り壊しのできる仮設の能舞台で演じられている。はじまりの事情を知っておられるある女性から聞くところによれば、旧藤沢信用金庫の職員仲間が喜多流の謡曲を学んでおられ、能を愛する情熱と、鎌倉や寒川など近隣の町で行われながら藤沢に無いことを憂い、遊行寺にも薪能を信用金庫の主催でしようと相談して始まったという。いまは、かながわ信用金庫の主催で無料である。

能はシテのためにあるといったのは能学者野上豊一郎氏であるが、それに待ったをかける書物「異界を旅する能 ワキという存在」を2011年に出版され、ワキの存在にスポットライトを当てた人がいる。これは能を立体的に見る見方を教えてくれた。この著者の安田登氏は、中森氏と同じく家元出身でなく、ジャズバンドをしていた高校教師の時、能を始めて見て感動して、能楽師に無理に志願して受け入れてもらい、能楽師となった人だ。下掛宝生流で、その流派がワキの流派なのでワキの能役者だ。彼が、最近「能650年続いた仕掛けとは」という能に関する解説本を出された。内容は能をやるのが健康に役立つといった堅苦しい家元系の人間ではかけないような内容でありながら能のすべてを語る異色の本である。

このような家元系でない素人たちが、場合によっては家元連が牛耳る能楽協会の圧力にもめげず、次々に新しい演能の場を広げてくれた。また舞台照明や、解説揭示などの演出の工夫も一般大衆向けに受け入れられる工夫が広がり、新作能生まれるなど、確実に伝統の能狂言に、新しい息吹を与えてくれた。現代は

能狂言の第3の世紀なのだ。

その根本は能狂言が縄文1万年の遺伝子を受け継ぐ日本人に愛される何かを持っていることにある。家元の専売から解き放たれ、市民の手で自由となることで、逆に専門家の家元集団も活性化し豊かになることで、ようやく能狂言は危機を脱して新たな繁栄の道を歩み始めたのである。

V 能の魅力 その世界観

能の魅力は、人間にとつての「宇宙」にたとえられる。

まず何の予備知識を持たなくとも、星空を眺めるだけで、宇宙の美しさに吸い込まれる。能もまた美しい。しかしそれは理解を拒む奥深さを持っている。

宇宙もまたしかり、人知の及ばぬ奥深さを持っている。

知ろうとするとすこしづつわかる。人類はこうして宇宙をすこしづつ知り、世界観を広げた。

能も分かろうとすれば、常に門戸を開いて迎え入れてくれ、少しでもわかればわかるほど、能は面白くなる。

最近の宇宙論では、宇宙は人間の感知できない未知の物質とエネルギーに満ち溢れ、高い次元の中を、あるものが自由に動きまわるといふ。しかもそれは、生きている人間には見えないけれど、今いる空間そのものが高次元で出来ているのだという。

能の最大の魅力は、この世の隣に存在する異界と自由に出入りするシテの存在だ。何もない舞台が、一瞬にして、あるいは都の伽藍になり、杜若の咲き誇る池になり、そこを不思議な仮面の存在がリアルに舞う。人間の想像力をかくも高める演劇は他にない。

能もまさに宇宙と同じだ。はまり込んだら離れることができない。

能狂言文献集

- 風姿花伝 世阿弥著 野上豊一郎西尾実校訂 岩波文庫 1958-10-25
- 高砂 観世流大成版 1-1 観世左近 檜書店 昭和42年12月5日
- 紅葉狩 観世流大成版 18-5 観世左近 檜書店 昭和34年4月10日
- 杜若 観世流大成版 26-3 観世左近 檜書店 昭和41年3月10日
- 日本古典文学全集 謡曲集 1-2 小学館 s 48-5-31
- 日本古典文学大系 狂言集上下 岩波書店 S35-7-5
- 能 研究と発見 野上豊一郎 岩波書店 昭和5年2月5日
- 世阿弥 北川忠彦 中公新書 1972-7-25
- 能楽への招待 梅若猶彦 岩波新書 2003-1-21
- 死者と生者が共にある世界の記憶 子安信邦 学士会会報第938号 d 36 R1年6-1
- 「天の花 淵の声 能界遊歩」小川国夫 角川書店 S51-6-30
- 節の精解―改訂版― 三宅杭一 檜書房 H4-3-10
- 謡稽古の基礎知識 三宅杭一 檜書房 H24-2-4
- よくわかる謡い方 1-3 藤波重満 檜書房 2004-4-5

能面入門 金春信高 増田正造 北澤三次郎 平凡社 1984-10-18

能 岩波写真文庫 1952-7-10

能百番 上下 増田正造 平凡社カラー新書 1979-4-8

まんが能百番 渡辺睦子作 増田正造解説 平凡社 2009-11-10

もっと知りたい続まんが能百番 渡辺睦子作 増田正造解説 平凡社 2011-4-25

面白いほどよくわかる能・狂言 三浦裕子 日本文芸社 201-12-30

縄文の祭り 野口幹夫 三水会報告 2013年4月17日

<http://kozus5.my.coocan.jp/HPjesus/iyumonon.pdf>

縄文語の名残を話していた人たち 野口幹夫 三水会報告 2015/1/21

<http://kozus5.my.coocan.jp/iyomongo.pdf>

孤軍奮闘の能楽人生一代記 中森晶三 伝統芸術産業(株) 2001-12-10

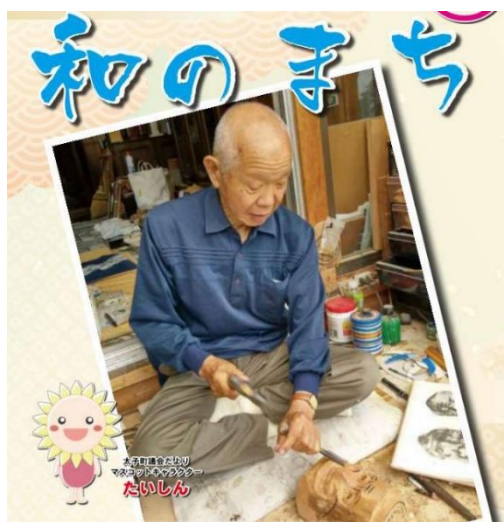
異界を旅する能 ワキという存在 安田登 ちくま文庫 2011-6-10

能 650年続いた仕掛けとは 安田登 新潮新書 2017-9-20

付録 次ページの写真は、野口宇宙飛行士が出身地の兵庫県太子町から名誉町民に任ぜられたが、その

際記念品として贈られた能面2面（小面と太子）である。

能面師は太子町在住の三輪工雲氏である。



湘南記 日本原記

発行 第一次 日本原記 二〇一五年六月二日

第二次 日本原記 続編 二〇一九年一〇月三〇日

第三次 日本原記 総集編 二〇二三年二月二〇日

著者 野口幹夫

印刷製本 ストリートフアクトリー 茅ヶ崎市東海岸北5・15・25